

は最も周堤帯も良く残っており、住居壁より2m前後離れたところに頂部幅50~100cm、高さ30cm程でほぼ全周する。

カマド 位置 東壁中央よりやや南寄り。

規模 全長約150cm 最大幅約105cm 焚き口幅約42cm

袖 手前に50~55cm程張り出して黄褐色粘性土により構築されていた。

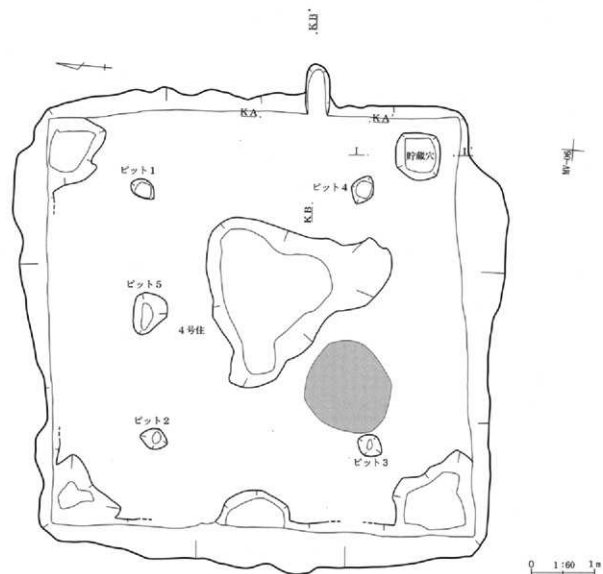
煙道 住居壁を切り込んで、約57cm外へ延びる。

埋没土 焼土ブロック・粒子を多量に含む褐色土。

遺物出土状態 埋没土中より小破片は出土したが、

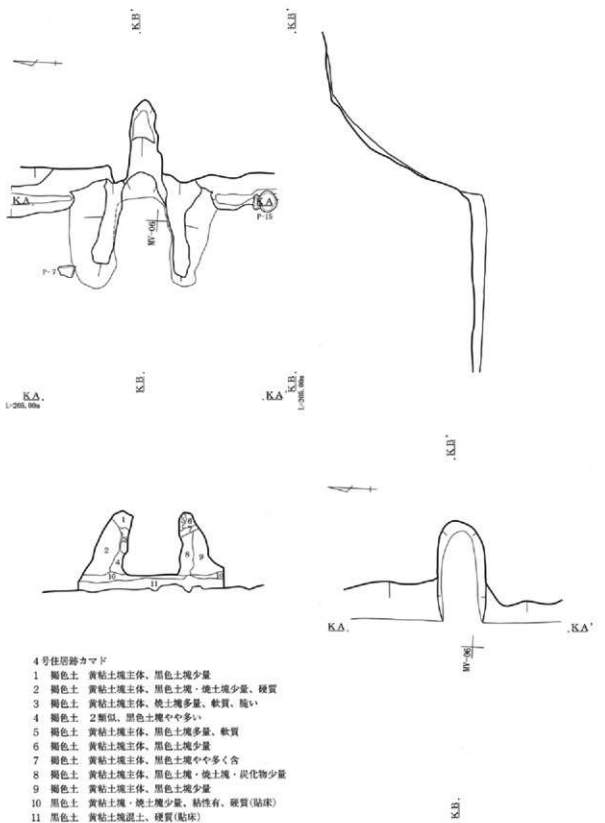
完形の坏や大形破片等は出土しなかった。

遺存状態 比較的良好。カマドの内部にはF Aの堆積は認められず、F A降下時には使用できない状態であったと考えられる。



第209図 IV区5面Hr-FA下黒色土4号住居跡掘り方

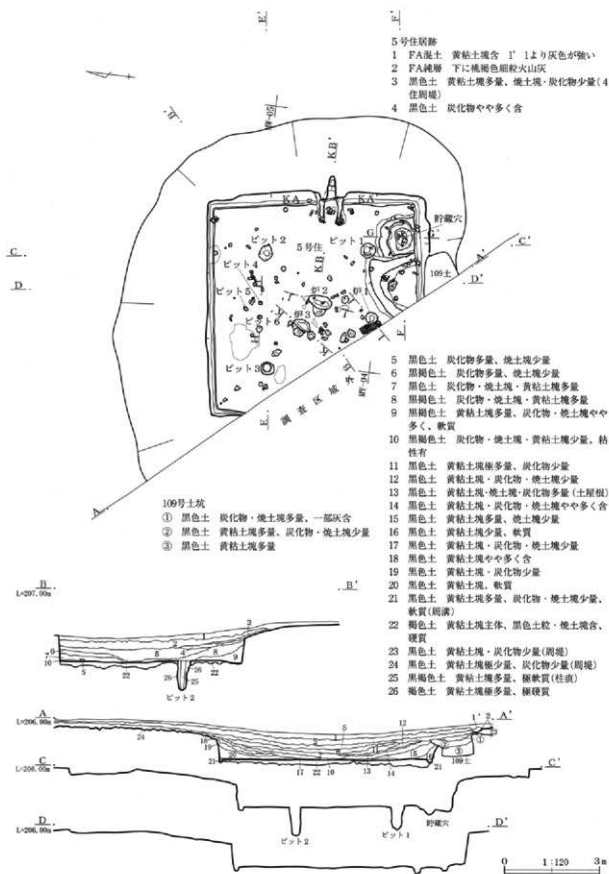
Ⅲ 検出された遺構と遺物



4号住居跡カマド

- 1 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊少量
- 2 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊・焼土塊少量、硬質
- 3 褐色土 黄粘土塊主体、焼土塊多量、軟質、脆い
- 4 褐色土 2類似、黒色土塊やや多い
- 5 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊多量、軟質
- 6 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊少量
- 7 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊やや多く含
- 8 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊・焼土塊・灰化物少量
- 9 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊少量
- 10 黒色土 黄粘土塊・焼土塊少量、粘性有、硬質(貼床)
- 11 黒色土 黄粘土塊混土、硬質(貼床)

第210図 IV区5面Hr-FA下黒色土4号住居跡カマド



第211図 IV区5面Hr-FA下黒色土5号住居跡周境

III 検出された遺構と遺物

5号住居跡

位置 MW-3・4・5, MX-3・4・5, MY-4・

5 主軸方向 N83°E

重複 21号住居→5号住居→4号住居

規模 縦7.10m×横7.00m×深さ0.98m

形状 方形。

埋没土 最上層はFAブロック・黄褐色粘性土ブロック含む暗褐色土。中間はFA純層、整層堆積。下層は炭化物多く、焼土ブロック・粒子を少量含む黒色土。

掘り方 床より5～25cm程下がる。中央及びその西側が凹む。北壁から南側に等間隔に仕切り溝が3条検出された。

床面 周辺部を除きほぼ全面硬くしまっていた。北壁東寄りと北壁中央よりやや南西部でベンガラが散る部分が検出された。

貯蔵穴 南東コーナー。長径105cm×短径86cm×深さ60cm。底面隅丸長方形。比較的明瞭な周堤帯が巡る。4号住居とは違い内部から多くの土器が出土した。

周溝 幅10～20cm。深さ8～12cmでカマド部分を除き全周するものと思われる。

柱穴 6本検出。主柱穴4本。中間のp4～6は補助柱、p1～3にはφ15cm前後の柱痕有り。黄褐色粘性土ブロックを含むしまりの悪い暗褐色土により埋没。掘り方は黄褐色粘性土ブロックを含むしまりの良い黒色土により掘められていた。p1長径45cm×短径43cm×深さ75cm, p2長径51cm×短径39cm×深さ90cm, p3長径49cm×短径40cm×深さ63cm, p4長径12cm×短径11cm×深さ9cm, p5長径16cm×短径10cm×深さ9cm, p6長径15cm×短径12cm×深さ13cm

遺物出土状態 カマドを含め、ほぼ全面から極多量の土器・礫出土。いずれもかなり下層から出土しているが、床面に直接接しているものは少なかった。礫の出土量が多いのが目立つ。全体から炭化物が出土しているが、中央の炉跡周辺が最も良く焼けている。

遺存状態 比較的良好。F P下で3号落ち込みとし

て認識された。住居の周堤帯は4号住居に比べるとかなり崩れており、黄褐色粘性土ブロックが混じる僅かな高まりとして認識された。南壁貯蔵穴西側には周堤帯で囲まれた(128)cm×115cmの範囲があり、その南側上場は攪乱で切られていたが4号住居のようになだらかになっていた可能性があり、入口の可能性が考えられる。炭化物の出土状況や多量の遺物からすると火災住居と考えられる。FAは厚い間層を置いて整層位に堆積しており、埋没してから4号住居よりも時間が経過していることが伺える。

カマド 位置 東壁ほぼ中央。

規模 全長152cm 最大幅86cm 焚き口幅38cm

袖 手前に50～60cm程張り出して黄褐色粘性土により構築されていたが、端部に礫が使用されていた。

煙道 住居壁を切り込んで約58cm程外へ延びる。

埋没土 焼土ブロック・粒子を多量に含む褐色土。

遺物出土状態 熱焼部中央より甕が置かれた状態で出土した。その下には棒状礫を利用した脚が設置されていた。

遺存状態 良好。土圧で壊れていたもの、甕がカマドにかかった状態で出土しており、使用中に放棄されたことがわかる好資料である。

炉 位置 住居ほぼ中央。

規模 炉1長径38cm×短径34cm×深さ18cm, 炉2長径64cm×短径64cm×深さ9cm, 炉3長径60cm×短径54cm×深さ4cm

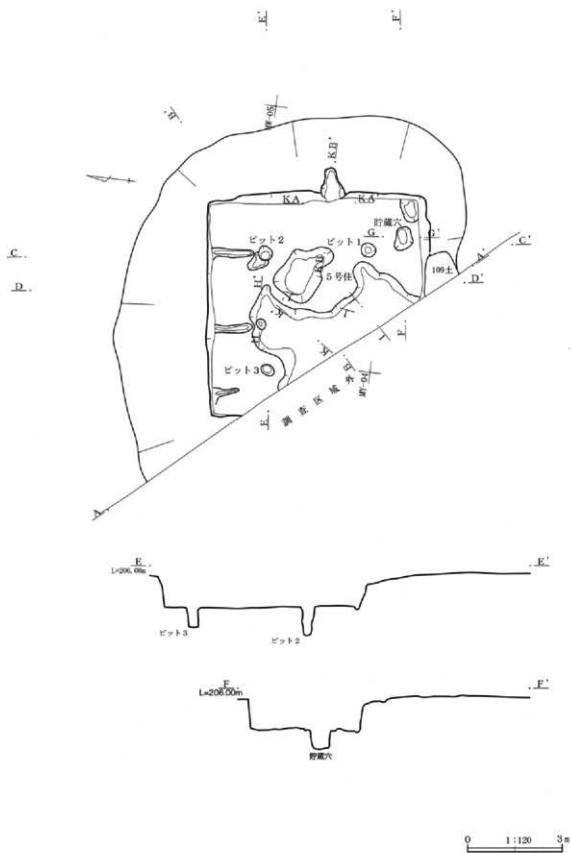
形状 炉1円形、深い丸底。炉2不整形な楕円形、浅い皿状。炉3不整形な楕円形、浅い皿状。

埋没土 炉2のみ焼土・炭・灰の互層、他は焼土ブロック・粒子を多く含む褐色土。

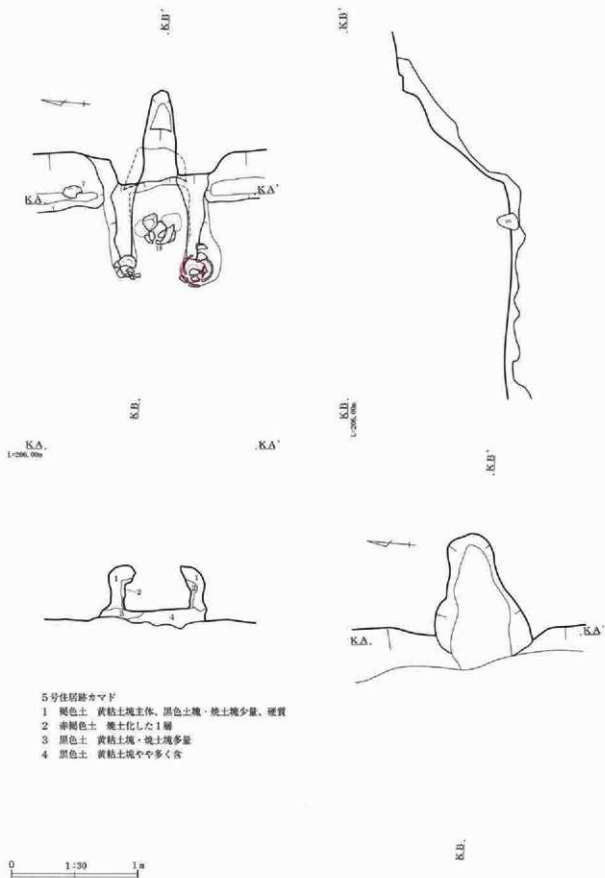
遺物出土状態 数点の土器片は出土。その周りから安山岩の垂角礫出土。炉1の南西側には炭化物がまとまって出土した。

遺存状態 炉1はやや深く、炉2・3は浅かったが、いずれも底面は焼けていた。全体の中でもこの周辺が一番良く焼けているので、カマド以外では出火元の可能性が一番高い場所である。

III 検出された遺構と遺物



第213図 IV区5面Hr-FA下黒色土5号住居跡掘り方周堤



5号住居跡カマド

- 1 褐色土 黄粘土塊主体、黒色土塊・焼土塊少量、硬質
- 2 赤褐色土 焼土化した1層
- 3 黒色土 黄粘土塊・焼土塊多量
- 4 黒色土 黄粘土塊やや多く含む

第214図 IV区5面Hr-FA下黒色土5号住居跡カマド

Ⅲ 検出された遺構と遺物

6号住居跡

位置 MV-8, MW-8 主軸方向 N82°E

重複 無し。

規模 縦(1.50)m×横(1.70)m×深さ0.60m

形状 方形?

埋没土 上層はFAブロックを多く含む黒褐色土(人為的埴土)、中間はFAの純層、整層堆積、下層は黄褐色粘性土ブロック少量含む黒色土、部分的に桃褐色細粒火山灰ブロック含む。

掘り方 床面より8~20cm程下がる。南西部で土坑1基検出。

床面 比較的平坦であり、硬くしまっていた。

貯蔵穴 不明。掘り方調査時に南西部で長径44cm×短径37cm×深さ17cmの土坑が検出されたが、それがその可能性も考えられる。

周溝 幅5~20cm、深さ3~7cmで巡る。

柱穴 不明。

遺物出土状態 埋没土中より土師器甕小破片出土。

遺存状態 良好。しかし、南西部を一部調査したのみ、ほとんどが未検出。F P下で4号落ち込みとして認識された。周溝帯は住居壁から1~1.5m離れた部分に幅60~80cmの黄褐色粘性土ブロックが分布する僅かな高まりを持つ部分として認識された。南西部に開口部を持つ。住居への進入口の可能性も考えられる。

6号住居跡

- 1 黒色土 黄粘土塊・FA塊少量
- 2 黒褐色土 FA塊多量、黄粘土塊少量
- 3 黒色土 FA含
- 4 黒色土 FA塊多量
- 5 FA純層
- 6 黒色土 FA塊多量、黄粘土塊少量
- 7 黒色土 黄粘土塊や多く、粘性有(固着)
- 8 黒色土 黄粘土塊・焼土塊少量、粘性有、硬質
- 9 黒色土 黄粘土塊少量
- 10 黒色土 黄粘土塊や多く、焼土塊少量
- 11 黒色土 焼土塊多量、黄粘土塊・炭化物少量
- 12 黒色土 焼土塊、炭化物少量
- 13 黒色土 黄粘土塊や多く含

7号住居跡

位置 MS-4, MT-4・5・6, MU-5・6 主軸方向 N6°W

重複 24号住居→7号住居

規模 縦9.35m×横(3.85)m×深さ0.50m

形状 方形?

埋没土 最上層はFAブロック・粒子を多く含む暗褐色土。中間はFA純層、整層堆積。下層は炭化物・焼土ブロック・粒子多く含む黒色~黒褐色土。

掘り方 床面より5~20cm程下がる。中心が高く、壁際が下がる。

床面 中心部は硬化していたが、西壁寄りにはあまりしまっていないかった。西壁寄りの何カ所かに焼土・炭化物片がまとまる部分があった。

貯蔵穴 南西コーナー。長径130cm×短径125cm×深さ60cm、隅丸方形。比較的明瞭な周溝帯が巡る。多く高坪を中心とする遺物が中位~下位からまともて出土した。

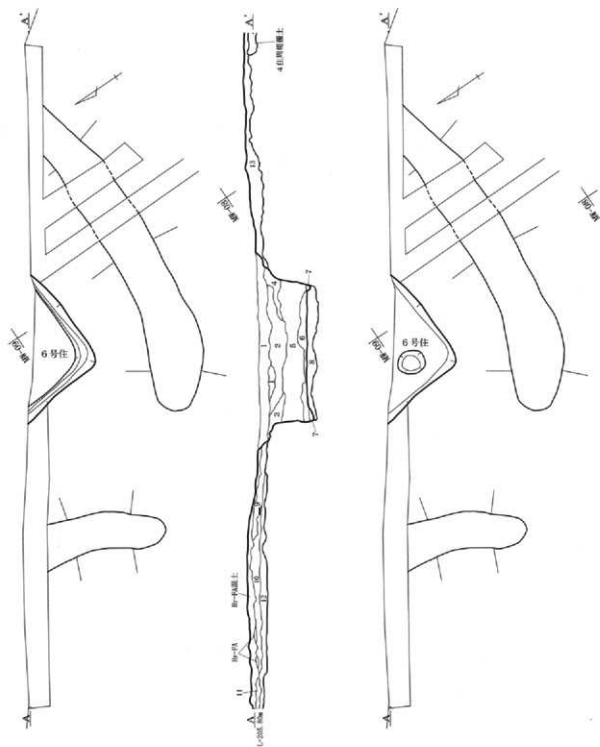
周溝 幅5~20cm、深さ10~20cmで巡る。

柱穴 5本検出されたが、配置や形態の違いからp1が本住居の主柱穴、p2は24号住居の主柱穴と考えられる。p5は補助柱の可能性もある。p3・4は浅く、柱穴ではない可能性もある。p1長径33cm×短径32cm×深さ68cm、隅丸方形。p2(24号住居柱穴)、隅丸長方形。p3長径43cm×短径38cm×深さ18cm、不整形な楕円形。p4長径38cm×短径33cm×深さ15cm、不整形な楕円形。p5長径φ22cm×深さ34cm、調査区東側検出。

遺物出土状態 貯蔵穴上の北側と南西コーナーから甕や高坪などがまともて出土した。p4と南壁の間から扁平大形礫とその上にのりような状態で坏類が出土した。

遺存状態 比較的良好。F P下で5号落ち込みとして確認。西壁~南壁西寄りの一部検出。住居壁から1.5~2.5m離れた部分から緩やかな落ち込みとして確認された。その外側に周溝帯が位置するものと考えられる。堅穴はFA降下時にはかなり埋没しており、その段階では既に周溝帯もほとんど崩れていたと推定される。焼土や炭化材の出土状況から火災住居の可能性も充分考えられる。

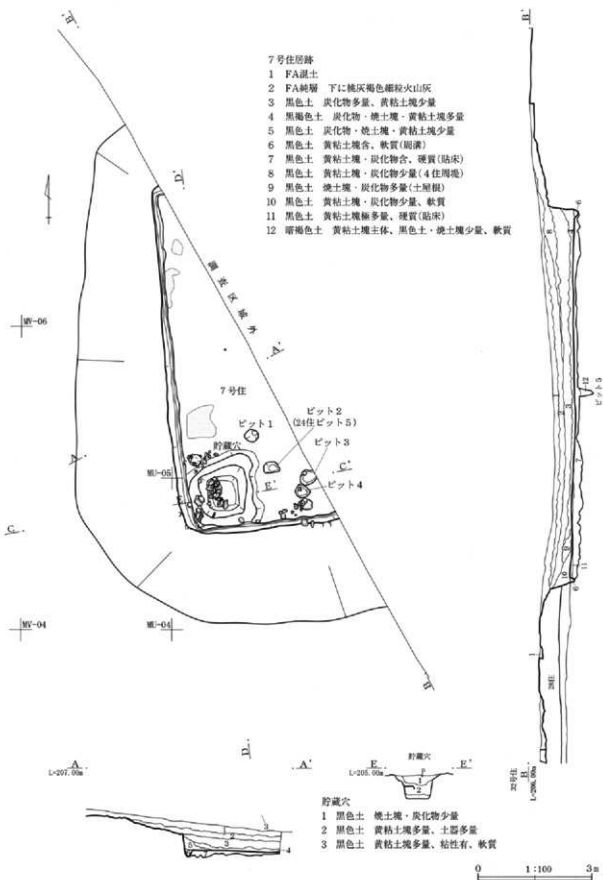
カマド 不明。



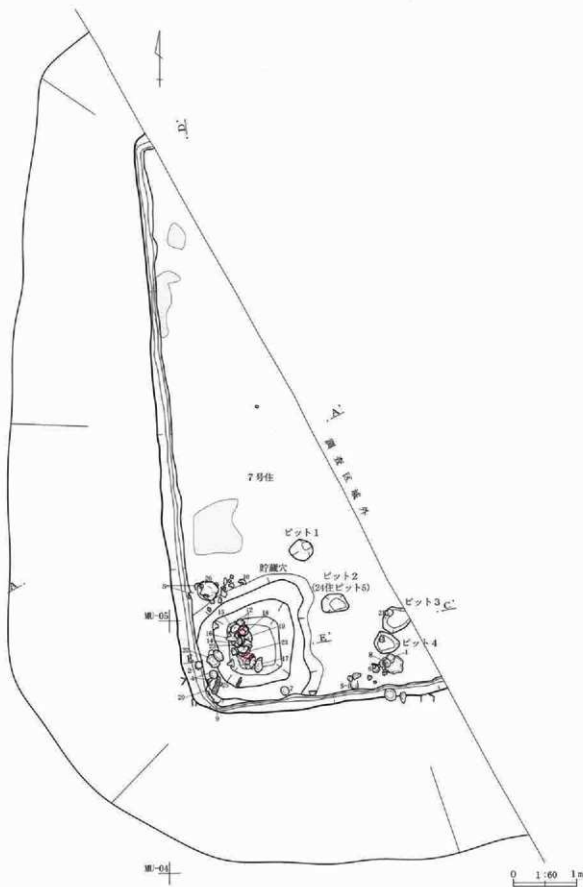
第215図 IV区5面Hr-FAT黑色土6号住居跡周堤・掘り方

0 1:60 1m

III 検出された遺構と遺物

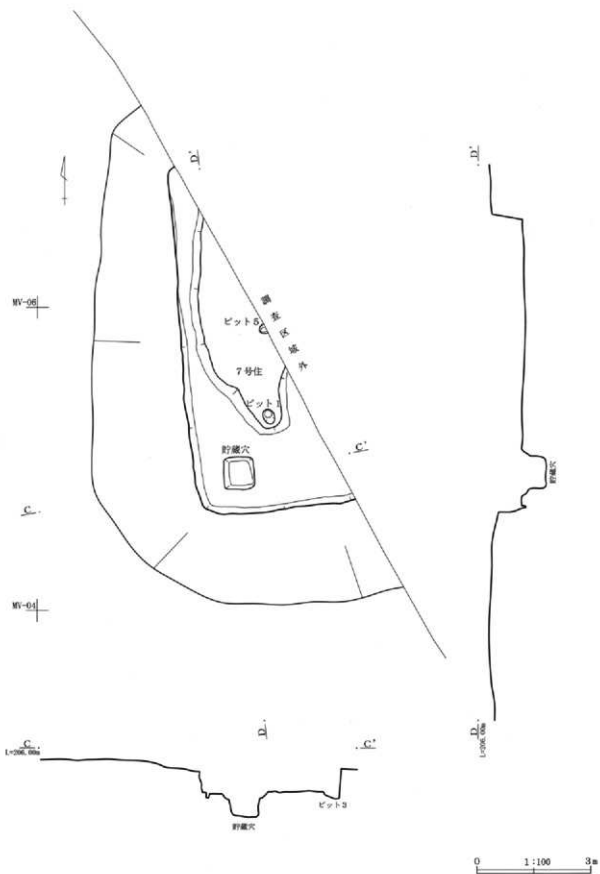


第216図 IV区5面Hr-FA下黒色土7号住居跡周境

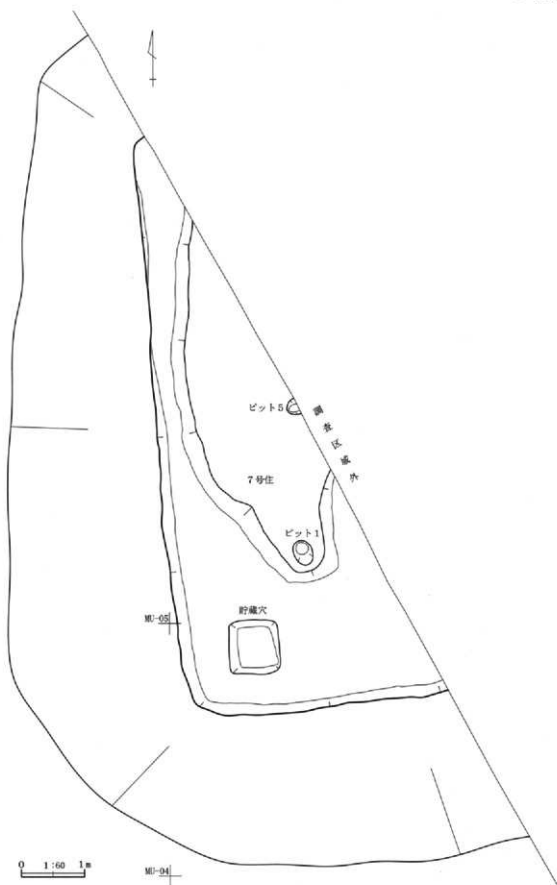


第217図 IV区5面Hr-FA下黒色土7号住居跡

III 検出された遺構と遺物

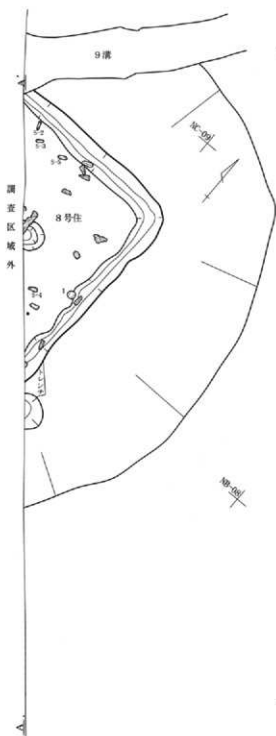


第218図 IV区5面Hr-FA下黒色土7号住居跡掘り方周堤・エレベーション



第219図 IV区5面Hr-FA下黒色土7号住居跡掘り方

III 検出された遺構と遺物



8号住居跡

- 1 FA面土
- 2 黒色土 黄粘土塊多量(9溝併土)
- 3 黒色土 FA塊多量(9溝併土)
- 4 FA純層 下に焼灰褐色細粒火山灰
- 5 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・炭化物少量
- 6 黒色土 黄粘土塊・炭化物やや多く含
- 7 黒色土 黄粘土塊多量・焼土塊・炭化物少量
- 8 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・炭化物やや多く含
- 9 黒色土 黄粘土塊極多量
- 10 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・炭化物極多量
- 11 黒褐色土 黄粘土塊やや多く、粘性有、硬質
- 12 褐色土 下半焼土化(カマド層遺)
- 13 褐色土 (カマド胎)
- 14 黒色土 黄粘土塊やや多く、粘性有、軟質
- 15 黒色土 黄粘土塊多量、極硬質
- 16 黒色土 黄粘土塊多量、焼土塊・炭化物少量、極軟質(柱痕)
- 17 黒色土 黄粘土塊多量(柱距方)



第220図 IV区5面Hr-FA下黒色土8号住居跡

8号住居跡

位置 NB-7・8, NC-7・8 主軸方向 N2°E

重複 26号住居→8号住居

規模 縦3.50m×横3.10m×深さ0.50m

形状 方形?

埋没土 上層はFAブロック・粒子を含む暗褐色土及び9号溝掘削時排土。その下にFA純層。下層は黄褐色粘性土ブロック・焼土ブロックを多く含む黒色～黒褐色土。

掘り方 床面より3～15cm程下がる。北東コーナーに長径100cm×短径65cm×深さ11cmの不整形の凹み有り。

床面 全体にあまり硬くしまっている部分はなかった。

貯蔵穴 不明。

周溝 幅10～20cm, 深さ10cm前後で巡る。

柱穴 主柱穴は北東部の1本検出。長径(30)cm×短径46cm×深さ56cm

遺物出土状態 全体から棒状礫や円礫が出土したが、一部炭化材の出土もあった。調査区東壁中央から棒状礫とその手前から逆位の坏が出土した。床面の直ぐ上であり、意識的に置かれたものと推定される状況であった。

遺存状態 比較的良好。F.P下で6号落ち込みとして認識された。北壁東～東壁北側検出。住居壁から1.7～2.3m離れた部分から緩やかな落ち込みとして確認された。その外側に周堤帯が位置するものと考えられる。堅穴はFA降下時にはかなり埋没しており、その段階では既に周堤帯もほとんど崩れていたと推定される。炭化材の出土は少ないが、焼土もあり火災住居の可能性は充分考えられる。

カマド 不明。

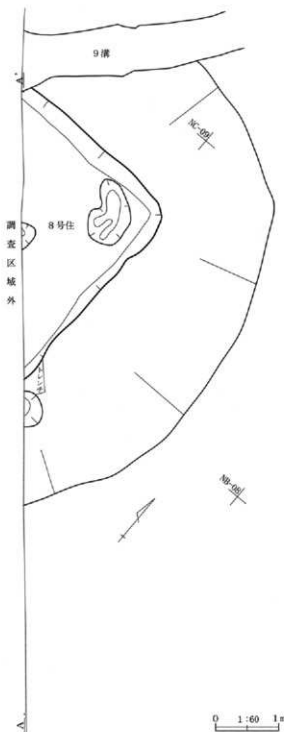
9号住居跡

位置 MX-16・17, MY-16 主軸方向 N75°E

重複 13号住居→9号住居

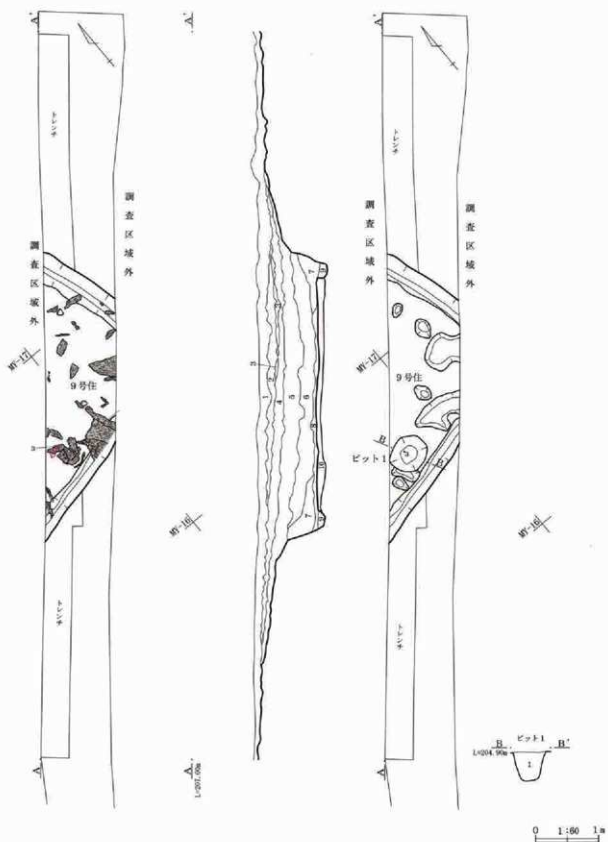
規模 縦(1.40)m×横(1.90)m×深さ0.60m

形状 方形?



第221図 IV区5面Hr-FA下黒色土8号住居跡掘り方

Ⅲ 検出された道構と遺物



第222図 IV区5面Hr-FA下黒色土9号住居跡・掘り方

埋没土 最上層はF P下木田耕作土及び黄褐色粘性土ブロック含む黒色土。その下にF A純層整層堆積。住居上層は黄褐色粘性土ブロック・焼土ブロック・炭化物が少ないが、下層は多い黒色土。

掘り方 床面より3～15cm程下がる。壁近くには不定形な凹みが幾つかある。

床面 全体に比較的良くしまっていた。

貯蔵穴 不明。掘り方調査時に南壁中央手前に長径60cm×短径52cm×深さ53cmの土坑を検出した。黄褐色粘性土ブロックを多量に含む黒色土により埋没していた。

周溝 幅15～25cm、深さ9～15cmで巡る。

柱穴 不明。

遺物出土状態 多量の炭化材の下から数点の甕口縁部破片や埴類出土。多量の炭化物は屋根及び建築材の一部と考えられる。

遺存状態 北東コーナー付近を一部検出。F A下では7号落ち込みとして確認された部分の下層である。堅穴はF A降下時にはかなり埋没しており、その段階では既に周堤帯もほとんど崩れていたと推定される。多量の炭化材と焼土があり、火災住居の可能性は充分考えられる。

カマド 不明。

| | |
|----------------------|-----------------------------|
| 9号住居跡 | 7 黒色土 黄粘土塊・炭化物含、軟質 |
| 1 F P下木田耕土 | 8 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・炭化物多量(崩落土層根) |
| 2 黒色土 黄粘土塊多量 | 9 黒色土 黄粘土塊含、軟質(周溝) |
| 3 黒色土 黄粘土塊・FA粒少量 | 10 黒色土 黄粘土塊多量、硬質(貼床) |
| 4 F A純層 下に焼灰褐色細粒火山灰 | P 1 |
| 5 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・炭化物少量 | 1 黒色土 黄粘土塊多量 |
| 6 黒色土 黄粘土塊、炭化物少量 | |

10号住居跡

位置 MV-2, MW-2・3 主軸方向 N67°E
重複 無し。

規模 縦(1.75)m×横4.75m×深さ0.55m

形状 方形?

埋没土 最上層はF Aブロック・粒子を多く含む暗褐色土。その下にF A純層、整層堆積。下層は黄褐

色粘性土ブロックを多量に含む黒褐色土と炭化物を多く含む黒色土、焼土ブロック・粒子を多量に含む黒褐色土の順。

掘り方 床面より5～27cm程下がる。北東部は凹む。床面 中央部分には非常に硬質な貼床が1～5cm程施され、非常に硬くしまっていた。北東コーナーは比較的軟質でやや凹んでいた。

貯蔵穴 南東コーナー。長径52cm×短径33cm×深さ49cm、底面円形。隅丸方形になるように5cm程の高さで周堤帯が巡る。上部から多量の土器が、下部から多くの礫が出土した。

周溝 幅5～15cm、深さ3～10cmで、カマド脇まで巡る。

柱穴 北東部の1本検出。長径32cm×短径(21)cm×深さ40cm、楕円形。

遺物出土状態 カマド左袖端と右袖端、貯蔵穴上とカマド周辺より多量の遺物が出土した。完形品や大形の破片類が多く、床面より5～10cm程上で検出されたものが多い。右袖のものはかなり壁に近い高い出土位置であった。

遺存状態 比較的良好。F P下で8号落ち込みとして認識された。堅穴はF A降下時にはかなり埋没しており、その段階では既に周堤帯もほとんど崩れていたと推定される。遺物の出土状態や炭化材や焼土の混入状況などから火災住居の可能性が高い。

カマド 位置 東壁ほぼ中央。

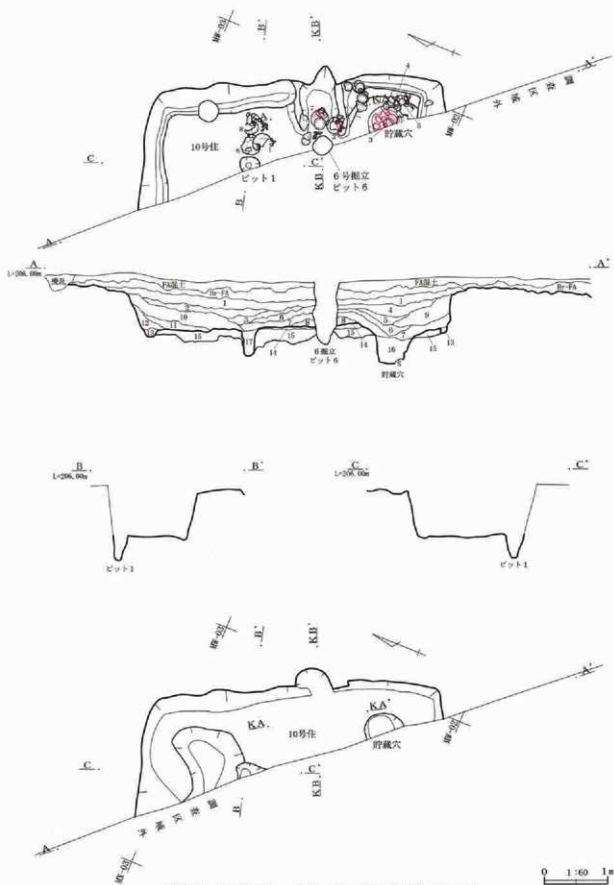
規模 全長約115cm 最大幅約88cm 焚き口幅約40cm
袖 手前に70～85cm程張り出して、黄褐色粘性土により構築されていたが、左袖には礫、右袖には甕が用いられていた。

煙道 住居壁を切り込んで約30cm程外へ延びる。

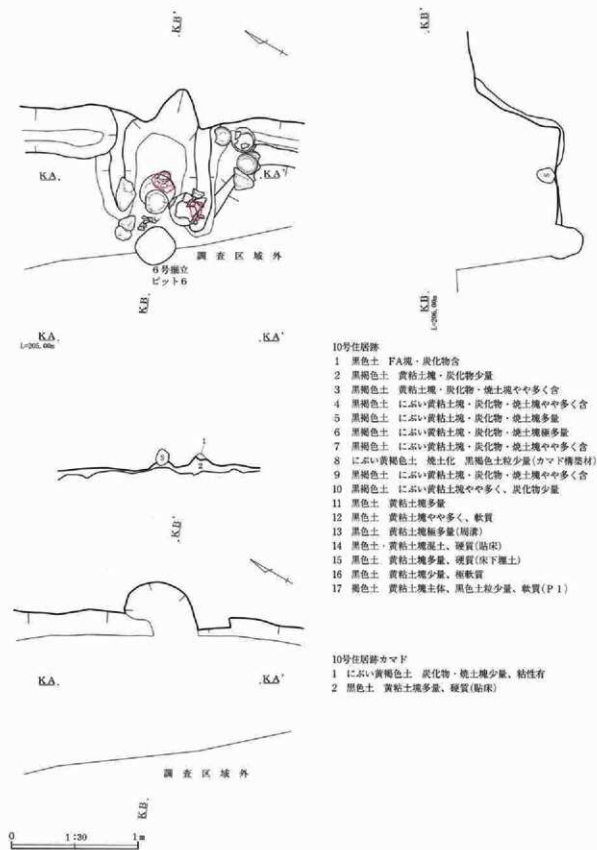
埋没土 焼土ブロック・粒子を多量に含む褐色土。
遺物出土状態 燃焼部中央より甕が置かれた状態で出土した。その下には坏を利用した脚が設置されていた。

遺存状態 良好。土圧で壊されていたものの、甕がカマドにかかった状態で出土しており、使用途中に放棄されたことがわかる好資料である。

III 検出された遺構と遺物

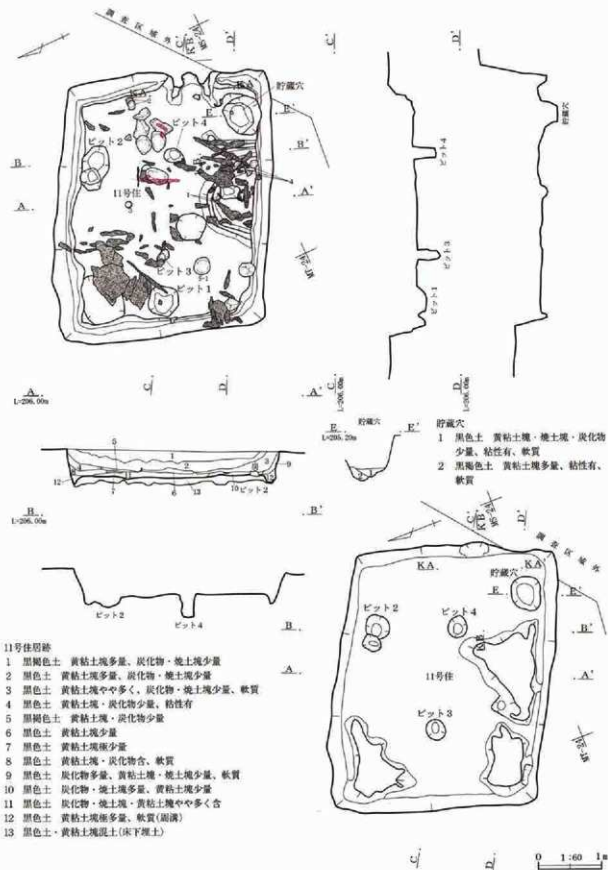


第223図 IV区5面Hr-FA下黒色土10号住居跡・掘り方



第224図 IV区5面Hr-FA下黒色土10号住居跡カマド

III 検出された遺構と遺物



第225図 IV区5面Hr-FA下黒色土11号住居跡・掘り方

11号住居跡

位置 MS-23・24, MT-24 主軸方向 N114°E

重複 無し。

規模 縦4.20m×横3.40m×深さ0.42m

形状 長方形、北壁がやや長く、ゆがむ。小形。

埋没土 黄褐色粘性土ブロックを含む黒色～黒褐色土により埋没。上層よりもやや下層の方が黒味が強く、粘土ブロック量も多い。全体に炭化物片を多く含む。

掘り方 床面より3～15cm程下がる。北西コーナー、南西コーナーと南壁中央手前だけやや高く残るが、他は凹む。底面には工具痕が無数に検出された。

床面 貼床有り。北西部及び壁手前を除きほぼ全面硬化していた。南壁中央部に、高さ5～6cmの周堤帯で囲まれた120cm×65cmの半円形の範囲が特に硬かった。入口の可能性が高い。

貯蔵穴 北東コーナー。長径62cm×短径58cm×深さ28cm、楕円形。低い周堤帯が西から北側の一部にかけて巡る。内部からは土器小破片が出土したが、完形品等の遺物は出土しなかった。

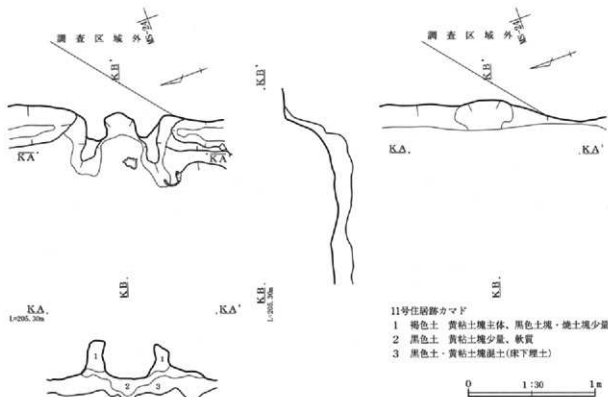
周溝 幅8～20cm、深さ8～15cmで、カマド部分を除きほぼ全周する。

柱穴 4基のピット検出、うち径は小さいが深さがあるp3・4の2本が主柱穴と考えられる。p1長径50cm×短径50cm×深さ18cm、p2長径70cm×短径42cm×深さ26cm、p3長径24cm×短径13cm×深さ37cm、p4長径31cm×短径23cm×深さ38cm

遺物出土状態 カマド左前から大形礫が5点まとまって出土したが、埋め戻しの際に投げ込んだものと考えられる。全体から極めて多量の炭化材が出土したが、屋根材や梁などの建築材の他に編み込み状況のわかる植物繊維のまとまりがわかるものもあった。土器は東壁北寄り、床中央、南壁東寄りなどから完形もしくはそれに近いものも検出された。

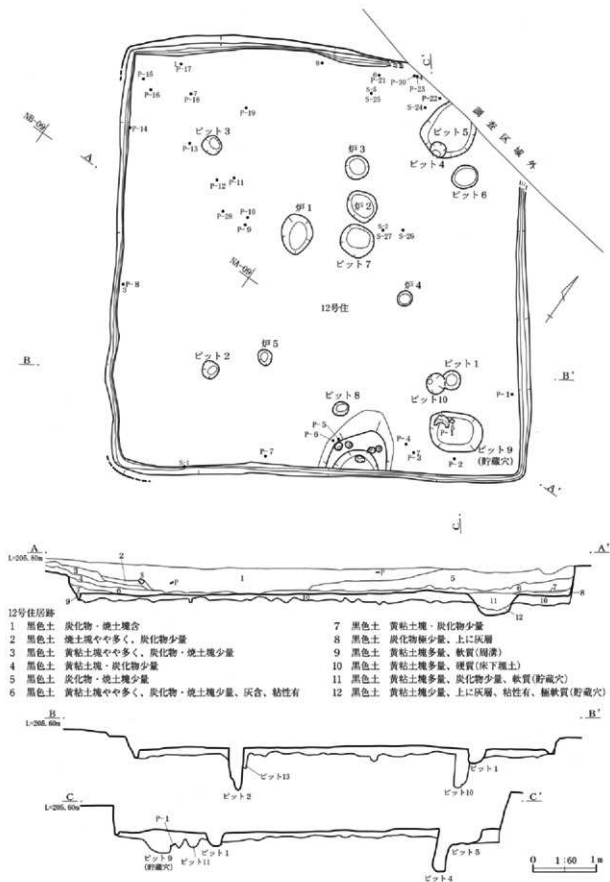
遺存状態 比較的良好。F P下では落ち込みとしては認識できるものではなく、上にF Aの堆積は認められなかった。カマドにはほとんど遺物は無く、焼けた時にはある程度片付けられていたものと考えられる。

カマド 位置 東壁中央よりやや南。



第226図 IV区5面Hr-FA下黒色土11号住居跡カマド

III 検出された遺構と遺物



第227図 IV区5面Hr-FA下黒色土12号住居跡

規模 全長約57cm 最大幅約85cm 焚き口幅46cm
 袖 壁より手前に30cm程張り出す。両袖とも黄褐色粘性土により構築されていたが、右袖先端には土器が使用されていた。

煙道 ほとんど住居壁の外には延びない。

埋没土 焼土ブロック・粒子及び灰を多く含む褐色土。

遺物出土状態 燃焼部より燧破片出土。右袖先端に構築材に使用された燧破片出土。

遺存状態 良好。燃焼部壁は良く焼けており、底面には灰が堆積していた。袖下には黄褐色粘性土ブロックを少量含む軟質の黒色土が貼られていた。その

下に貼床の土有り。

12号住居跡

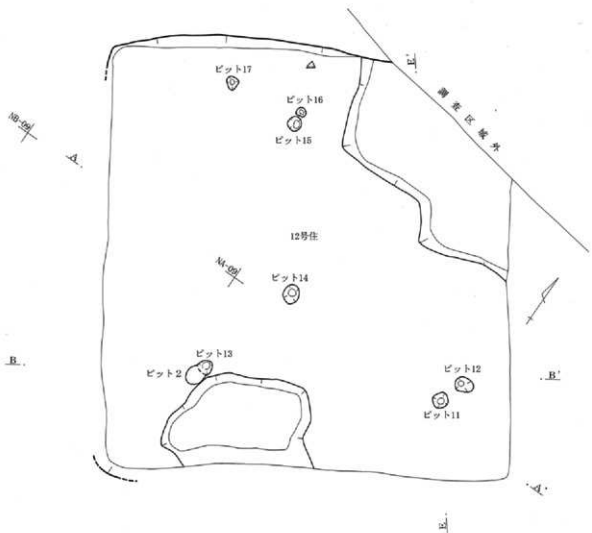
位置 MX-8・9, MY-8・9・10, NA-8・9・10 主軸方向 N34°W

重複 29号住居→12号住居

規模 縦7.05m×横6.72m×深さ0.45m

形状 方形。

埋没土 上層は炭化物・焼土ブロック・黄褐色軽石粒子を少量含む黒色土。壁近くには黄褐色粘性土ブロック含む黒色土有り。東部には厚さ1cm程度灰が堆積する部分有り。



第228図 IV区5面Hr-FA下黒12号住居跡掘り方

III 検出された遺構と遺物

掘り方 床面より5~20cm程下がる。北東コーナー及び南壁西寄り部分に緩やかな凹み有り。底面には鋤状工具による半月形工具痕多数有り。

床面 貼床有り。北東コーナー及び南壁西寄り部分を除き、ほぼ全面硬くしまっていた。特に南壁中央の75cm×30cmの半円形の低い周堤帯に囲まれる範囲は良くしまっていた。入口と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー。長径84cm×短径62cm×深さ30cm。隅丸長方形、浅い鍋底状。底部南側より壺大形破片出土。

周溝 幅5~10cm、深さ3~7cmで、ほぼ全周する。

柱穴 掘り方を含め12基検出されたが、配置と深さからp2・3・4・10が主柱穴、p8が補助柱穴の可能性が考えられる。p2長径29cm×短径27cm×深さ66cm、円形。p3長径29cm×短径28cm×深さ61cm、円形。p4長径25cm×短径22cm×深さ63cm、円形。p10長径33cm×短径30cm×深さ54cm、円形。

遺物出土状態 ほぼ全面から出土したが、床面より浮いたものが多く、床直のものはほとんどなかった。比較的高い位置から大形礫が出土しており、埋め戻しの際に投げ込まれた可能性が高い。

遺存状態 比較的良好。FP下では落ち込みとしては認識できなかった。北東コーナー調査区外未検出。中心付近には焼けている部分が多くあり、埋没土中にも炭化物が認められたので、火災住居の可能性がある。

炉 **位置** 炉1~4はほぼ中央、炉5中心より南西寄り
規模 炉1長径64cm×短径50cm×深さ6cm、炉2長径50cm×短径45cm×深さ5cm、炉3長径38cm×短径38cm×深さ6cm、炉4長径24cm×短径23cm×深さ7cm、炉5長径25cm×短径23cm×深さ5cm

形状 炉1楕円形、炉2楕円形、炉3円形、炉4円形、炉5ほぼ円形、いずれも浅い皿状。

埋没土 焼土粒子・灰・炭化物粒を含む黒褐色土。

遺物出土状態 特に無し。

遺存状態 炉1~3は比較的良好。4・5は規模は小さくあまり良い状態ではなかった。炉跡ではなく、焼失の際に床面が焼けたものかもしれない。

13号住居跡

位置 MX-17 主軸方向 不明。

重複 14号住居→13号住居→9号住居

規模 不明。

形状 不明。

埋没土 上層は黄褐色小軽石粒を少量含む黒色土、下層は黄褐色小軽石粒子を僅かに含む黒色土でしまりは良い。壁近くは炭化物を多く含む黒色土でしまりは弱い。

掘り方 無し。床下土坑等無し。

床面 貼床無し。特に硬化している面はなかった。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 不明。

遺物出土状態 埋没土中より弥生土器破片出土。

遺存状態 不良。一部検出のみ。火災住居の可能性有り。

炉 不明。

14号住居跡

位置 MW-17, MX-17・18 主軸方向 N58°W

重複 14号住居→13号住居

規模 不明。

形状 不明。

埋没土 炭化物・黄褐色小軽石粒を少量含む黒色粘性土、床上には炭化物・焼土を含む部分有り。

掘り方 床面より5cm前後下がるが、床下土坑等はなかった。

床面 貼床有り。比較的硬くしまっていた。

貯蔵穴 不明。

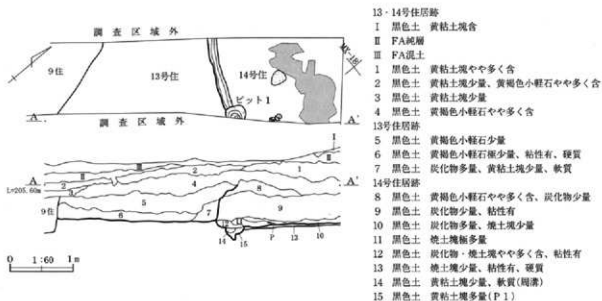
周溝 幅約10cm、深さ4cmで巡る。

柱穴 不明。周溝東に長径30cm×短径(20)cm×深さ18cmのピット有り。

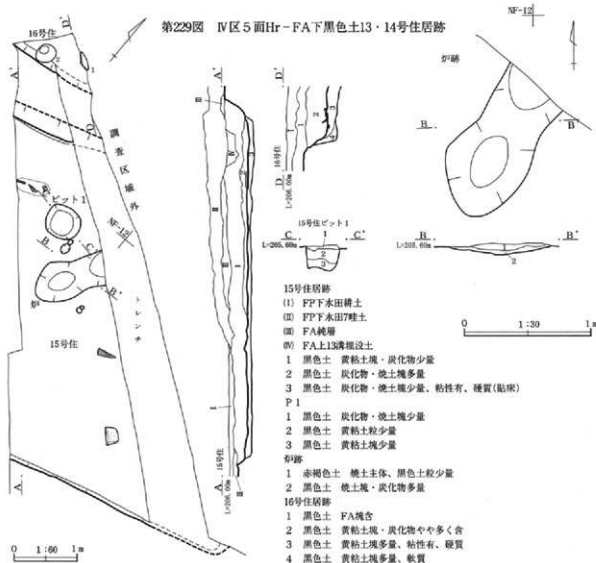
遺物出土状態 東側で弥生土器破片出土。中央から大形礫出土。床面から炭化物がまとまって出土した。

遺存状態 不良。一部検出。火災住居の可能性有り。

炉 不明。



第229図 IV区5面Hr-FA下黒色土13・14号住居跡



第230図 IV区5面Hr-FA下黒色土15・16号住居跡

Ⅲ 検出された遺構と遺物

15号住居跡

位置 NE-11, NF-11・12 主軸方向 N75°E

重複 15号住居→16号住居

規模 縦3.90m×横5.30m×深さ0.30m

形状 長方形?

埋没土 黄褐色粘性土ブロック・炭化物・黄褐色軽石粒を含む黒色土。床上には炭化物・焼土ブロックを多く含む黒色土堆積。

掘り方 床面より3~10cm下がる。床下土坑無し。

床面 貼床有り。粘性のある硬くしまった黒色土で埋められており、全体的に比較的良くしまっていた。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 可能性のあるもの1基検出。p1長径55cm×短径50cm×深さ40cm, 楕円形, 鍋底形。

遺物出土状態 埋没土中より土器片出土。床上より炭化物片及び亜角礫出土。

遺存状態 不良。プラン確認も困難であった。炭化物・焼土ブロック等の状況から火災住居と考えられる。その後埋め戻されているものと思われる。

炉 位置 ほぼ中央。

規模 長径(90)cm×短径55cm×深さ12cm

形状 楕円形, 浅い皿状。

埋没土 上層は焼土を主体とする赤褐色土。下層は焼土ブロック・炭化物を多く含む黒色土。

遺物出土状態 無し。

遺存状態 不良。北東側に古いものが連続する。

16号住居跡

位置 NF-12 主軸方向 N96°W

重複 15号住居→16号住居

規模 不明。

形状 不明。

埋没土 黄褐色粘性土ブロック・炭化物をやや多く含む黒色土。

掘り方 床面より15cm程下がる。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックを多く含む黒色土により埋められていた。壁際はやや軟質。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 不明。

遺物出土状態 南壁際より口縁を欠損した甕正位出土。他に口縁と底部を欠く甕出土。

遺存状態 不良。南西端の極一部検出。火災住居の可能性有り。その後埋め戻されているものと思われる。

カマド 不明。

17号住居跡

位置 MU-0・1・2, MV-1・2 主軸方向 N11°W

重複 無し。

規模 縦9.40m×横6.10m×深さ0.80m

形状 方形。

埋没土 黄褐色粘性土ブロック・炭化物を含む黒色土、上層は黄褐色粘性土ブロックが少なく、下層は多い。炭化材も下層の方が多く含まれる。

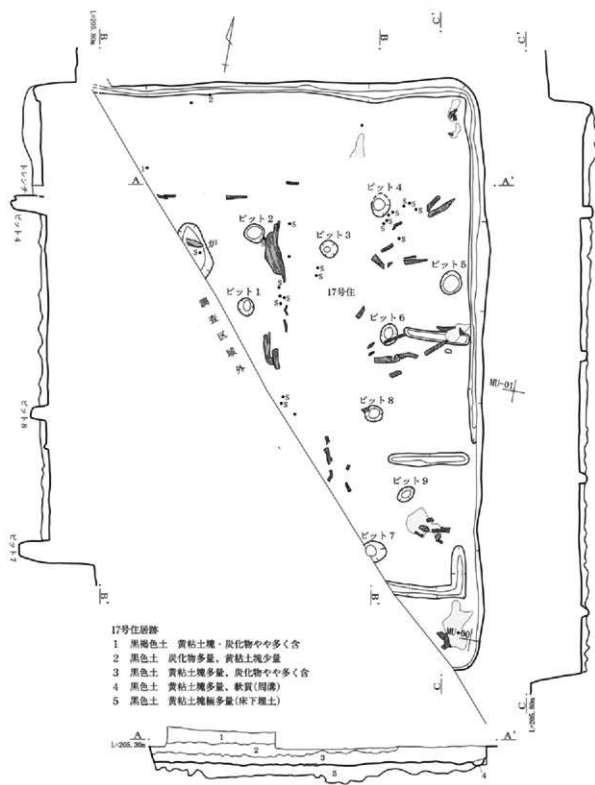
掘り方 床面よりも10~25cm程下がる。北壁に近い部分は浅く凹む。底面には鋤状工具による工具痕が無数に残る。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックを極多量に含む黒色土により埋められていた。壁に近い周辺部はやや軟質であったが、中心は比較的良くしまっていた。

貯蔵穴 不明。

周溝 幅10~15cm, 深さ約7cmで巡る。南東コーナーは検出できなかったが、焼土や炭化物の下にも巡る可能性はある。東壁から等間隔で内側に100~130cm仕切り溝が検出された。

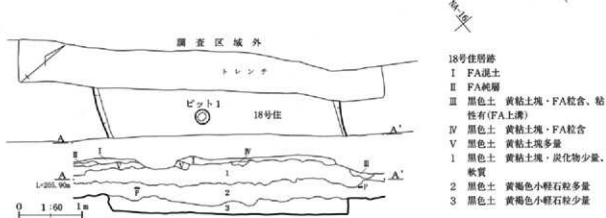
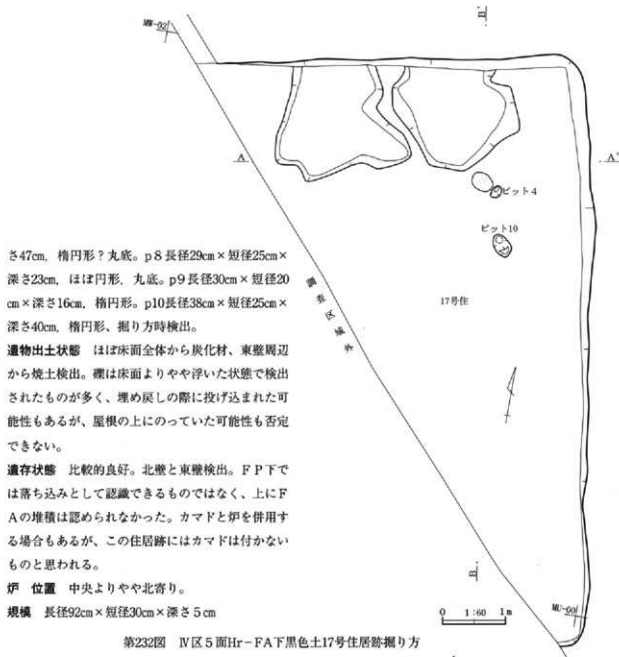
柱穴 9本検出。うち出土位置及び深さからp4・7が主柱穴, 間のp6・8は補助柱と考えられる。p1長径28cm×短径25cm×深さ35cm, ほぼ円形。p2長径30cm×短径30cm×深さ27cm, ほぼ円形。p3長径28cm×短径26cm×深さ46cm, ほぼ円形。p4長径38cm×短径29cm×深さ56cm, 楕円形, 丸底。p5長径37cm×短径33cm×深さ12cm, 楕円形。p6長径35cm×短径26cm×深さ36cm, 楕円形。p7長径(30)cm×短径32cm×深



第231図 IV区5面Hr-FA下黒色土17号住居跡

0 1:60 1m

III 検出された遺構と遺物



形状 楕円形、浅い皿状。

埋没土 焼土及び炭化物粒子含む暗褐色土。

遺物出土状態 無し。炭化物は出土したが、土器はなかった。

遺存状態 比較的良好ではあるが、西半は検出できなかった。

18号住居跡

位置 NA-14・15 主軸方向 N67°W

重複 無し。

規模 縦(0.83)m×横(3.70)m×深さ0.23m

形状 不明。

埋没土 黄褐色軽石粒含む黒色土により埋没、上層の方が同軽石粒が多く含まれる。

掘り方 特に無し。

床面 特に硬化している部分は検出できなかった。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 不明。中央よりやや南寄りでp1長径23cm×短径22cm×深さ14cmが検出された。

遺物出土状態 埋没土中より弥生土器破片が出土した。

遺存状態 不良。北壁と南壁の一部検出。

炉 不明。

20号住居跡

位置 NB-9・10, NC-8・9・10, ND-9・10

主軸方向 N44°E

重複 26・29号住居→20号住居→9号溝

規模 縦6.20m×横6.40m×深さ0.55m

形状 方形。

埋没土 上層は黄褐色粘性土ブロックを多く含む黒色土。中層は黄褐色粘性土ブロック・焼土ブロックを少量含む黒色土。下層は中層よりも粘性があり硬くしまっているが、壁周辺は軟質。

掘り方 床面より5～20cm程下がる。中央部が高く、周辺部が下がる。底面には無数の鋤状工具による痕跡有り。西壁から幅約20cm、深さ約10cmで内側に140

cm程の仕切り溝が2条入る。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックを多量に含む黒色土により埋められていた。中心部は貼床も薄く、周辺部に比べ硬くしまっていた。西壁中央よりやや南に長径104cm×短径72cm×深さ12cm、楕円形土坑有り。

貯蔵穴 北東コーナー。長径105cm×短径85cm×深さ75cm、楕円形。穴の周りは低い周堤帯状に若干高くなっていた。

周溝 幅10～15cm、深さ8cm前後で、カマド部分を除きほぼ全周するものと思われる。

柱穴 ビット7基検出、うち主柱穴はp1・2、中間p3・7は補助柱と考えられる。p4は柱ではなく、焼土や灰を置くためのものと思われる。北西部の柱穴は検出できなかったが、該当する位置に大形の礫があった。p1長径48cm×短径43cm×深さ56cm、楕円形。p2長径31cm×短径30cm×深さ51cm、円形。p3長径22cm×短径20cm×深さ15cm、円形。p4長径50cm×短径48cm×深さ10cm、円形。p5長径37cm×短径28cm×深さ32cm、楕円形。p6長径30cm×短径24cm×深さ10cm、楕円形。p7長径17cm×短径16cm×深さ51cm、円形。

遺物出土状態 カマド右袖脇から壺口縁部破片などの大型品が、北西部では最上層から坏類がまもって出土した。

遺存状態 比較的良好ではあるが、中央を南北方向に9号溝に壊されていた。F P下では落ち込みとして認識できるものではなく、F A降下時には完全に埋まりきっていたと考えられる。炭化材の出土は極僅かではあるが、火災住居の可能性もある。

カマド 位置 北壁東寄り。

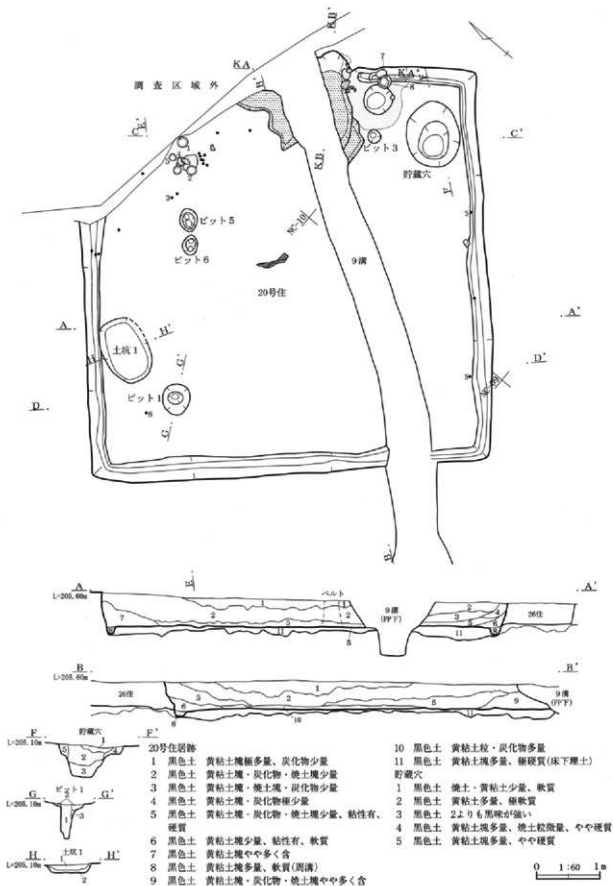
規模 全長180cm 最大幅131cm 焚き口幅 不明。

袖 左袖はほとんど9号溝で壊されていたが、右袖は黄褐色粘性土で構築された上に礫が用いられていた。

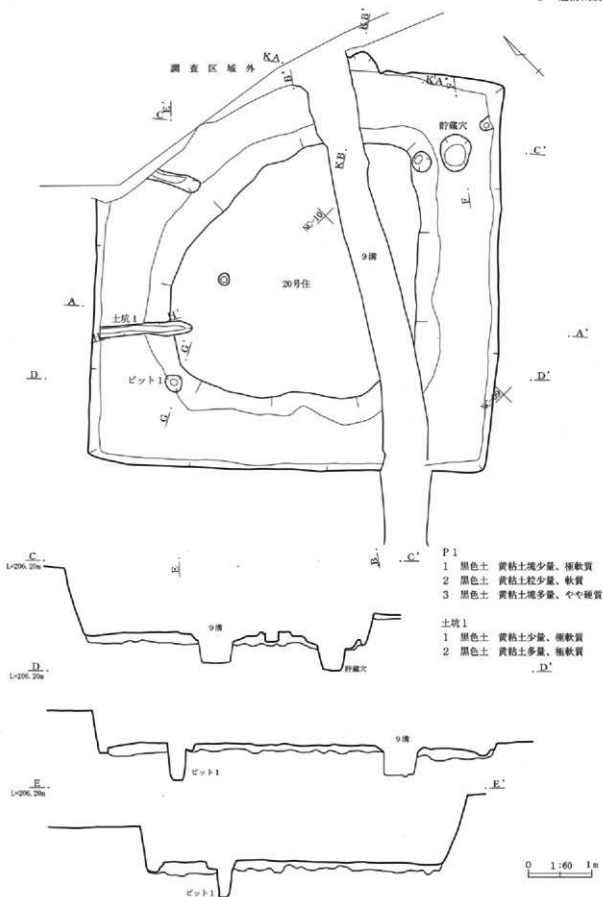
煙道 住居壁を切り込んで僅か12cm程外へ延びるが、ほとんど住居内で納まるタイプであった。

埋没土 焼土粒子・ブロック含む暗褐色土。9号溝で多くの部分が失われていた。

III 検出された遺構と遺物

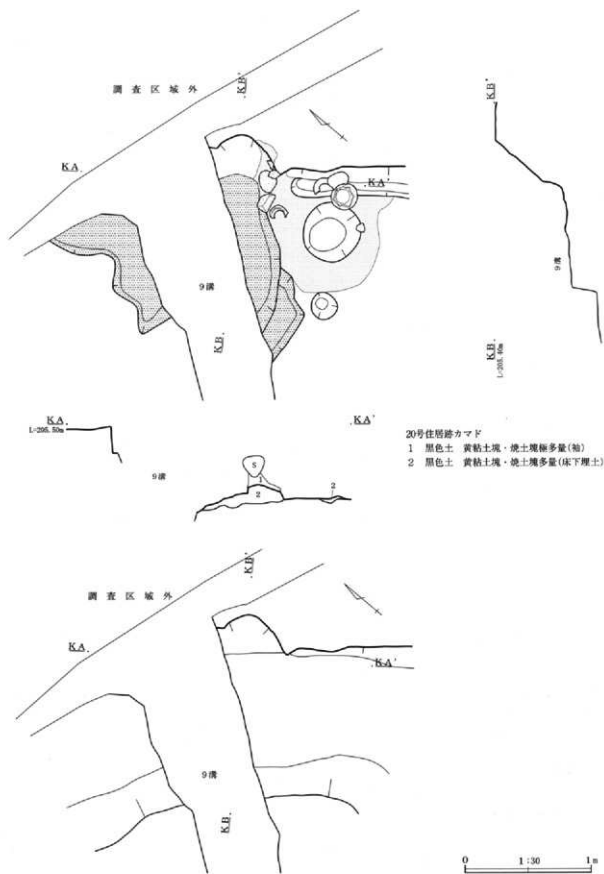


第234図 IV区5面Hr-FA下黒色土20号住居跡

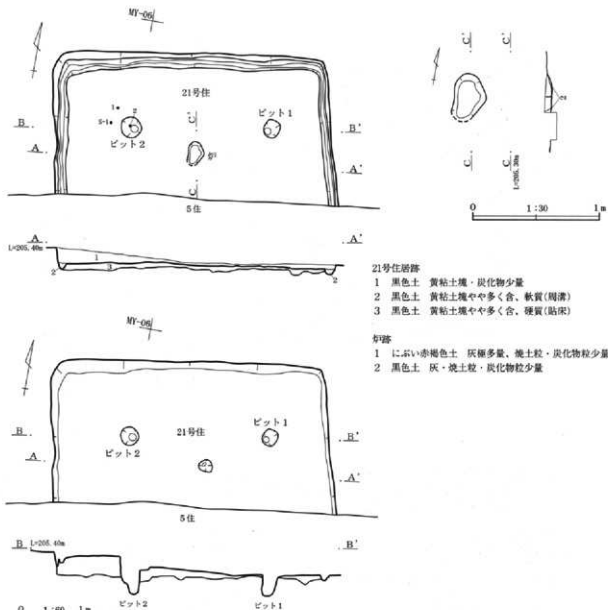


第235図 IV区5面Hr-FA下黒色土20号住居跡掘り方・エレベーション

III 検出された遺構と遺物



第236図 IV区5面Hr-FA下黒色土20号住居跡カマド



遺物出土状態 カマド右袖とその脇の北壁手前から
甕口縁部破片などが出土した。

遺存状態 不良。主要部分を9号溝に壊されており、
右袖と左袖の一部が残っていた。カマド両袖脇には
多くの灰が、p4の周りには多くの焼土が分布する
部分があった。

21号住居跡

位置 MX-5, MY-5 主軸方向 N82°E

重複 21号住居→5号住居

規模 縦(2.32)m×横4.40m×深さ0.25m

形状 方形?比較的小形。

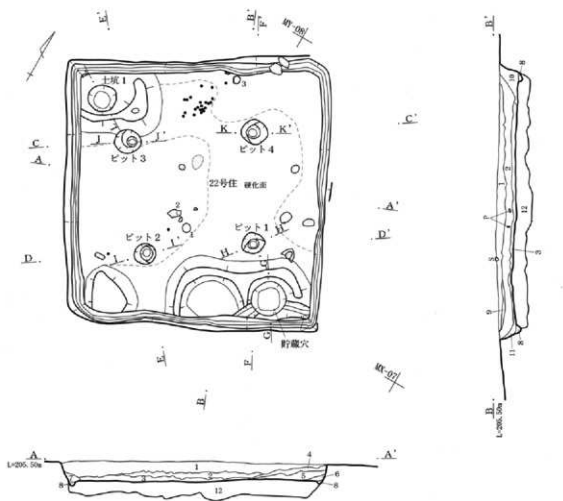
埋没土 黄褐色粘性土ブロック・炭化物粒・黄褐色
軽石粒子少量含む黒色土。

掘り方 床面よりも3~12cm程下がる。炉の近くに
長径20cm×短径18cm×深さ17cmの小ピットがあく。
全面に鋤状工具による痕跡有り。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックを多く含む
黒色土により埋められていた。西側が厚く、東側が
薄くなっており、壁周辺を除き東半の方がしまりは
良かった。

貯蔵穴 不明。

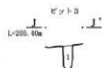
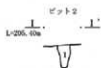
III 検出された遺構と遺物



22号住居跡

- 1 黒色土 黄粘土塊・炭化物少量
- 2 黒色土 1より黄粘土塊多い
- 3 黒色土 黄粘土塊やや多く、焼土塊・炭化物粒少量
- 4 黒色土 黄粘土塊・焼土塊やや多く含
- 5 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・灰層多量
- 6 黒褐色土 黄粘土塊多量、粘性有

- 7 黒色土 黄粘土塊少量、軟質
- 8 黒色土 黄粘土塊多量、軟質(淵溝)
- 9 黒色土 焼土塊・炭化物極多量、硬質(31住貼床)
- 10 黒色土 黄粘土塊・炭化物少量、軟質
- 11 黒色土 黄粘土塊多量、軟質
- 12 黒色土 黄粘土塊多量、焼土塊少量、硬質(床下埋土)



P1-4

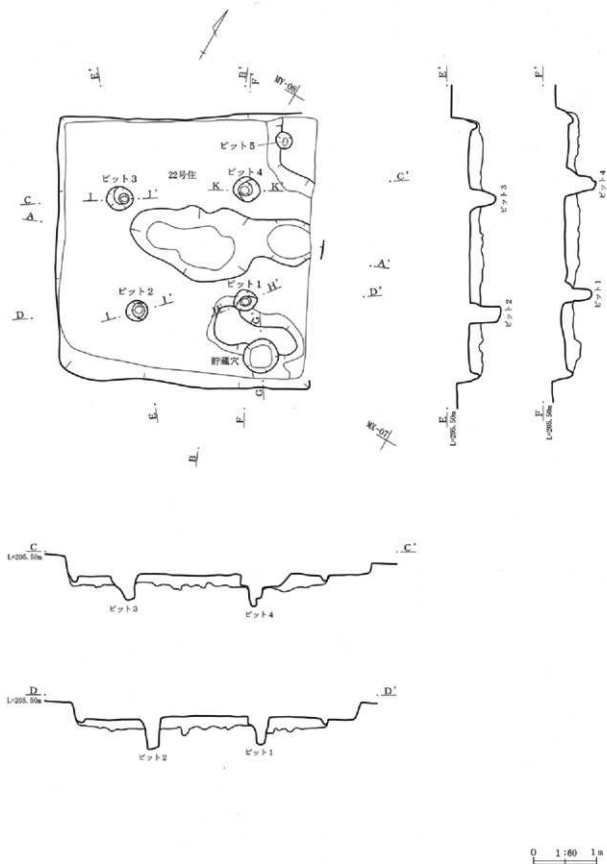
- 1 黒色土 黄粘土粒やや多く、炭化物少量、極軟質

貯蔵穴・土坑1

- 1 黒色土 黄褐色小粒石粒やや多く含、軟質
- 2 黒色土 1より明るい
- 3 黒色土 黄粘土塊多量、極軟質



第238図 N区5面Hr-FA下黒色土22号住居跡



第239図 IV区5面Hr-FA下黒色土22号住居跡掘り方

Ⅲ 検出された遺構と遺物

周溝 幅約15cm、深さ7～10cmで巡る。

柱穴 北東部・北西部で各1、計2基検出。p1長径28cm×短径25cm×深さ32cm、p2長径32cm×短径32cm×深さ39cm

遺物出土状態 p2の西側で床よりも僅か上から灰と棒状礫が、p2内部から鉄が出土した。

遺存状態 不良。南半を5号住居跡に壊されていた。

炉 位置 中央よりやや北寄り。

規模 長径40cm×短径23cm×深さ5cm

形状 楕円形、浅い皿状。

埋没土 灰を多量、焼土粒子・炭化物粒子少量含むにふい赤褐色土。

遺物出土状態 無し。

遺存状態 不良。南側一部壊されており、未検出部分有り。

22号住居跡

位置 MX-6・7、MY-6・7 主軸方向 N63°E

重複 29号住居→22号住居→4・31号住居

規模 縦4.40m×横4.20m×深さ0.30m

形状 方形。小形。

埋没土 黄褐色粘性土ブロック少量含む黒色土。中～下層の方が同ブロックの割合が多い。A-A'セクション東壁寄りには焼土ブロック・粒子を多く含む。

掘り方 床面よりも15～30cm程下がる。中央部が凹み、南東コーナーにやや高く残る部分有り。鋤状工具による凹凸が無数に残る。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロック含む黒色土に掘められていた。西壁～中央部にかけてと東壁中央～北壁中央部分はやや軟質であったが、それ以外は硬化していた。南壁手前には100cm×60cmの半円形部分があり、貯蔵穴とともに周堤帯により囲まれていた。その部分と南西コーナー部分は特に良く硬化していた。

貯蔵穴 南東コーナー。長径55cm×短径54cm×深さ35cm、隅丸方形。周堤帯により囲まれる。北西コーナーにも周堤帯で囲まれた長径45cm×短径42cm×深さ22cmの土坑1がある。

周溝 幅5～20cm、深さ5～10cmで全周する。東壁のカマドと推定される部分の下も巡る。

柱穴 主柱穴4本検出。p1長径37cm×短径32cm×深さ43cm、p2長径34cm×短径33cm×深さ46cm、p3長径43cm×短径38cm×深さ38cm、p4長径38cm×短径38cm×深さ42cm

遺物出土状態 北壁中央部手前が最も集中する場所であり、次いでp2の周辺が多かった。床面よりも浮いたものが多いが、大形の燧破片など床面に付いたものもあった。円礫は北東コーナー壁に貼り付くような位置で検出されたものもあった。

遺存状態 カマド部分を除けば比較的良好。F P下では全く落ち込みとしては認識できなかった。F A降下時には完全に埋まりきっていたと考えられる。埋没土の色調は全体に黒く、僅かではあるが炭化物や焼土も確認できたので、火災住居の可能性も考えられる。

カマド 位置 東壁中央?

規模 不明。

袖 左袖は黄褐色粘性土により、右袖は黄褐色粘性土と円礫により構築されていたものと思われる。

煙道 住居壁の外にはほとんど延びないものと思われる。

埋没土 黄褐色粘性土ブロック・焼土ブロックを多く含む黒色土により埋没。底面には灰層が厚く堆積していた。

遺物出土状態 完形品や大形破片の出土はなかった。

遺存状態 極めて不良。当初南壁でカマドのみ検出された31号住居跡をこの住居跡のカマドと見ていたので、東壁にあるのを見逃してしまいかかり掘り進めてしまった。その痕跡のみ検出。

23号住居跡

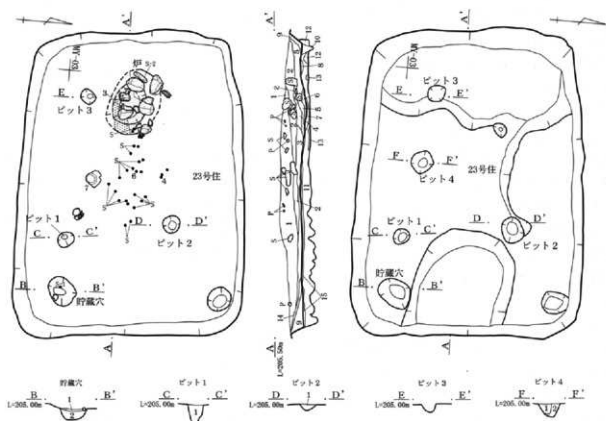
位置 MT-2・3、MU-2・3、MV-2・3

主軸方向 N92°W

重複 無し。

規模 縦4.80m×横3.70m×深さ0.33m

形状 長方形、比較的小形。



23号住居跡

- 1 黒色土 礫・炭化物多量、黄褐色小軽石粒やや多く含、軟質
- 2 黒色土 炭化物・黄粘土粒多量、焼土粒少量
- 3 黒色土 炭化物・焼土粒やや多く含
- 4 黒色土 黄粘土粒・焼土粒・炭化物多量
- 5 赤色土 黄粘土・焼土極多量
- 6 灰褐色土 灰層 炭化物粒・焼土粒僅少
- 7 明赤褐色土 焼土化した砂床
- 8 黒色土 黄粘土粒多量、炭化物・焼土粒少量

- 9 黒色土 黄粘土粒少量
- 10 黒色土 9類似、極軟質
- 11 黒色土 ほは単一的、硬質
- 12 黒色土 暗オリーブ褐色土塊少量、やや硬質
- 13 灰褐色土 焼土粒多量、軟質
- 14 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量、やや硬質
- 15 黒色土 黄粘土塊多量、極硬質

貯蔵穴

- 1 黒色土 焼土塊・炭化物やや多く含
- 2 黒色土 黄粘土塊極少量

ピット1

- 1 黒色土 黄粘土塊少量

ピット2

- 1 黒色土 黄粘土塊極少量

ピット3

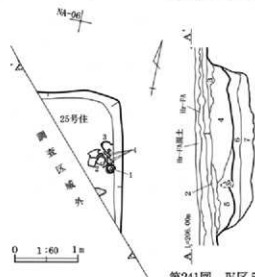
- 1 黒色土 黄褐色小軽石粒やや多く含

ピット4

- 2 黒褐色土 黄粘土塊溶沈薄く含、やや硬質

0 1:60 1m

第240図 IV区5面Hr-FA下黒色土23号住居跡



25号住居跡

- 1 黒色土 FA塊・炭化物少量
- 2 黒色土 焼土塊少量
- 3 黒色土 黄粘土塊やや多く含
- 4 黒色土 炭化物少量
- 5 黒色土 焼土塊極多量、炭化物極少量
- 6 黒色土 炭化物極少量、粘性有、硬質
- 7 黒褐色土 炭化物・焼土塊極少量、硬質(床下埋土)

第241図 IV区5面Hr-FA下黒色土25号住居跡

III 検出された遺構と遺物

埋没土 炭化物片を多量に含む黒色土、礫が極多量に投棄されている。

掘り方 床面よりも5～20cm程下がる。北壁寄りやや高く、東西の壁寄りが下がる。底面には鋤状工具による痕跡が多数検出された。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックを多量に含む黒色土により2～3cm程貼られており、その下は阿ブロックをほとんど含まない黒色土により埋められていた。貼床が薄く、ない部分もあったので検出は困難であった。

貯蔵穴 南東コーナー。長径48cm×短径38cm×深さ18cm、楕円形、断面浅い鍋底状。北東コーナーにも長径38cm×短径35cm×深さ6cm、楕円形のピット有り。
周溝 無し。

柱穴 4本検出。掘り方調査時に精査したが、北西部の1本は未検出。p1長径26cm×短径23cm×深さ30cm、p2長径28cm×短径26cm×深さ11cm、p3長径24cm×短径20cm×深さ12cm、p4長径34cm×短径32cm×深さ50cm

遺物出土状態 中央部付近からほとんどの遺物が出土した。床面よりもかなり上からのものが多かった。多量の礫と共に投げ込まれた可能性が高い。

遺存状態 不良。全体を検出したが、床面の確認は困難であった。もしかしたら北西部の柱穴は元々なかったか、あっても非常に浅く、20号住居跡の北西部柱と同様に基礎に大形礫が使用されていた可能性も考えられる。

炉 位置 西壁中央より50cm程手前。

規模 長径95cm×短径65cm×深さ5cm

形状 東西に長い楕円形、浅い皿状。

埋没土 極多量の焼土ブロック・黄褐色粘性土ブロック含む赤褐色土。

遺物出土状態 焼礫の間から土器破片出土。

遺存状態 不良。石圓い炉があった可能性が高いが、かなり壊されていた。底面は焼けており、1～2cm程灰が堆積していた。かなり西に寄った位置にあり、カマドを作る前段階のものか？

24号住居跡

位置 MS-4、MT-4・5・6、MU-4・5

主軸方向 N39°W

重複 24号住居→28号住居→7号住居

規模 縦7.10m×横4.60m×深さ0.20m

形状 長方形？

埋没土 黄褐色粘性土ブロック・焼土ブロック・炭化物片を含む黒色土、壁に近いところには焼土ブロック・炭化物片が多く含まれる。

掘り方 床面よりも10～30cm程下がる。底面には鋤状工具による痕跡が検出された。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロック・炭化物片を少量含む黒褐色土により埋められていた。比較的良くしまっていたが、p3周辺で極めて硬質な部分も検出された。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

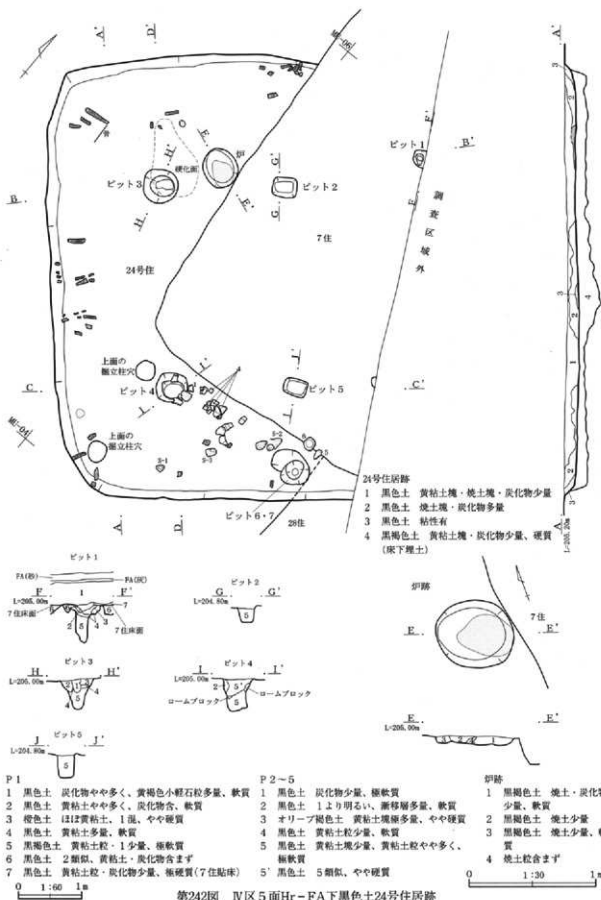
柱穴 主柱穴p2～5の4本、入口柱p6・7の2本検出。掘り方が角張るものが多い。p1長径26cm×短径(19)cm×深さ42cm、p2長径39cm×短径30cm×深さ25cm、隅丸長方形、主柱穴。p3長径55cm×短径53cm×深さ53cm、円形、底部隅丸長方形、主柱穴。p4長径50cm×短径46cm×深さ53cm、隅丸長方形、底部隅丸長方形、主柱穴。p5長径37cm×短径27cm×深さ42cm、隅丸長方形、主柱穴。p6長径43cm×短径22cm×深さ28cm、隅丸長方形、入口柱。p7長径43cm×短径25cm×深さ25cm、隅丸長方形、入口柱。

遺物出土状態 壁近くから中心に向かって多くの炭化材が出土した。一部溶けた骨の痕跡有り。主要な土器や石器類は南東部p4の東側からまとまって出土したが、大形砥石など一部のものを除き5～10cm程床面より浮いた状態で出土した。

遺存状態 比較的良好。1/2以上7号住居跡に壊されていたが、7号住居内で主柱穴も検出された。中心を向く多くの炭化材が検出されたので、火災住居と考えられる。

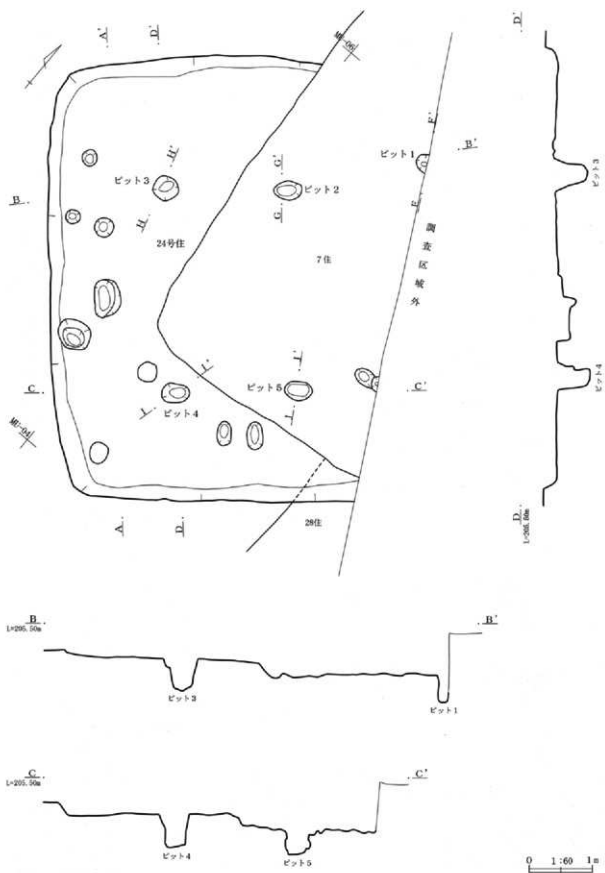
炉 位置 中央部よりやや北西、p2と3の間。

規模 長径65cm×短径53cm×深さ7cm



第242図 IV区5面Hr-FA下黒色土24号住居跡

Ⅲ 検出された遺構と遺物



第243図 IV区5面Hr-FA下黒色土24号住居跡掘り方

形状 楕円形、浅い皿状。

埋没土 焼土ブロック・粒子を多く含む、しまりの弱い黒褐色土。

遺物出土状態 無し。

遺存状態 比較的良好。炉内の東側が良く焼けていた。

25号住居跡

位置 MY-5, NA-5 主軸方向 N12°W

重複 無し。

規模 縦(2.20)m×横(1.32)m×深さ0.34m

形状 方形。

埋没土 炭化物・黄褐色軽石粒を少量含む黒色土。セクションポイントA寄り部分では焼土ブロックを極多量に含む部分もあり、カマドが近いものと考えられる。

掘り方 床面よりも約30cm程下がる。床面は凹凸が付くが、床下土坑等特別な遺構は検出されなかった。

床面 貼床有り。炭化物や焼土ブロックを極僅かに含む黒色～黒褐色土により埋められており、比較的良くしまっていたが、壁に近いこともあり、特に硬化している部分はなかった。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 不明。

遺物出土状態 東壁寄りで坏・甕・大形鉢などがまとまって出土したが、床面よりかなり浮いた状態であった。後で投棄されたものの可能性が高い。

遺存状態 不良。北東コーナーの一部検出。

カマド 不明。東壁？

26号住居跡

位置 NB-7・8・9, NC-7・8・9 主軸方向 N20°W

重複 26号住居→20・8号住居→9号溝

規模 縦(9.45)m×横(3.30)m×深さ0.55m

形状 方形？

埋没土 上層は黄褐色小軽石粒子含む黒色土、下層

は黄褐色粘性土ブロック少量含む黒色土。両層とも焼土粒子・炭化物粒子少量含む。

掘り方 床面より5～18cm程下がる。北壁と東壁には壁沿いの周溝よりさらに内側に周溝検出。東壁から内側に2条ないしは3条の間仕切り溝検出。底面に多数の工具痕検出。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックを多く含む黒色土により埋められていた。ほぼ平坦であり、比較的良くしまっていた。

貯蔵穴 不明。東壁中央に長径90cm×短径72cm×深さ22cmの土坑1がある。内部から土器片が出土した。周溝 幅10～17cm、深さ7～13cmで巡る。

柱穴 主柱穴2本、補助柱1本検出。p1長径70cm×短径55cm×深さ87cm、p2長径62cm×短径62cm×深さ89cm。両者とも底面は極めて硬くしまっており、隅丸長方形。p1には2ヵ所硬化面あり。p3長径(32)cm×短径(15)cm×深さ35cm

遺物出土状態 p2内上部から多量の礫とともに土器も出土した。中心の大形礫はすえられたように見える。その西壁から炭化材が出土した。その他は散在的に検出された。9号溝北側の土器群は床直に近い状態で検出されたが、8号住居東側の一群と南東コーナーの一群は床よりも5～10cm程浮いていた。

遺存状態 不良。8・20号住居跡や9号溝により大きく壊されていた。また、西半は調査区外で未検出。p1の東側にはベンガラが散布していたエリアがあった。炭化材は僅かではあったが出土しており、焼土粒子も少量ではあるが出土したので、火災住居の可能性が考えられる。

炉 不明。

27号住居跡

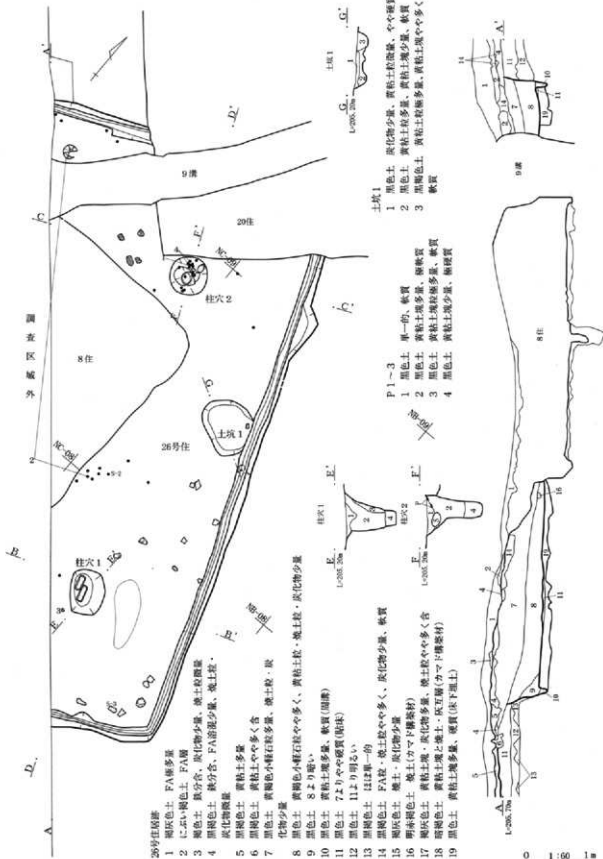
位置 NB-13, NC-12・13, ND-12 主軸方向 N16°W

重複 無し。

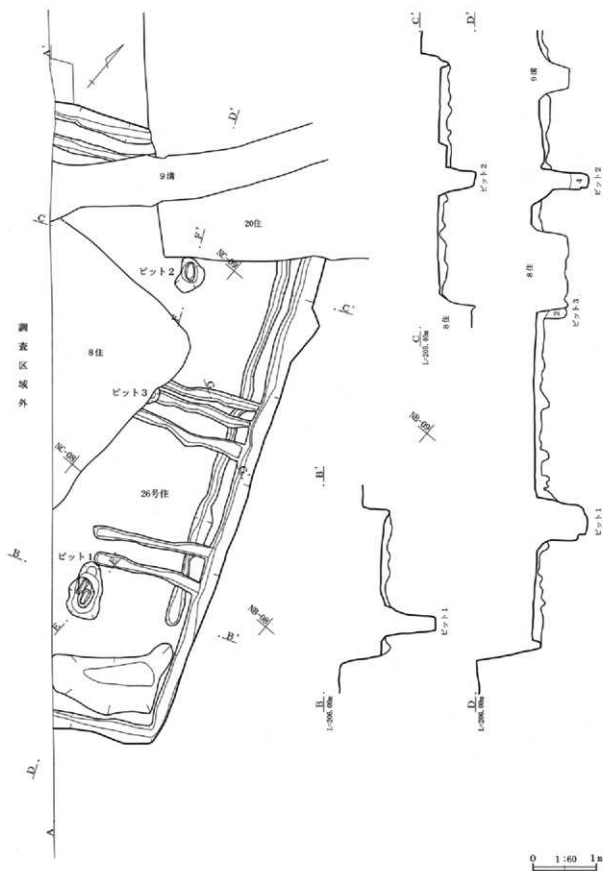
規模 縦(2.06)m×横(6.20)m×深さ0.36m

形状 方形？

埋没土 黄褐色小軽石粒子多量に含む黒色土、しま

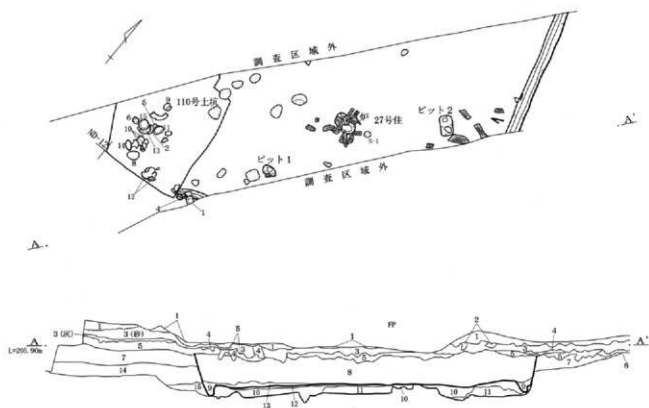


第244図 N区5面Hr-FA下黒色土26号住居跡



第245図 IV区5面Hr-FA下黒色土26号住居跡掘り方

III 検出された遺構と遺物



27号住居跡

1 褐色土 FA少量、軟質(FF水田畦)

2 灰黄褐色土 1・3混土、極軟質

3 にふい黄褐色土 乱れたFA層、極軟質

4 褐色土 鉄分含、FA粒やや多く、極軟質

5 褐色土 鉄分多量

6 黒色土 FA粒僅か

7 黒色土 黄褐色小軽石粒多量、炭化物少量、やや硬質

8 黒色土 7より黒く、軟質

9 黒色土 黄粘土粒多量、極軟質

10 黒色土 黄粘土粒多量、炭化物やや多く、焼土粒少量

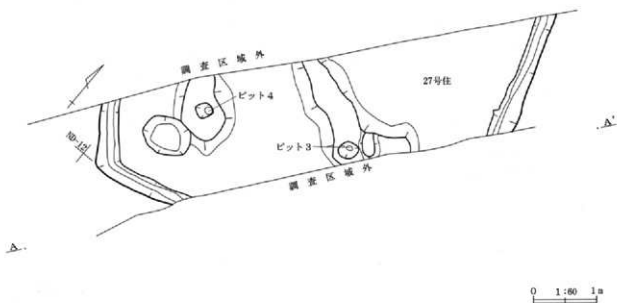
11 暗褐色土 黄粘土主体、黒色土層か

12 黒色土 黄粘土多量、硬質(粘床)

13 赤褐色土 機土多量、黄粘土やや多く、炭化物僅か、やや軟質

14 黒色土 7より黄褐色小軽石粒少量

15 黒色土 はは単一の



第246図 IV区5面Hr-FA下黒色土27号住居跡

りは悪い。炭化物片を多く、焼土粒子少量含む。

掘り方 床面よりも5～15cm程下がる。中心がやや高く、周辺部は凹む。底面には多くの鋤状工具による痕跡有り。

床面 貼床有り。黄褐色粘性土ブロックと黒色土の混合土により埋められていた。上層はやや黄褐色粘性土の割合が少なく、下層は多い。

貯蔵穴 南西コーナー。調査時に110号土坑としたものであり、その周辺から極めて多量の高坏や坏・甕などが出土した。長径77cm×短径50cm×深さ47cm、隅丸長方形。

周溝 幅10～15cm、深さ7cmで巡る。掘り方調査時に南西部も確認。

柱穴 ビット4基検出。柱穴の可能性が高いのは掘り方調査時に検出したp4のみ。p1長径23cm×短径15cm×深さ22cm、楕円形。p2長径32cm×短径20cm×深さ17cm、隅丸長方形。p3長径32cm×短径25cm×深さ4cm、楕円形。p4長径25cm×短径22cm×深さ45cm、隅丸長方形。

遺物出土状態 炭化材を多く検出。特に中央の炉の周りや東壁近くには多かった。土器類は南西部の貯蔵穴周辺に集中する。円礫は貯蔵穴と炉の間に多かった。

遺存状態 不良。南西部の貯蔵穴が住居に伴うものか否かという検討を行いプラン確認したが、それは非常に困難であった。北西部の大半と南東部が調査区外のため全体未検出。多くの炭化材が出土し、焼土粒子も検出されたことから火災住居と考えられる。

炉 位置 中央p1とp2の間。

規模 長径35cm×短径25cm×深さ6cm

形状 楕円形、浅い皿状。

埋没土 焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。

遺物出土状態 上から多量の炭化材、その下から土器片出土。

遺存状態 比較的良好。底面は良く焼けていた。

28号住居跡

位置 MS-3・4、MT-3・4 主軸方向 N2°E

重複 24号住居→28号住居→7号住居

規模 縦(4.74)m×横(3.40)m×深さ0.15m

形状 方形?

埋没土 黄褐色小軽石粒子多量に含む黒色土、下層の方がやや少ない。炭化物は下層の方が多量。全体に焼土粒子少量。

掘り方 床面より17～30cm程下がる。底面には多くの鋤状工具による痕跡有り。

床面 貼床有り。黄褐色小軽石粒子をやや少なく含む黒色土により埋められていた。中心に黄褐色粘性土ブロックを少量含む部分有り。比較的平坦であるが、中心がやや高い。焼土部分3ヵ所検出。

貯蔵穴 不明。西壁に長径120cm×短径85cm×深さ18cmの半月形の土坑1有り。黄褐色小軽石粒子を多量に含む黒色土により埋没していた。

周溝 幅10～15cm、深さ3～7cmで巡る。

柱穴 不明。p1長径33cm×短径32cm×深さ16cmが南西部に有り。

遺物出土状態 埋没土中より坏や高坏の破片出土。完形品や大形破片の出土はなかった。

遺存状態 不良。プラン確認は非常に困難であり、浅かった。床上で焼土部分が検出されたり、埋没土中に炭化物が入っていることなどから火災住居の可能性が高い。

炉 不明。

29号住居跡

位置 MX-7・8・9、MY-7・8・9・10、NA-7・8・9・10、NB-8・9 主軸方向 N24°W

重複 29号住居→12・22号住居

規模 縦10.34m×横10.62m×深さ0.12m

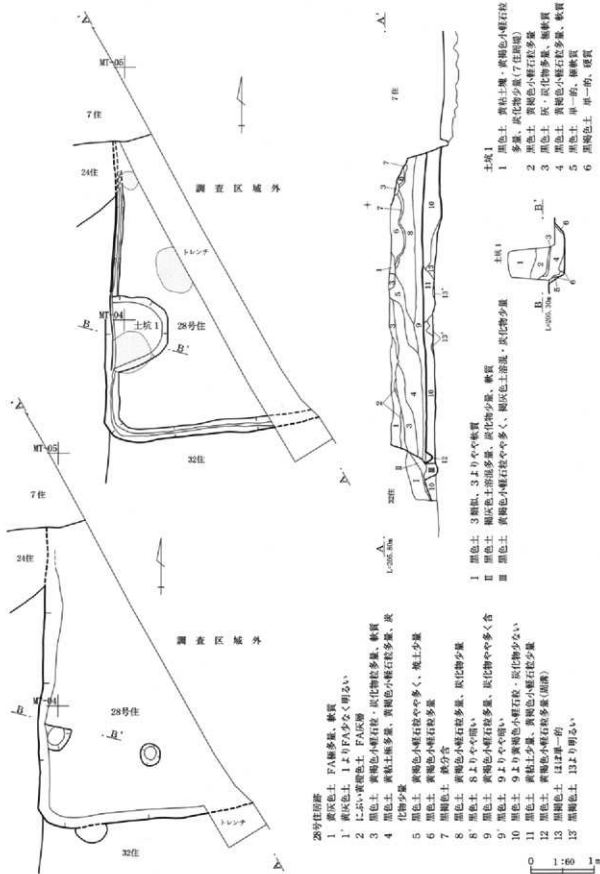
形状 方形。

埋没土 黄褐色小軽石粒子多く、炭化物片やや多く、焼土粒子少量含む黒色土。

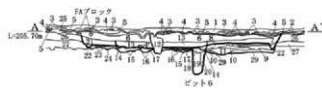
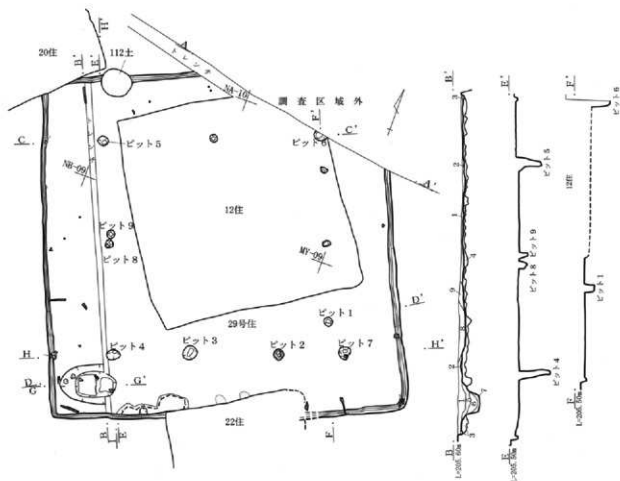
掘り方 床面より5～30cm程下がる。底面には無数の凹凸有り。掘り方調査時に検出されたピットも数多く有り。p11は床下土坑かと考えられる。

床面 貼床有り。黄褐色小軽石粒子少量含む黒色土

III 検出された遺構と遺物



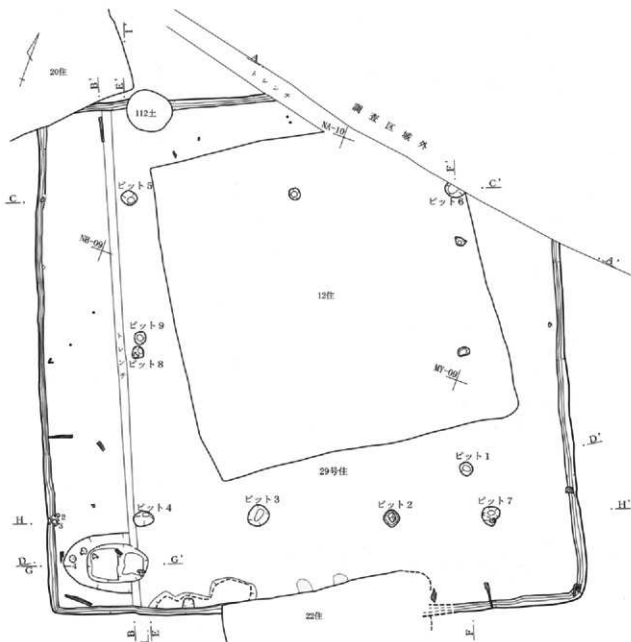
第247図 IV区5面Hr-FA下黒色土28号住居跡



- B-B'
- 1 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒・炭化物少量
 - 2 黒色土 黄粘土塊多量、硬質
 - 3 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒極少量、軟質(周溝)
 - 4 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒少量、硬質(床下)
 - 5 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒少量、軟質(貯蔵穴)
 - 6 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒少量、極軟質(貯蔵穴)
 - 7 黒色土 黄粘土塊やや多く含、極軟質(貯蔵穴)
 - 8 黒色土 黄粘土塊多量、焼土塊・炭化物・灰含
 - 9 黒色土 黄粘土塊・焼土塊・炭化物・黄褐色小軽石粒少量

第248図 IV区5面Hr-FA下黒色土29号住居跡セクション・エレベーション

III 検出された遺構と遺物



29号住居跡

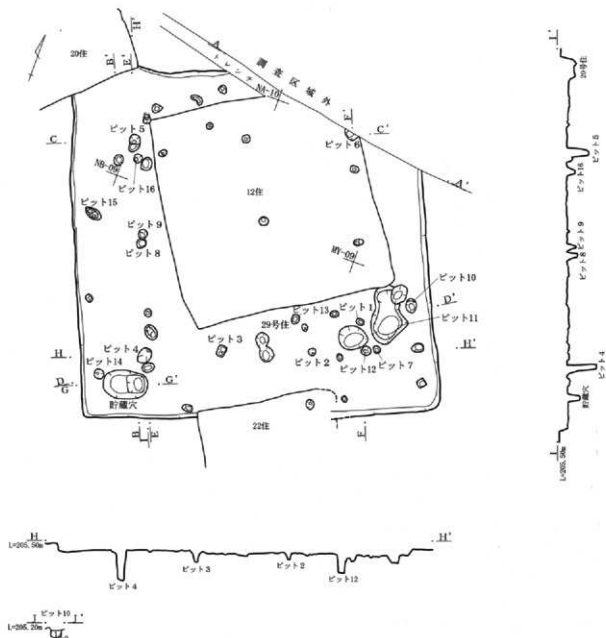
A-A'

- 1 褐色土 FA多量、焼土少量、軟質
- 2 灰褐色土 FA極多量
- 3 FA純層
- 4 黒色土 焼土粒・炭化物・黄褐色小軽石粒少量
- 5 暗褐色土 焼土粒・炭分多量
- 6 黒色土 黄褐色小軽石粒多量、焼土粒やや多く含
- 7 黒色土 黄褐色小軽石粒多量、炭化物やや多く、焼土粒少量
- 8 黒色土 黄褐色小軽石粒・炭化物・灰多量、黄粘土塊やや多く含
- 9 黒色土 黄粘土粒少量、黄褐色小軽石粒微量
- 10 褐色土 黄粘土主体、黒色土少量、硬質
- 11 黒色土 9よりやや硬質
- 12 黒褐色土 黄褐色小軽石粒・炭化物少量、軟質
- 13 黒色土 7より黄褐色小軽石粒少ない、灰少量
- 14 黒色土 灰少量、軟質（周溝）

- 15 黒色土 灰多量、炭化物少量
- 16 黒褐色土 黄粘土多量、硬質（12住貼床）
- 17 黒褐色土 黒色土やや多く、黄粘土少量（12住床下）
- 18 黒褐色土 黄粘土塊・焼土粒・炭化物少量（29住P6）
- 19 黒色土 黄粘土微量、極軟質（29住P6）
- 20 褐色土 黄粘土主体、黒色土僅か、軟質（29住P6）
- 21 黒色土 13より暗い、灰含まず
- 22 黒色土 黄褐色小軽石粒微量、軟質（29住周溝）
- 23 黒色土 黄褐色小軽石粒少量、極硬質（29住貼床）
- 24 黒褐色土 黄褐色小軽石粒少量、硬質（29住床下）
- 25 黒褐色土 黄褐色小軽石粒多量、炭化物少量
- 26 黒色土 黄褐色小軽石粒極多量、黄粘土粒少量
- 27 黒褐色土 白色微粒多量、硬質
- 28 黒褐色土 単一の、硬質
- 29 黒色土 単一の、硬質

0 1:80 2m

第249図 IV区5面Hr-FA下黒色土29号住居跡



- P10
 1 黒色土 黄粘土やや多く、極軟質
 2 褐色土 黄粘土主体、暗褐色土僅か、軟質



- P12・13
 1 黒色土 黄粘土粒やや多く、炭化物少量



- P14・15
 1 黒色土 黄褐色小軽石粒微量、やや硬質
 2 黒褐色土 炭移層塊溶混多量、硬質



- P16
 1 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒少量、軟質



0 1:120 3m

第250図 N区5面Hr-FA下黒色土29号住居跡掘り方ピットセクション・エレベーション

により貼られていたが、非常に良くしまっていた。壁近くは不明瞭な部分も有り、あまり硬くない部分もあった。

貯蔵穴 南西コーナー。長径(180)cm×短径125cm×深さ70cm。楕円形、底面隅丸長方形、東半が深い。高坏脚・埴など主要な土器類がまとまって出土した。
周溝 幅約10cm、深さ2～14cmで全周するものと思われる。

柱穴 20数基のビット検出。四隅の主柱穴の間に1～3本の補助柱が立つ。掘り方調査時南東部に2間(2.70m)×1間(2.50m)の柱穴で囲まれる部分有り。p1長径28cm×短径26cm×深さ33cm、円形。p2長径33cm×短径32cm×深さ34cm、隅丸方形。p3長径44cm×短径41cm×深さ42cm、隅丸長方形。p4長径43cm×短径40cm×深さ99cm、楕円形。p5長径31cm×短径29cm×深さ101cm、隅丸方形。p6長径(22)cm×短径(20)cm×深さ62cm、楕円形? p7長径35cm×短径25cm×深さ29cm、楕円形。p8長径27cm×短径25cm×深さ36cm、楕円形。p9長径25cm×短径25cm×深さ31cm、円形。p10長径45cm×短径33cm×深さ31cm、楕円形。p11長径115cm×短径(80)cm×深さ17cm、隅丸長方形。p12長径32cm×短径28cm×深さ54cm、底部隅丸長方形。p13長径30cm×短径24cm×深さ46cm、楕円形。p14長径32cm×短径30cm×深さ37cm、円形。p15長径59cm×短径31cm×深さ32cm、楕円形。p16長径28cm×短径25cm×深さ24cm、円形。p17長径21cm×短径21cm×深さ16cm、円形。p18長径28cm×短径20cm×深さ19cm、隅丸長方形。p19長径31cm×短径20cm×深さ32cm、隅丸長方形。p20長径28cm×短径20cm×深さ10cm、楕円形。p21長径23cm×短径18cm×深さ17cm、楕円形。p22長径20cm×短径17cm×深さ10cm、隅丸方形。p23長径26cm×短径25cm×深さ12cm、隅丸方形。p24長径38cm×短径28cm×深さ26cm、楕円形。

遺物出土状態 壁際で中心に向かって炭化材が検出された。貯蔵穴北側の西壁周溝部分から高坏脚や埴類が出土した。その他は破片が散在的に出土した。

遺存状態 不良。ほとんど倒平されており、床面ま

では非常に浅かった。この場所で切り合う住居跡の中では最も古く、かつ巨大なものであった。貯蔵穴規模も他の住居跡よりもかなり大きく、Ⅲ区・Ⅳ区の中でも最大の住居跡である。火災住居と考えられる。

炉 不明。

30号住居跡

位置 MS-1・2, MT-1 主軸方向 N85°W

重複 30号住居→100号土坑

規模 縦(1.96)m×横(5.40)m×深さ0.05m

形状 不明。

埋没土 炭化物を多量に含む黒色土が床上で確認された。

掘り方 床面より10～15cm前後下がる。鋤状工具の痕跡が確認された。

床面 貼床有り。黄褐色小軽石粒子・炭化物粒子微量含む黒色土により埋められていた。検出された部分では比較的良くしまっていた。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 不明。

遺物出土状態 カマド手前で床頂上から炭化材及び大形礫検出。弥生土器片・土師器壺小破片出土。

遺存状態 極めて不良。カマド周辺部のみ一部検出。
カマド 位置 西壁。

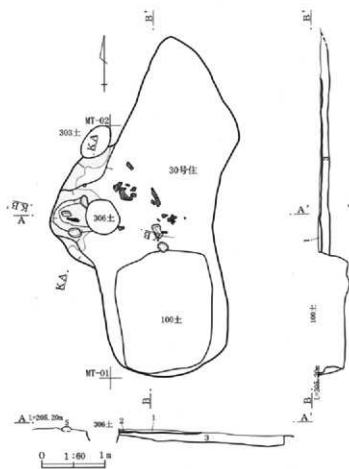
規模 全長(60)cm 最大幅(85)cm 焚き口幅(30)cm
袖 両袖とも粘性土により構築されていたが、大形礫も1点ずつ使用されていた。

煙道 住居壁を切り込んで約70cm程外へ延びる。

埋没土 黄褐色粘性土ブロックを多量に含む赤褐色土。天井崩落土と考えられる。

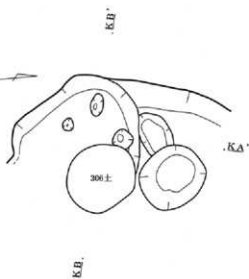
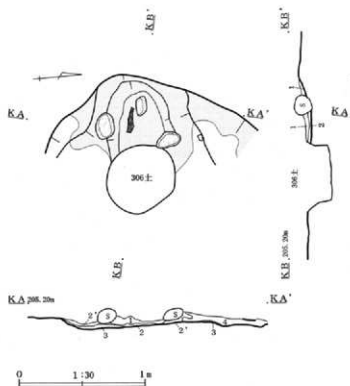
遺物出土状態 埋没土より弥生土器壺小破片出土。
遺存状態 手前を掘立の柱穴に切られており極めて不良。しかし、両袖の石と燃焼部の礫を用いた支脚は残っており、低い壁と底面も良く焼けていた。底面には2cm程灰層が確認された。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



30号住居跡

- 1 黒色土 炭化物多量、黄褐色小礫石粒少量
- 2 黒色土 灰、含焼土粒少量
- 3 黒色土 黄褐色小礫石粒少量、炭化物微量



30号住居跡カマド

- 1 赤褐色土 焼土 黄粘土多量、やや硬質
- 2 褐灰色土 灰層 焼土粒少量、軟質
- 2' 褐灰色土 灰層 2より焼土粒やや多い
- 3 黒色土 炭化物少量、硬質
- 4 黒色土 黄粘土塊やや多く、焼土粒・炭化物微量
やや硬質

第252図 IV区5面Hr-FA下黒色土30号住居跡・カマド

31号住居跡

位置 MX-6・7 主軸方向 N25°W

重複 22号住居→31号住居

規模 不明。

形状 不明。

遺存状態 極めて不良。

カマド 位置 不明。南壁？

規模 全長(41)cm 最大幅(61)cm 焚き口幅(49)cm

袖 不明。

煙道 不明。

埋没土 確認した時点では非常に浅く、カマド周辺部分が一部残っていた程度で埋没土はほとんどなかった。

遺物出土状態 中央部分に高坏の脚がすえてあった。そのまわりから炭化物粒や焼土粒及び坏類が出土した。

遺存状態 非常に悪く、しまりの良い土の上に貼り付いていた程度であった。西側部分には粗砂を含む粘土が貼付されていた。

32号住居跡

位置 MS-3, MT-3 主軸方向 N4°E

重複 32号住居→28・34号住居

規模 不明。

形状 方形？

埋没土 地山よりもやや軟質で、若干白色粒子を多く含む黒褐色土が貼り付いていた程度でほとんど深さはなかった。

掘り方 鋤による工具痕が多数検出された。

床面 比較的平坦。あまり硬くしまつてはなかった。

貯蔵穴 西壁近くに長径55cm×短径48cm×深さ18cmの床下土坑と同程度のピット1があった。

周溝 無し。

柱穴 不明。

遺物出土状態 無し。

遺存状態 極めて不良。西壁の一部を確認したのみであった。

カマド 不明。

炉 不明。

33号住居跡

位置 MS-23・24 主軸方向 N35°E

重複 33号住居→11号住居

規模 縦(3.22)m×横(2.35)m×深さ0.31m

形状 方形？

埋没土 黄粘土粒・黄褐小軽石粒含む。黒色～黒褐色土により埋没していたが、下層の方がその量は少ない。

掘り方 西壁近くに不定形な小ピットが2基あったが、他に特徴的なものはなかった。

床面 比較的平坦であり、あまり硬くしまつてはなかった。

貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

柱穴 不明。

遺物出土状態 無し。

遺存状態 極めて不良。北側を11号住居に壊され、西壁と北壁一部をわずかに確認したのみであった。

カマド 不明。

炉 不明。

34号住居跡

位置 MS-3 主軸方向 N33°E

重複 32号住居→28・34号住居

規模 縦(1.30)m×横(1.10)m×深さ(0.01)m

形状 方形？

埋没土 地山よりやや軟質で、若干白色粒子を多く含む黒褐色土が貼り付いていた程度で、ほとんど深さはない。

掘り方 特に特徴無し。

床面 比較的平坦。

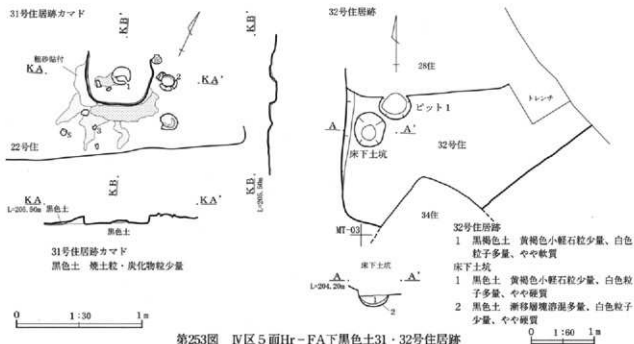
貯蔵穴 不明。

周溝 無し。

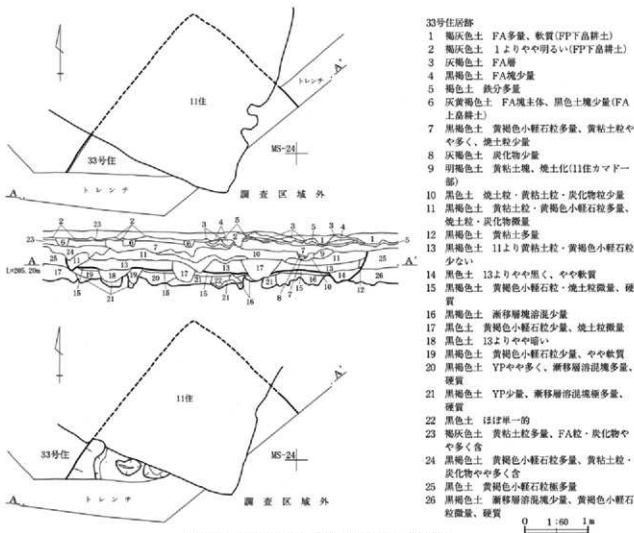
柱穴 不明。

遺物出土状態 無し。

III 検出された遺構と遺物



第253図 IV区5面Hr-FA下黒色土31・32号住居跡



第254図 IV区5面Hr-FA下黒色土33号住居跡

遺存状態 極めて不良。痕跡一部確認。

カマド 不明。

炉 不明。

1号遺物集中（屋外炉跡）

位置 MX-6 主軸方向 N27°E

重複 4号住居→1号遺物集中

規模 長径270cm×短径225cm×深さ15cm

形状 不整形な楕円形。

埋没土 黄褐色粘性土ブロック及び同粒子・焼土粒子・炭化物粒子含む黒褐色～褐色土。

掘り方 浅い皿状。掘り込みの重複で結果的に不整形を呈する。

遺物出土状態 最上部F A直下から坏類が出土しはじめ、一部4号住居跡の周堤帯内部に喰い込んでいた。同住居跡とはは同時期から使用しはじめ、その直後まで使われていた可能性がある。

遺存状態 不良。複数の屋外炉跡の集合体と考えられ、厳密にその一つ一つを把握することは困難であった。

3号遺物集中

位置 MU-3・4 主軸方向 N26°W

重複 無し。

規模 長径260cm×短径204cm×深さ29cm

形状 楕円形。

埋没土 上層は炭化物多く含む褐灰色土、土器・礫を多量に含む。下層は炭化物・焼土ブロックを多く含む黒褐色土。

掘り方 楕円形。浅い鍋底状。

遺物出土状態 上層から多量の礫及び土器片出土。焼け礫が多く、下層からの出土はほとんどなく、使用していたものを投棄したものと考えられる。

遺存状態 比較的良好。焼土だけでなく、底面北側には焼けた部分あり。炭化物や灰、黄褐色粘性土ブロックを含む層が4～5cm程堆積していた。

4号遺物集中

位置 NA-7・8 主軸方向 N4°E

重複 29号住居→4号遺物集中

規模 長径114cm×短径118cm×深さ8cm

形状 楕円形。

埋没土 焼土ブロック・炭化物・灰を含む黒色～黄褐色土。

掘り方 不整形な楕円形。

遺物出土状態 周辺から多くの炭化材出土。礫と礫の間から土器片出土。

遺存状態 比較的良好。円礫と茶褐色粘性土により構築されていた。燃焼部に支脚有り。使用面は良く焼けていた。構造的には礫を使用したカマドそのものであるが、それに付随した竪穴等の他の施設はなかった。単独の屋外カマドと考えられる。

5号遺物集中（IHMY-8遺物集中）

位置 MX-8・9、MY-8・9 主軸方向 N33°W

重複 29号住居→12号住居→5号遺物集中

規模 長径710cm×短径380cm×深さ20cm

形状 楕円形に分布。

埋没土 焼土ブロック・炭化物を多量に含む黒色土。

掘り方 底面不平等な浅い皿状。

遺物出土状態 円礫が散布する間に土器が集中する部分がある。土器は大形の甕類が多く坏類が少ない。礫は焼けているものが多い。

遺存状態 他の遺物集中よりもまともよりは少なく、分散した感じ。底面は焼けておらず、屋外カマドで使用されていた土器や礫をまとめて凹地に投棄したものと考えられる。

11号掘立柱建物跡

位置 MR-0・1 主軸方向 N78°E

重複 12号掘立柱と重複する位置にあるが、新旧関係不明。

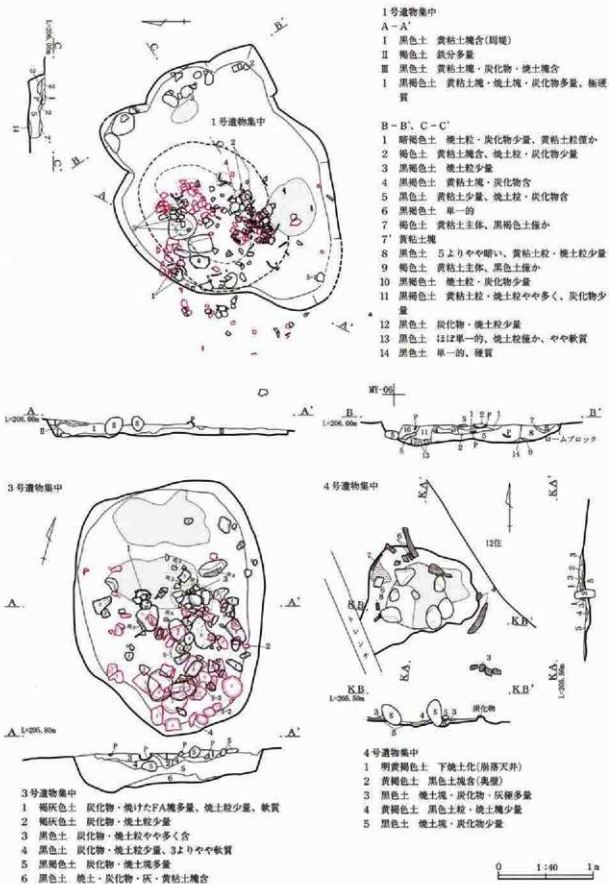
規模 2間(3.20m)×2間(2.30m)以上

形状 東西に長い長方形。

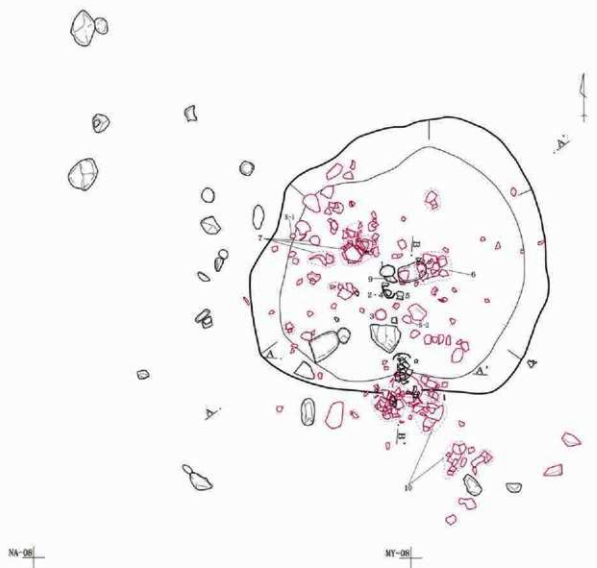
柱穴埋没土 黄褐色粘性土ブロック・粒子を多く含む黒褐色土。

掘り方 ほぼ円形。丸底。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



第255図 IV区5面Hr-FA下黒色土Ⅰ・3・4号遺物集中



5号遺物集中

- 1 黒色土 FA塊・焼土塊・炭化物含
- 2 黒色土 焼土塊・炭化物極多量、FA塊少量
- 3 黒色土 焼土塊・炭化物多量、FA塊少量
- 4 黒色土 焼土塊・炭化物やや多く、FA塊少量
- 5 黒色土 焼土塊・炭化物やや多く、FA塊・FP少量
- 6 黒色土 焼土塊・炭化物少量

0 1:20 50cm

第256図 IV区5面Hr-FA下黒色土5号遺物集中

Ⅲ 検出された遺構と遺物

柱穴 5本検出。p1長径28cm×短径28cm×深さ23cm, p2長径44cm×短径43cm×深さ38cm, p3長径45cm×短径42cm×深さ32cm, p4長径38cm×短径35cm×深さ32cm, p5長径35cm×短径32cm×深さ30cm

遺物出土状態 柱穴掘り方調査中に若干の土器小破片は出土したが、必ずしも本遺構に伴うものとは言えない。

遺存状態 不良。柱痕無し。住居群調査終了後土坑群調査中に検出したものであり、FA下の掘立柱建物跡に比べ浅かった。7・8・9号掘立柱建物跡に先行するものと考えられる。

12号掘立柱建物跡

位置 MR-0・1 主軸方向 N9°E

重複 11号掘立と重複する位置にあるが、新旧関係不明。

規模 2間(4.25m)×1間(1.65m)以上

形状 南北に長い長方形?

埋没土 黄褐色粘性土ブロック・粒子を多く含む黒褐色土。

掘り方 楕円形。九底。

柱穴 4本検出。p4はややずれるので他のピットの可能性はある。p1長径60cm×短径40cm×深さ34cm, p2長径40cm×短径32cm×深さ29cm, p3長径35cm×短径27cm×深さ53cm, p4長径28cm×短径25cm×深さ20cm

遺物出土状態 柱穴掘り方調査中に若干の土器小破片は出土したが、必ずしも本遺構に伴うものとは考えられない。

遺存状態 不良。柱痕無し。住居群調査終了後土坑群調査中に検出したものであり、FA下の掘立柱建物跡に比べ浅かった。7・8・9号掘立柱建物跡に先行するものと考えられる。

100号土坑

位置 MS-1 主軸方向 N7°W

重複 30号住居→100号土坑

規模 長径188cm×短径155cm×深さ37cm

形状 隅丸長方形。

埋没土 黄褐色粘性土ブロック含む黒褐～黒色土。下層の方が暗い。両層とも黄褐色軽石粒・白色軽石粒少量含む。

掘り方 浅い鍋底状。底面は南東部が低い。

遺物出土状態 埋没土中より弥生土器小破片が出土したが、必ずしも本遺構に伴うものとは考えられない。

遺存状態 比較的良好。

111号土坑

位置 MV-2・3, MW-2・3 主軸方向 N33°W

重複 無し

規模 長径220cm×短径201cm×深さ17cm

形状 楕円形。

埋没土 黄褐色小軽石粒子少量、炭化物粒子微量、灰白色土ブロック溶混を含みまじりの悪い黒色土。

掘り方 浅い皿状。底面は比較的平坦。

遺物出土状態 大形礫は外側に、土器は中心に近い部分にまとまりがあった。浅い掘り込み部分に置いたものが土圧で押し潰されたものと考えられる。復元できた土器は大形の弥生甕2点であり、いずれも体部最大幅部分に外からの打撃により穿孔されていた。なお、骨や玉類は検出できなかった。

遺存状態 浅い掘り込みの状態で検出された。遺存状態は決して良いとは言えないが、主体部は残っていたものと思われる。甕の体部が打撃により穿孔されていたことから墓坑と考えられる。また、全く同様なものが2個体出土していることから、最低でも2人埋葬されていたものと推量される。

329号土坑

位置 MW-7, MX-7 主軸方向 N60°E

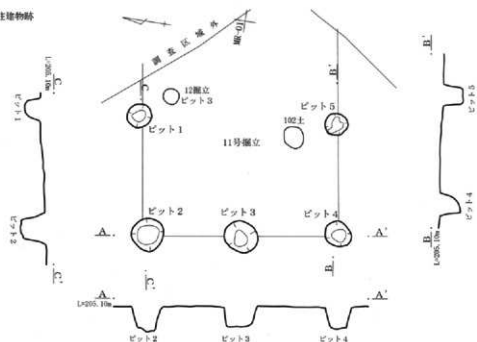
重複 無し。

規模 長径127cm×短径120cm×深さ25cm

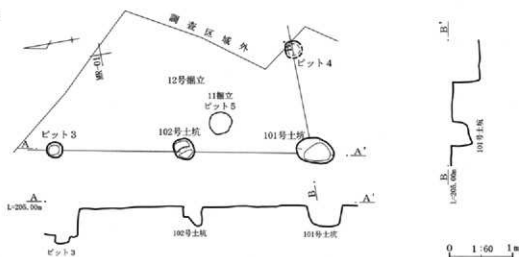
形状 ほほ円形。

埋没土 上層は炭化物片少量、YP粒やや多く含む黒色土、下層は黄褐色粘性土ブロック溶混を多量に

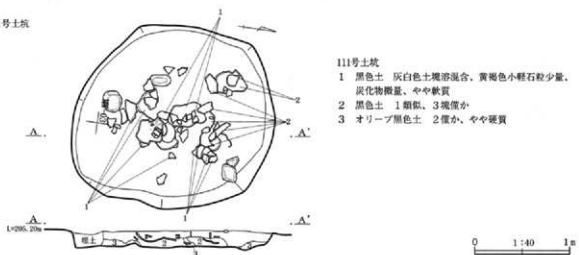
11号掘立柱建物跡



12号掘立柱建物跡

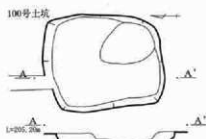


111号土坑

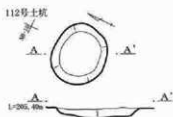


第257図 IV区5面Hr-FA下黒色土11・12号掘立柱建物跡、111号土坑

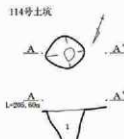
III 検出された遺構と遺物



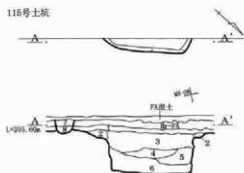
100号土坑
1 黒褐色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒含
2 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒少量、硬質



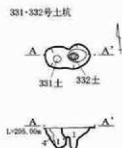
112号土坑
1 黒褐色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒含



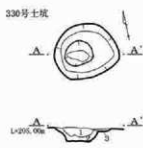
114号土坑
1 黒褐色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒含



115号土坑
1 黒色土 黄粘土塊・炭化物・黄褐色小軽石粒少量
2 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒僅少、やや硬質(埋土)
3 黒褐色土 黄粘土塊多量、黄褐色小軽石粒少量(埋土)
4 黒色土 黄粘土塊やや多く、黄褐色小軽石粒少量(埋土)
5 黒色土 黄粘土塊・黄褐色小軽石粒少量(埋土)
6 黒色土 黄粘土塊多量、黄褐色小軽石粒少量(埋土)
7 FA主体 黒褐色土少量、やや軟質(FA上高)
8 黒褐色土 FA塊多量、炭化物・黄褐色小軽石粒少量(FA上高)

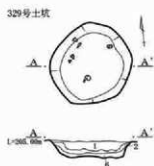


331・332号土坑



330号土坑

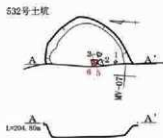
329~333号土坑
1 黒色土 YP粒やや多く、炭化物・漸移層塊溶混少量、硬質
1' 1より明るく、漸移層塊溶混やや多い
2 黒褐色土 漸移層塊溶混多量、1よりYP粒少なく、極硬質
3 黒色土 単一の、軟質
4 黒褐色土 黄粘土塊多量、1'よりやや軟質
5 黒褐色土 漸移層塊多量、YP微量、軟質
6 明褐色土 黄粘土塊溶混・黒褐色土塊混土、軟質



329号土坑



333号土坑



532号土坑



第258図 IV区5面Hr-FA下黒色土100・104~108・112・114・329~333・532号土坑

含む黒褐色土。上層より下層の方がしまりは良い。
 掘り方 浅い鍋底状。底面は比較的平坦。
 遺物出土状態 縄文前期土器口縁部・体部破片が散在的に出土。底面より10cm以上浮いていた。
 遺存状態 比較的良好。確認した時点では比較的浅かったが、いわゆる貯蔵穴と考えられる。

330号土坑

位置 MW-7 主軸方向 N78°W
 重複 無し。
 規模 長径103cm×短径85cm×深さ22cm
 形状 楕円形。
 埋没土 上層は炭化物片少量、Y P粒やや多く含む黒色土、下層は黄褐色粘性土ブロック溶混を多量に含む黒褐色土。上層より下層の方がしまりは良い。
 掘り方 丸底。西側が深くなる。
 遺物出土状態 無し。
 遺存状態 不良。遺物は出土しなかったが、埋没土の状況から縄文時代のものと考えられる。

532号土坑

位置 MV-7 主軸方向 N34°E
 重複 532号土坑→4号住居
 規模 長径(90)cm×短径(100)cm×深さ20cm
 形状 楕円形。
 埋没土 上層は炭化物片少量、Y P粒やや多く含む黒色土、下層は黄褐色粘性土ブロック溶混を多量に含む黒褐色土。上層より下層の方がしまりは良い。
 掘り方 やや深い皿状。底面はやや西側に傾斜する。
 遺物出土状態 4号住居との境目から出土したが、底面から4cm前後上で検出された。
 遺存状態 不良。東半1/2検出。西半は4号住居により削られ、周堤帯に盛られていた。

2 遺物概要

(1) 土器概要

I区第1面F P上

5軒の住居跡と多くの土坑が確認されたが、1・2・3・5号住跡土師器・須恵器、3号土坑から土器(かわらけ)等が出土した。4号住跡は確認した時点で既に床面まで削平されており、痕跡を確認しただけで遺物も殆ど出土しなかった。1号住と2号住には特徴的なものとしては灰釉陶器と羽釜がある。2号住からは少なくとも5個体の羽釜が出土し、胴が張るタイプのものであまり張らないものとの両方があったが、1号住からは胴の張るタイプのもはなかった。3号住居跡からも胴の張らない羽釜破片が出土した。坏・碗の類は底部が比較的小さく、口縁はかなり開いて立ち上がり、口唇部は外反するものであった。底部は灰釉陶器を除きいずれも糸切りであった。2号住居跡からは内面を磨きしぼす内黒の碗が出土した。5号住居跡からは坏が1点出土したが、分厚い小形のもので、土器(かわらけ)と呼んだ方がよいようなものである。平安末期の10世紀末～11世紀代と考えられるものである。3号土坑から出土した坏は口唇部が薄く尖り、底部糸切りではあるが、静止の糸切りであり、縦に糸紋が付いている。

いずれの住居跡も住居跡同士の重複関係は認められず、一定間隔を置いて配置されていたが、必ずしも同時期存在とは言えず、1～3号住居跡は10世紀代、4号住跡は時期不明、5号住跡は10世紀末～11世紀代と考えられる。これらの遺構は平安時代後期の10世紀代から11世紀にかけて営まれたと考えられるものである。掘立柱建物跡については時期判定に使用できるような遺物は殆ど出土しなかったが、平安時代以降のものと考えられる。1号掘立柱建物跡からは淳化元宝も出土しており、中世の可能性も否定できない。

第2面F P下及び第4面F A下

この間は水田の連続耕作であり、時期判定に使用できるような遺物は出土しなかった。

第5面F A下黒～黒褐色土

上位から弥生土器(I)が出土した。同土器は甕の頸部破片と考えられ、幅12cm、8本以上の簾状文とその下に波状文を施すものであった。隣のⅡ区と違い

弥生時代の遺物は極めて少なく、同時代の遺構も全く確認出来なかった。

中期～後期の縄文土器は第5面下位の黒～黒褐色土層位のグリッドから出土した。中期後半加曾利E式土器数点、後期堀之内式土器片が多数出土した。加曾利E式土器に続く称名寺式土器は無く、一時期空白が出来たものと考えられる。加曾利E式土器はいずれも後葉～終末のもので、その中には器形復原可能な大形破片(縄文-1)もあった。沈線で区画し、縄文を充填するものが多い後期堀之内式主体で、中期が客体的に混じるが、縁辺が摩滅しているものが多く、現位置を保っているものは少ないと思われる。後期堀之内式土器の一部には胴部下端にまで縄文を施すものもあった。同式期の底部には網代直を残すものが多く、かなり粗い編み込みのものや細かいものがあった。大形の深鉢の底部には粗いものが、小形の鉢類の底部には細かいものが多い傾向が見受けられた。

第6面基盤の横層直上

草創期に属すると考えられる土器片は基盤直上の黄褐色粘性土から17点が出土した。細・微隆線が施されるもの6点、その内口縁部1点、その他5点は体部破片であった。1は平縁で口縁下に数条の横位微隆線施されるもので、欠損している下にも更に横位微隆線が施されるものと考えられる。2は2条の微隆線で楕円に区画された中に波状の細隆線が施されるもので、この時期の中でも類例は少ないが特徴的なものである。3は横位微隆線が2条施されるもので、4～6は斜位微隆線が施されるものである。9は一定間隔に横位に米粒状の粘土粒が貼付されるものである。9を除く7～17は無文土器片であり、口縁部破片は7と8であり、それ以外は体部破片である。薄手のものと厚手のものがある。7は厚手の大形破片であり、口縁部から底部近くまであり、底部先端は無いが、底部は尖底もしくは尖底に近い丸底と考えられる。8は完全な平縁ではなくやや波状になるものと推定される。

Ⅱ区第1面F P上

3軒の住居跡及び土坑から須恵器の碗や甕、灰釉陶器の碗、羽釜や甌などの破片が若干出土した。1号住居跡の甌(11)は大形で、底部近くに孔がある。羽釜(12)は胴が外に大きく張るもので薄手の作りと

なっている。須恵器の甕の破片(8~10)は大形の個体の一部と考えられる。2号住居跡からは羽釜と須恵器の甕の小破片が、3号住居跡からは土師器の甕の底部が出土した。いずれも10世紀代のもと考えられ、特に注目すべきようなものはなかった。

第2面F P下

2号溝から須恵器の甕の破片(1)が出土したのみであり、しかも摩滅した小破片であり、時期を特定するようなものではなかった。

第3面F A上

3号溝から土師器の坏口縁部破片(1)と須恵器の甕頭部破片(2)が出土した。いずれも小破片であり、時期を特定するようなものではなかった。

第4面F A下

1号遺物集中から口縁部の作りが厚く大きく外反する胴部が丸い甕が検出された。口縁~胴部に繋がるとは2点あるが、1点(1)は胴部の調整は施削りで、もう1点(2)は一部に刷毛目状調整が残る鈍煎り・寛撫で後寛磨きを施すものであり、いずれも5世紀の第4四半期頃に属すると考えられるものである。

第5面F A下黒~黒褐色土

黒色~黒褐色土であり、しかもその後の高や水田の耕作による攪乱が著しく、住居跡のプラン確認は困難を極めた。その後何とか床面や掘り方の痕跡でプランを確認したが、残念ながらその上の多くの遺物はグリッドで取り上げざるを得なかった。明確に住居跡に伴うものと言えるのは、5号住居跡出土のものだけとなってしまった。同住居跡からは多くの高坏、甕・埴の類が検出された。高坏は脚が比較的短く裾が太く外に広がるタイプのもので脚が比較的長く裾が「く」の字状に短く開くタイプのものである。前者の脚外面には幅広い磨きに近い寛撫で、後者には細い寛磨きが施されていた。また、前者の坏内面には横位寛撫でまたは撫でのみで、その後の寛磨きはないが、後者の内面には細い放射状の寛磨きが施されていた。その他外面に刷毛目状調整を残す脚部破片も複数あった。口縁部が「く」の字状に外反する胴部が丸くなる甕(16)や体部下半に最大径が位置するほぼ全面刷毛目状調整を施す甕(18)もあった。埴類では口縁部横位撫でで頭部~肩部に刷毛目状調整を施すものや寛撫でのみのものもあった。両者とも口縁は「く」の字状にほぼ直線的に開き、体部最大径とはほぼ同じ口径となる。体部は上下に潰

れ横に広がった形態を採る。F A降下前に黒~黒褐色土によって埋没しており、その直前では無く一定の時間差があるものと考えられ、5世紀中頃の所産と思われる。

3号遺物集中出土の大形の個体は、頸部に1連止め簾状文を施し、肩部に波状文による三角形区画を施す甕(1)が1点、他に肩部に波状文を施し体部を寛磨きし、同下半に最大径の位置する甕(3)1点、同様な形態で、胴部下半に一部刷毛目状調整を残す個体(2)1点の計3点が出土した。弥生時代後期樽式土器の中でも比較的古い段階と考えられるものであろう。

以下グリッド出土遺物については特徴的まとまりがあるもののみ取り上げて行くこととする。

L S-18グリッドからは多くの壺形土器が出土した。口縁は直線的に開き、口唇部が内傾するものや口縁が外反するものがある。前者は口縁と頸部上に波状文が、頸部に2連止め簾状文が施されるものである。後者は頸部に1連止め簾状文が、肩部に波状文とその下に沈線による三角形区画の各頂点にボタン状貼付文を施すものである。体部の調整は基本的には寛磨きによって仕上げられているが、その前の調整が寛撫でだけのものと口縁下から頸部にかけて刷毛目状調整を残すものや内面体部に刷毛目状調整を残すものがある。折り返し口縁の個体はない。同グリッド遺物は後期前半の所産と考えられる。

L W-21グリッドからは高坏や甕、小形埴の類も出土した。高坏は坏の内外共に放射状の磨きを施すものもあった。甕は口縁が「く」の字状に開き、体部がやや長めで体部下半に最大径が来るもので、寛撫で後一部寛磨きを施すものである。全体として5世紀前半のものと考えられる。

L W-22グリッドからは高坏、坏、埴、甕類が出土した。高坏は坏の内外に放射状に寛磨きを施すもので、坏部の段が明瞭なものもあった。脚は軸が極めて裾が屈曲して開くものとそうでないものがあった。坏は底部が小さく、内湾して立ち上がり、口縁が僅か開くもの(6)があった。甕は口縁が僅か湾曲するが、ほぼ「く」の字状に開くものがあったが、口縁から頸部にかけて刷毛目状調整を残すものと同部位は横位撫でで、体部も寛撫で後寛磨きを施すものがあった。後者は体部中央に最大幅が来るもので、体部縦断面は円よりもやや長めである。このグリッドも5世紀前半のものと考えられる。

III 検出された遺構と遺物

調査をしている際には弥生時代の遺物は全体から万遍なく出土しており、古墳時代の遺物とかなり混じった印象であったが、意外に大きい遺物にはまとまりがあることが分かった。同時代の遺物は3号遺物集中とLS-18グリッド周辺にまとまりが見られ、それ以外のところは多少の分布は見られるものの、弥生時代の遺物は少ないことが分かった。確認面で黒～黒褐色土であり、しかもその上は畝や水田の耕作により攪乱されており、検出が極めて困難であったが、その周辺には住居跡や土坑などの何らかの遺構があった可能性は否定できない。

反対に古墳時代の遺物がまとまるのは、LT-20・LU-20・LV-20・LW-21・LW-22グリッドであり、しかもLW-21・LW-22グリッドは隣接したグリッドであり、両者あわせて何かしらの遺構があった可能性は否定出来ない。それ以外の場所もその可能性は否定できない。黒～黒褐色土で確認が極めて難しかったと言え、調査技術の未熟さを痛感させられるものとなってしまった。しかし、このことを教訓として他の調査区では黒～黒褐色土の中でも遺構のプランや新田を行うことができた。

Ⅱ区第5面では後期堀之内式土器が主体であり、中期の遺物は殆ど無かった。Ⅰ区では出土しなかった前期有尾式土器類の破片も検出された。

第6面基盤層上

漸移層下～基盤層上の極硬質の暗黄褐色砂質土から3点の土器片が出土したが、同一個体であり接合し1点に復原できた。頸部破片と考えられ、上部側口縁部は接合部より綺麗に欠損している。横位微隆線が複数施される個体の頸部下位から胴部無文部にかけての大形破片と考えられる。内面は良く研磨されているが、外面は鋭削り後撫でが施されるが、削りの痕跡が残る。器肉は薄く、焼成は良好である。Ⅰ区の土器同様胎土に繊維は含まない。内面に多量の炭化物が厚く付着しており、年代測定したところ14C年代で 12570 ± 50 (yrBP $\pm 1\sigma$) (吹屋三角遺跡所収) という数値が得られた。Ⅰ区と同時期の縄文時代草前期のものと考えられる。

Ⅲ区第1面FP上

15軒の住居跡と土坑等から多くの遺物が出土した。

1号住居跡からは内面を良く研磨し、燻しをかけた内黒の坏や須恵器の壺、土師器の甕の底部、羽釜

などの破片が出土した。内黒の坏や羽釜などの特徴的な土器から10世紀後半頃と思われる。

2号住居跡からは多くの須恵器の坏や碗、底部に「田」の墨書のある坏、「コ」の字口縁台付甕なども出土した。甕の口縁はあまり崩れておらず、比較的「コ」の字に近いものであった。小形の台付甕には使用による煤の付着が良く残っていた。全体として見るとこの住居跡は羽釜が1点も無いことから9世紀後半頃のものと考えられる。

3号住居跡からは多くの須恵器の坏や碗・甕破片、内黒の碗、「コ」の字口縁の甕、羽口破片等が出土した。坏や碗の類は底部が大きいものと小さいものがあつた。甕の口縁は明確に「コ」の字を呈するものとやや崩れたものがあつた。これらの甕の内面頸部～肩部にかけては横位撫での単位中に刷毛目状線が残るものが多いとどんであつた。2号住居跡よりも若干新しい傾向は見られるものの、「コ」の字口縁の甕のみで羽釜が1点も無いことから、やはり9世紀後半頃と考えられる。

4号住居跡からは須恵器の坏や碗、「コ」の字口縁の甕などが出土した。土師器の坏が無いこと、甕の口縁が明確な「コ」の字状では無いこと、羽釜が無いことなどからすると9世紀後半頃と考えられる。

5号住居跡からは多くの須恵器の碗・内黒の坏・甕、「コ」の字口縁の甕、羽口などが出土した。須恵器の碗類は底部が比較的大きく深いものが多かった。甕の口縁は「コ」の字が比較的明確なものとそうでないものがあつた。また、大形のものと同形の台付甕があつた。その中に横位撫で中に刷毛目状線が付くものもそうでないものがあつた。羽口は2個体以上出土しており、本住居跡が小鍛冶に何らかの関わりがあつた可能性を示唆するものである。本遺跡の殆どの鉄器がⅢ区から出土したと言っても過言ではなく、しかもその多くがFP上であり、集落内で小鍛冶の存在が想定される。この住居跡の時期としては土師器の坏が無いこと、「コ」の字口縁の甕があるが、羽釜が無いことなどからすると9世紀後半頃と考えられる。

6号住居跡からは比較的底径の大きい坏と須恵器の甕、土師器の甕などが出土した。土師器の甕は「コ」の字口縁の甕のものとして「ク」の字に近いものがあつた。須恵器の坏は口唇部の外反するものとそうでないものがあつた。土師器の坏は無く、まだ羽釜もな

く、「コ」の字口縁の寛があることなどからすると9世紀後半頃と思われる。

7号住居跡からは比較的底径の大きい土師器の坏、灰釉陶器の椀・瓶、内黒の坏、柄の小さい「十」の墨書のある蓋、外面底部に「真」の墨書のある椀、土師器の小形甕などが出土した。羽釜が無いこと、寛の口縁は明確な「コ」の字状ではないがやや「コ」の字口縁に近いこと、組み合わせに土師器の坏などを含む点を考慮すると全体としては9世紀後半頃と考えられる。

8号住居跡からは須恵器の坏・足高台の椀、内黒で「九一」の墨書土器、高台の断面が方形に近い灰釉陶器、須恵器大甕・瓶破片、須恵器の羽釜・土師器の羽釜等が出土した。坏・椀類はいずれも口縁部がやや膨らみを持ち、口唇部が外反するものであり、高台が付くものはいずれも外に開く形のものであった。羽釜は体部が丸く強るものが多く、上半に指頭痕を多く残すものが多かったが、須恵器製のものには指頭圧痕は殆どついていなかった。足高の高台、煮炊き具に「コ」の字口縁の寛が無いこと、高台の断面が三日月よりも丸みを持つ方形に近い灰釉陶器があることなどから10世紀後半頃と考えられる。

9号住居跡からは坏・灰釉陶器・須恵器甕破片等が出土した。いずれも小破片であり、明確な時期は確定できないが、底部の小さい坏があることなどから10世紀代頃か?と思われる。

10号住居跡からは須恵器の坏・椀・甕口縁部破片、土師器甕等が出土した。甕の口縁には多くの指頭圧痕があり、あまり明確な「コ」の字状を呈するものではない。底径の大きい坏があり、煮炊き具が羽釜ではなく、土師器の甕であることなどから、9世紀後半頃か?と思われる。

11号住居跡からは須恵器の坏・椀、灰釉陶器の椀、墨書のある底部破片、底部中心に孔の開く須恵器、体部のあまり張らないタイプの羽釜、羽口、土錘等が出土した。灰釉陶器は口唇部が外反し、高台断面が三日月形に近い形のものであった。坏・椀は口唇部がいずれも外反するもので、それらの底部は比較的小さいものが多かったが、足高の高台はなかった。口縁部・底部ともかなり歪んでいる個体もあった。土錘(13)は体部に最大幅が位置し、指頭圧痕を残すもので、上下両端は削削りで平坦になっている。

底部中心に孔の開く須恵器破片(8)は縁部が打ち欠きされており、裏側から片側穿孔されていた。これらのことから紡錘車に転用しようとした可能性が考えられる。坏・椀の作りや煮炊き具が甕ではなく、羽釜であることなどからすると10世紀後半頃と考えられる。

12号住居跡からは須恵器の坏・椀、底部の内外面に墨書のある須恵器、羽釜が出土した。坏・椀類は口縁部が外反し、底部が比較的小さく、高台が付くものはいずれも浅い作りであった。内外面に煤状の炭化物が付着し、黒変を有するものが多かった。足高の椀が無く、煮炊き具に「コ」の字口縁の寛が無く、羽釜であることなどから、10世紀の中頃以降ではないかと考えられる。

13号住居跡からは須恵器の坏・椀、内黒の椀、墨書のある須恵器小破片、灰釉陶器の破片等が出土した。内面を良く磨き焼しをかける椀で足高の高台を持つもの、灰釉陶器は高台断面がかなり丸みを持ち下端が内側を向くものであった。煮炊き具が土師器の甕なのか羽釜なのか明確ではないが、坏・椀類などの形態から10世紀後半頃と思われる。

14号住居跡からはあまり遺物は出土しなかった。実測したものは底部破片1点のみであった。体部の立ち上がりが丸みを持ち、10世紀代か?と思われるが、詳細は不明である。

15号住居跡からは口縁部がやや丸みを持ち、口唇部が外反する底径の比較的大きい椀が出土した。実測できたものは1点のみであり、9世紀中頃以降の可能性はあるが、セツト関係が確定せず、詳細は不明である。

60号土坑からは灰釉陶器の椀、須恵器甕破片、土師器の羽釜が出土した。羽釜は体部が大きく張り出す浅いタイプのものであった。須恵器の坏・椀が無く不明点が多いが、煮炊き具が甕でなく、羽釜であることなどからすると10世紀代と考えられる。

その他土坑からは須恵器坏・椀類や灰釉陶器の椀、甕破片等が出土したが、いずれもセツト関係を知ることができるようなものはなかった。概ね9世紀後半から10世紀代のものが多いと思われる。

Ⅲ区のF P上の住居跡は、いずれも小形で東カマドであったが、方形に近いものと長方形に近いものがあった。それについて明確な時期的差は認められなかった。

III 検出された遺構と遺物

9世紀代のものは2・7・10・15号住居跡であり、10世紀代のものは1・8・9・11~14号住居跡であり、その分布を見ると9世紀代のものは1軒だけや東寄りになっているが、他の7軒はⅢ区中央にまとまりが見られた。そのうちの2・15号住居跡、3・4号住居跡は重複しており、建て替えの可能性がある。6軒はほぼ同時に存在していた可能性が考えられる。10世紀代のものはⅣ区寄りの西側に1軒、その他6軒はⅡ区寄りの東側にまとまりが見られた。Ⅱ区3軒とⅠ区5軒は10世紀代以降のものであり、9世紀代から10世紀になると東側斜面にまで住居跡域が広がっていることがわかる。

第2面FP下

FPの下から検出された畦とした盛土の高まりの中から多くの遺物が検出された。厳密な意味ではFPの直下ではない。1号畦からは須恵器甕の破片が、2号畦からは三角形の透かしを有するやや大形の須恵器の高坏破片が出土した。

3号畦からは内外面を施磨きする内裏の坏、浅い底部施磨りの模倣坏、内外面研磨する内裏の高坏、細長い三角形の透かしを有する須恵器の高坏、はそう、横に撫でて施磨きのない土師器の高坏、土師器の小形甕、須恵器の小形甕などがあつた。須恵器の高坏は比較的脚が長く、土師器の高坏は脚が太く広がるものであつた。土師器の坏は口縁部がほぼ直立よりもやや内傾するものもあつた。FA降下後FP降下以前のものであり、6世紀前半頃のものと考えられる。

第3面FA上

FAの降下後FPの降下以前のものであり、この間の約30年の間のものである。巨大周溝からは須恵器の口縁部破片・土師器の坏・高坏の脚、甕底部破片、壺口縁部破片等が出土しているが、古いものと新しいものが混在しており、この遺構の時期のものは須恵器口縁部破片、土師器の坏・甕などと考えられる。この時期の遺構はそれ以前の遺構を切り込むものも多く、古いものと混在が多く認められる。

FA直下では5・6・9号垣及び1・2・3号落ち込み(下に住居跡有り)が確認されたが、やや幅のあるもののいずれも5世紀の第4四半期~6世紀前半頃のものと思われる。

FA中より土師器の甕の底部が1点出土したが、口縁部がなく詳細は不明である。

第4面FA下

底面にまでFAが入り込む住居跡は16・17・18号住居跡が検出された。

16号住居跡からは口縁が内傾し、外面底部施磨りで内面を研磨する土師器の坏、内外とも放射状に研磨する土師器の高坏、体部が丸みを持つ土師器の甕などが出土した。坏は口唇部が内傾し先端の断面が尖るものと口唇部が外反し先端だけが内側を向くものがあった。甕と坏には大形のもの小形のものがあった。大形の甕は施磨り又は施撫で後内外とも施磨きを施すものと施磨きを施さないものがあった。頸部に指頭圧痕を残すものとそうでないものがあった。

17号住居跡からは16号住居跡と同様な内斜口縁の坏と口縁部が外反し、体部が丸みを持つ小形甕(5)、須恵器甕肩部破片(7)などが出土した。

18号住居跡からは内斜口縁の坏、坏底部との境が明瞭な段を有し、外面に刷毛目状調整を残す高坏、内外とも一部施磨きを施す高坏、口縁部に一部刷毛目状調整を残す甕の口縁部破片、体部がソロバン玉状に潰れた形態の須恵器のはそう(4)が出土した。

これらの住居跡は床面にFAが堆積しており、その意味でまさに直下と言えるものであつた。16号住居跡のカマドは既に完全に埋まりきっており使用できない状態になっていたが、17号住居跡のものは煙道までFAが駆け上っており、その直前まで使用できたことが伺える。しかし、その差は数日か1年か分からないが、土器に明確な差が出る程の違いはなく、5世紀末~6世紀の第1四半期頃と考えられる。

FA直下では遺物集中は4カ所確認された。

1号遺物集中からは3点の土師器の甕が出土した。大形のもの比較的の小形のものがあったが、いずれも体部がかなり丸みを持つものであつた。小形の1点は口縁部があまり大きく外反しないで、体部を施磨りするだけであつたが、他の2点は口縁部が大きく外反し、体部を施磨り又は施撫で後施磨きするものであつた。これらはいずれも使用による変色部分で良く残すものであつた。

2号遺物集中では土師器の甕1点が固化できた。この甕(1)は口縁部が肥厚し、やや直線的に開くもので、体部下半に最大径が位置する。体部は施撫でであり、その後の施磨きは殆ど施されない。内面底部付近には施撫での単位の中に刷毛目状調整が残るも

のであった。

3号遺物集中では内斜口縁の坏3点がまとまって出土した。1点は口縁部が薄く底部が厚い作りで口唇部が外反するもの(2)で、他の2点は内傾するもので、内1点(1)は全体がかなり分厚いつくりであった。いずれも外面には指頭圧痕を残し、内面に磨磨きを施すものであった。1点(3)の底部には焼成時の黒斑が良く残されており、そこには空気が入らなかったことを示しており、下に別の個体を置いて重ねて焼いたか、炭に接していた証拠と考えられる。

4号遺物集中では須恵器の甕破片を中心とし、土師器の内斜口縁の坏が検出された。甕(2~6)は口縁部が折り返しを有する有段の口縁であり、頸部に波状文、体部外面に敲き目、内面に押しえ目の青海波文が良く残る比較的厚手の作りである。土師器の坏(1)は外面体部に磨削り、内面に磨磨きを施すものであった。

1~4号遺物集中はいずれもF Aの直下であり、甕などに多少の個体差はあるものの、時期を見いだす程の違いは感じられない。直下の住居跡と同様の5世紀末~6世紀の第4四半期頃と考えられる。

他に5・8号落ち込みやグリッド出土遺物があったが、いずれも内斜口縁の坏であり、口唇部が外反するものやそうでないものがあった。5号落ち込みの坏はやや浅く、MO-24グリッドの坏はやや深い傾向は見られたが、時期差を見出せる程のものではなかった。これらも5世紀末~6世紀の第4四半期頃と考えられる。

第5面F A下黒~黒褐色土

19号住居跡からは酸化焼成の須恵器甕、内面を研磨する内斜口縁の坏、口縁部外反し、体部が丸みを持つ甕、体部磨削りで下半に最大径が位置するやや長めの甕などがまとまって出土した。甕は大形のものや小形のものがあった。小形のものには体部が丸く、大形のものには細長いものや丸いものがあった。体部の無で単位の中に刷毛目状調整が残るものと磨削りまたは磨磨きで後磨磨きするものがあった。模倣坏や図化できるような高坏はなかった。F A降下時点では黒土で皿状に埋まっていたが、完全には埋まりきらず、凹みにF Aが堆積していた。土層の堆積状況からはF A降下以前でその降下に近い時期が想定できる。土器からは5世紀第4四半期頃と考えられる。

20号住居跡からは須恵器の坏、土師器模倣坏・内

斜口縁の坏、口縁部外反する甕、土器破片を利用した土製円板などが出土した。須恵器坏(3)の底部には「×」印がある。坏と甕には大形のものや小形のものがあった。甕の体部は磨削りまたは磨磨きで一部その後磨磨きするもので、形態は体部がかなり丸いものであった。19号住居跡同様F A降下時点では黒土がかなり埋まっていたが、完全には埋まりきらず、凹みにF Aが堆積していた。土層の堆積状況からはF A降下以前で比較的その降下に近い時期が想定できる。土器には模倣坏があることから一見20号住居跡の方がかなり新しくそうであるが、ほぼ同じ頃の5世紀第4四半期頃と考えられる。

21号住居跡からは土師器坏・甕などが出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するものであり、浅いものと深いものがあった。内面を放射状渦巻きに磨磨きするもので底面まで磨くものもあった。甕は大形のものや小形のものがあり、体部が丸く張るものと体部下に最大径が位置し、やや長めのものもあった。体部が丸い形態のものが多かった。体部調整は磨削りや磨磨きで後一部磨磨きを施すものが多いが、頸部や体部上半に一部刷毛目状調整が残るものもあった。19号住居跡同様F A降下時点では黒土がかなり埋まっていたが、完全には埋まりきらず、凹みにF Aが堆積していた。土層の堆積状況からはF A降下以前で比較的その降下に近い時期が想定できる。組み合わせに模倣坏や須恵器の坏、高坏等はなかったが、ほぼ5世紀第4四半期頃と考えられる。

22号住居跡からは土師器の坏・高坏・小形甕の破片が出土した。破片であり、詳細は不明であるが、概ね5世紀後半頃と考えられる。

23号住居跡からは土師器の坏・甕、須恵器はそう破片が出土した。坏は比較的厚手での作りであり、内斜口縁で、内部を放射状渦巻き磨磨きを施すものであった。甕は大形のものや小形のものがあり、体部がかなり丸く張り出すものと長めのものがあった。体部に縦磨削りを施すものがあったが、小形のものには磨磨きを施すものもあった。19号住居跡同様F A降下時点では黒土がかなり埋まっていたが、完全には埋まりきらず、凹みにF Aが堆積していた。土層の堆積状況からはF A降下以前で比較的その降下に近い時期が想定できる。組み合わせに模倣坏や須恵器の坏、高坏等はなかったが、ほぼ5世紀第4四半期頃と考えられる。

III 検出された遺構と遺物

24号住居跡からは高坏の脚、甕の口縁などが出土した。高坏脚には縦磨きが施され、甕の口縁には横位刷毛目状調整が残っていた。坏が無く、セット関係が不明であるが、概ね5世紀中頃と考えられる。

25号住居跡からは高坏が1点出土した。高坏の外表面は良く磨かれていたが、内面には疎らな放射状磨きが残っていた。坏が無く、セット関係が不明であるが、概ね5世紀中頃と考えられる。

26号住居跡からは高坏、甕、埴類が出土した。高坏は坏底部の段が明瞭で内外面全面を磨きするものと坏内外面を疎らに放射状磨きするもの(1・2)、指頭圧痕を多く残し横位撫でのみで全く磨きを施さないもの(4)があった。埴は口縁と体部最大幅がほぼ同じもので、体部に荒削りを施すものであった。甕は小形のもの大形のものがあった。大形のものには口縁部が厚手で「く」の字状に外反するもので体部に横位荒削りを施すものであった。体部に焼成時の黒斑と使用による黒変が明瞭に残る。セットに坏はないが概ね5世紀中頃と考えられる。

27号住居跡からは土師器の坏破片、須恵器高坏破片、甕底部等が出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するものと薄手の模倣坏があった。調査面積が狭く良く確認できなかったが、黒色土が僅かに落ち込んでいた。甕の口縁はなく、土師器の高坏などもなくセット関係は不明な点もあるが、5世紀第4四半期頃と考えられる。

28号住居跡は26号住居跡と重複しており、甕口縁部と底部破片が出土した。甕は小形のもの大形のものがあったが、口縁部が厚く「く」の字状に外反し内外面に刷毛目状調整を残すものであった。坏や高坏が無く、セット関係は不明であるが、概ね5世紀中頃と考えられる。

29号住居跡は20号住居跡の床下から検出されたものであり、時期判定に使用できるような遺物は殆ど出土しなかった。

30号住居跡からは高坏脚部、甕、甕が出土した。高坏脚部は放射状に縦磨きを施すものであり、裾部は段が付いて開く。小形甕は体部に荒削りまたは横撫で後一部磨きを施すもので、内外面の一部に刷毛目状調整を残す。体部が横位に広く潰れた形態で、口縁から体部に使用による黒変を良く残す。大形のもの口縁部は厚く、「く」の字状に大きく外反し、体部がかなり丸く横に張り出すもので、横撫

で後磨きを施す。甕大形個体には口縁から肩部に煮溢れによる垂れの痕跡を良く留めている。甕(18)は小形のもので、折り返し口縁で、体部の縦磨きでの単位の中に刷毛目状条痕を残す。甕の口縁から肩部にかけて噴きこぼれが認められ、その部分だけ筋状に煤が付着していない。坏類が無く、セット関係は不明であるが、概ね5世紀中頃と考えられる。

31号住居跡からは甕の破片が出土した。口縁部は厚く「く」の字状に外反する。体部は丸みを持ち底部中心は僅かに上がる。両破片共に刷毛目状調整を残す。甕しかなく、セット関係は不明であるが、概ね5世紀中頃?と考えられる。

32号住居跡からは土師器の坏、高坏が出土した。坏には内斜口縁で内面に渦巻き状磨きを施すものと底の浅いタイプの模倣坏があった。高坏の坏破片には放射状に疎らに磨きを施し、脚破片の外面に横撫でを施すものであった。坏の底部の段はあまり明瞭ではない。模倣坏があったり、また甕が無くセット関係が明瞭ではないが、概ね5世紀第4四半期頃と考えられる。

33号住居跡からは内斜口縁の坏、高坏破片、埴底部等が出土した。坏(1)は放射状渦巻きに細かい磨きを施すもので、口唇部が外反するものであった。高坏坏部には内面に疎らに磨きを施すものであった。埴体部は横に大きく張り出すもので、横撫で後一部磨きを施すものであった。甕が無くセット関係が明瞭ではないが、概ね5世紀第4四半期頃と考えられる。

34号住居跡からは埴類、小形甕、高坏、ミニチュア土器等が出土した。埴類は口縁部径と体部径がほぼ同じものと口縁部径の方が大きいものがあった。埴には刷毛目状調整を良く残すものと荒削りまたは横撫で後磨きするものがあった。小形甕は口縁部が外反し、底部が大きい鉢に近い形態のものであった。体部には指頭圧痕を多く残すものであった。高坏は坏の底部との段は比較的明瞭なものあまり明瞭ではないものがあり、内外面と脚部部に疎らな磨きを施すものであった。脚部部は明確な段が付いて開く。ミニチュア土器2点(1・2)は手捏ねで指頭圧痕を多く残す。その内1点(1)は卵形で口縁は薄く完形、もう1点(2)は口縁部が欠損しているが甕形または埴形をしている。大形の甕類が無くセット関係が明瞭ではないが、埴類が多く概ね5世紀中頃と

思われる。

35号住居跡からは高坏、埴類、鉢、甕類が出土した。高坏は底部との境に明瞭な段を有するものとそうでないものがあった。外面坏体部～脚接合部にかけて刷毛目状調整を残すものとそうでないものがあった。内面は放射状に疎らな磨磨きを施すものと刷毛目状調整を施すものがあった。坏の内外面とも刷毛目状調整を施すものは脚裾の開きも緩く明瞭な段にはならないものであった。埴類は口径が体部径よりも大きいものと小さいものがあった。小形のものには磨撫でや指頭圧痕を多く残すが、頸部～体部上半にかけては刷毛目状調整を残し、体部下半には磨削りまたは磨撫でを施すものであった。最大径が体部上半に来るものと下半に来るものがあった。甕はやや大形のもの和小形のものがあった。口縁部は「く」の字状に外反し、体部調整は磨削り後磨撫でが多いが、内外面共に刷毛目状調整を施すものもあった。概ね5世紀中頃と考えられる。

37号住居跡からは甕の口縁部・体部・底部破片、小形台付甕が出土した。小形台付甕③は口縁部と肩部に波状文を施し、頸部に1止連じの縷状文を施すものであった。口縁部は緩い「く」の字状に外反し、ボタン状貼付文を付す、上部は大形損している。大形の甕体部には横位刷毛目状調整を施す。弥生時代樽式土器の盛行期の後期後半と考えられる。

38号住居跡からは内斜口縁の坏、甕と甕の底部などが出土した。坏は内外面共に磨磨きを施すものと内面のみ施すもの、磨磨きの施されないものがあった。かなり深いものと浅いものがあった。また口唇部は外反するものとそうでないものがあった。甕と甕は体部外面を縦磨磨きをし、内面は横位刷毛目状調整を施すものであり、本来53号住居跡に属するものであった可能性も考えられる。甕や甕を除いた坏類などからすると5世紀第4四半期頃と推定される。

39号住居跡からは高坏、埴類、甕、甕などが出土した。高坏は極めて明瞭な段を有し、坏部内外面に磨磨きを施すものと外面磨撫でで内面に磨磨きを施すものがあった。脚部外面に縦磨磨きを施すものと縦刷毛目状調整を残すものがあった。蓋④は上が細く裾が傘状に開くもので、外面は磨撫で、内面は横位刷毛目状調整後磨磨きを施すものであった。埴類は口径が体部径を上回るもので外面体部に刷毛目状調整を施すもの、口縁部欠損で外面体部下端に磨削

りを施すものであった。底部は僅か上げ底ぎみとなっている。甕は口縁が「く」の字状に外反するものであり、体部が丸いものだけであった。甕は大形のもの和小形のものがあった。外面口縁～体部上半と体部下半に刷毛目状調整を残すものであり、小形のものには使用による黒変だけでなく、口縁から体部にかけて煮溢れによる垂れが明瞭に残っていた。坏類が無く、セット関係は明瞭ではないが、概ね5世紀中頃と考えられる。

40号住居跡からは内斜口縁の坏、鉢、大形の甕などが出土した。坏は外面体～底部磨撫で、内面は磨撫でで指頭圧痕を残すものであり、内面に磨磨きは施されていない。焼成時の黒変を良く残す。鉢は体部が押し潰されたように丸みを持って横に張り出し、内外面とも磨磨きを施すものであった。甕口縁部は厚く、短く外反し、体部は非常に丸くなるものであった。調整は外面磨削り後磨磨きと考えられるが、内面は横位磨撫でで一部指頭圧痕を残す。坏などからすると5世紀第4四半期頃と考えられる。

41号住居跡からは内斜口縁の坏と鉢が出土した。坏は口唇部が外反するものとそうでないものがあった。内面のみ磨くものと内外面とも磨くものがあった。鉢も僅か口唇部が開くものがあった。底部はいずれも丸底となるものと思われる。坏のみであり、他のセットが確定できないが、概ね5世紀第4四半期頃と考えられる。

42号住居跡からは高坏、甕、埴類、甕などが出土した。高坏坏部は体～底部の段は比較的明瞭なものと滑らかに脚部へ移行するものがあった。内外面とも良く磨くものと殆ど磨かないものがあった。図化した1点は脚部裾が滑らかに反り返り、外面を良く磨くものであった。甕⑤は小形品で、口縁部が直線的に立ち上がり調整は内外面とも磨撫でまたは指撫で、指頭圧痕を外面に多く残すものであった。埴は口縁部径と体部径がほぼ同じもので、体部に横位磨削りを施し内面には指頭圧痕を多く残すものであった。焼成時の黒変を良く残す。甕には小形のもの和大形のものがあり、小形のものには指頭圧痕を多く残し、底部は上げ底となっている。使用による黒変を残す。大形のものには口縁部破片と体～底部破片があったが、口縁部破片の内外面には横位刷毛目状調整、体部破片内面には横位磨撫でものと刷毛目状調整を施すものがあった。底部外面が残るものは磨削り

Ⅲ 検出された遺構と遺物

であった。ほぼ5世紀の中頃と考えられる。

43号住居跡からは小形台付甕、折り返し口縁壺破片、甕頸部・底部等破片が出土した。頸部に2連止め簾状文、その上下に波状文が施されるものがあった。底部は内外面共に磨きを施すものであった。小破片が多く詳細な時期の判定は難しいが、概ね弥生時代後期樽式土器の段階と考えられる。

44号住居跡からは内斜口縁の坏と鉢、小形の甕等が出土した。坏は口唇部が内傾したままのものと外反するものがあり、口縁部に篋撫で状の条線が残るものと外面体～底部に刷毛目状調整が残るものがあった。いずれも内面は篋磨きされるものであった。鉢は内外面共に疎らに篋磨きされるもので、外面には指頭圧痕を残す。小形甕は首がかなり絞られており壺に近い形態のもので、頸部に刷毛目状調整が残るものであった。概ね5世紀後半のものかと考えられる。

45号住居跡からは須恵器の坏、土師器の甎、甕等が出土した。甎(3)は小形のもので、内外面共に刷毛目状調整を良く残す。甕は口縁部があまり外反せず、体部がやや長めの小形品で、刷毛目状調整を残すものと口縁部が「く」の字状に大きく外反し、体部が丸く張り出し、体部調整は篋撫でたものであった。甎や甕に刷毛目状調整が良く残ることからすると一見古くなりそうであるが、須恵器の坏があることなどからすると5世紀の第4四半期頃と考えるのが妥当であろう。

46号住居跡からは土師器の高坏脚破片、弥生土器甕・甕底部破片・鉢などが出土した。弥生の甕は体部があまり丸くならないもので、口縁部も丸みを持って外反しないものであった。頸部に2連止め簾状文を施し、口縁部と体部を磨くものと口縁～頸部まで波状文を施すものや頸部簾状文の止めも明瞭ではないものもあった。鉢は小形品であり、内外面共に底部まで良く磨かれていた。高坏脚(1)も出土しているものの、この高坏は外面縦篋磨きで、裾部は丸みを持って外反するものであり、作りからすると5世紀代のもと考えられ、本来は44号住居跡のものではないかと思われる。それを除く他の遺物からするとこの住居跡の時期は後期後半の樽式土器の段階と考えられる。

47号住居跡からは蓋と甕の体～底部破片などが出土した。蓋(1)は傘がやや反り気味に開くもので、深

さは無い。中央には孔が開き、内外面共に放射状に疎らに篋磨きされていた。甕は体部はあまり丸く張らず、内外面共に良く磨かれていた。後期後半の樽式土器の段階と考えられる。

48号住居跡からは鉢・甕・壺・脚破片等が多量に出土した。鉢(3)は外面は縦刷毛目状調整後縦篋磨き、内面横篋磨きするものであり、分厚い作りのものである。小形台付甕(2)の口縁部と肩部には波状文を施文しその上にボタン状貼付文、頸部には1連止め簾状文、体～脚部にかけては縦篋磨きが施されるものである。脚破片の外面にはいずれも縦篋磨きが施され、一部内面に横位刷毛目状調整が残るものもある。甕は体部中央に最大幅が位置し、かなり丸く張り出すものと肩部に最大幅が位置するものがあった。頸部2連止め簾状文と波状文だけのものもあり、一定しない。口縁と体部上半に横に線刻を入れるボタン状貼付文が付く個体もあった。口縁に波状文を施すものとうでないものがあった。実測した甕の口縁部はいずれも単口縁で折り返し口縁は無かったが、破片では折り返し口縁もあった。壺はいずれも口縁部が欠損しているが、頸部に2連止め簾状文、その下に波状文、外面体部篋磨き、内面刷毛目状調整を施すものであった。これらの遺物の時期は後期樽式土器の段階と考えられる。

49号住居跡からは弥生土器の口縁部破片と底部破片が出土した。口縁部破片には外面に波状文、底部破片は内外面共に篋磨きが施されていた。弥生時代後期樽式土器の段階と考えられる。

50号住居跡からは小形甕と台付甕の脚部が出土した。甕は頸部に1連止め簾状文、その下に波状文、体部に篋磨きを施すものであった。脚は外面に縦篋磨きを施すものであった。これらの遺物の時期は後期樽式土器の段階と考えられる。

51号住居跡からは小形甕・大形甕・多くの甕や壺の破片類が出土した。小形甕の口縁部には波状文、頸部に簾状文、肩部に波状文が施され、体部に縦篋撫でを施すものであった。大形の甕は頸部に2連止め簾状文、その下に波状文、体部上半に櫛書きによる三角形文、体部下半は縦に内面は横に篋磨きするものであった。いずれも焼成時黒変・使用による黒変が良く残っている。甕破片には口縁～頸部にかけて波状文、頸部に細かい止めのある簾状文を施すものや壺破片では体部にボタン状貼付文をものもあつ

た。これらの遺物の時期は後期樽式土器の段階と考えられるが、本遺跡の中ではやや古手と考えられる。

52号住居跡は20・39・48号住居跡に切れ、ほんの僅かしか残っていなかった。実測できるような遺物は何もなかった。

53号住居跡からは台付甕・鉢・甕類が出土した。台付甕は小形で口縁部横撫で、頸部簾状文、その下に波状文、体部寛磨きを施すものであった。鉢(3)はやや深めでは直線のからやや反りぎみで開く形態で、体部縦磨き、内面横磨きを施すものであった。甕は口縁部が外反し、口径が体部径よりも小さい形態で、全く御書きによる文様を施さず、内外面共に磨きのみを施すものが多かったが、体部が丸く張り出し、頸部に簾状文、口縁と肩部に波状文を施すものもあった。文様を施文されないタイプの甕には焼成時の黒変と使用時の黒変が良く残っていた。頸部簾状文は1連止めではあるが、間隔が通常のものに比べ非常に広がっていた。底部には広葉樹の葉脈があり、土器作りの際に葉を敷いたことが分かるものである。甕は形態的にも口径が大きく、直線的に開くものではなく、丸みを持って外反し、体部も丸みを持つものであった。これらの遺物の時期は後期樽式土器の段階と考えられるが、本遺跡の中ではやや新しいものと考えられる。

1号炉跡からは多くの坏・甕等が出土した。坏は浅いものと深いものがあり、口縁部が内傾し口唇部が外反しないものと僅かに外反するものがあった。坏の中には深さがあり鉢に近い形態で、底部はやや平坦で、外面に刷毛目状調整を残すものがあった。甕は口縁部がほぼ直立するものと「く」の字状に外反するものがあった。体部はかなり丸みを持つものが多いが、ややスマートなものもあった。口縁～体部にかけて刷毛目状調整を良く残すものと寛削りまたは寛撫でのものがあった。組成に埴類や模倣坏はなかった。全体としてみると5世紀後半頃と考えられよう。

56号土坑からは坏・甕などが出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するものとしなものがあった。あまり深いタイプのものはなかった。いずれも外面寛削り、内面に磨きを施すものであった。甕の口縁部は厚く、滑らかに外反するものと頸部で折れ曲がるように段が付くものがあった。組成に埴類や模倣坏はなく、全体としてみると5世紀後半頃

と考えられよう。

565号土坑からは甕破片が多く出土したが、大形の破片を圖化した。その内、単口縁で口縁部に波状文、頸部に簾状文、肩部に波状文、体部寛磨き、口縁と体部上半にボタン状貼付文を施すものは焼きも良く比較的薄手であった。もう一つの一群は折り返し口縁で、折り返し部分と頸部までの間に波状文、頸部に2連止め簾状文、その下に波状文、体部は刷毛目状調整を施すものであった。体部内外面共に粘土を縦に貼付した修正痕も見られた。他に体部下内外面共に磨きを施す破片もあった。これらの遺物の時期は後期後半樽式土器の段階と考えられる。

その他566・569号土坑からは5世紀代と考えられる坏・高坏・甕などの小破片が、607号土坑からは弥生時代樽式土器甕の小破片が出土した。

5号遺物集中からは口縁部が「く」の字状に開き、体部がかなり丸くなり、同部寛撫での単位中に刷毛目状の調整を残すもの1が出土した。

6号遺物集中からは内斜口縁の坏、甕、台付甕の脚などが出土した。坏はかなり深いものと浅いものがあった。口縁部は僅かに外反するものとそうでないものがあった。いずれも底部寛削り、内面は寛磨きであった。甕は口縁部が「く」の字状に外反するものと頸部の段が明瞭で大きく「く」の字状に外反するものがあった。必ずしもセット関係は明瞭では無いが、底部の丸い坏などからすると5世紀の第4四半期頃と考えられる。

グリッドで取り上げたものの中には5世紀代の坏や高坏・甕、弥生時代樽式土器の破片などがあるが、その中に高坏の脚部外面に沈線で何か直立するもの(MH-22-1)が1点あった。他に土器片を利用し、打ち欠いた後に研磨をし整形した土製円板(MH-22-2)が1点あった。

遺物が多く出土した堅穴式住居跡から見た集落の時期は弥生時代後期樽式土器の段階と5世紀後半～6世紀第1四半期頃と考えられる。樽式土器でも竜見町式土器に繋がるようなあまり古い段階のものはなかった。調査したⅢ区内ではほぼ同時に存在したのは数軒であったと思われる。

古墳時代堅穴式住居集落はF A降下以前の5世紀第4四半期前後にピークがあり、F A直下の数軒を最後に調査区内では堅穴式住居跡は見られなくなる。その後は畠や平地式住居跡が作れるようになる。F

Ⅲ 検出された遺構と遺物

A直下の住居跡はいずれも人為的に埋め戻しており、その後畝にされている。そうしたことからすると少なくともF A降下により、この場所での土地利用に何らかの変化があったことが伺える。それが堅穴式住居から平地式住居へという住居形態の変化にも影響を与えたのではなかろうか。

縄文時代

596・597・630号土坑及びグリッドから後期堀之内式期の小破片が、前期黒浜・有尾式期の土器片が620・621・622・623・624・625号土坑から出土した。後期の土器はいずれも小破片で量も少なく、あまり特徴的なものは無いが、前期の土器は622号土坑や625号土坑で大形破片やある程度まとまりがあった。前期有尾式の深鉢は波状文口縁であり、その波状文のトップの下に半截竹管による沈線+爪形文3単位で変形の文様構成を形成する。頸部にも横位に同様な手法で3単位沈線+爪形文を施文する。有尾の方が縄粒が明瞭であり、黒浜は平口縁で口縁部まで縄文が施され、縄粒も何となく不明瞭であり、625号土坑からはその両方が出土した。他に僅かに中期加曾利E式期と考えられる小破片が検出されたが遺構に伴うものでは無かった。

取り上げなかった遺物も前期が比較的多く、土坑もその時期のものが多かったので、どこから流れて来たものではなく、その時期にこの場所で人の営みがあったことは間違いない。この時期の住居跡は少なくとも調査区内では1軒も検出されなかったのが、同じ台地上のなか全く他の場所かは分からないが、どこか比較的近くにあるものと考えられる。

Ⅳ区第1面F P上

1号住居跡からは羽釜が出土した。この羽釜は鈔の部分も短く、作りも粗雑な感じがする。坏の出土は無くセット関係は不明ではあるが、11世紀代のものかと思われる。

2号住居跡からは須恵器の坏・椀、土師器の甕等が出土した。坏・椀は底部に糸切りを良く残し、口唇部が外反するものであった。甕は口縁部が「コ」の字よりも「ク」の字状に近いものであった。羽釜が無く、土師器の坏も無いことなどからするとたまたま組成から抜け落ちている可能性も否定できないが、10世紀に近い9世紀第4四半期頃と考えられる。

3号住居跡からは時期判定に使用できるような遺

物は殆ど出土しなかった。

他に10・32・41・60土坑などから僅かに坏や甕が出土した。41号土坑(墓坑)からは外面底部に「九」の墨書がある須恵器の椀が出土した。これらはいずれも小破片であったり、単品でセット関係は不明であるが、周りの状況や埋没土などからも、おそらく9世紀後半～10世紀代のもものと推量される。

なお、掘立柱建物跡や溝からは時期判定に使用できるような遺物は出土しなかった。

Ⅳ区に比べ調査面積の割には非常に遺構は疎らであり、住居跡も3軒のみであった。しかも同時期に存在していた可能性があるのは2・3号住居跡の2軒のみであった。当時の集落の中心はやはりⅢ区あたりでそこからは外れていたと考えられる。

第2面F P下

1号焼土遺構(下層3号平地式建物跡)からは坏と甕の底部が出土した。坏はあまり口縁が内傾せずむしろ外反さみに開いて立ち上がる比較的浅いのもので、内面には細い庵磨きが施されるものとやや小形・やや大形で口縁がやはり開いて立ち上がる模倣坏があった。概ね6世紀前半頃のものと考えられる。

9号溝からは坏・高坏、甕類などが出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するもので内面を斜めに磨くものであった。高坏は口縁部が大きく外反し、内面に疎らな放射状庵磨きを施すもので、脚部には縦庵磨きが施されるものであった。甕は口縁部が「ク」の字状に外反するもので、頸部に横位施施の単位の中に刷毛目状条線が良く残るものであった。この溝は5世紀代の住居跡などの遺構を壊して作られているが、水田の耕作と関連の深いものであり、概ね6世紀前半頃のものと考えられる。

10号溝からは坏と甕の底部が出土した。坏は口縁部がほぼ直線的に開いて立ち上がり、内面に格子状の庵磨きを施すものであった。器形的には1号焼土遺構のものに近い。

その他町道部分の水田の畦脇から増に近い形態の小形甕、1号高まり(祭祀?)、NB-10-MT-2・NW-3グリッドなどから土師器の甕、須恵器の坏・蓋、土師器の坏などが出土した。NW-3グリッド以外は単品の出土であり、まとまりとしては捉えることは出来なかった。同グリッドの土師器の模倣坏は口縁部があまり反らずに直線的に開くもので底部との段が明瞭なものとしてでないものがあった。多

少違和感のあるものもないわけではないが、概ね6世紀前半頃のものと考えられる。

第3面FA上

1号平地式住居跡からは比較的浅い模倣坏、須恵器蓋、薄手須恵器小破片等が出土した。坏は口縁部が直線的に開くもの2点、やや大形で彎曲して開くもの1点があった。蓋(1)には寛による片梯子状または門柱状の刻みが付けられていた。概ね6世紀第2四半期頃と考えられる。

その他2号平地式住居跡からは土師器底部破片、3号平地式住居跡からは須恵器蓋破片、3号サイロ状遺構からは内斜口縁の坏、1号垣からは内斜口縁の坏と蓋の口縁部破片等が出土したが、いずれも小破片であり、セット関係も不明であるので、詳細な時期判定はできなかった。MU-1グリッドからは土師器の坏と蓋が出土した。坏は比較的浅めで口唇部が外反する内斜口縁のもの、口縁がほぼ直線的に立ち上がる模倣坏であった。蓋は口縁部が狭く、「く」の字状に大きく外反し体部はかなり丸くなるものであった。調整は外面体部磨撫で後一部磨磨き、内面口縁部のみ磨磨きで体部磨撫でを施すものであった。概ね6世紀第1四半期頃のもの？と考えられる。

第4面FA下

7・8・9号掘立柱建物跡から坏や甕破片などが、85・89・96・98土坑から土師器坏・甕、須恵器甕破片などが、1・2号遺物集中からは須恵器蓋・坏・はそう、土師器坏・埴・甕などが出土した。特に2号遺物集中からは玉類をはじめとする多くの遺物が出土した。

掘立柱建物跡の坏は浅めの作りの内斜口縁で口唇部が外反するもの、口縁がやや外反しながら立ち上がるものがあった。

85土坑の坏(1)はほぼ口縁が直立し、口唇部だけが僅か外反する模倣坏であり、土師器の甕(3)は頸部が狭く体部上半に最大径が来る大形の丸胴形のものであり、体部調整は磨撫で後磨磨きを施すものであった。概ね5世紀第4四半期頃のものと考えられる。

98号土坑の甕は土師器と須恵器があり、須恵器は折り返し口縁の小破片であったが、土師器の甕はいずれも体部が非常に丸く張り出すもので、口縁部がかなり絞られる形態であった。口縁が「く」の字状の反りに返るもの(3)とやや直立気味に立ち上がるもの(1)があった。概ね5世紀の第4四半期頃のもの

と考えられる。

2号遺物集中の坏類は内斜口縁のものが圧倒的に多かったが、いわゆる模倣坏もあった。内斜口縁の坏は口唇部が外反するものとそうでないものがあった。いずれも底部は丸く、内面は良く渦巻き状に磨磨きされていた。模倣坏の口縁部は僅かに外反するが、ほぼ直立するもので、底部との境の段は差程強いものではなかった。須恵器の坏(1)は罍の部分が大きく張り出すもので、段も明瞭となっている。高坏は坏部が浅く、ほぼ直線的に開いて立ち上がり、脚部も低い。埴(26)は頸部が細く、直線的に開いて立ち上がり、体部が上から潰された感じで横に大きく張り出すもので、口縁~体部上半にかけて細い磨磨きが施されている。甕は小形のもので、口縁部がやや厚く外反して立ち上がるものは体部がかなり丸く、短口縁であり外反しないものは、体部があまり丸く張り出さない。前者は口縁部に一部刷毛目状調整を残すが、後者は磨撫でであった。須恵器のはそう(30)は孔の部分は竹管を入れて動かし際に周りが欠けたもので剥離痕が認められる。体部下半~底部外面に鼓き、内面に青海波文の押さえが良く残っている。坏の内面底部にFAが堆積しているものが多い。概ね5世紀第4四半期~6世紀第1四半期頃と考えられる。

その他MW-6・NC-11・ND-10グリッドなどから土師器の坏・甕、高坏などが出土した。MW-6の甕(1)は口縁部が「く」の字状に外反するもので、体部は丸く、底部は小さくなる。外面体部は良く磨磨きされており、内面は磨撫でで指頭圧痕を残す。体部には外面から敲いたことによる孔とその周りに剥離痕が認められる。NC-11の模倣坏は厚手で浅く底部が平坦な作りとなっている。ND-10の坏は比較的浅く内斜口縁で口唇部が僅か外反するものとそうでないものがあった。高坏の脚は縦磨撫でで裾は短くやや反っていた。FAの直下で検出されたもので、概ね5世紀第4四半期頃と考えられる。

第5面FA下黒~黒褐色土

4号住居跡からは土師器の坏・小形甕、須恵器高坏・蓋・小形甕等が出土した。土師器の坏はいずれもあまり深く無い作りの内斜口縁で、口唇部が外反するものとそうでないものがあった。須恵器の高坏は土師器の模倣坏に高台を貼付したような形態のもので、薄手の作りとなっていた。須恵器の蓋(3)は酸

III 検出された遺構と遺物

化焙焼成で口縁部がやや丸みを持って開き、口唇部が僅か外反するものであった。形態的には内斜口縁の坏に類似する。土師器の甕は口縁部が「く」の字状に外反し、体部が丸く張り出し、調整は篋削り、底部は小さく中心部が僅か上げ底ぎみとなっていた。須恵器の甕6は薄手で口縁部の屈曲は「コ」の字状を呈し、内面口縁に1条沈線が巡るもので、外面肩部に横位2条の沈線を施し、その中を連続して蔽くものであった。4号住居跡はF A降下に近い前のものであるが、直下のものではない。遺物も5世紀第4四半期の終わり頃～6世紀第1四半期初め頃と考えられる。

5号住居跡からは土師器の内斜口縁の坏・高坏、甕、須恵器の坏等が出土した。坏は底部が丸く、口唇部が外反するものとそうでないものがあった。いずれも内面は良く研磨されていたが、研磨方向は右巻きと左巻きがあった。須恵器の坏(11)は甕が大きく外に張り出すもので、口縁部はやや内傾し、口唇部は丸く、内側に沈線は無い。筒近くまで篋削りされていた。なお、模倣坏は無い。土師器の甕(15～18)は口縁部がやや厚く外反するもので、体部はやや丸くなる。小形品(17)は体部調整は篋撫であったが、やや大形品は口縁部や体部上半に刷毛目状調整を残すものが多かった。小形品の底部には木葉痕が残こされていた。4号住居跡に僅かに先行するがそれに近い時期の5世紀第4四半期の終わり頃と考えられる。

6号住居跡からは甕底部破片と脚部破片が出土した。床面にはF Aが堆積していたが、その殆どが調査区外のためセツト関係は不明である。F Aの直下ということからするとおそらく5世紀の第4四半期の終わり頃～6世紀の第1四半期頃と推定される。

7号住居跡からは内斜口縁の坏、多くの高坏、台付鉢、埴、土師器甕などが出土した。坏は全般にやや厚く、内面を篋磨きするものと篋撫するものがあった。深さがあり、底部中央がやや平坦になるものが多かった。高坏は皿状に浅く段を持たず、坏・脚部とも良く研磨する小形品、坏部に段を持ち良く篋磨きする中形品、坏・脚共に段を有し、篋磨きする大形品とに分けることが出来た。埴は頸部が細く、体部が横に潰れて広がった感じのものであった。台付鉢は深いタイプの坏の大形品が台に付いたような

形態であり、内外面共に篋撫で施すものであった。甕は大形品と小形品があり、口縁が滑らかに外反し体部上半に最大径が位置する小形・中形品と、頸部が細く体部が大きく丸く張り出す大形品とがあった。その他に甕の体部破片を利用した土製円板があった。坏の形態・調整、台付鉢などからすると5世紀第3四半期～第4四半期頃と考えられる。

8号住居跡からは内斜口縁の坏と土師器の甕口縁部破片が出土した。坏1は外面に指頭圧痕多数、内面は良く研磨されていた。甕2は口縁部はやや厚く、「く」の字状を呈し、一部に刷毛目状調整を残すものであった。遺物量も少なく、必ずしもセツト関係は明白ではないが、5世紀第3四半期～第4四半期頃と推定される。

9号住居跡からは土師器の埴と甕が出土した。埴はやや口径が体部径に比べて大きいもので、底部が大きいものと小さいものがあった。いずれも体部調整は指撫で、外面に指頭圧痕を多数残すものであった。甕は口縁が厚手で「く」の字状を呈するもので、頸部に刷毛目状調整を残し、ペンガラを混ぜた赤い粘土の隆帯を貼付し、指で押圧するものであった。隣接する吹屋塚屋遺跡でも出土している特殊なものである。坏がなくセツト関係は不明であるが、概ね5世紀の第3四半期頃と考えられる。

10号住居跡からは坏・甕・甗などが出土した。坏はやや薄手で内斜口縁で内面を篋磨きするものとやや深めの鉢に近いもので、内外面共に篋撫でするものであった。甗3は小形であり、内外面共に篋磨きするものであった。甕は小形・中形・大形があり、中形品には刷毛目状調整を良く残していたが、大形品には肩部に一部残るものもあったが、殆ど篋撫のものが多かった。口縁は「く」の字状を呈し、やや丸みを持って外反するものとほぼ直線的に開くものがあった。5号住居跡の周境帯が一部覆っており、それよりも前の住居跡であることが分かる。概ね5世紀第3四半期～第4四半期頃と考えられる。

11号住居跡からは坏・鉢・甗等が出土した。坏は内斜口縁で、内面を良く篋磨きするものと篋撫のままのものがあった。あまり内傾せずに開くものもあった。甗5は小形で、逆「ハ」の字状に開くもので、内外面共に篋撫で後一部篋磨きするものであった。鉢はやや厚手で口縁部が「く」の字状に開き、体部が非常に丸く張り出すものであった。5世紀の

第4四半期の終わり頃～6世紀の第1四半期頃と考えられる。

12号住居跡からは坏・高坏・埴・甕などが出土した。坏は内斜口縁で底部中心から放射状に疎らに磨ききするものでやや深めのものと口唇部が外反する厚手で浅い作りのものがあった。高坏は坏部の段は比較的明瞭で、内外面共に疎らに磨ききするものであった。埴(4)は体部が横に大きく張り出すもので、体部上半に刷毛目状調整を良く残すものであった。口縁部は欠損しているが、打ち欠かれたような剥離痕があり、人為的に取られた可能性がある。口縁部は細く直線的に立ち上がるものと推定される。甕には小形品と大形品があった。いずれも口縁部が「く」の字状に外反し、体部調整は大形品は磨き、小形品は指撫でで指頭圧痕を良く残すものであった。体部はかなり丸くなるものと丸みは持つがやや長めになるものがあった。5世紀第3四半期～第4四半期頃と考えられる。

13号住居跡からは弥生時代後期樽式土器壺の口縁部破片が出土したが、詳細は不明である。

14号住居跡からは高坏台付甕の脚部破片が出土したが、詳細は不明である。

15号住居跡からは埴・甕の口縁部破片が出土したが、埴(2)はほぼ直線的に開くもので、磨ききで磨きき施されていない。甕(1)は「く」の字状に開くもので、頭部の方が厚く、胴部に刷毛目状調整を残すものである。5世紀の第3四半期前後頃のものと思われるが、詳細は不明である。

16号住居跡からは甕が出土したが、口縁部が「く」の字状に開いて立ち上がるもので、体部がかなり丸くなるものとやや長めになるものがあった。体部調整は外面磨き後指撫で、内面に磨ききで施すものであった。坏や高坏など他のセット関係が不明であるが、概ね5世紀第4四半期頃のものと考えられる。

17号住居跡からは内面に磨ききを施す内斜口縁の坏と内面に磨ききを施し口縁部が外反する深めの坏が出土した。高坏や甕など他のセット関係が不明であるが、概ね5世紀第4四半期頃のものと考えられる。

18号住居跡からは弥生時代後期樽式土器の口縁部や頭部などの破片が出土したが、詳細は不明である。

20号住居跡からは坏・高坏・埴・甕などが出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するものとそうでないものがあった。浅い作りであり内傾の角度がきつ

くないものがあった。やや深めで内面を磨ききしないものもあった。高坏は内面のみ疎らに放射状磨ききを施すものであった。埴は口縁部は細く立ち上がるものと思われ、体部上半に刷毛目状調整を残し、下半と内面肩部に指頭圧痕を多く残すものであった。甕は口縁部内面に幅広の緩い沈線磨きを施すもので、段は比較的明瞭であった。概ね5世紀の第4四半期頃のものと考えられる。

21号住居跡からは口唇部が外反し、内面を放射状に磨ききする内斜口縁の坏と口唇部が僅かに外反しやや深い作りで、内面に磨ききを施すものがあった。高坏や甕など他のセット関係が不明であるが、概ね5世紀第3四半期～第4四半期頃と推定される。

22号住居跡からは底部がやや突出する感じで内外面共に磨ききする内斜口縁の坏、深めで底部がやや平らで口縁部があまり内傾しないで立ち上がり、内面を磨ききする坏と口縁部が「く」の字状に開き、肩部に一部刷毛目状調整を残す甕が出土した。必ずしもセット関係が明瞭ではないが、概ね5世紀の第4四半期頃のものと考えられる。

23号住居跡からは坏・鉢・台付鉢・甕などが出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するものとしてないものがあった。鉢(4)は坏がやや深くなった感じのもので、口縁部が短く外反し、体部に刷毛目状調整を残すもので、底部は平底であった。台付鉢は口縁部が非常に短く、外反し、内面一部に磨ききを施すものであった。甕(5)は口縁部が「く」の字状に外反し、肩部に最大幅が位置し、底部がかなり細くなるタイプの小形品であった。甕は口縁部が途中で屈曲しほぼ直立して立ち上がったもので、体部中央に最大幅が位置し、底部中心がやや上げ底となるもので磨きき後指撫でを施すものと口縁部が分厚く、体部が丸く張り出すもので、体部調整は磨ききで上半に指頭圧痕を多く残すものがあった。概ね5世紀の第3四半期～第4四半期頃のものと考えられる。

24号住居跡からは台付甕・甕などが出土した。台付甕(2)の頸部には2連止め縷文状、その下には波状文が、内面には細かく横磨きを施されるものであった。甕(4)は頭部がやや絞られ、体部がやや丸く張り出すもので、頭部に2連止め縷文状2段、その下に波状文2段、口縁と体部に磨ききを施されるものであった。底部破片には小形細身で外面刷毛目状調整後磨き、内面横刷毛目状調整を施すものと大形

III 検出された遺構と遺物

で内外面共に体部刷毛目状調整、内面に指頭圧痕を多く残すものがあった。弥生時代後期後半式土器の段階と考えられる。

25号住居跡からは坏・甕・大形鉢が出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反するもので、内外面共に寛磨きを施すものであった。甕3は口縁部が厚手で「く」の字状に外反し、体部が丸く、底部が瓶状に丸く欠けているもので、人為的に抜き、瓶転用の可能性もあるものであった。もう1点は頭部がやや広く鉢と甕との中間的形態であり、底部は丸底に近い平底である。特徴的なのは大形の鉢4であり、体部寛撫で内外面共に指頭圧痕を多数残す。噴き溢れ痕が明瞭に残るものであり、その部分だけ煤が付着していない。デンプン質の粘りのあるものを煮炊きした時のものと考えられる。底部は丸く欠損している。高坏や甕など他のセット関係が不明であるが、概ね5世紀第4四半期頃と考えられる。

26号住居跡からは器台・埴輪などが出土した。器台は明確な鐮状の段が飛び出るもので、内面に寛磨きを施すものであった。埴輪は寛撫でまたは指撫でを施すもので、一部刷毛目状調整が残るものもあった。口縁部が「く」の字状に開くもので、口縁の径が体部の径よりも大きいものとはほぼ同じものがあり、口縁が短く甕に近いものもあった。高坏や甕など他のセット関係が不明であるが、概ね5世紀第2四半期～第3四半期頃と考えられる。

27号住居跡からは埴の口縁部が欠損したような形態の土師器1が出土した。内外面共に寛磨きを施すものであった。他に底部に6個の孔の開く瓶4も出土した。27号住居跡(旧110号土坑)周辺からは坏・高坏・鉢・小形・大形の甕、台付甕などが出土した。坏は内斜口縁で口唇部が外反し内外面共に寛磨きするものが多かった。口縁部がほぼ直立し底部は小さい平底で、内面全体を放射状に磨くものもあった。高坏は口縁部に段を有し、内外面共に良く寛磨きするもの、段は緩く内外面共に疎らに放射状磨きするもの、段も更に緩く口縁部横撫でで底部も寛撫のみで、全く寛磨きしないものがあった。鉢は坏がやや深くなったような形態のもので、内外面共に共に寛磨きするものと寛撫でのみのものがあった。台付鉢は口縁部が明確に「く」の字状を呈し、内外面共に良く寛磨きするものであった。甕は口縁部が「く」の字状に外反し、小形で薄く底部丸底で、

刷毛目状調整を良く残すものと大形で口縁部に段を有し、頭部に一部刷毛目状調整を残し、体部寛撫で後縦寛磨きするものがあった。概ね5世紀第3四半期～第4四半期頃のものと考えられる。

28号住居跡からは口唇部が外反し、内外面共に研磨する内斜口縁の坏と内外面共に寛磨きする高坏の脚部が出土した。詳細な時期は不明であるが、概ね5世紀代中頃以降と考えられる。

29号住居跡からは高坏の脚と埴が出土した。縦撫撫での単位の中に刷毛目状調整を残し、その後縦撫磨きし、裾部があまり大きく反らないものと坏部に段が付き、脚部に刷毛目状調整が無く粗い縦撫磨きし、裾部が大きく反るものがあった。埴は口径と体部径がほぼ同じで、体部は円よりもやや潰れた形態で口縁部縦撫磨き、体部に指頭圧痕を多く残すものであった。坏や甕などが無いので、セット関係は不明であるが、概ね5世紀中頃のものと考えられる。

30号住居跡からは弥生時代後期式土器の破片が出土したが、カマドを持つ住居跡であり、遺構に伴うものではない。詳細な時期は不明であるが、F Aの降下前に完全に埋没していた住居跡であり、カマドを持つことなどから概ね5世紀の終わりの頃から6世紀の初め頃と推定される。

31号住居跡も22号住居跡の南壁付近より確認されたもので、カマドしか確認できなかった。口唇部が外反し、内外面共に寛磨きする内斜口縁の坏と放射状に寛磨きする高坏の脚部破片、口唇部が外反し外面横位寛削りて内面寛磨きを施す深めの坏のような鉢が出土した。セット関係が不明であり、詳細な時期は判断出来ないが、概ね5世紀後半と推定される。

32～34号住居跡からは時期判定に使用できるような遺物は出土しなかった。

住居跡は24号住居跡が弥生時代後期式土器の段階で、それ以外の殆どが5世紀後半～6世紀初め頃に限定されるものであり、非常に短期間に形成された集落であることが伺える。埋没中の遺物にも4世紀代～5世紀初めものは全く含まれておらず、その意味でも期間限定の集落と言える。

111号土坑からは弥生時代後期式土器の甕が2個体出土しており、2点とも折り返し口縁で折り返し部分に波状文、頭部に簾状文、その下に波状文2段施文するもので、体部調整は外面寛磨き、内面横刷毛目状調整が残るものであった。なお、簾状文は

止めでは無く横位櫛書文の上から縦に施される沈線
を4~5条引いている。2個体とも体部下半の最大
径部分に外面より打撃を加えて孔を開けている。全
く同じような作りで、孔の位置まで類似していた。
土坑も比較的大形であったので、2体を埋葬した墓
坑と考えられよう。

1号遺物集中の内斜口縁の坏はいずれも深さがあり、
1点だけ口唇部が外反するものがあった。内面
はいずれも良く研磨されていた。甕は比較的小形で
口縁はあまり大きく反らず、頸部に一部刷毛目状調
整を残すものであった。蓋(2)は口縁部がほぼ直立す
るもので、あまり外側に開かないものであった。F
Aの直下から顔を出していたが、その下の黒色土中
まで切れることなく、遺物は続いていたので、第5
面のものとして扱った。概ね5世紀の第4四半期頃
のものと考えられる。

3号遺物集中からは須恵器の蓋・埴・甕が出土し
た。蓋(1)は口縁部がほぼ直立し、口唇部内面に浅い
沈線が巡り、境の段は鐮状に細く突出するものであ
った。埴(4)は口縁部が僅かに内傾気味に直線的に立
ち上がり、頸部が細く絞られており、体部が非常に
丸く壺とよんでも良いものであった。甕は大形品で
あり、口縁部は「く」の字状に外反し、体部は丸み
を持ち、調整は磨撫であった。他に外面に刷毛目
状調整後化粧粘土を貼り、その上に縦磨磨きを施し
た分厚い作りの大形の底部破片が出土した。すべて
セットが揃っているわけではないが、概ね5世紀第
4四半期頃と考えられる。

4号遺物集中からは埴の口縁部と大形の甕破片が
出土した。埴口縁部(1)は内外面共に細く磨磨きされ
ており、やや直立気味に開いて立ち上がるがあまり
長くはないものであった。甕(2)は外面磨削り、内面
は横位磨撫を施すものであった。セット関係が明
白ではないが、概ね5世紀の第4四半期~6世紀第
1四半期のものと推定される。

5号遺物集中(旧MY-8遺物集中)からは坏・
小形壺・甕・大形甕など多くの遺物が出土した。坏
は内斜口縁で口唇部が外反するものと同様でないも
のがあった。底部は丸く薄手のものが多い。壺(5)は
埴が変形したような形態のもので、口唇部が丸く、
口縁も短く底部もかなり丸いものであった。甕(6)は
大形のものであり、外面は磨撫で、内面は磨撫で
あるが、下半部に刷毛目状の条線を残し、体部下半

に最大径が位置するものであった。甕の口縁部は
「く」の字状を呈し、頸部が細く絞られ、体部が非常
に丸くなるものであった。体部に刷毛目状調整を残
すものと磨撫だけのものがあった。5世紀の第4
四半期~6世紀第1四半期のものと考えられる。

2号以外の遺物集中カ所でもFAの直下から顔
を見せ初めたが、その多くが下の黒~黒褐色土中から
出土したものであり、純粋な意味でのFAの直下で
はない。従って第5面の中で取り扱った。2号遺物
集中のように形を保ったままの坏の内面にFAが堆
積していたものとは違い、その時には既に廃棄また
は遺棄された状態であったと推定されるものである。
上記住居跡群の時期よりもやや新しいかは同じ頃
と考えられる。

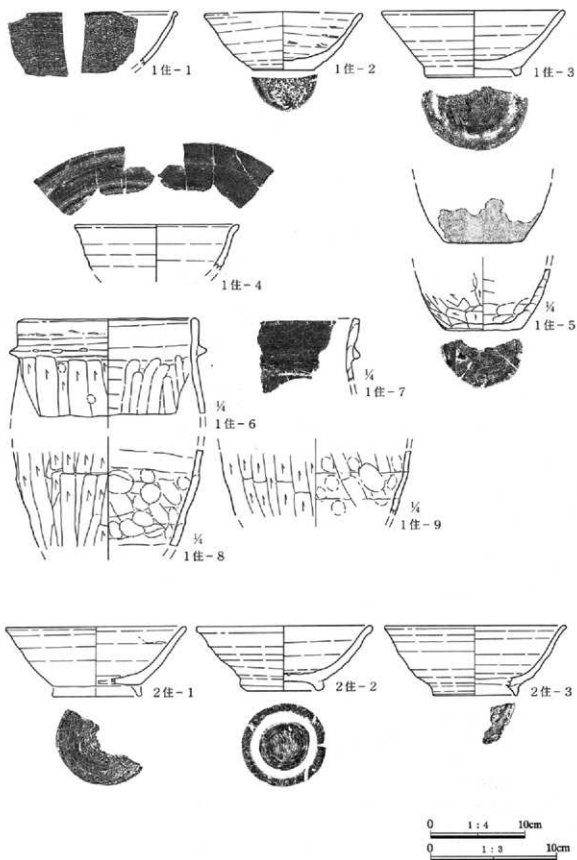
縄文時代

土坑から少量の縄文土器が出土した。その多くが
繊維を含む前期黒浜や有尾式土器であり、一部中期
や後期もあった。いずれも小破片であったが、329
号土坑と532号土坑はややまとまりが見られた。

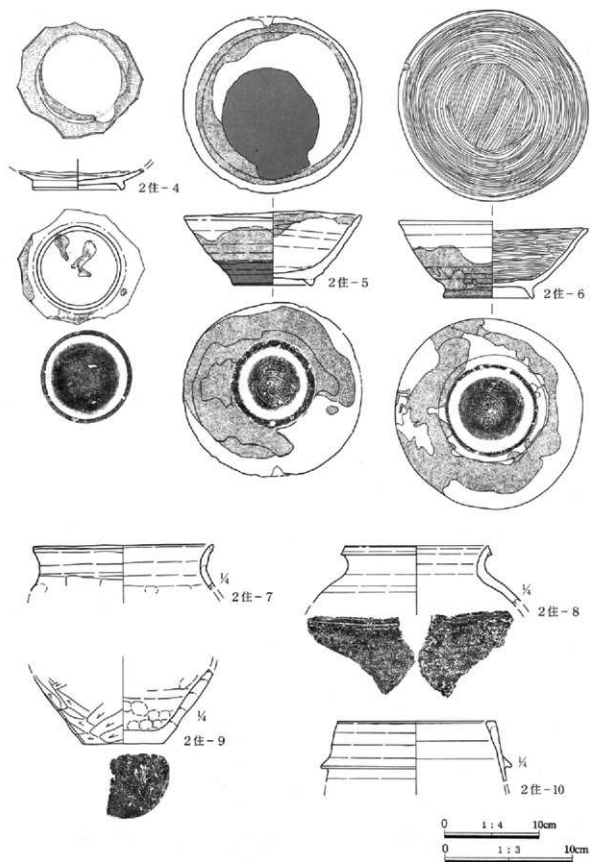
329号土坑出土の土器は前期有尾式と考えられる
もので波状口縁の下に半截竹管による平行沈線+爪
形文により菱形の文様を描くものと思われる。拓本
ではその一部の三角形や山形部分が見られた。

532号土坑の土器は口縁部まで縄文が施される黒
浜式と考えられ、体部下端まで縄文が施されるもの
であった。

III 検出された遺構と遺物

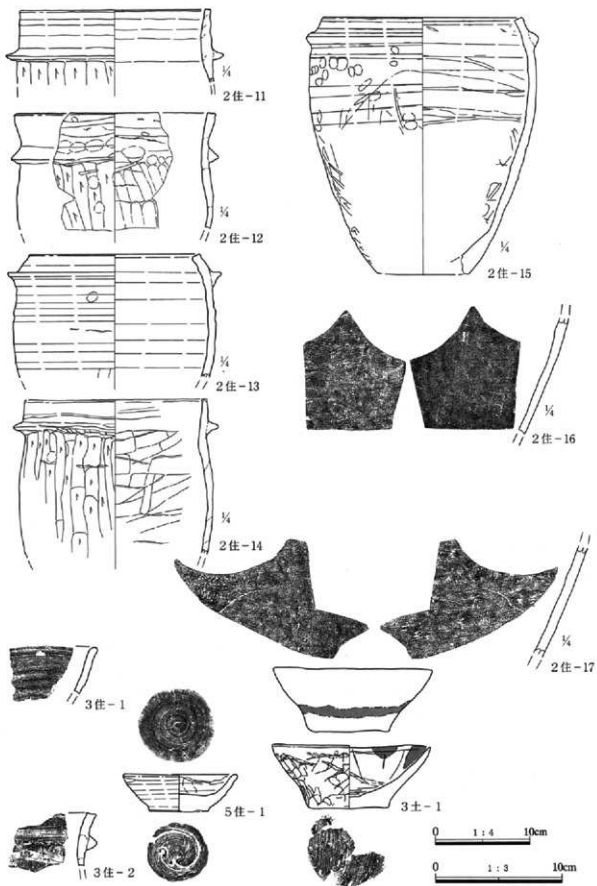


第259図 I区FP上1・2号住居跡出土土器

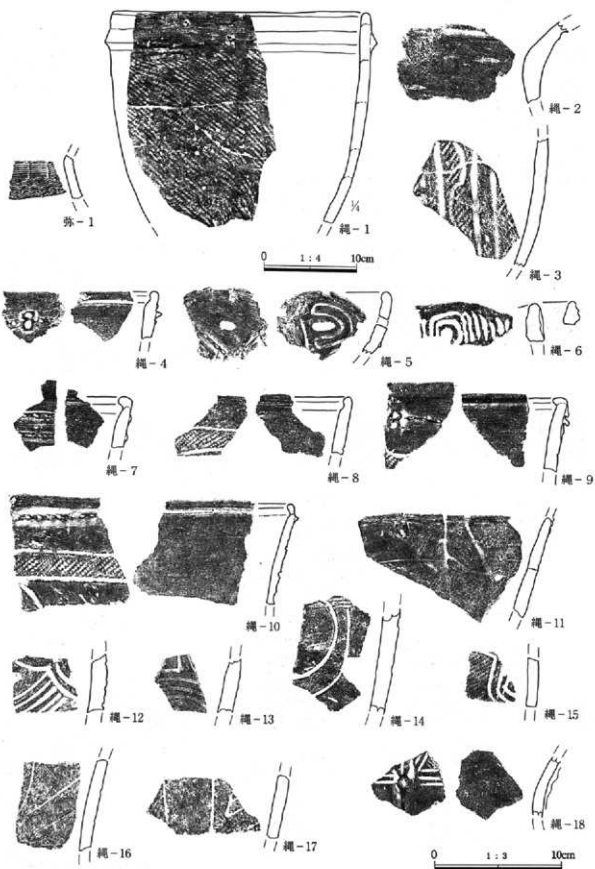


第260图 I区FP上2号住居跡出土土器

III 検出された遺構と遺物

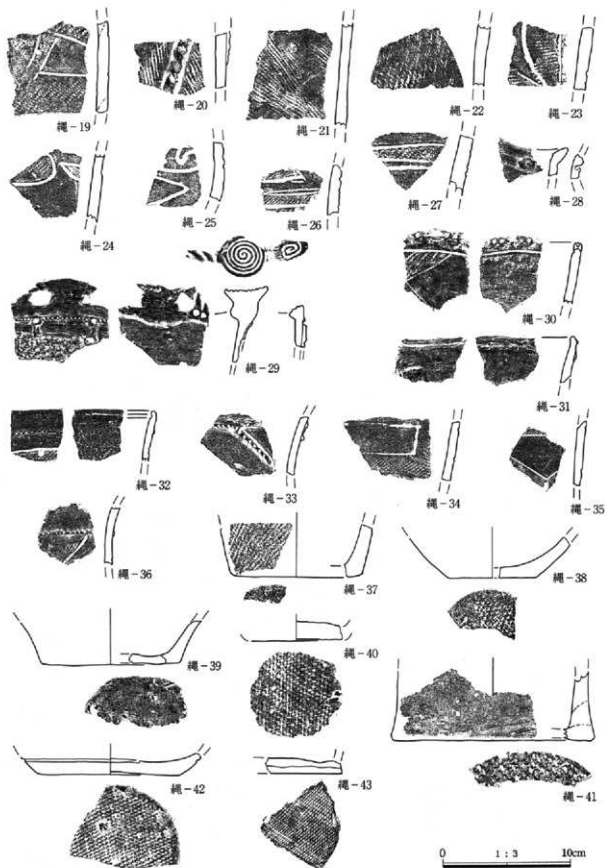


第261図 I区FP上2・3・5・号住居跡、3号土坑跡出土土器

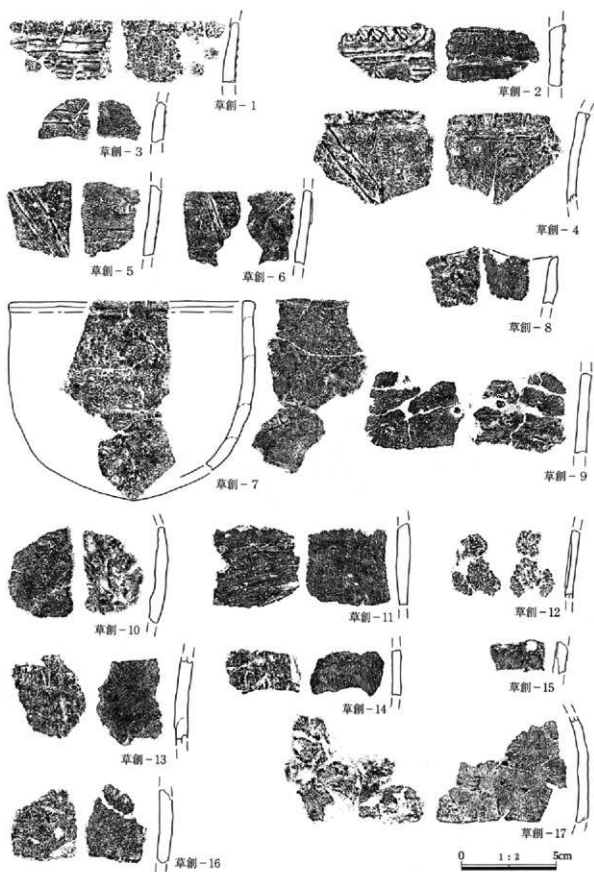


第262図 I区FA下黒弥生・縄文グリッド出土土器

III 検出された遺構と遺物

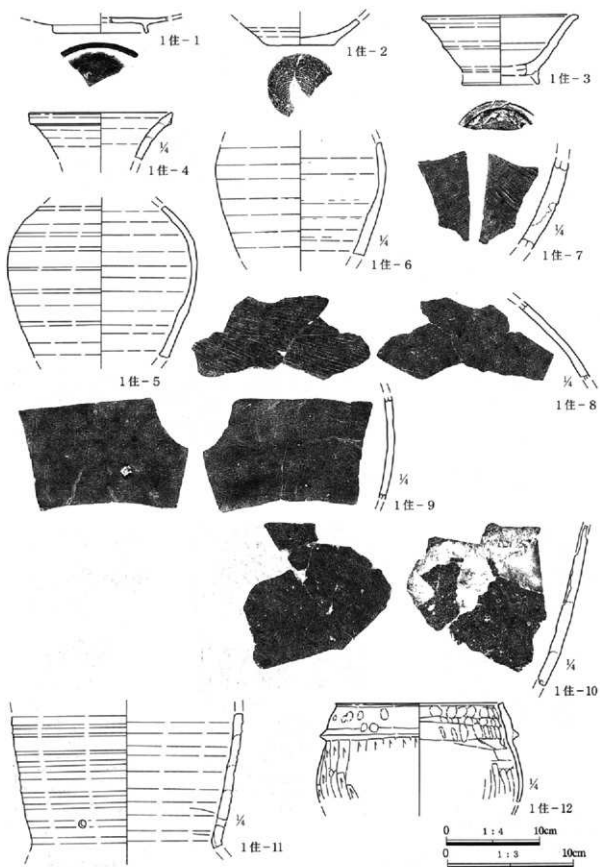


第263図 I区FA下黒縄文グリッド出土土器

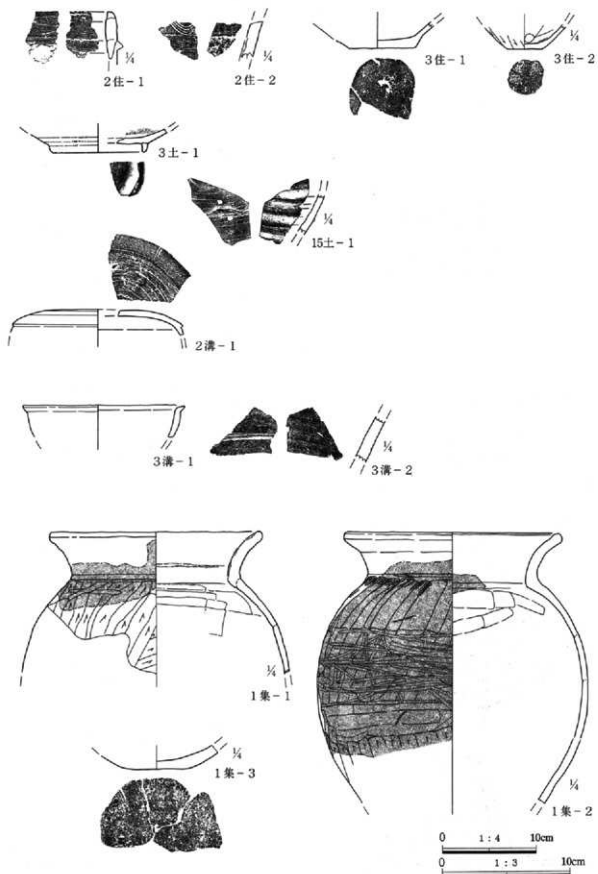


第264図 I区縄文草創期グリッド出土土器

III 検出された遺構と遺物

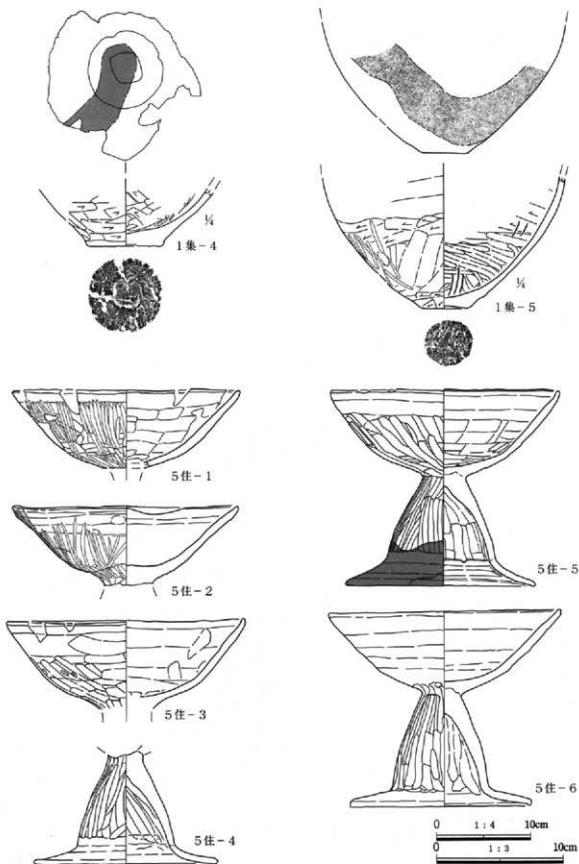


第265図 II区FP上1号住居跡出土土器

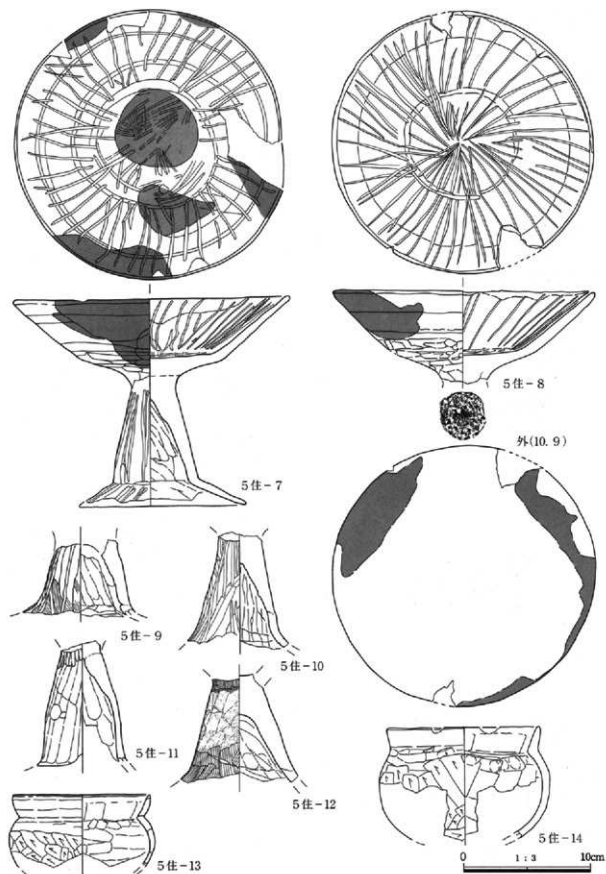


第266图 II区FP上2·3号住居跡、3·15号土坑跡、FP下2号溝、FA上3号溝、FAF1号遺物集中出土土器

III 検出された遺構と遺物

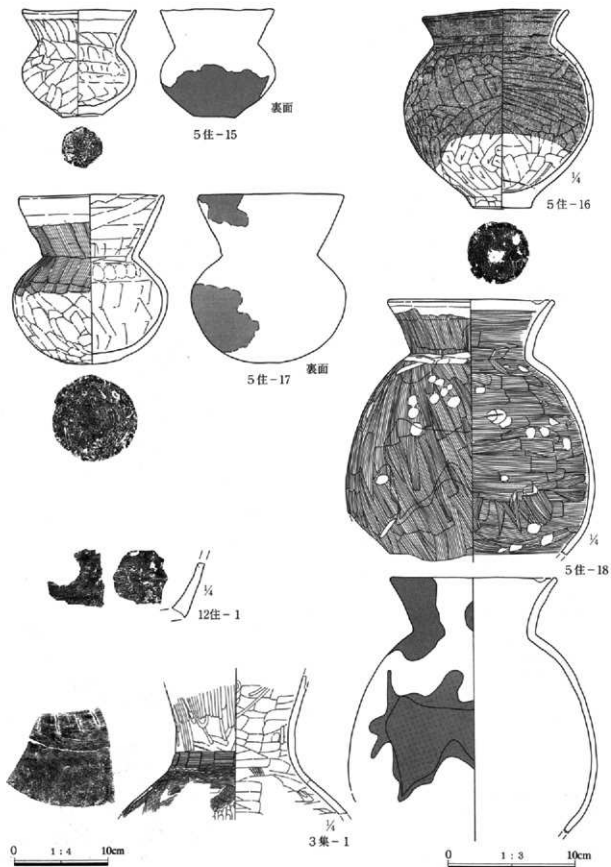


第267図 II区FA下1号遺物集中、FA下黒5号住居跡出土土器

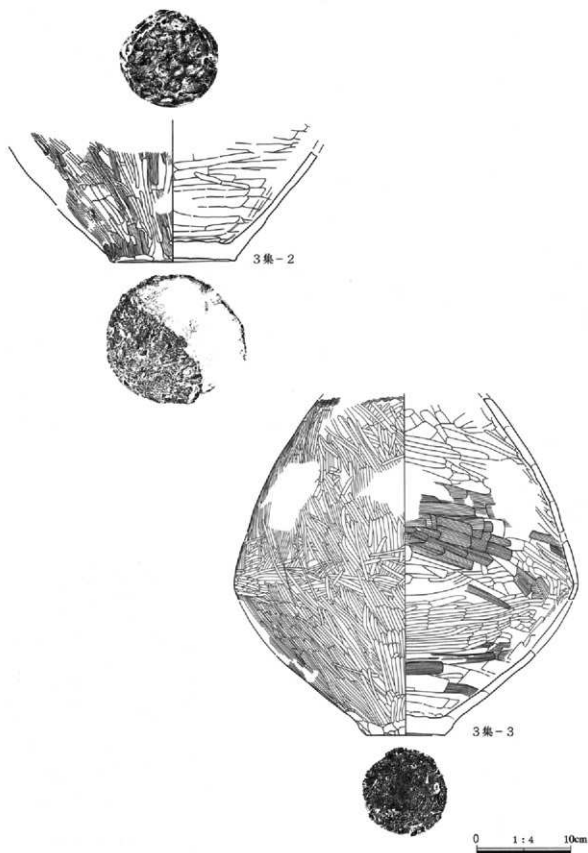


第268图 II区FA下黑5号住居跡出土土器

Ⅱ 検出された遺構と遺物

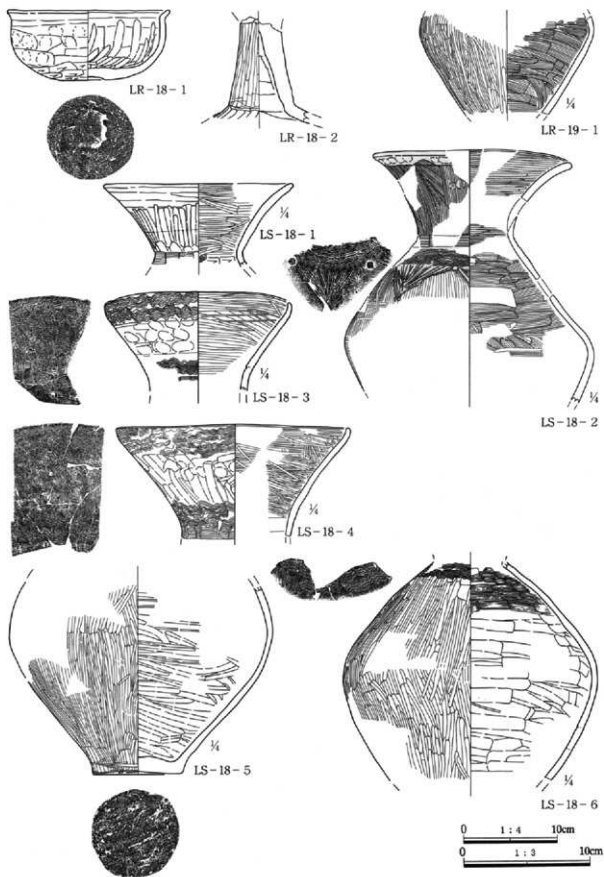


第269図 Ⅱ区FA下黒5号住居跡、3号遺物集中出土土器

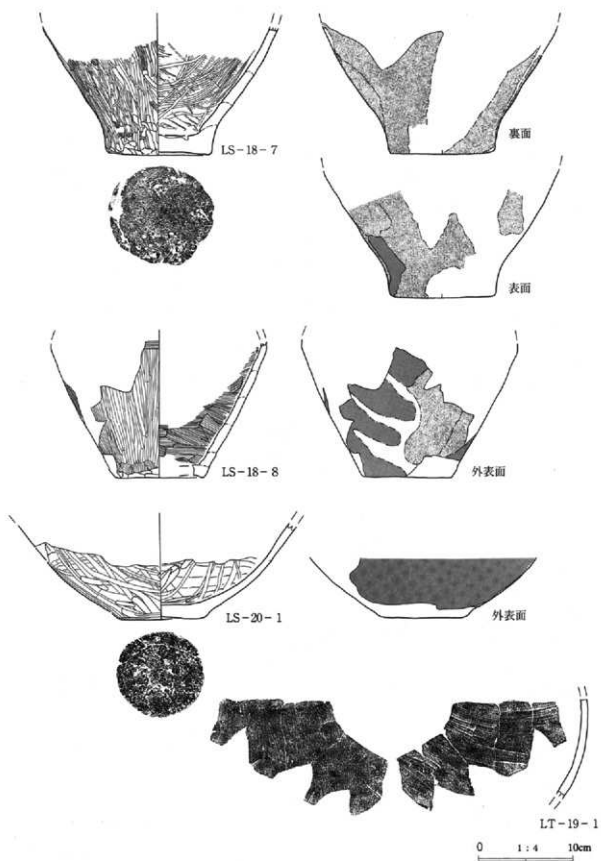


第270图 II区FA下黑3号道物集中出土土器

III 検出された遺構と遺物

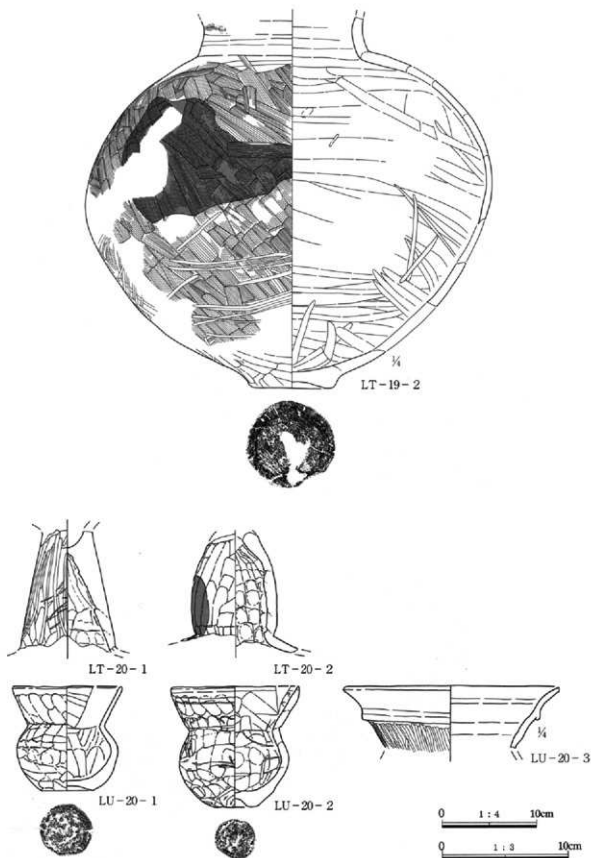


第271図 II区FAF黒グリッド出土土器

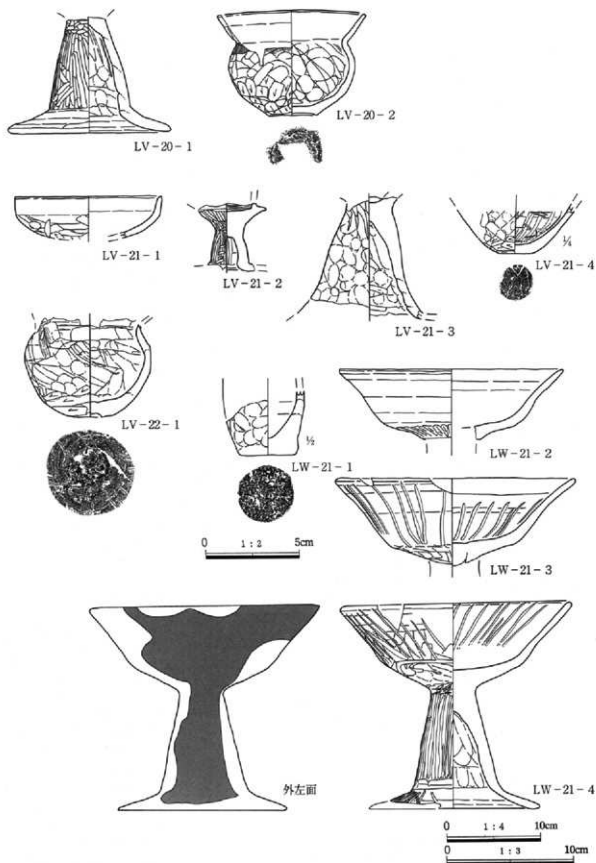


第272図 II区FA下黒グリッド出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

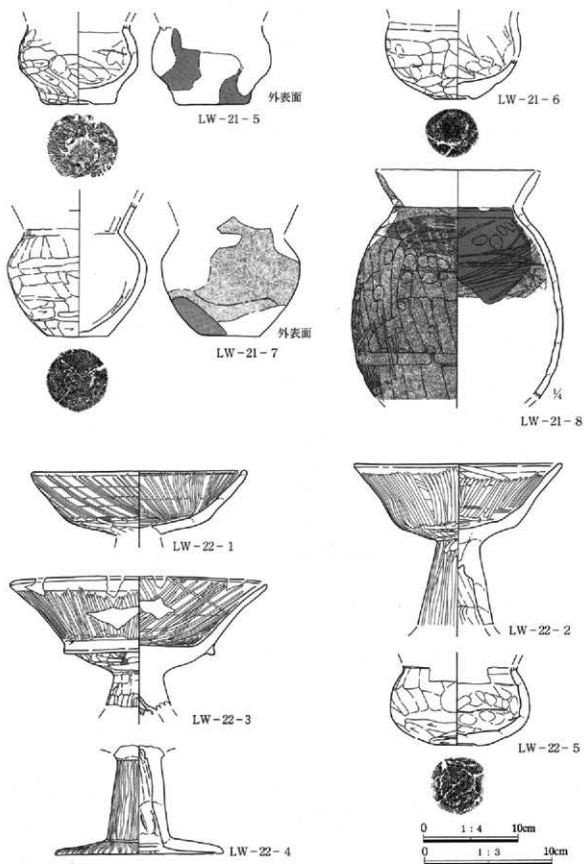


第273図 Ⅱ区FA下黒グリッド出土土器

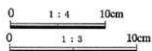
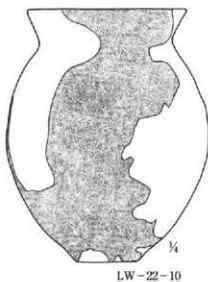
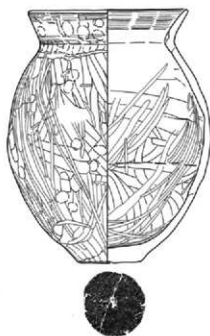
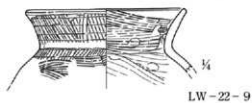
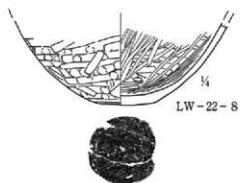
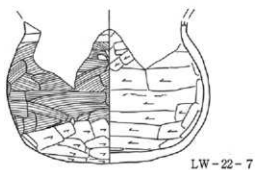
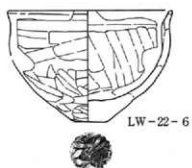


第274図 II区FA下黒グリッド出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

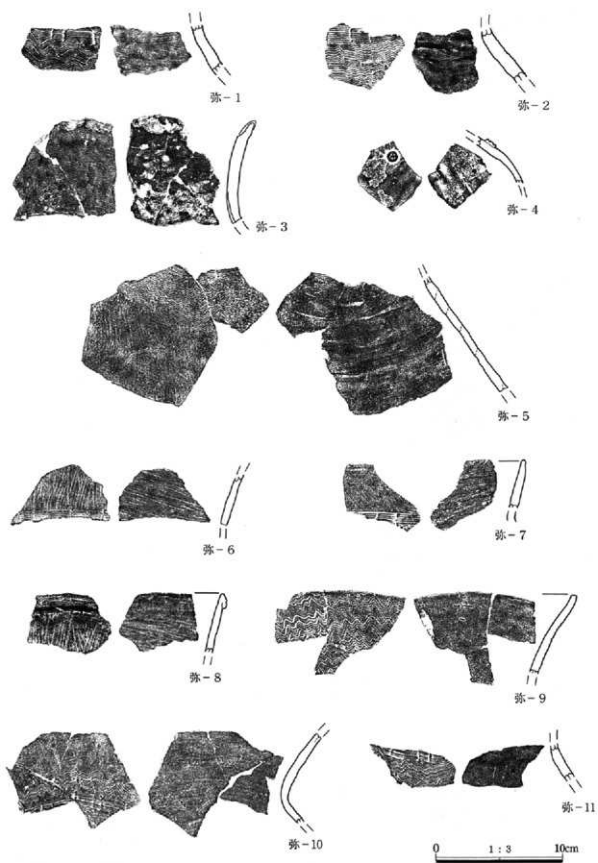


第275図 Ⅱ区FA下黒グリッド出土土器

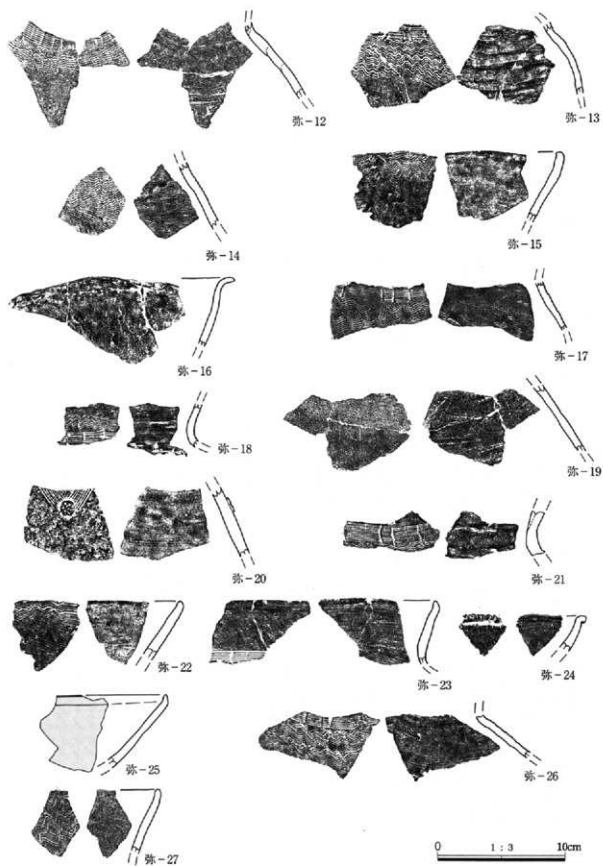


第276図 II区FA下黒グリッド出土土器

III 検出された遺構と遺物

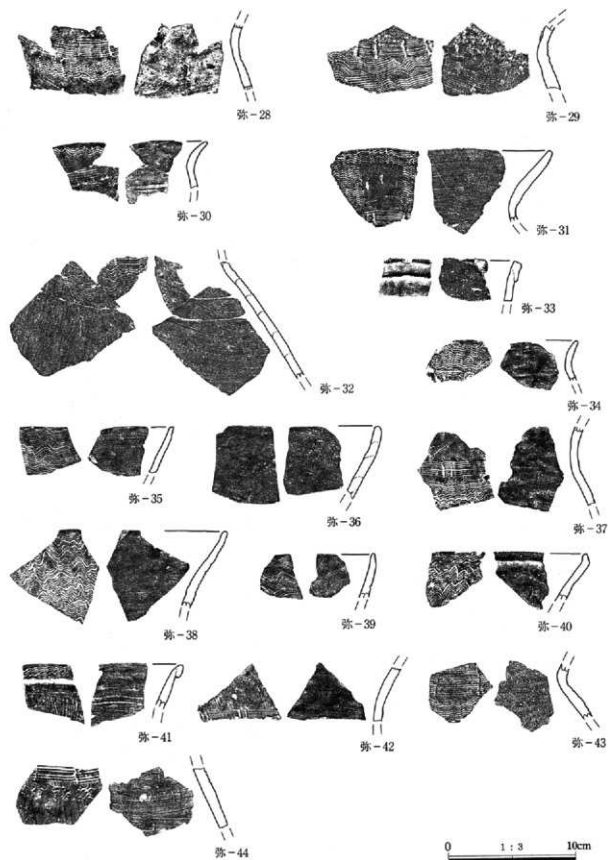


第277図 II区FA下黒グリッド出土土器

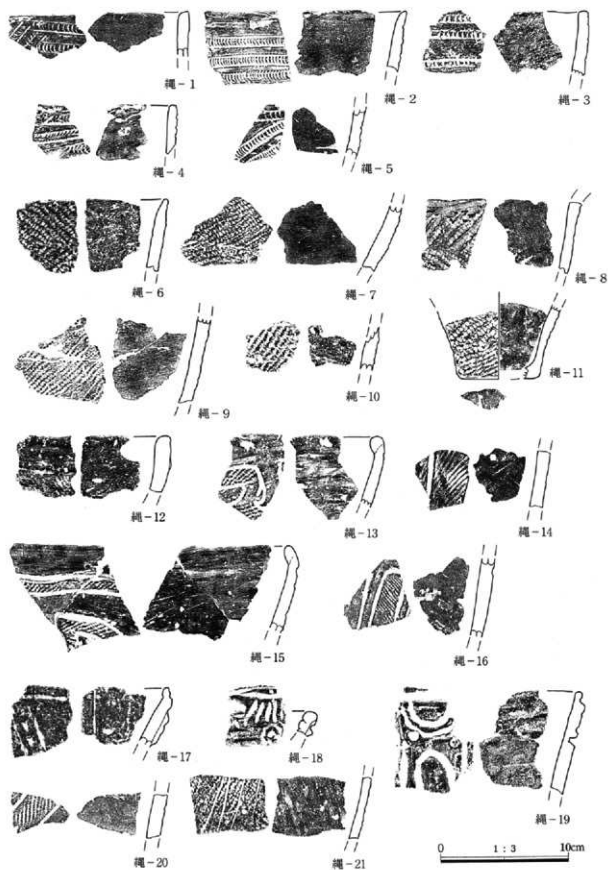


第278図 II区FA下黒グッド出土土器

III 検出された遺構と遺物

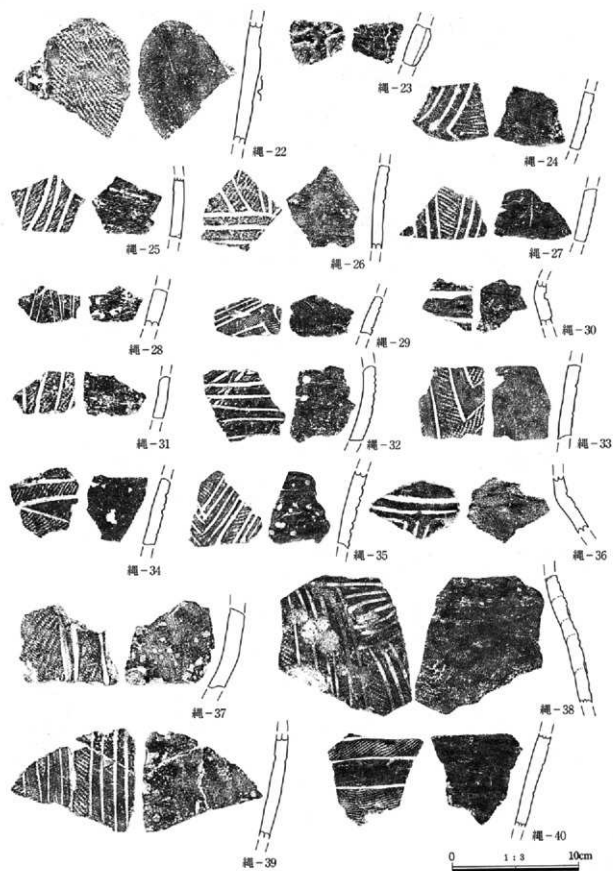


第279図 II区FA下黒グリッド出土土器

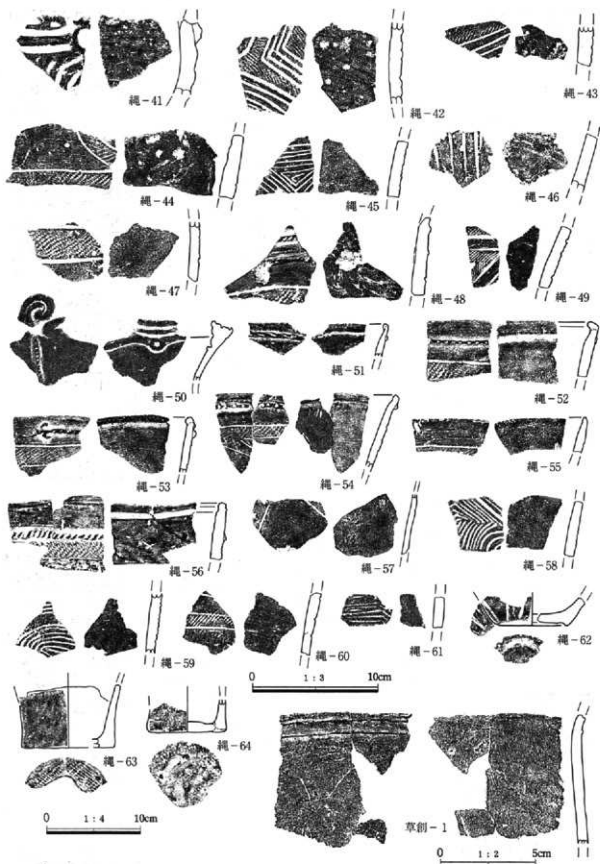


第280図 II区FA下黒縄文グリッド出土土器

III 検出された遺構と遺物

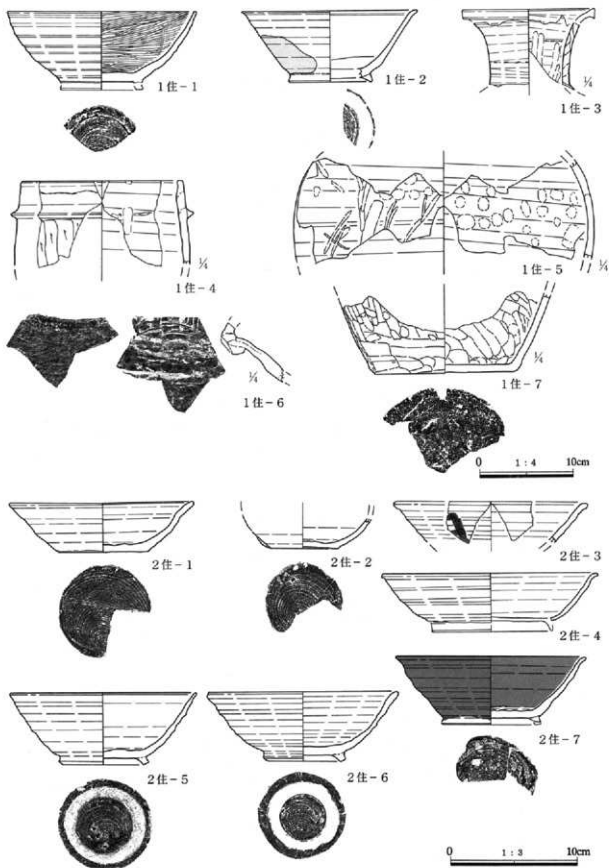


第281図 II区FA下黒縄文グリッド出土土器

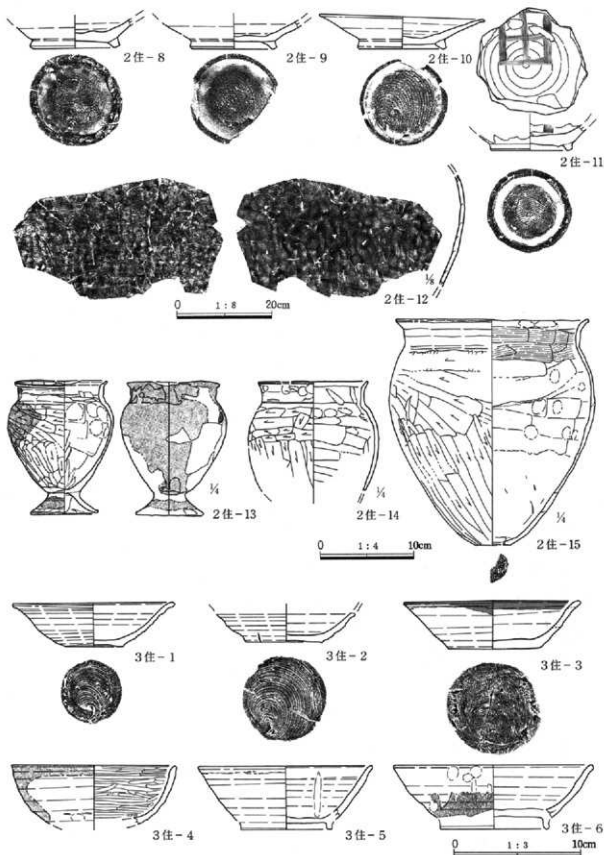


第282図 II区縄文草創期グリッド出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

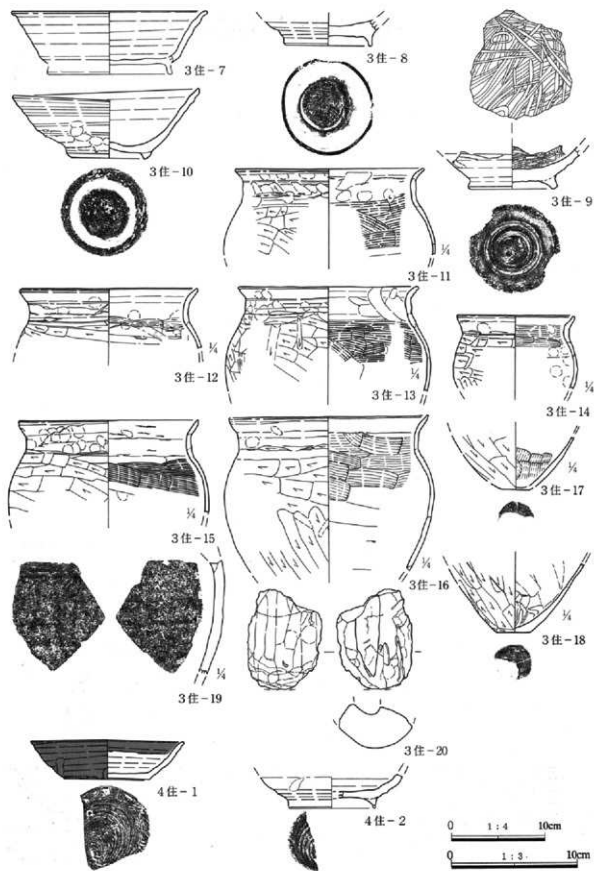


第283図 Ⅲ区FP上1・2号住居跡出土土器

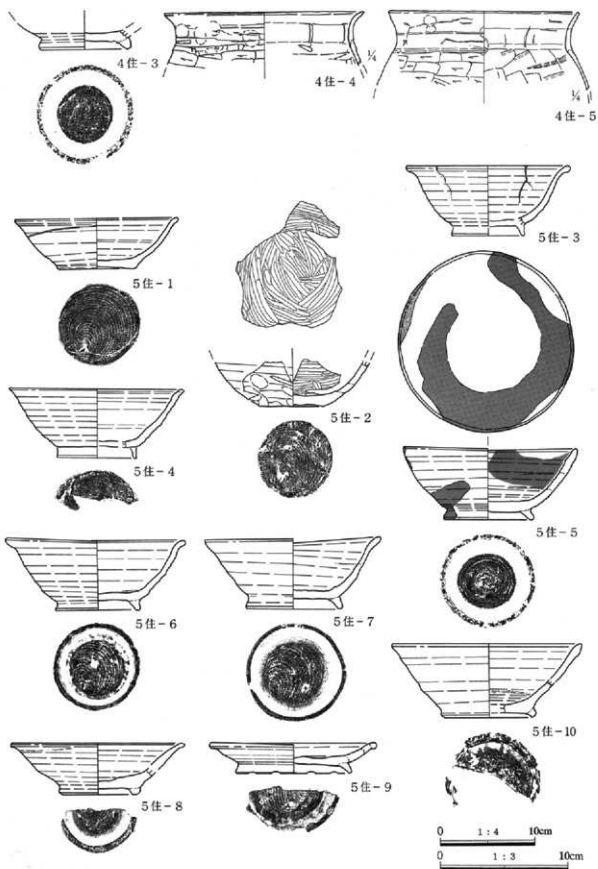


第284图 III区FP上2・3号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

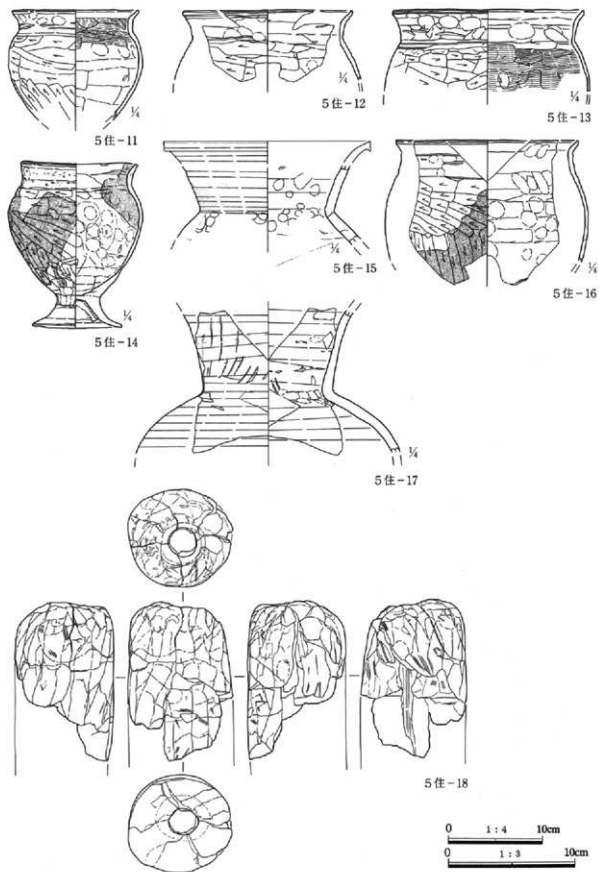


第285図 Ⅲ区FP上3・4号住居跡出土土器

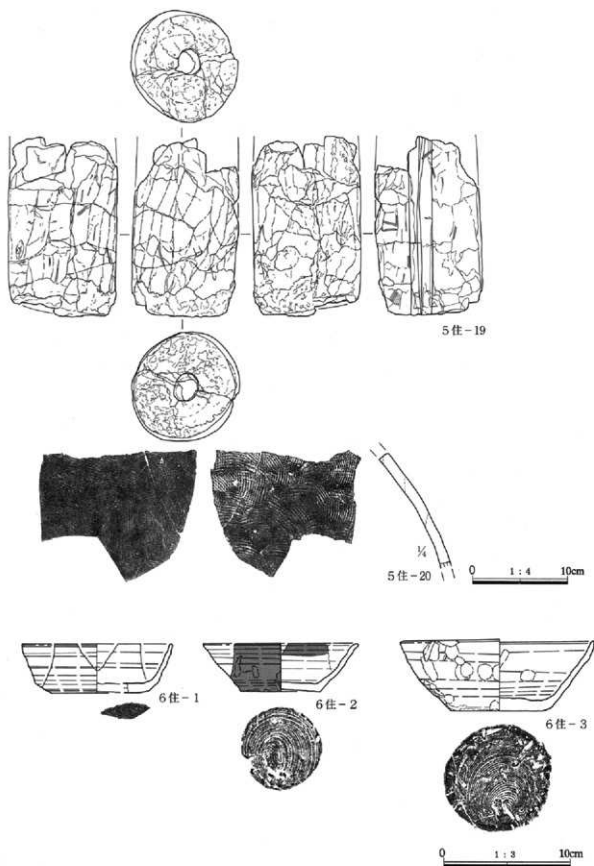


第286图 III区FP上4・5号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

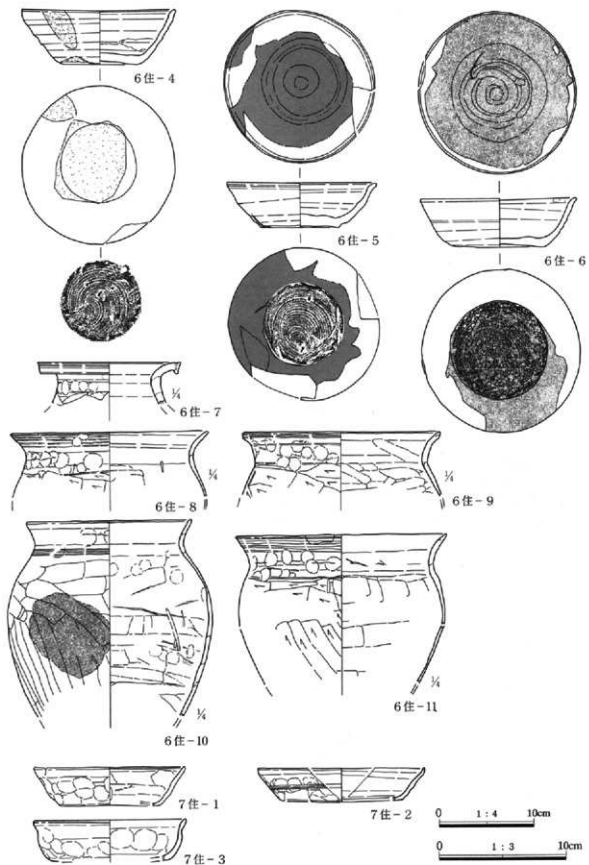


第287图 Ⅲ区FP上5号住居跡出土土器

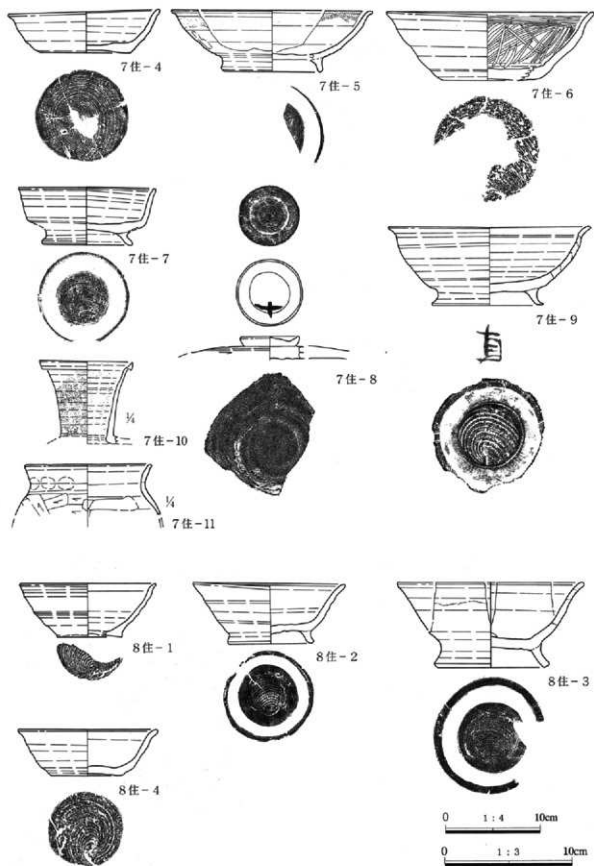


第288图 III区FP上5・6号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

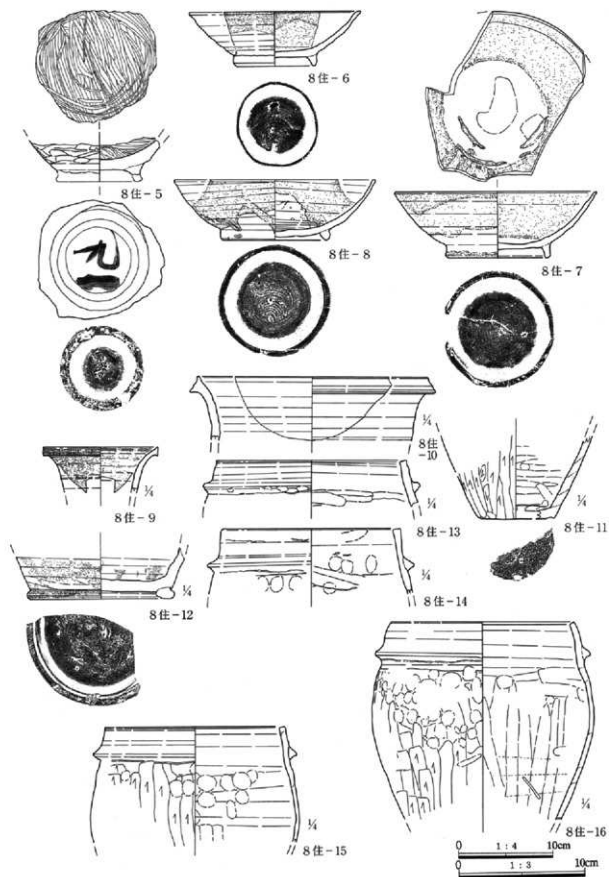


第289図 Ⅲ区FP上6・7号住居跡出土土器

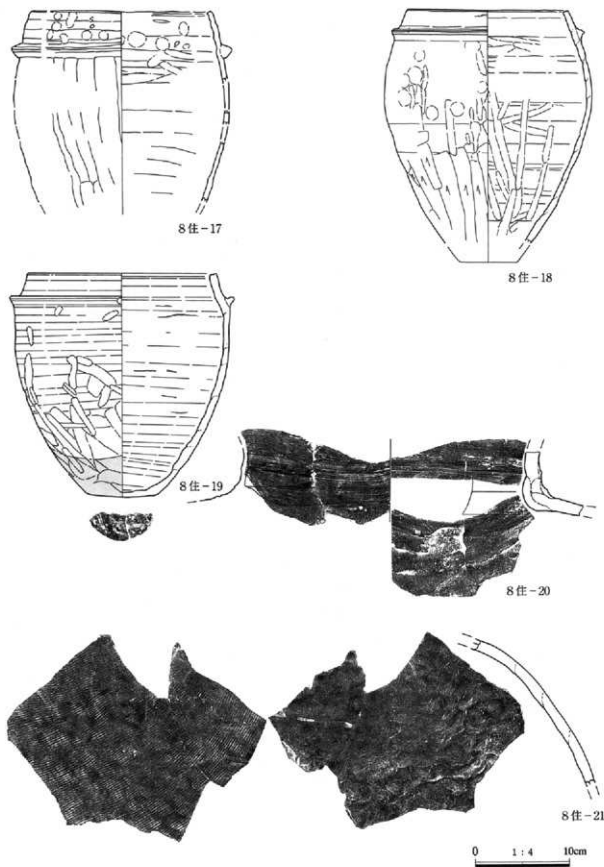


第290图 Ⅲ区FP上7・8号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

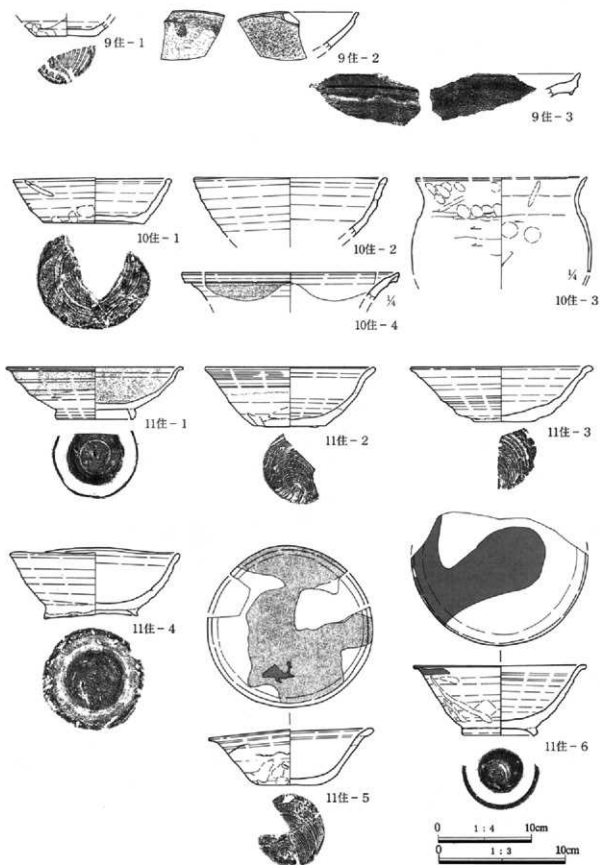


第291図 Ⅲ区FP上8号住居跡出土土器

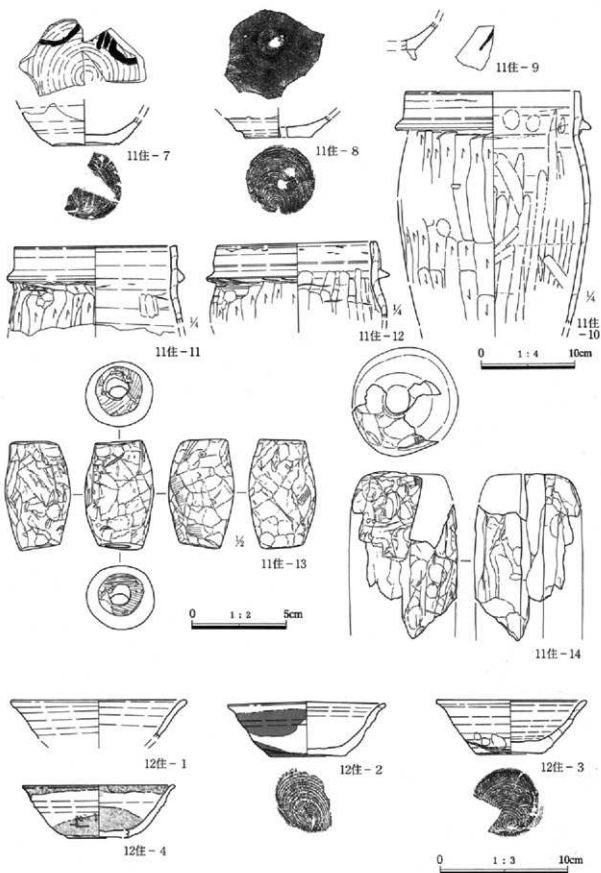


第292图 III区FP上8号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

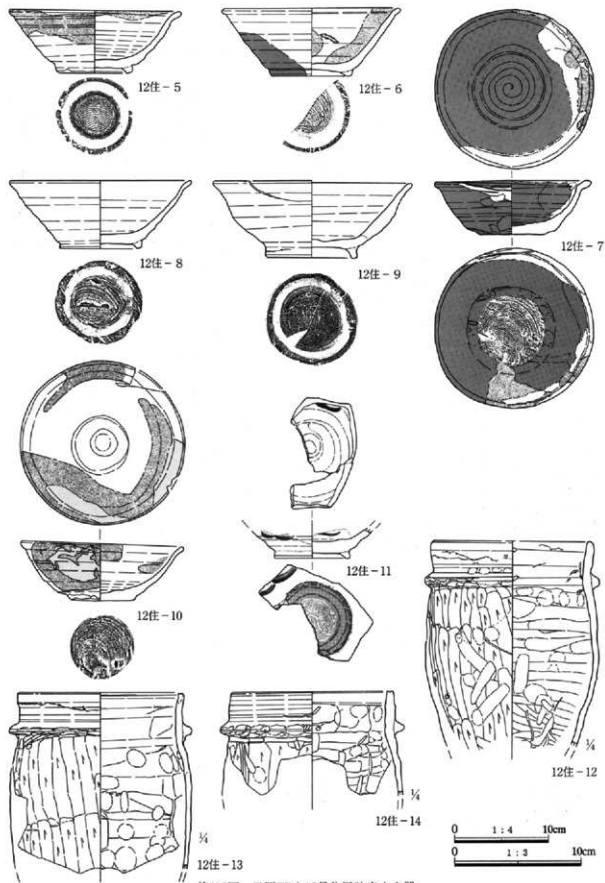


第293図 Ⅲ区FP上9～11号住居跡出土土器

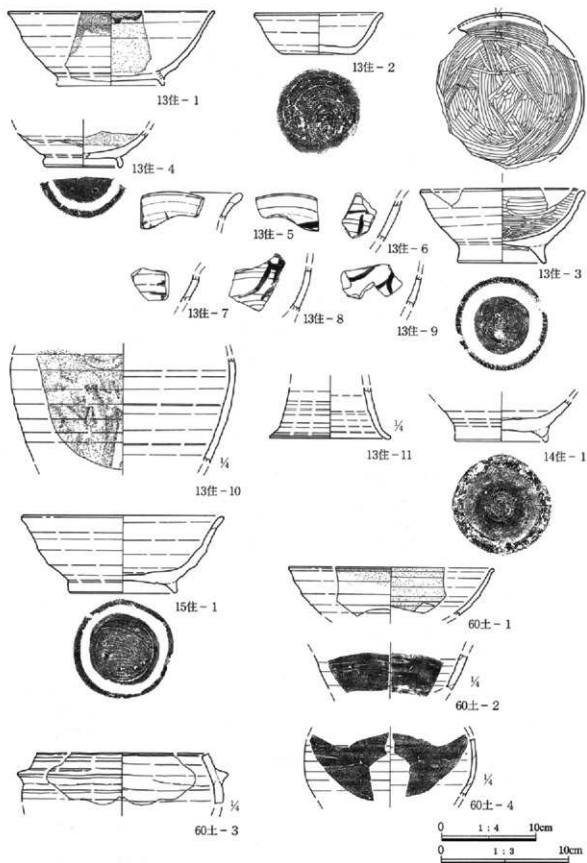


第294图 Ⅲ区FP上11・12号住居跡出土土器

III 検出された遺構と遺物

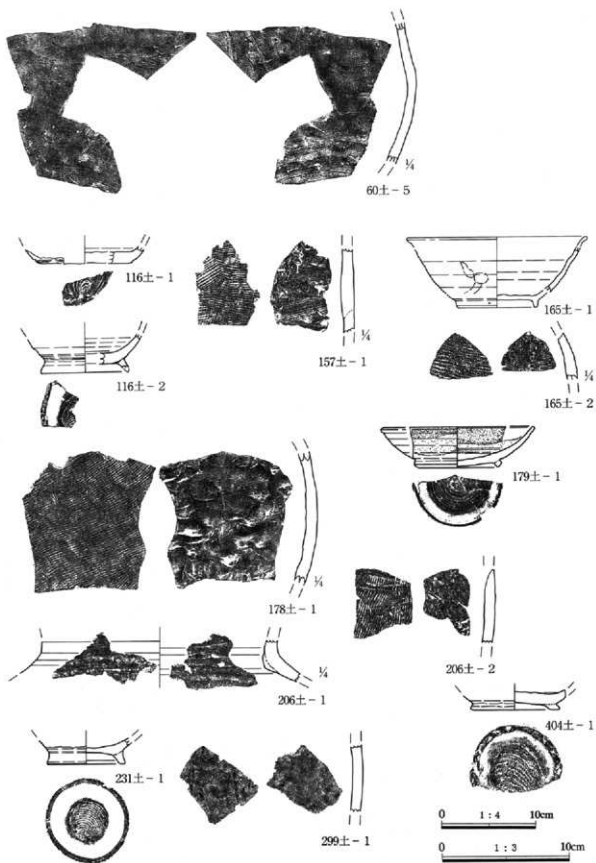


第295図 III区FP上12号住居跡出土土器

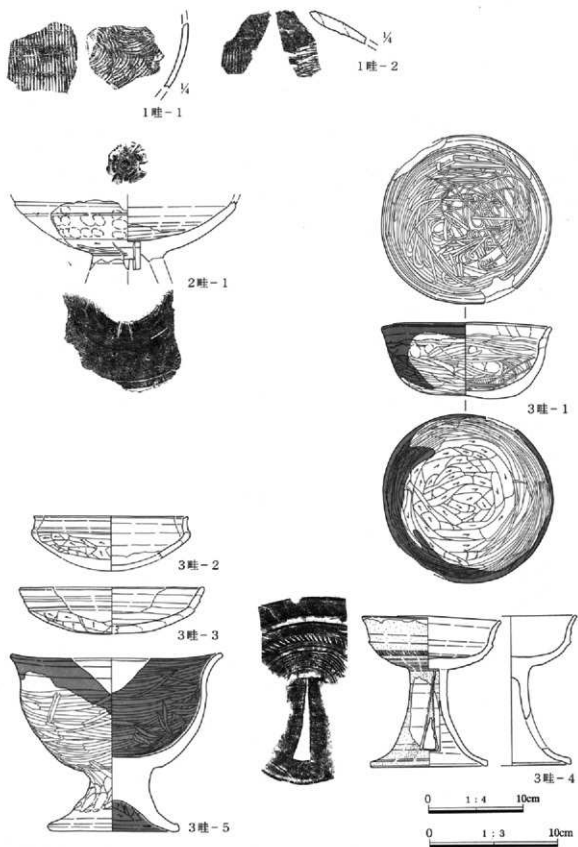


第296图 Ⅲ区FP上13~15号住居跡、60号土坑跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

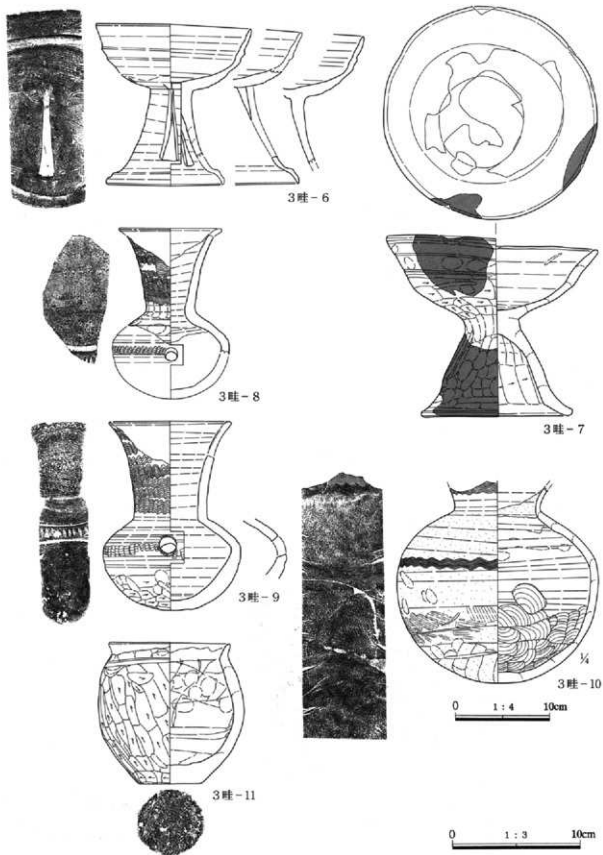


第297図 Ⅲ区FP上60・116・157・165・178・179・206・231・299・404号土坑跡出土土器

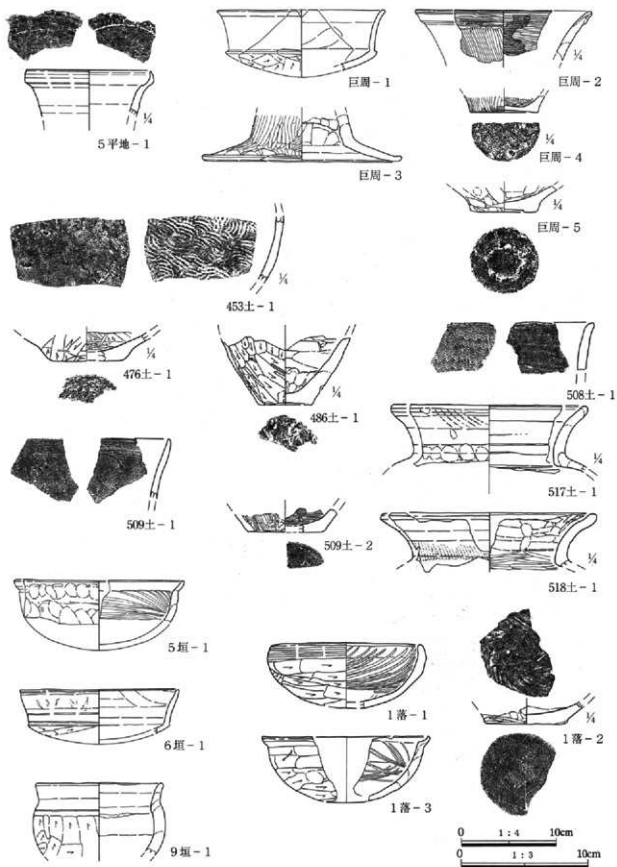


第298图 Ⅲ区FPF 1~3号甕出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

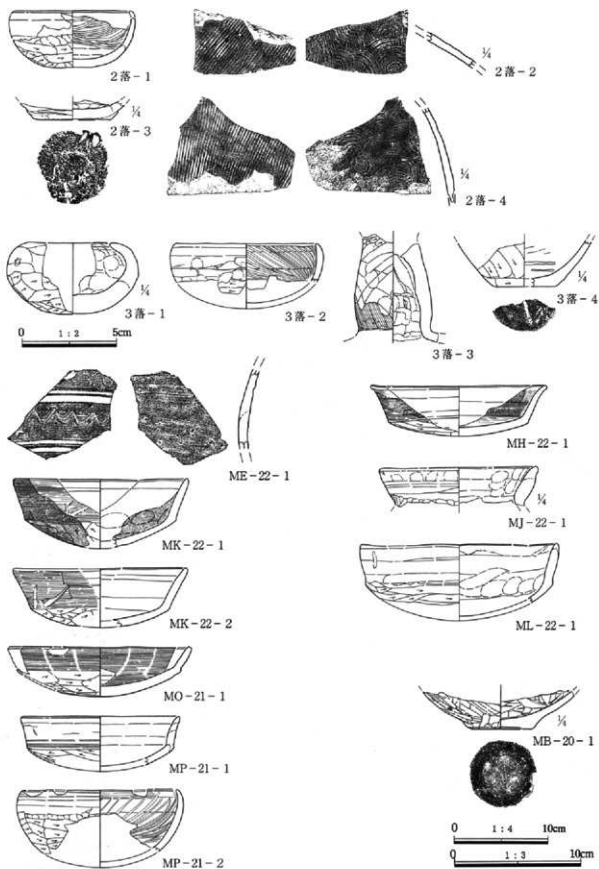


第299図 Ⅲ区FPF 3号哇出土土器

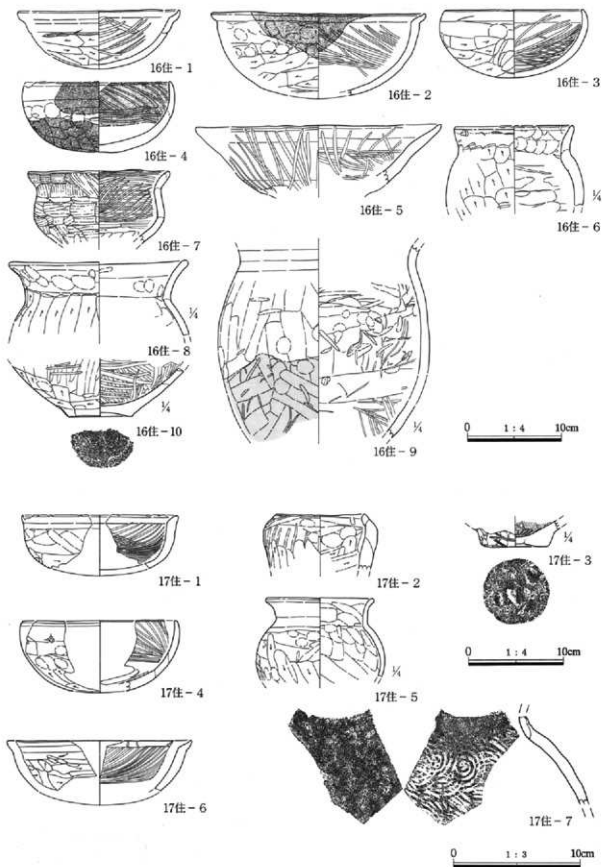


第300図 Ⅲ区FA上5号平地式建物跡、巨大周溝、453・476・486・508・509・517・518号土坑跡、5・6・9号垣、1号落ち込み出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

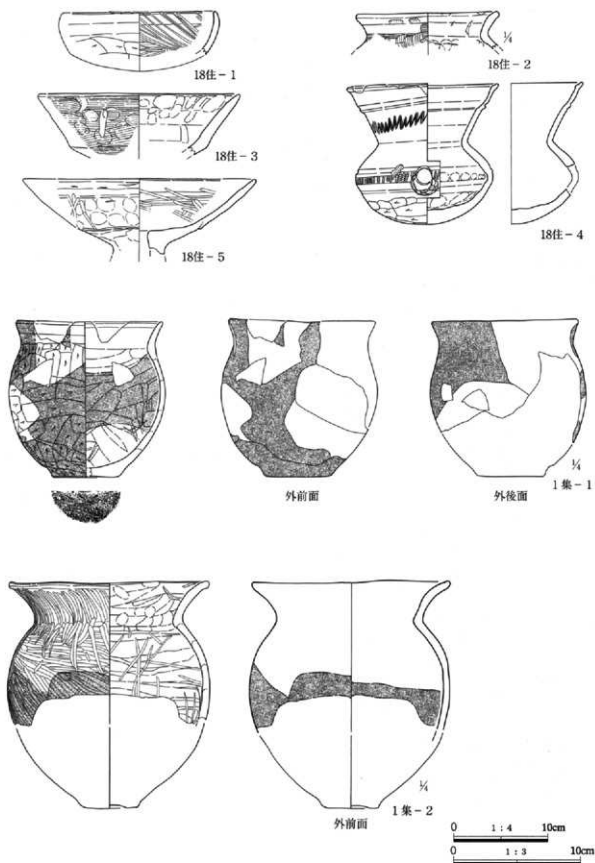


第301図 Ⅲ区FA上2・3号落ち込み、グリッド出土土器

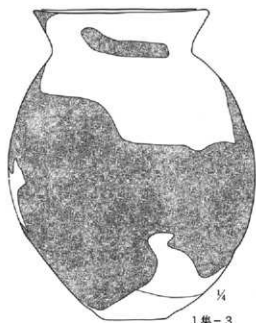
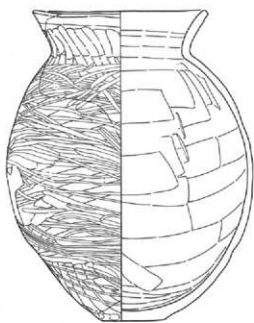


第302图 III区FAF16·17号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

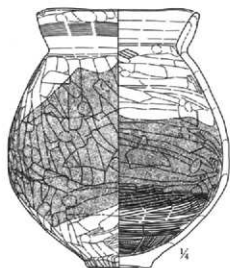


第303図 Ⅲ区FA下18号住居跡、1号遺物集中出土土器



外前面

1集-3



2集-1



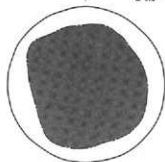
3集-1



3集-2



3集-3

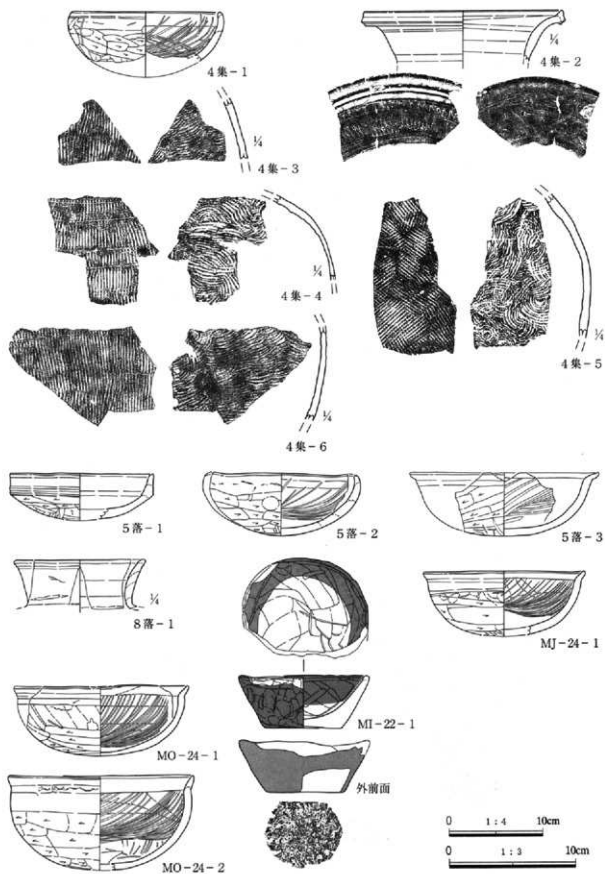


0 1:4 10cm

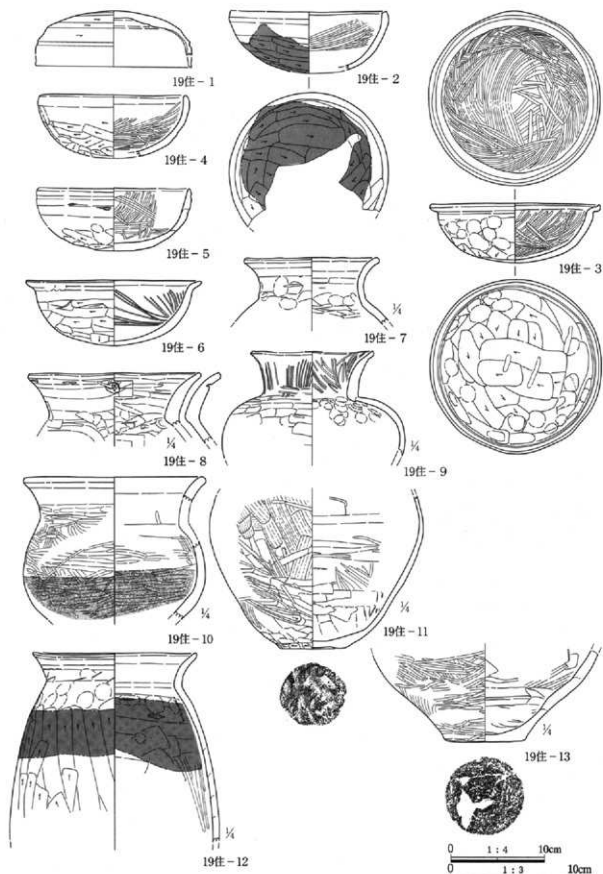
0 1:3 10cm

第304图 Ⅲ区FA下1~3号遺物集中出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

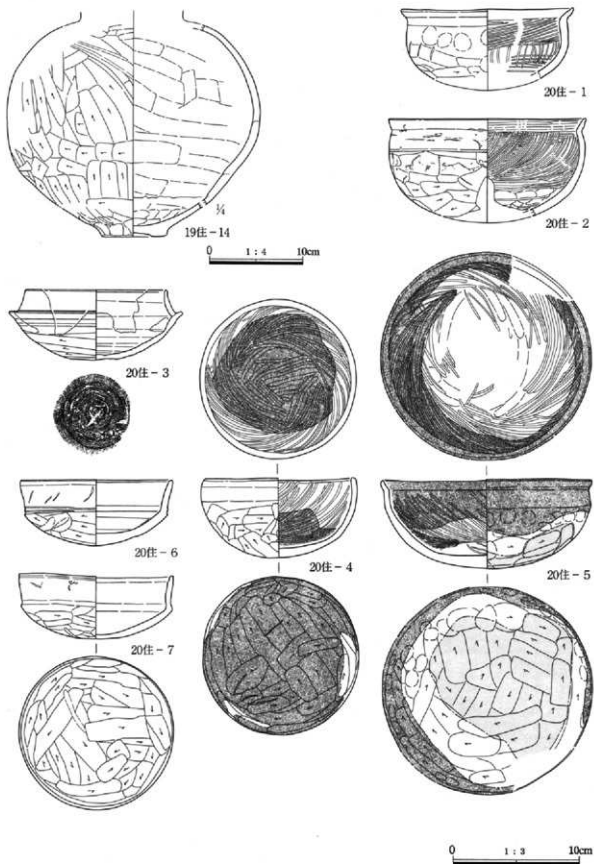


第305図 Ⅲ区FA下4号遺物集中、5・8号落ち込み、グリッド出土土器

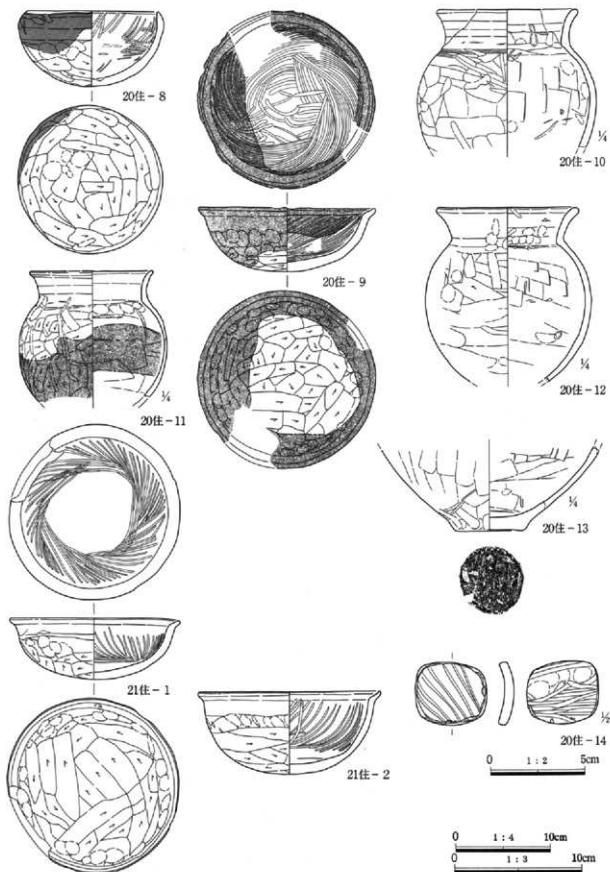


第306図 III区FA下黒19号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

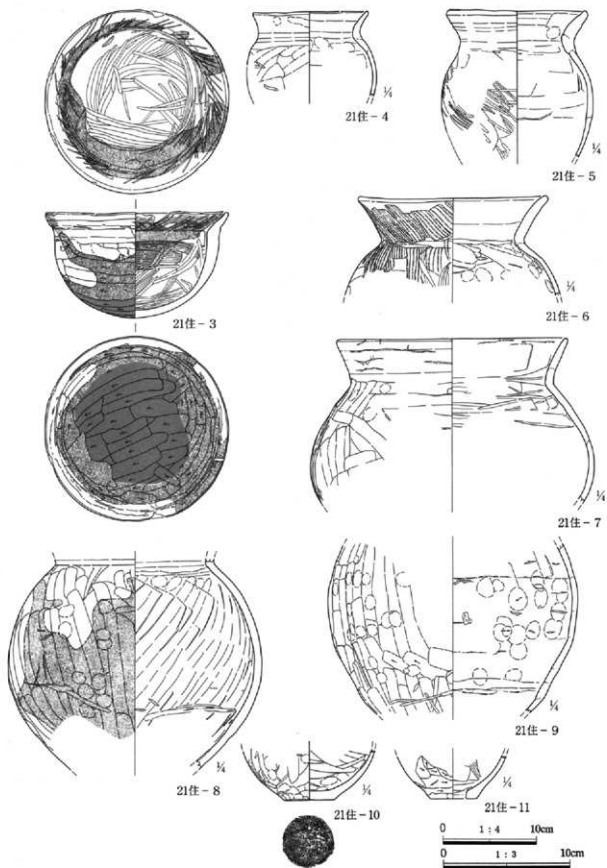


第307图 Ⅲ区FA下黑19・20号住居跡出土土器

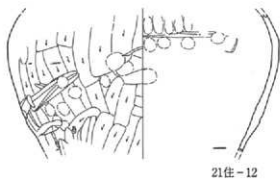


第308图 Ⅲ区FA下黑20·21号住居跡出土土器

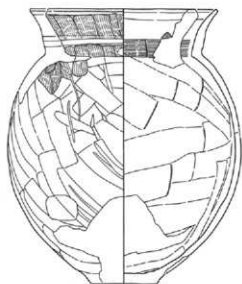
Ⅲ 検出された遺構と遺物



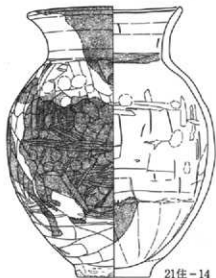
第309図 Ⅲ区FA下黒21号住居跡出土土器



21住-12



21住-13



21住-14



21住-15



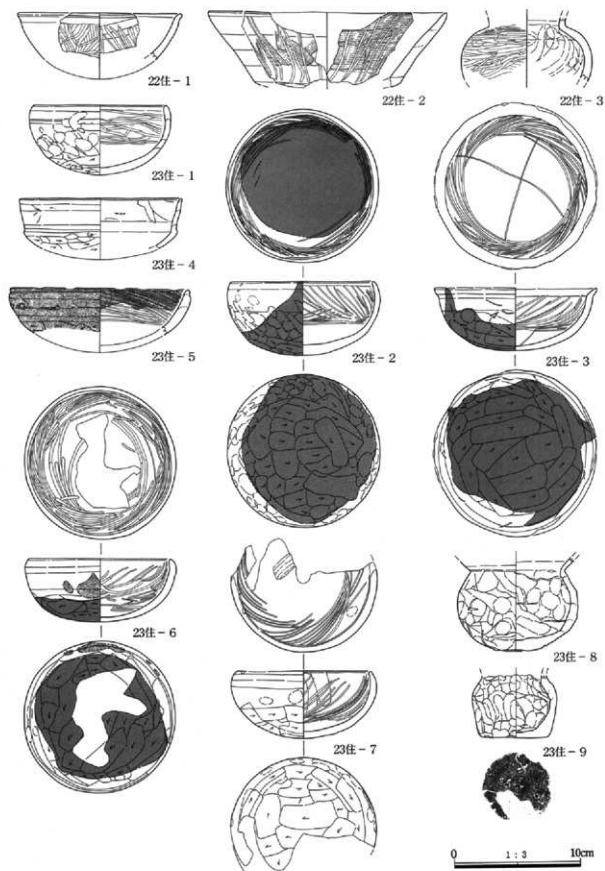
外表面



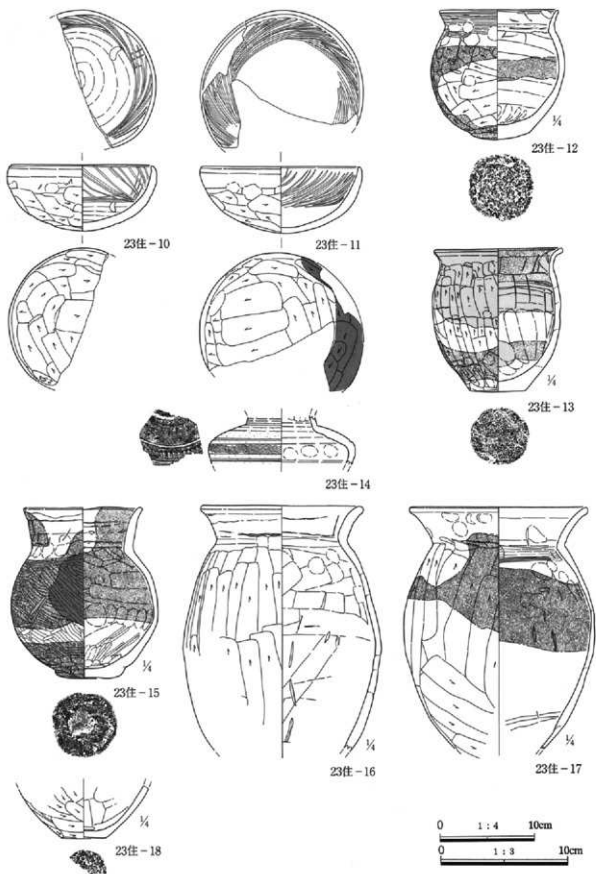
0 1:4 10cm

第310図 III区FA下黒21号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

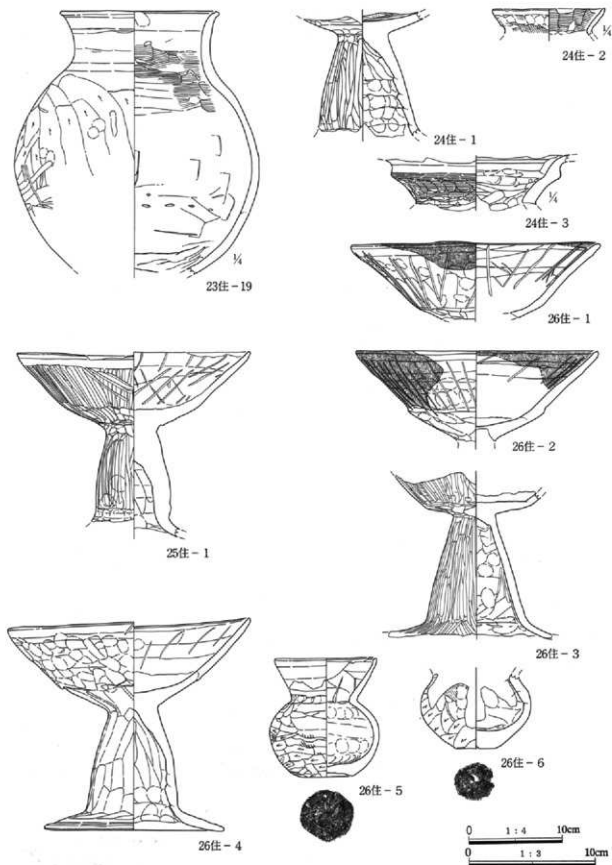


第311图 Ⅲ区FA下黑22・23号住居跡出土土器

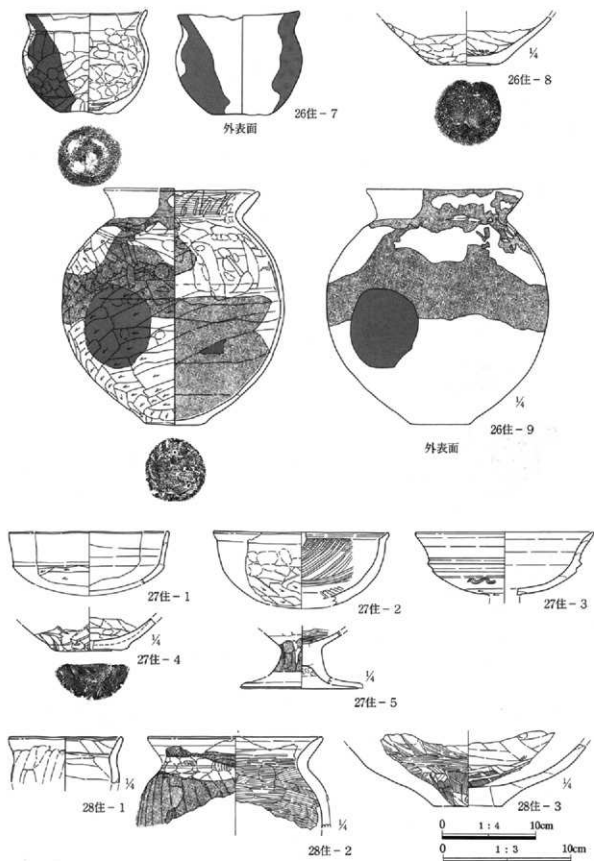


第312图 III区FA下黑23号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

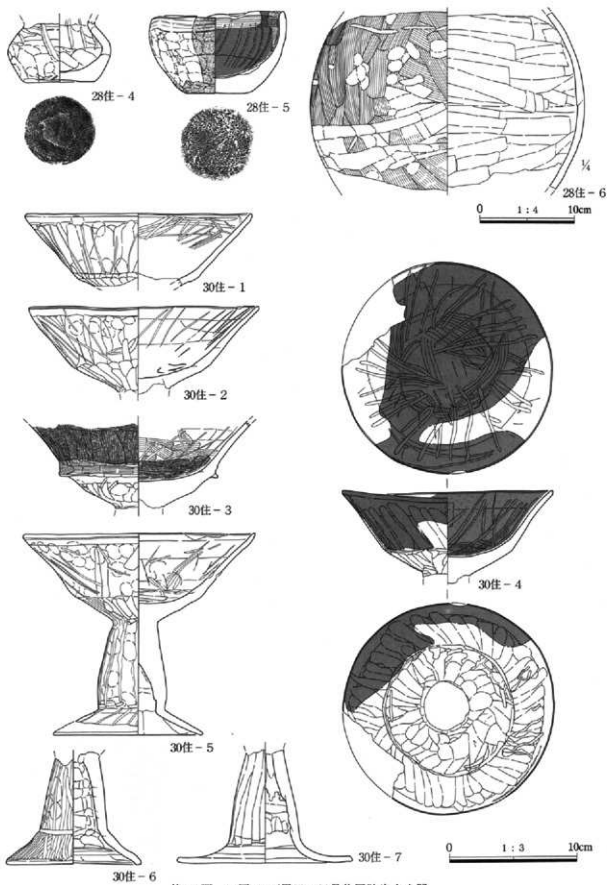


第313図 Ⅲ区FA下黒23~26号住居跡出土土器

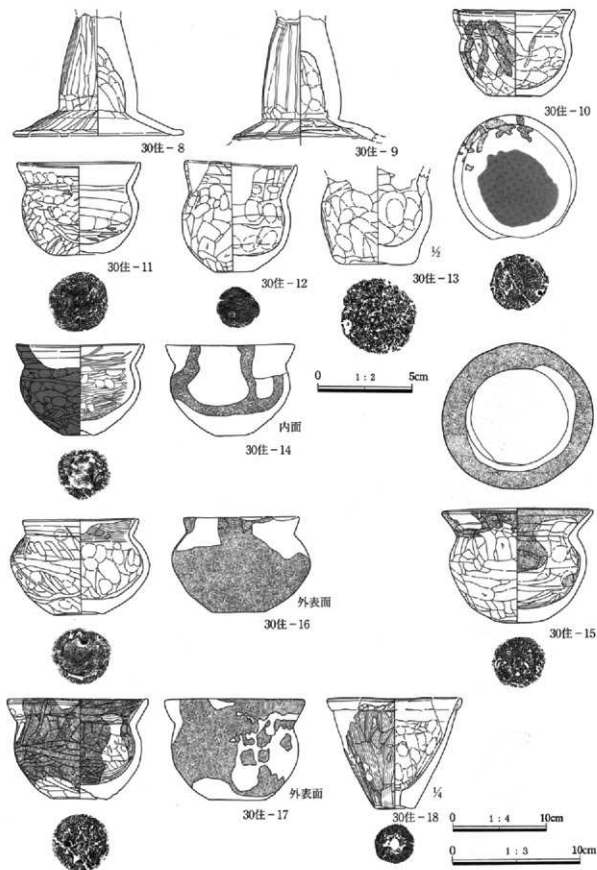


第314图 Ⅲ区FA下黑26~28号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

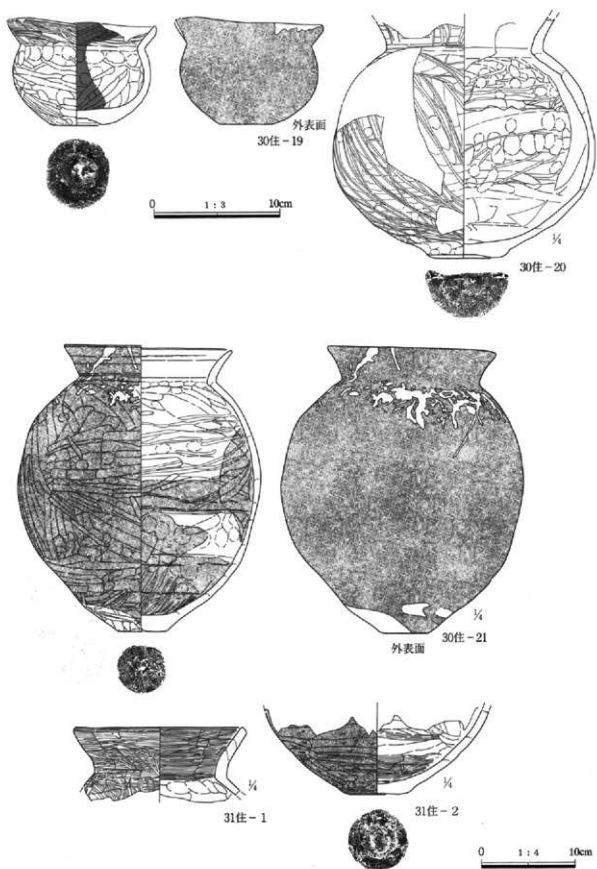


第315図 Ⅲ区FA下黒28・30号住居跡出土土器

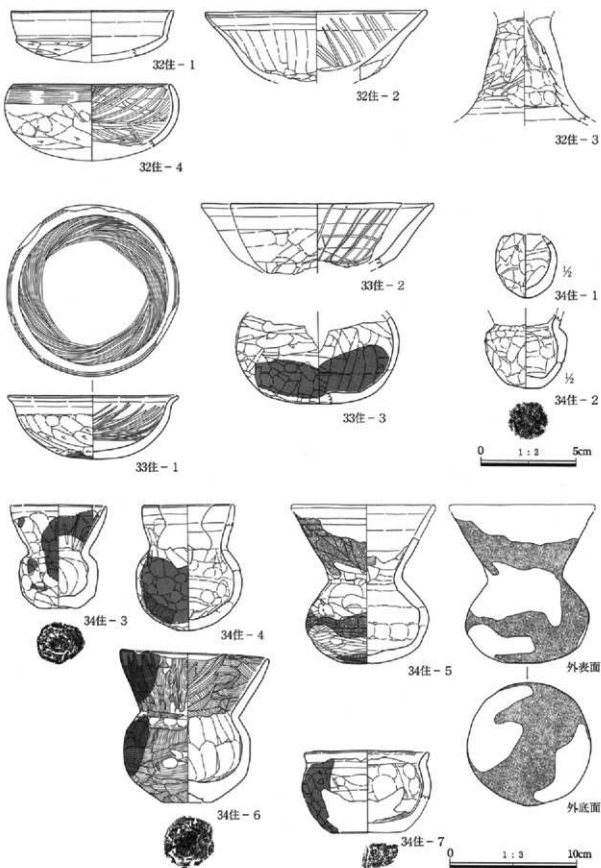


第316图 Ⅲ区FA下黑30号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

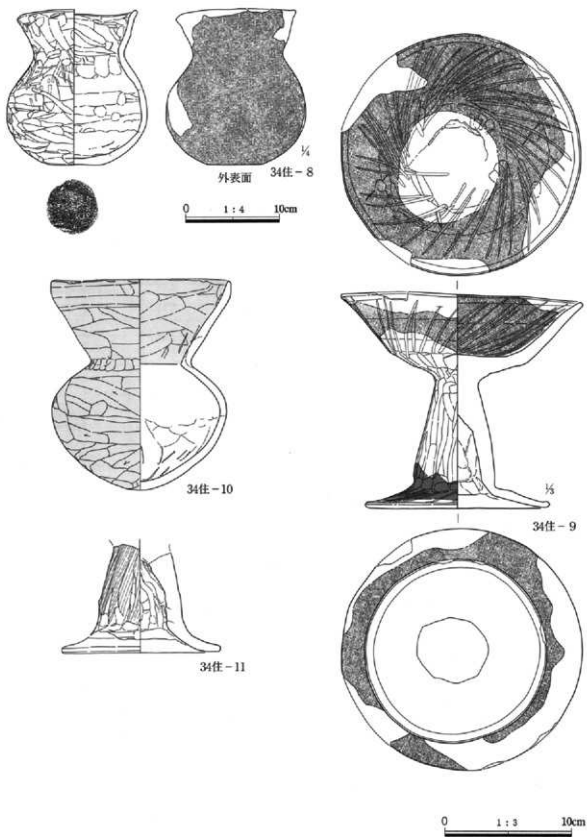


第317図 Ⅲ区FA下黒30・31号住居跡出土土器

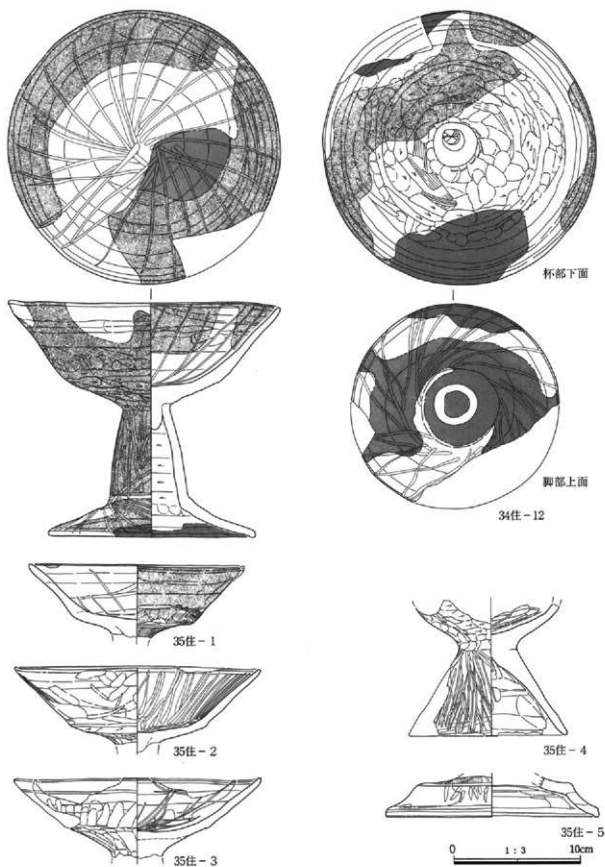


第318图 Ⅲ区FA下黑32~34号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

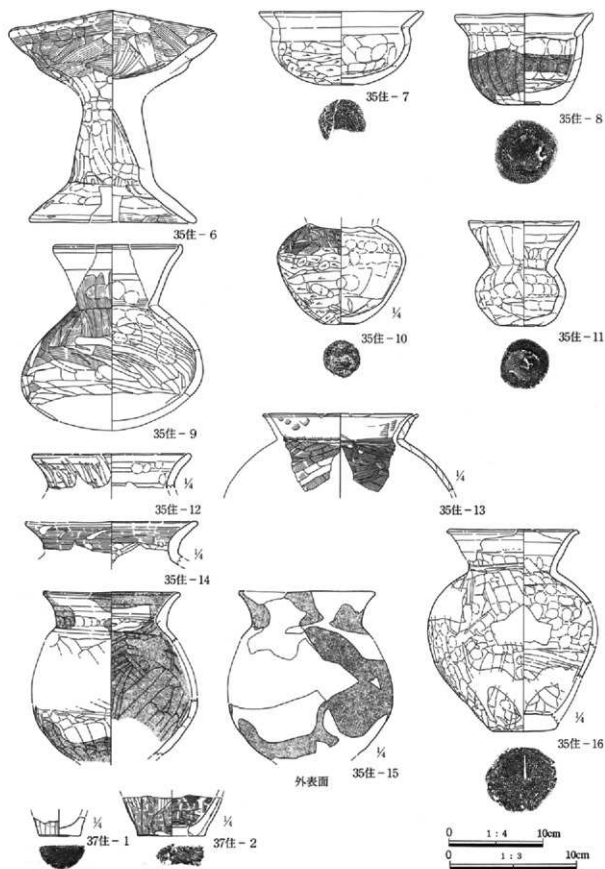


第319図 Ⅲ区FA下黒34号住居跡出土土器

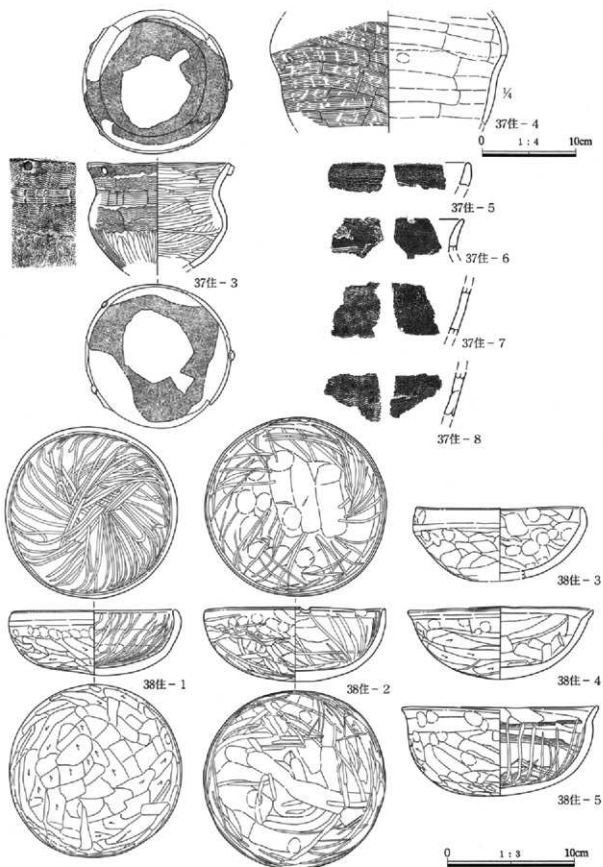


第320图 Ⅲ区FA下黑34・35号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

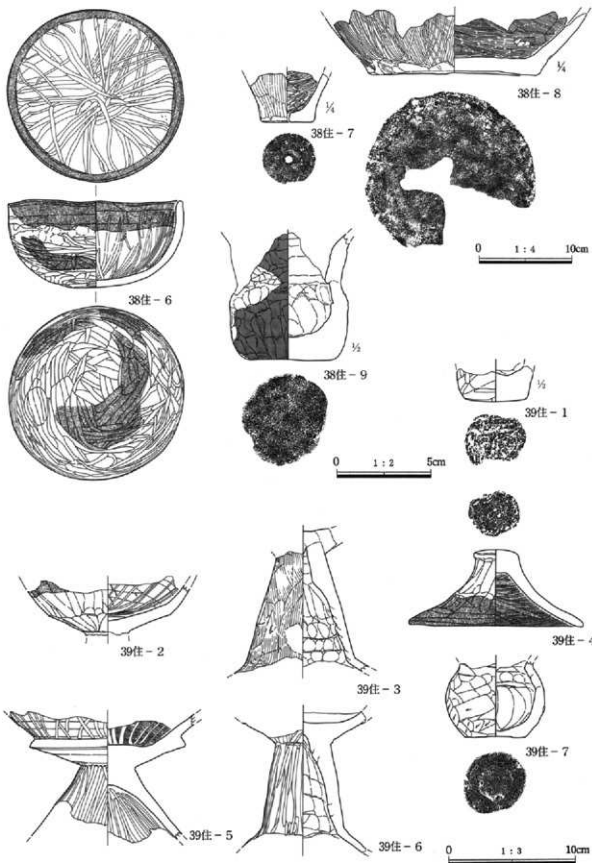


第321図 Ⅲ区FA下黒35・37号住居跡出土土器

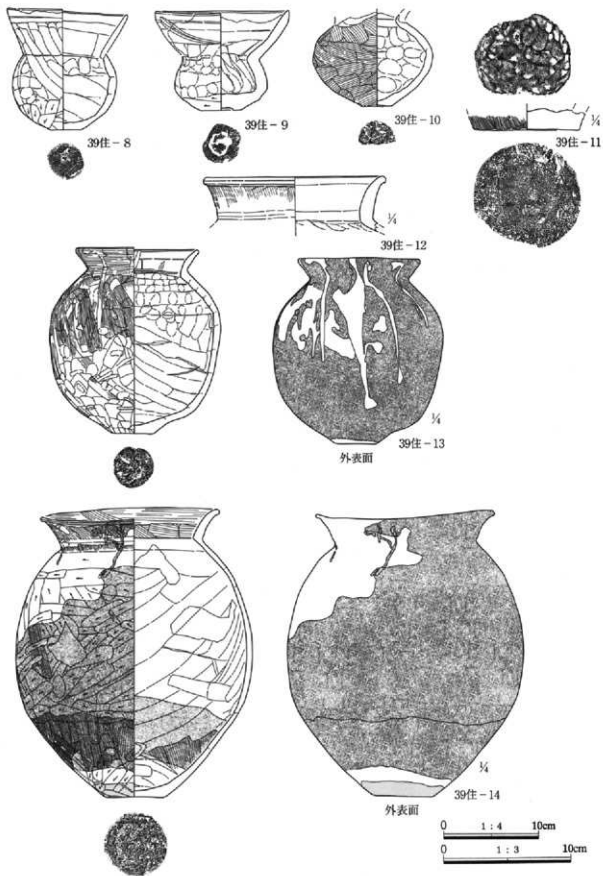


第322図 Ⅲ区FA下黒37・38号住居跡出土土器

III 検出された遺構と遺物

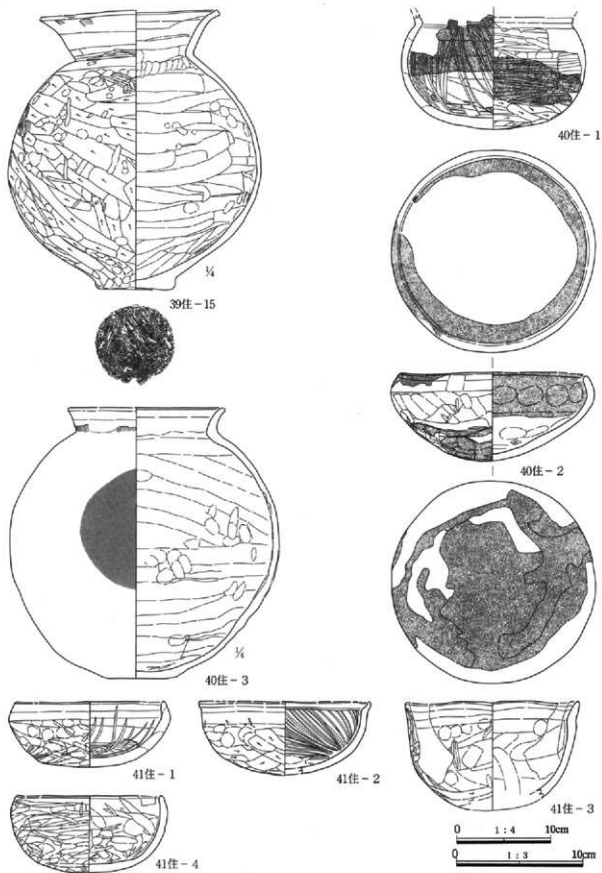


第323図 III区FA下黒38・39号住居跡出土土器

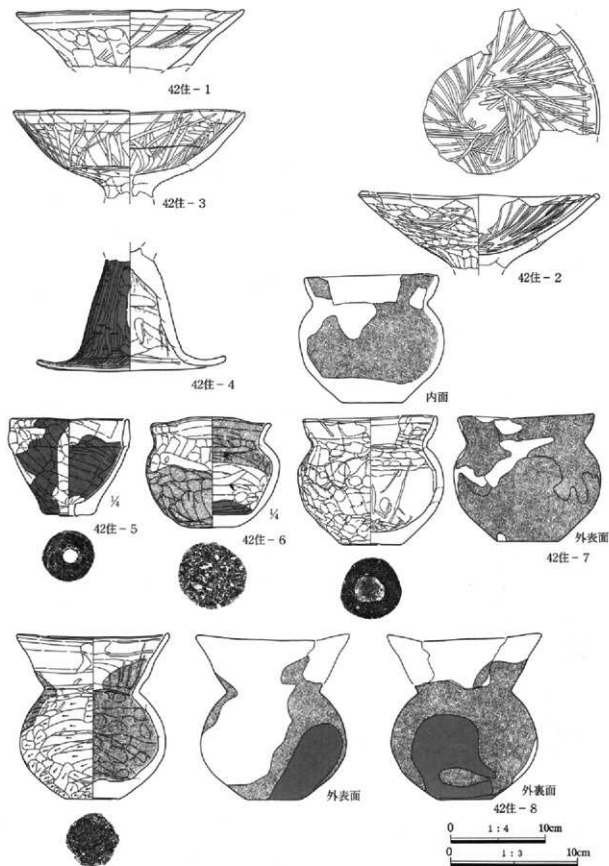


第324图 III区FA下黑39号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

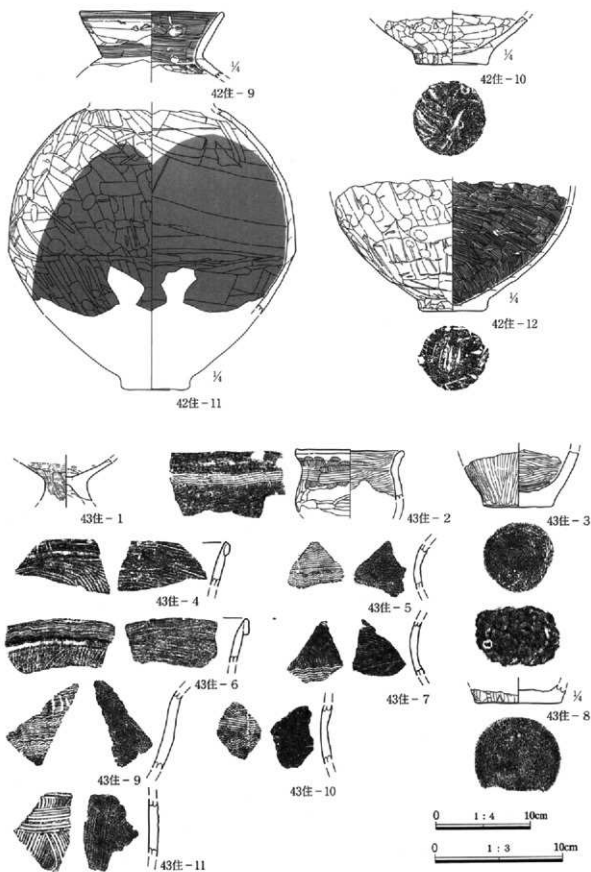


第325図 Ⅲ区FA下黒39~41号住居跡出土土器

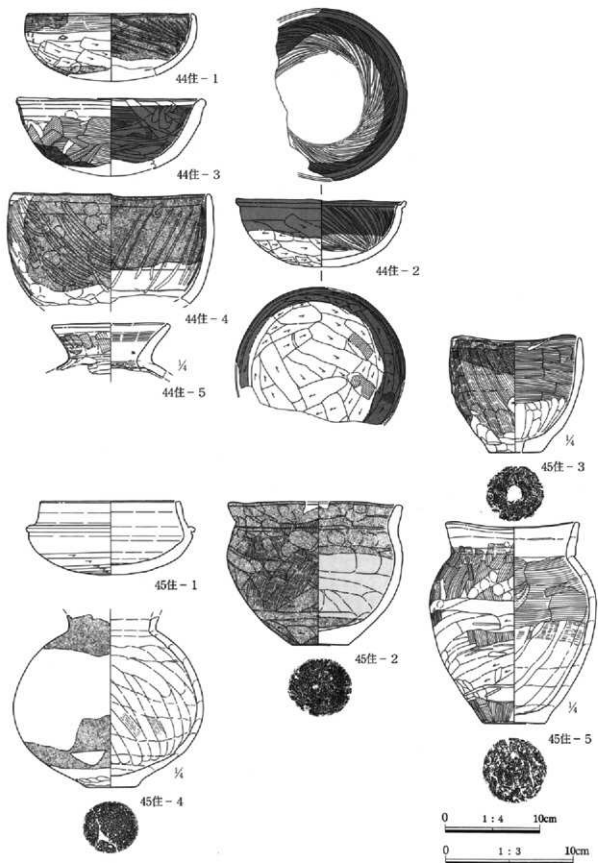


第326图 III区FA下黑42号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

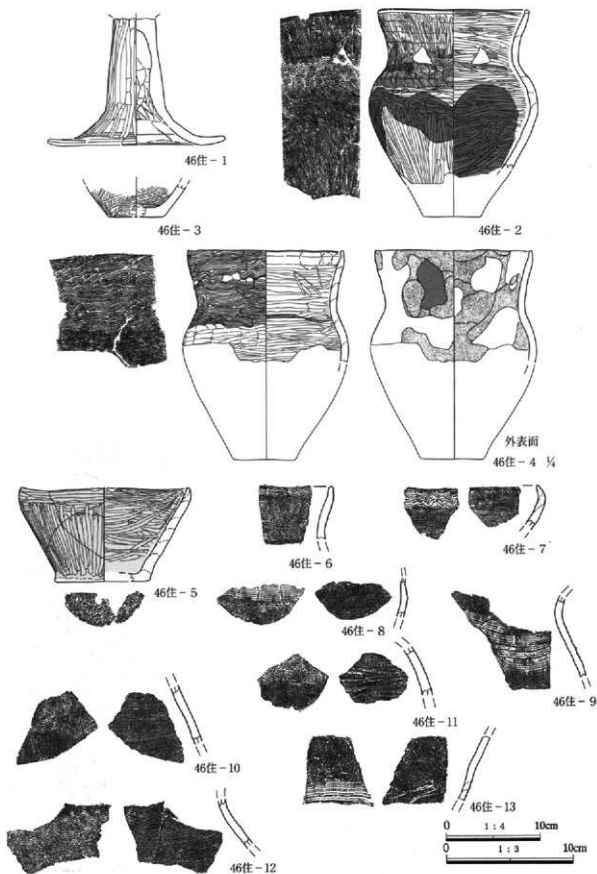


第327図 Ⅲ区FA下黒42・43号住居跡出土土器

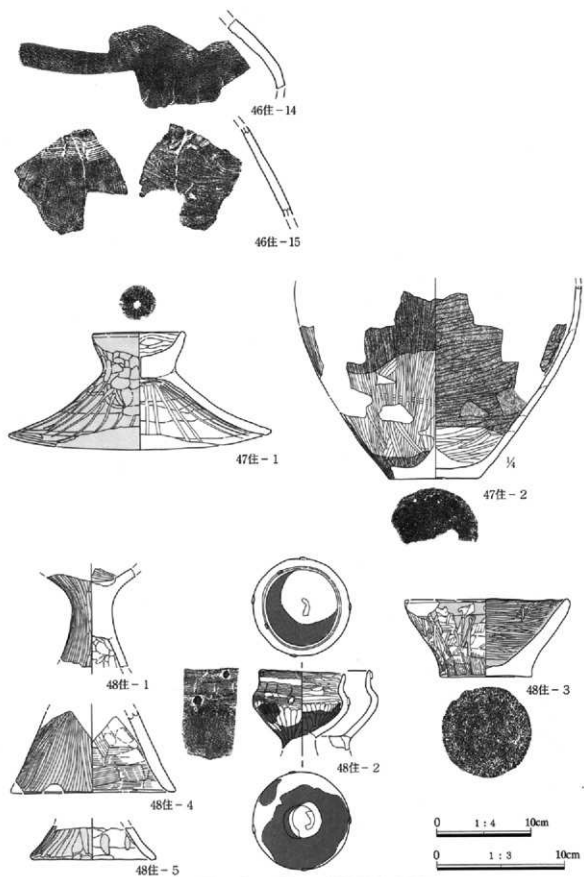


第328图 Ⅲ区FA下黑44·45号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

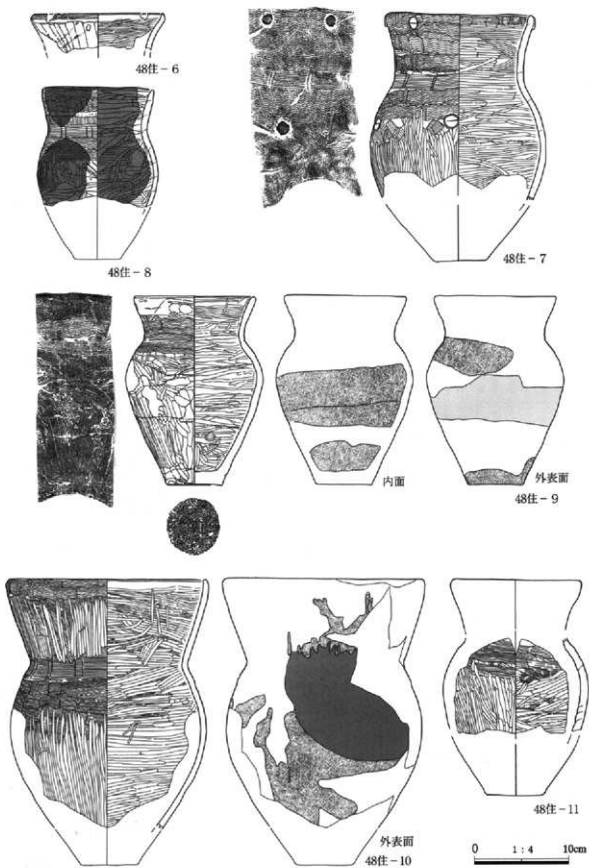


第329図 Ⅲ区FA下黒46号住居跡出土土器

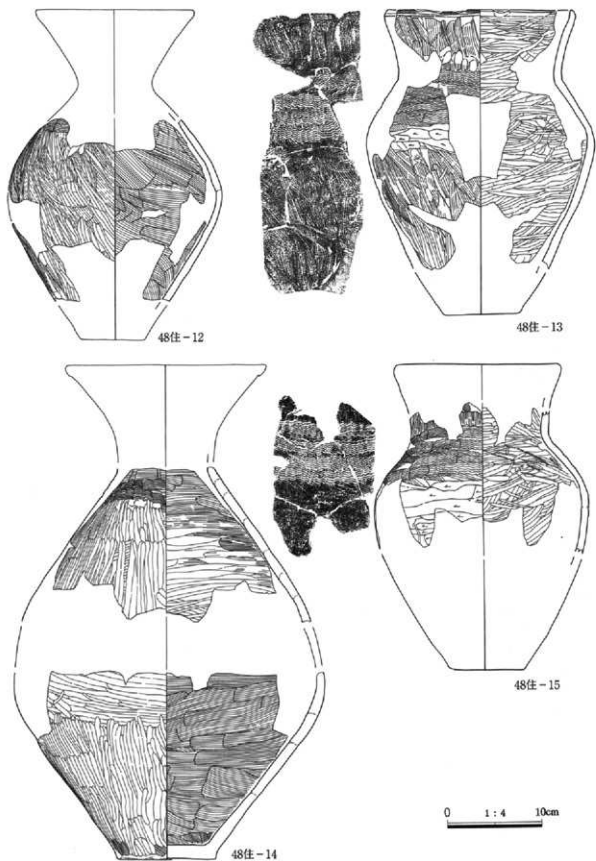


第330图 III区FA下黑46~48号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

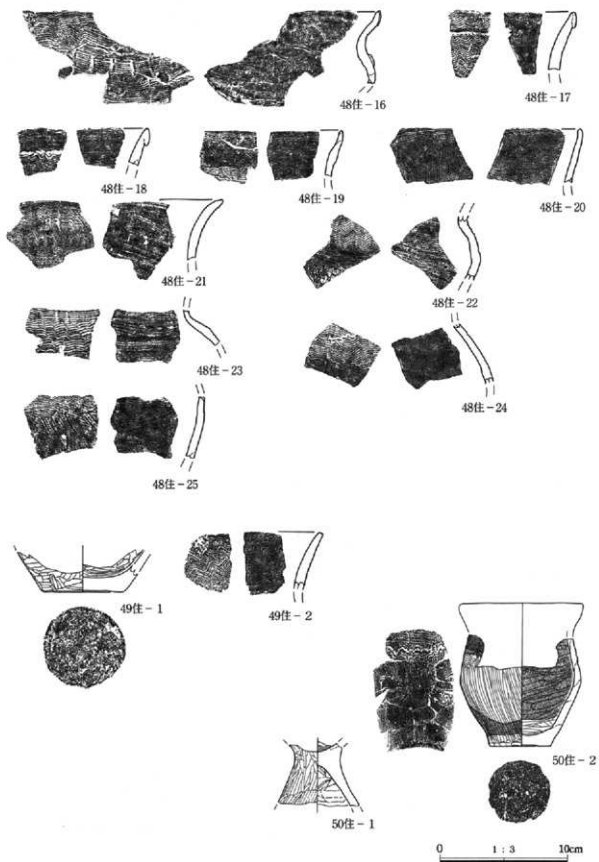


第331図 Ⅲ区FA下黒48号住居跡出土土器

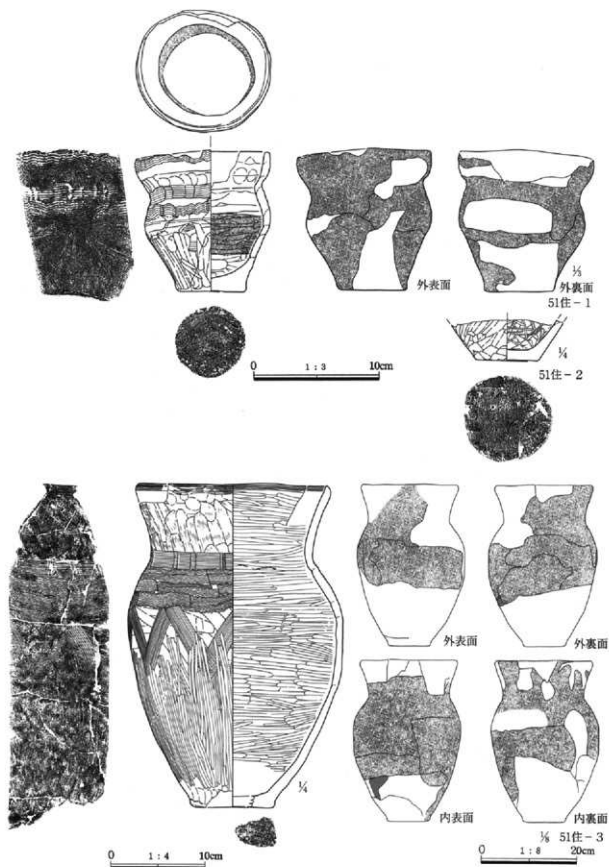


第332图 Ⅲ区FA下黑48号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

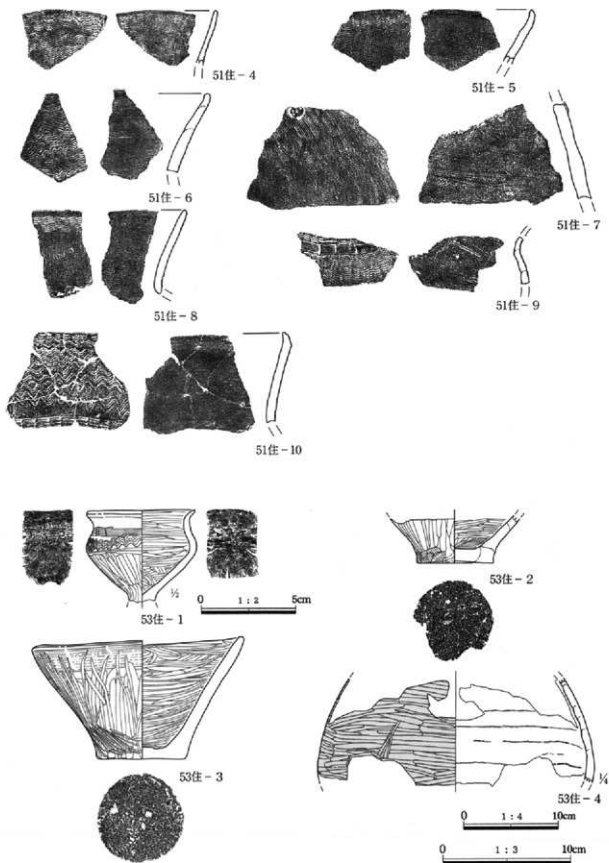


第333図 Ⅲ区FA下黒48~50号住跡出土土器

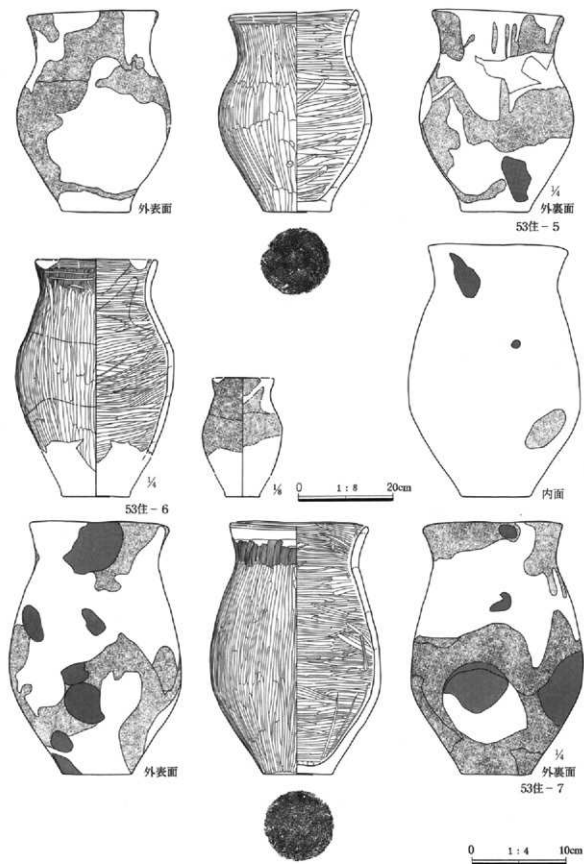


第334图 III区FA下黑51号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

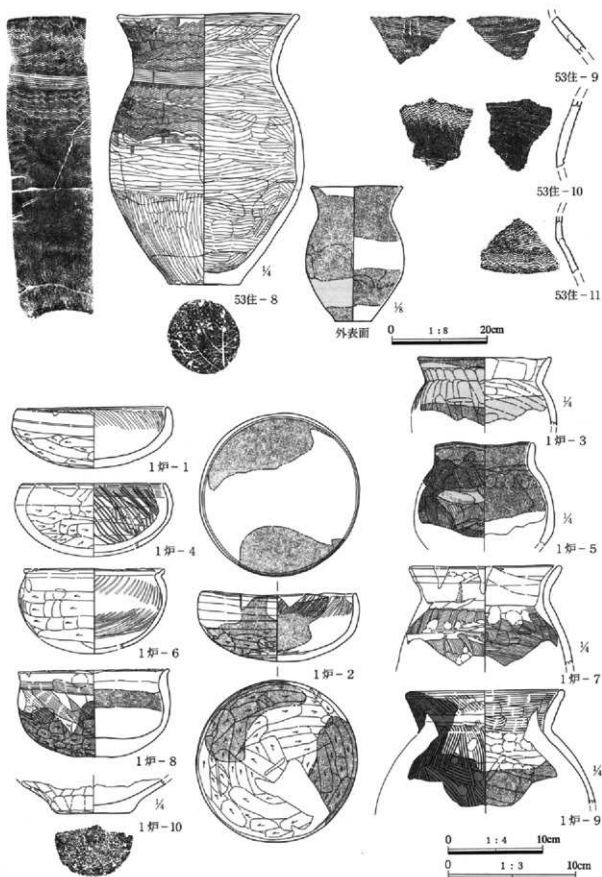


第335図 Ⅲ区FA下黒51・53号住居跡出土土器

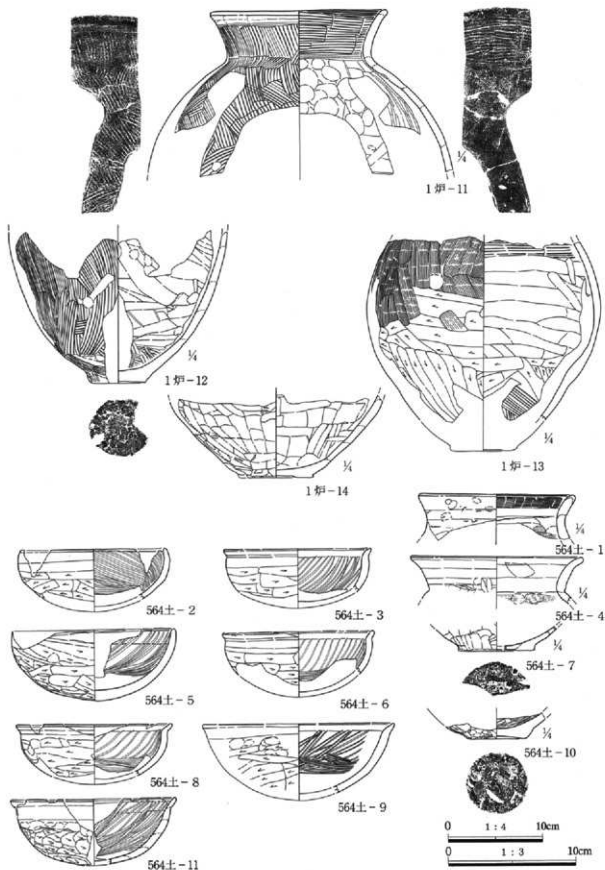


第336图 III区FA下黑53号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

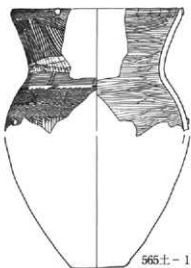


第337图 Ⅲ区FA下黑53号住居跡、1号炉跡出土土器

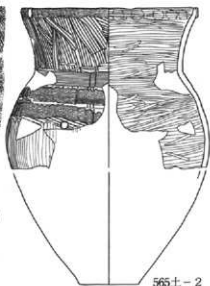


第338图 Ⅲ区FA下黑1号炉迹、564号土坑迹出土土器

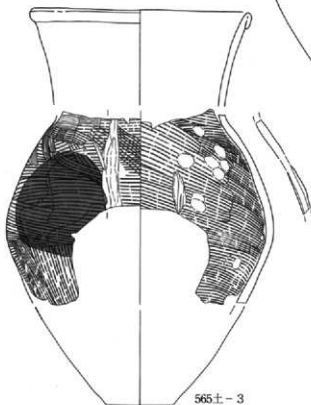
Ⅲ 検出された遺構と遺物



565土-1



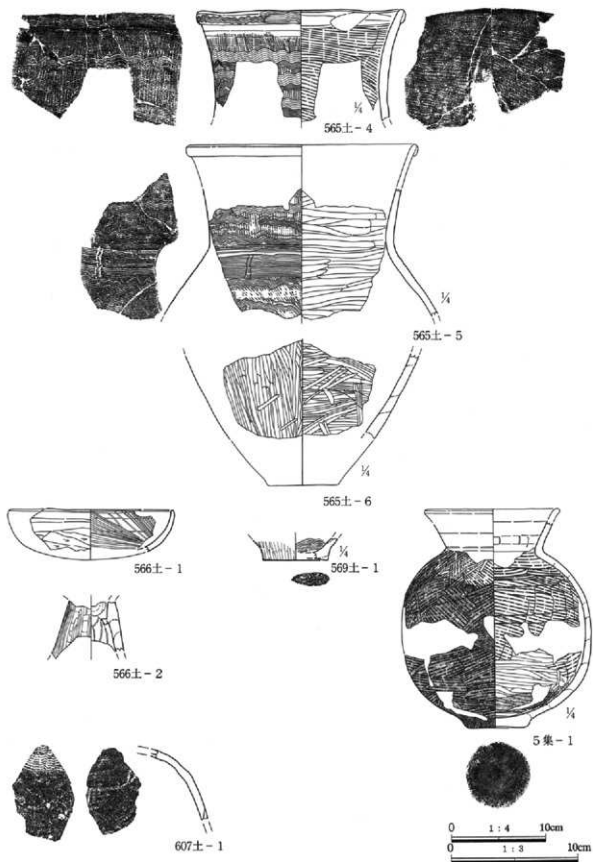
565土-2



565土-3

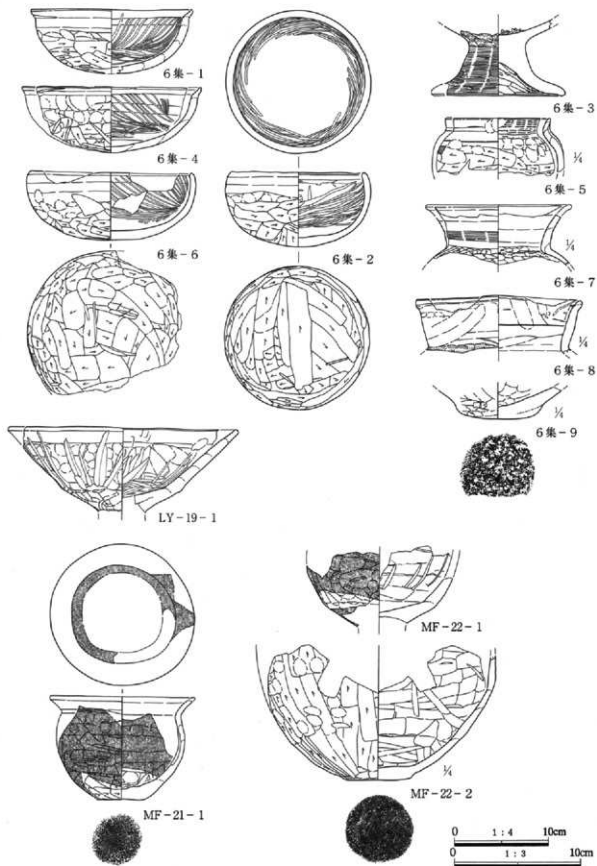
0 1:4 10cm

第339図 Ⅲ区FA下黒565号土坑跡出土土器

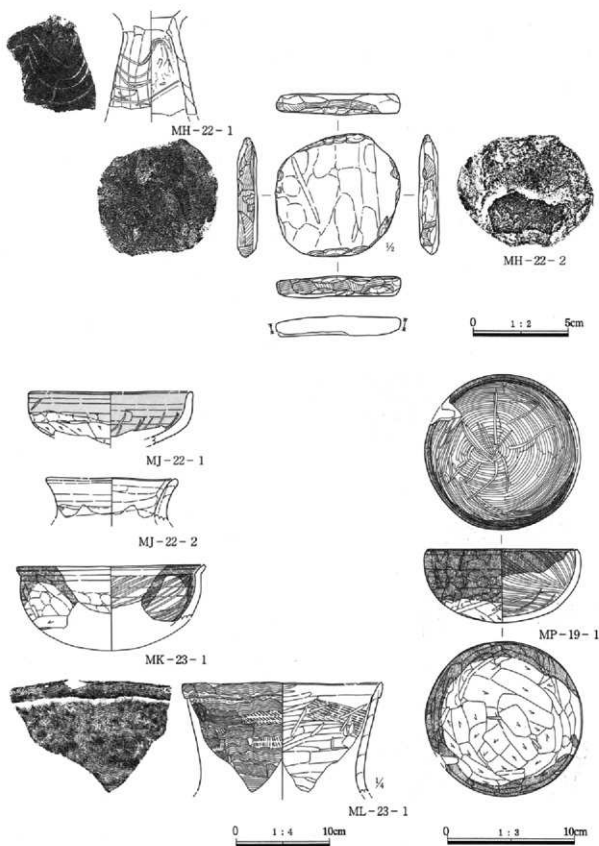


第340图 Ⅲ区FA下黑565·566·569·607号土坑迹、5号遺物集中出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

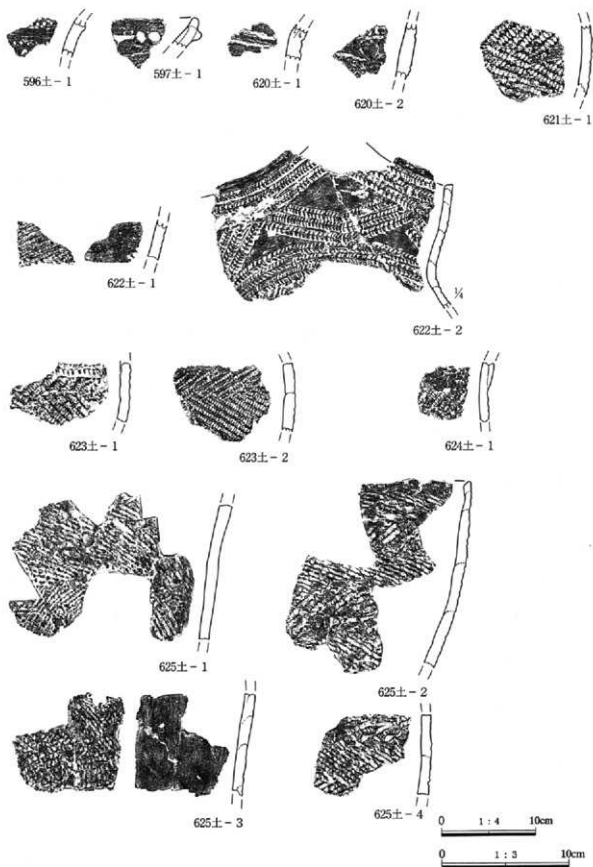


第341図 Ⅲ区FA下黒6号遺物集中、グリッド出土土器

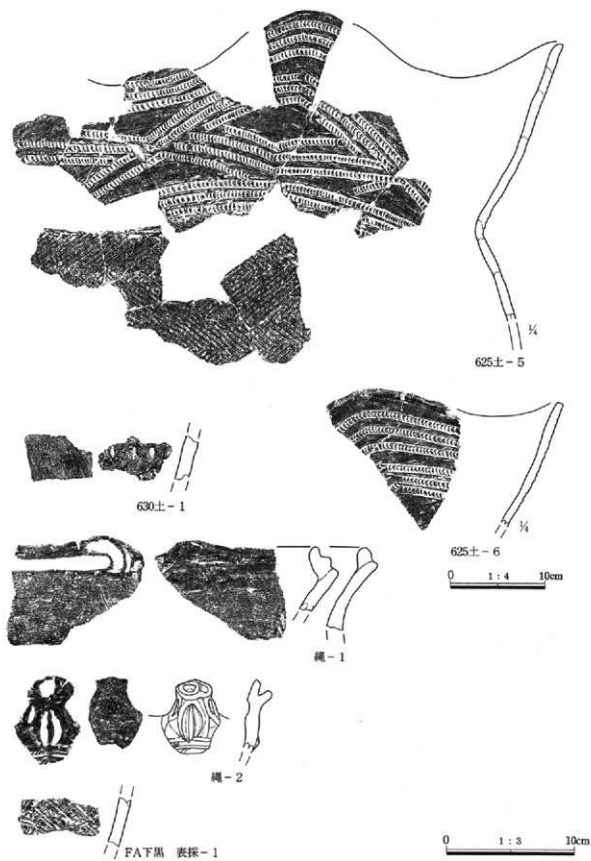


第342図 III区FA下黒グリッド出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

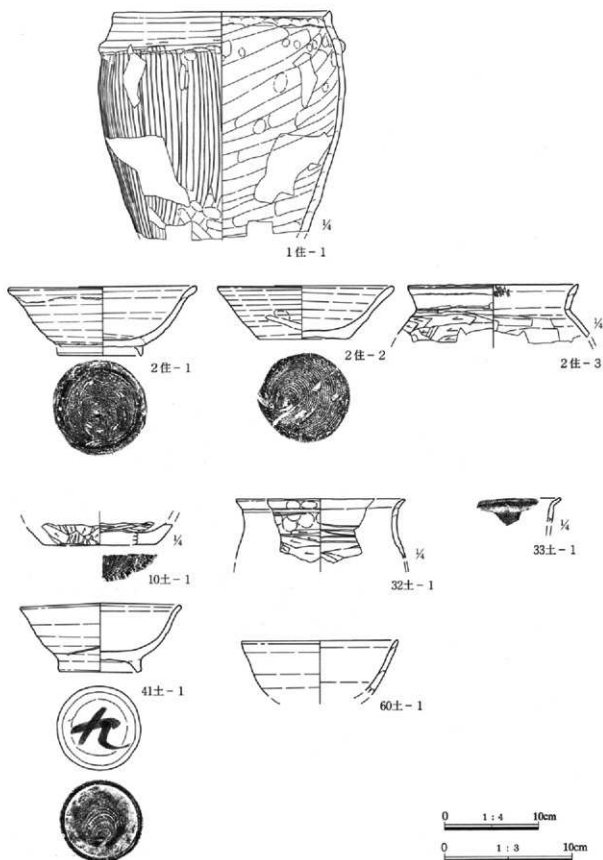


第343図 Ⅲ区FA下黒596・597・620・621・622・623・624・625号土坑跡縄文出土土器

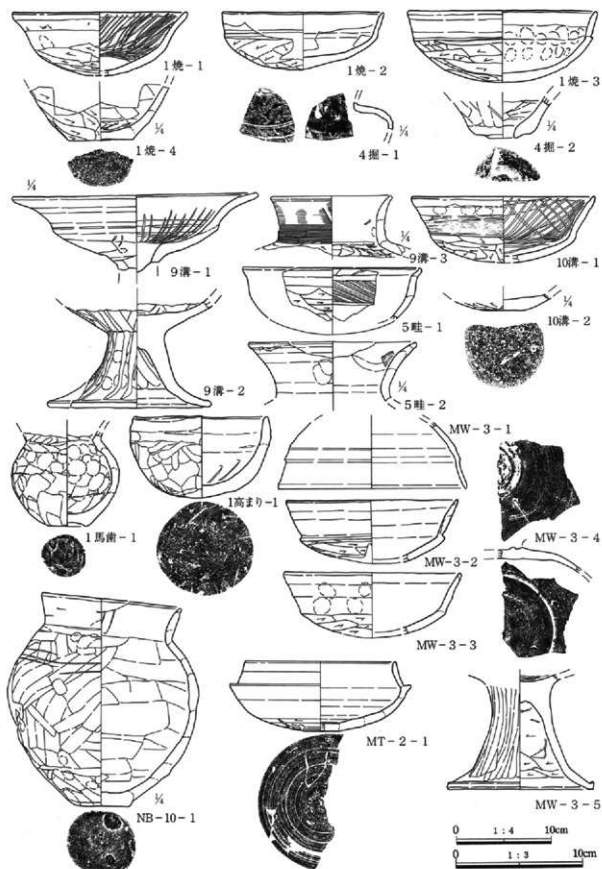


第344図 Ⅲ区FA下黒縄文625・630号土坑跡、グリッド、表採出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

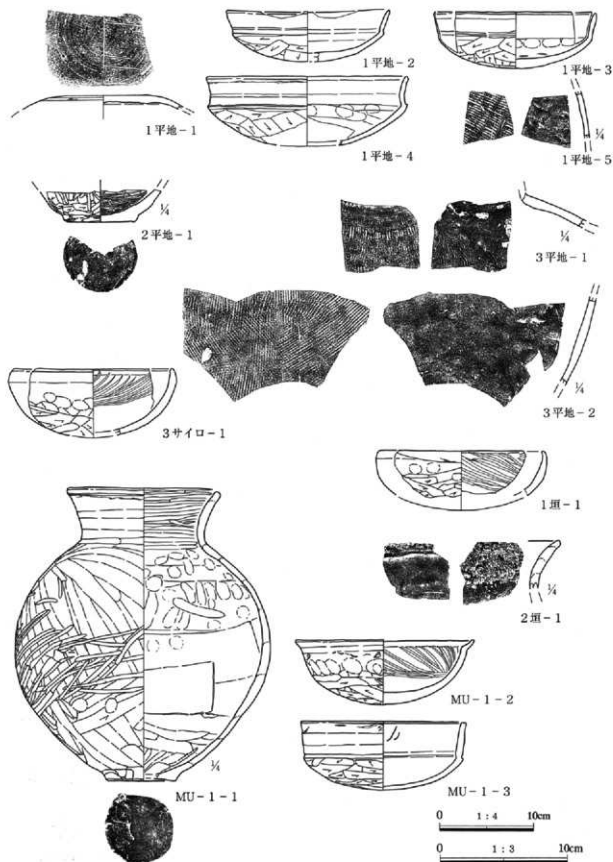


第345図 IV区FP上1・2号住居跡、10・32・33・41・60号土坑跡出土土器

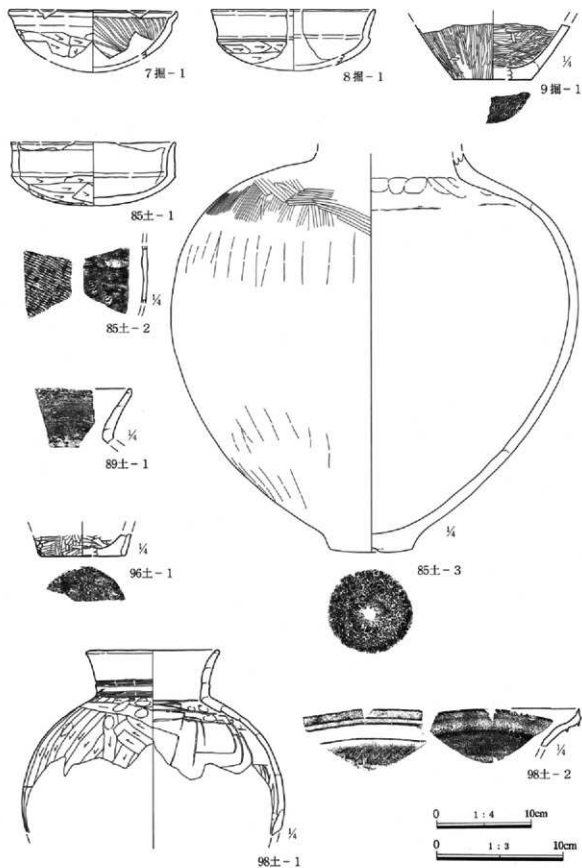


第346図 IV区FPP下1号焼土遺構、4号掘立柱建物跡、9・10号溝、5号畦、1馬歯、1号高まり、グリッド出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

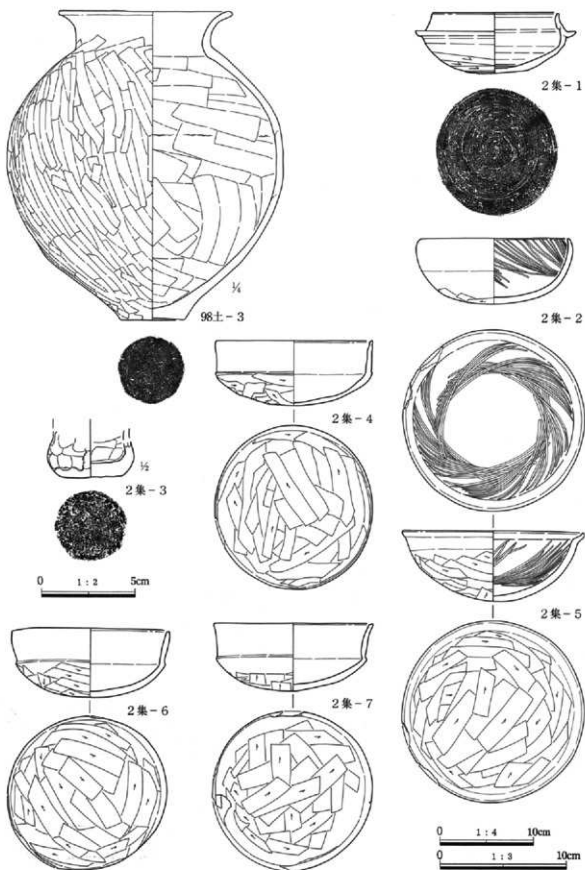


第347図 IV区FA上1～3号平地式建物跡、3号サイロ状遺構、1・2号垣跡、グリッド出土土器

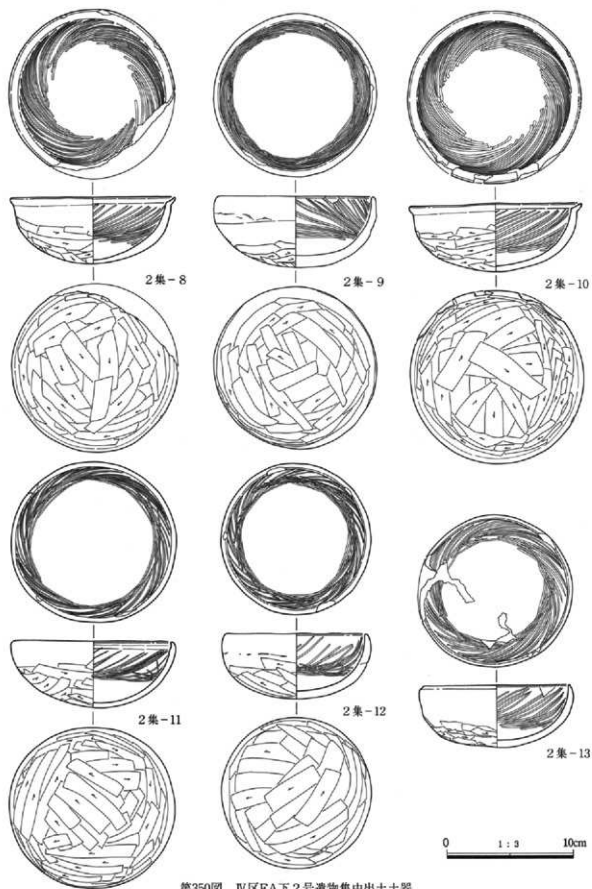


第348图 IV区FAT7~9号掘立柱建物跡、85·89·96·98号土坑跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

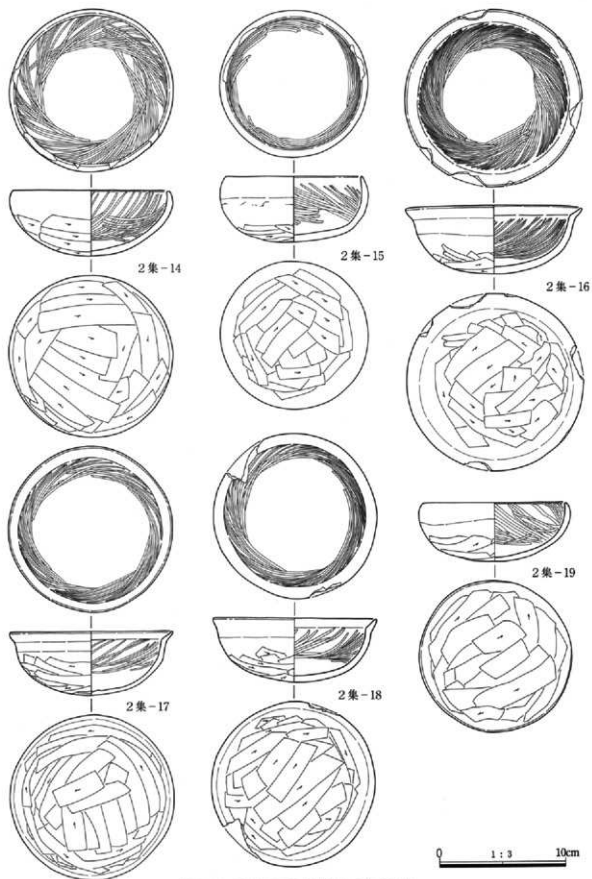


第349図 IV区FA下98号土坑、2号遺物集中出土土器

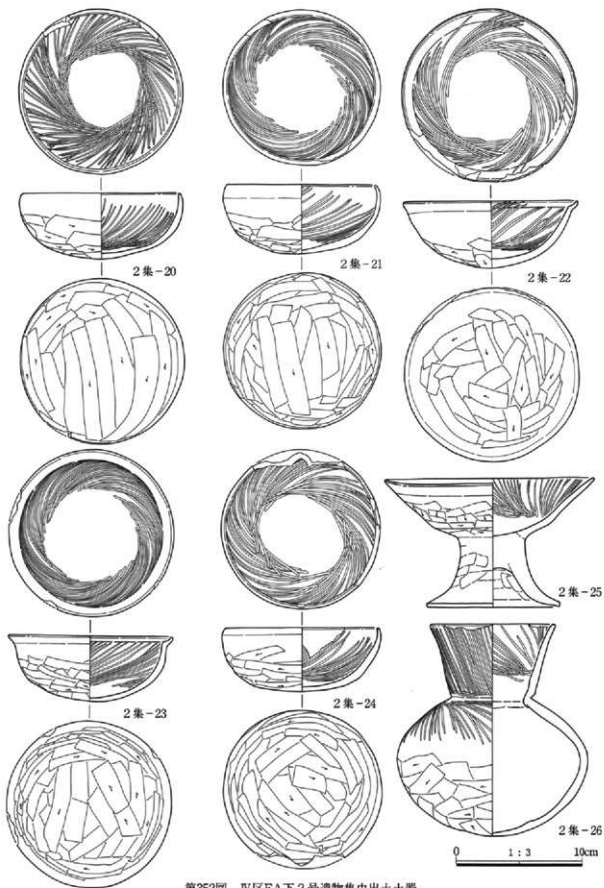


第350图 IV区FA下2号遺物集中出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

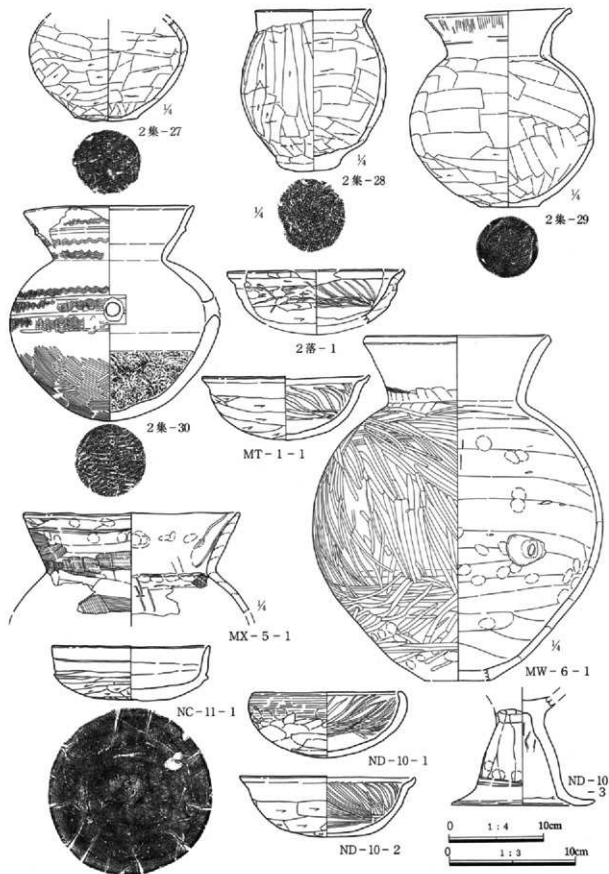


第351図 IV区FA下2号遺物集中出土土器

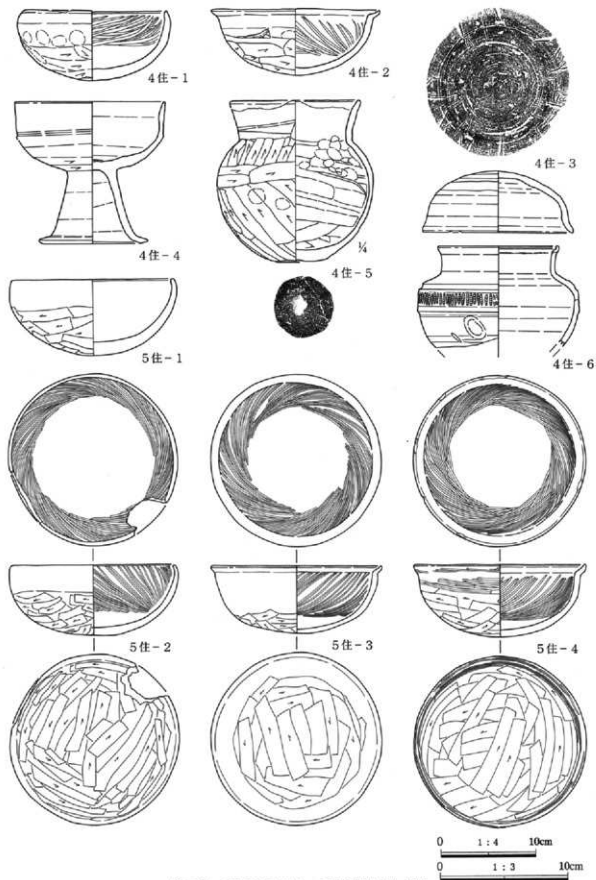


第352図 IV区FAF2号遺物集中出土土器

III 検出された遺構と遺物

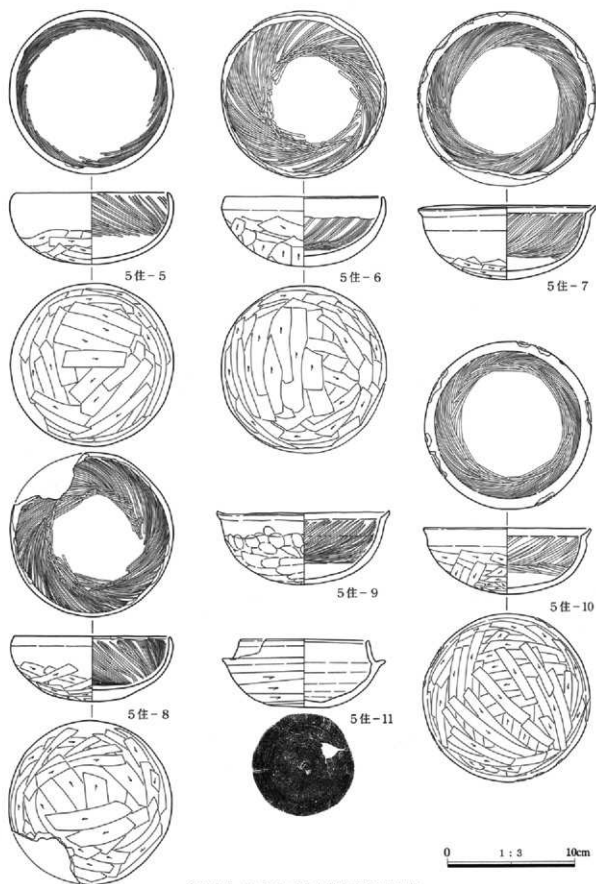


第353図 IV区FA下2号遺物集中、2号落ち込み、グリッド出土土器

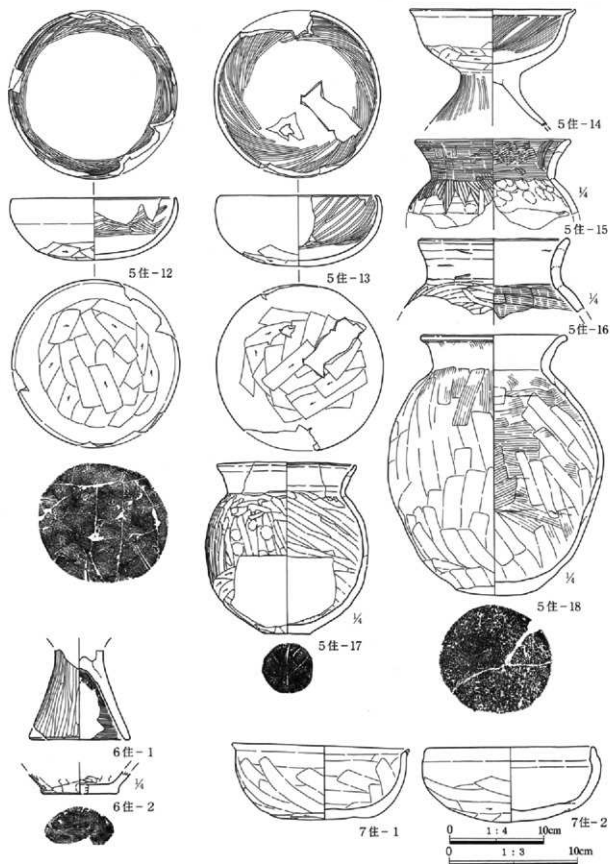


第354图 IV区FAF黑4·5号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

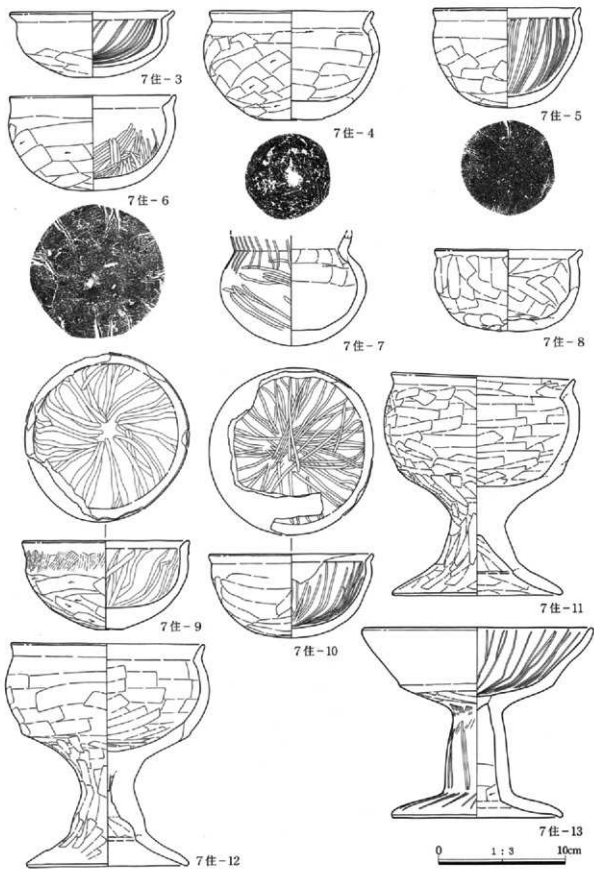


第355図 IV区FA下黒5号住居跡出土土器

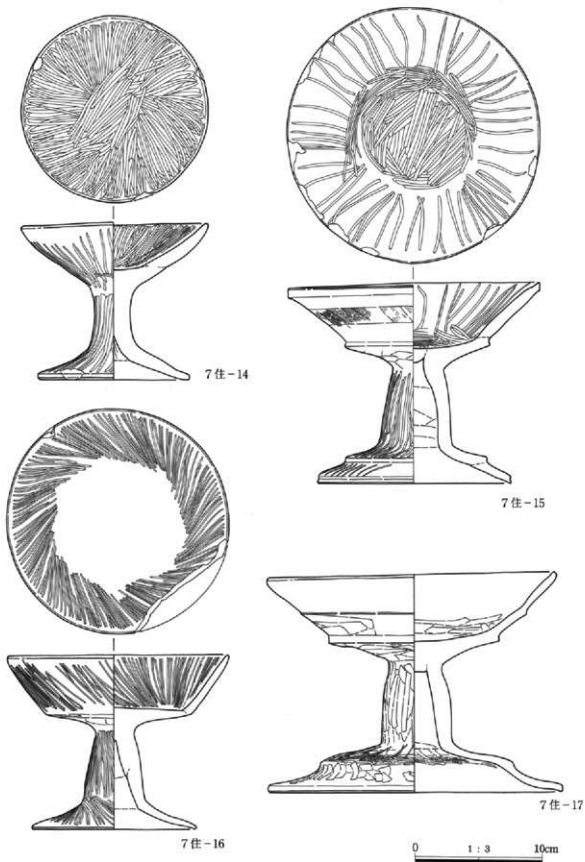


第356图 IV区FA下黑5~7号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

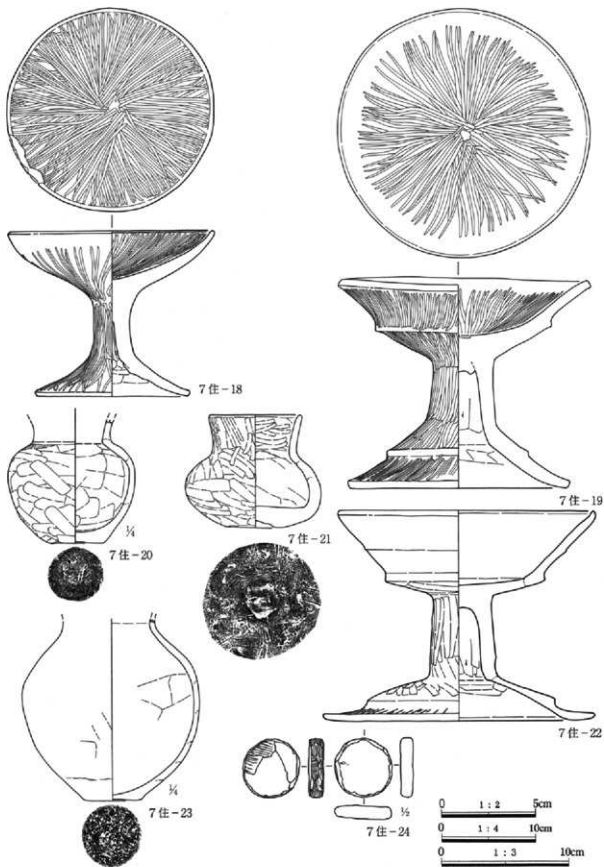


第357図 IV区FA下黒7号住居跡出土土器

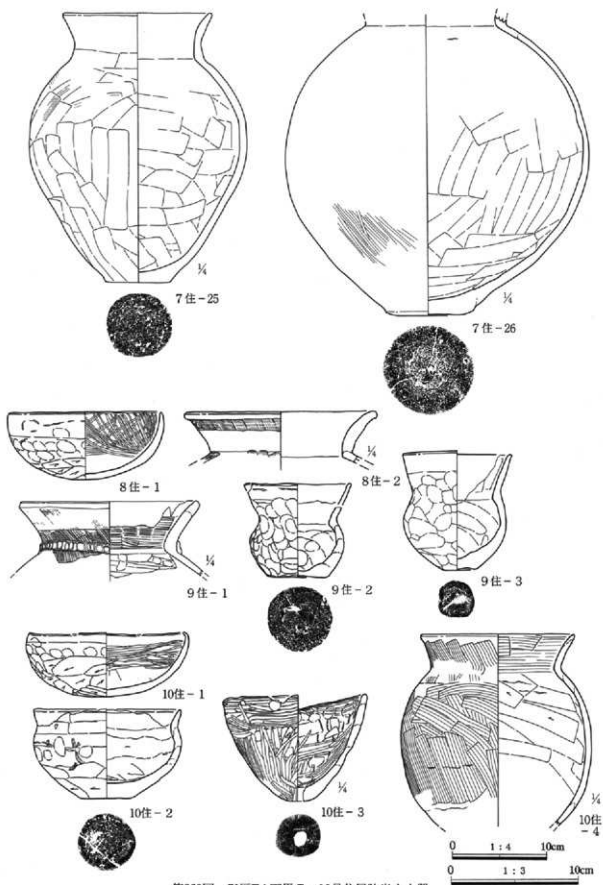


第358图 IV区FA下黑7号住居跡出土土器

III 検出された遺構と遺物

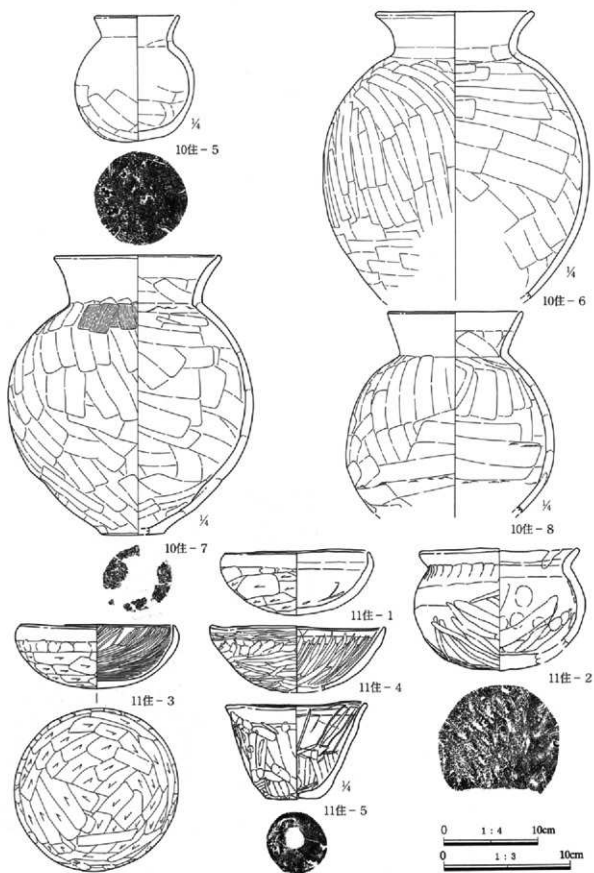


第359図 IV区FA下黒7号住居跡出土土器

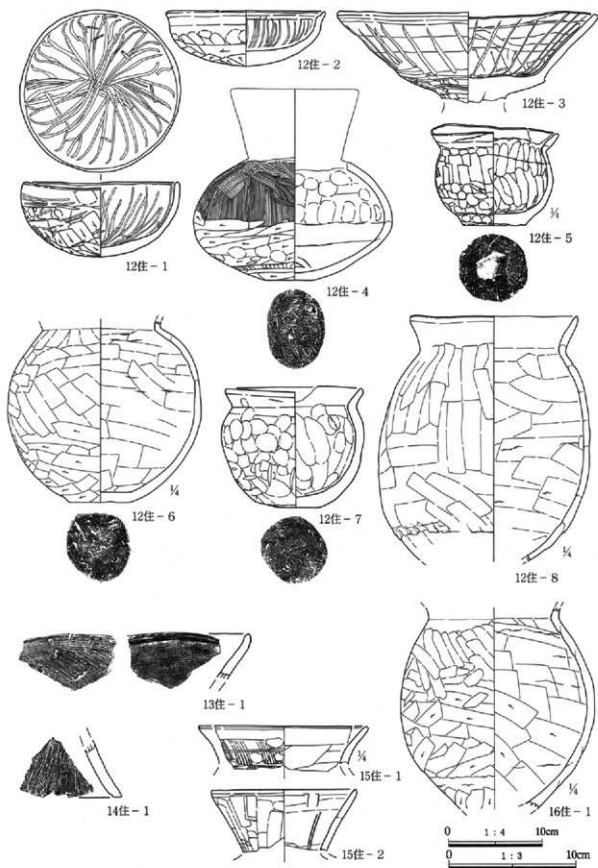


第360图 IV区FA下黑7~10号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

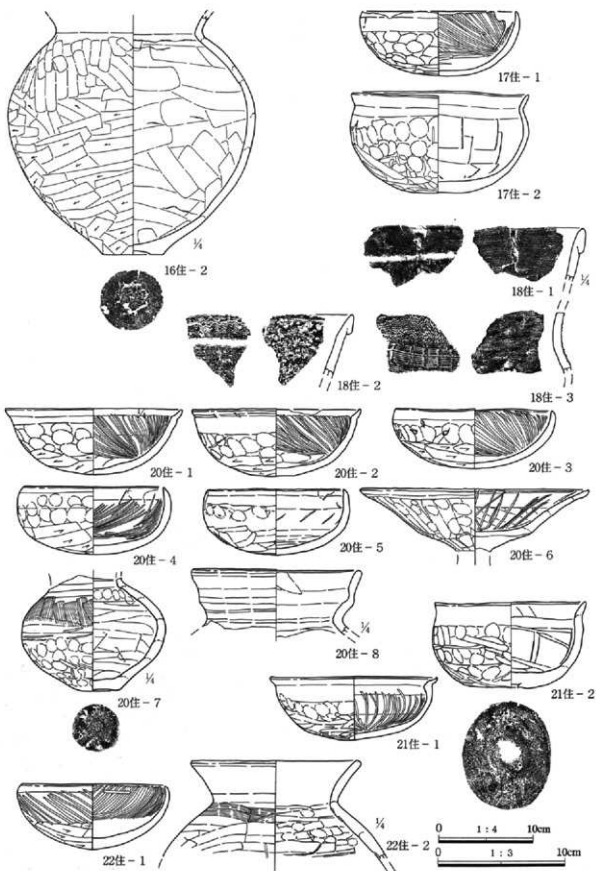


第361図 IV区FA下黒10・11号住居跡出土土器



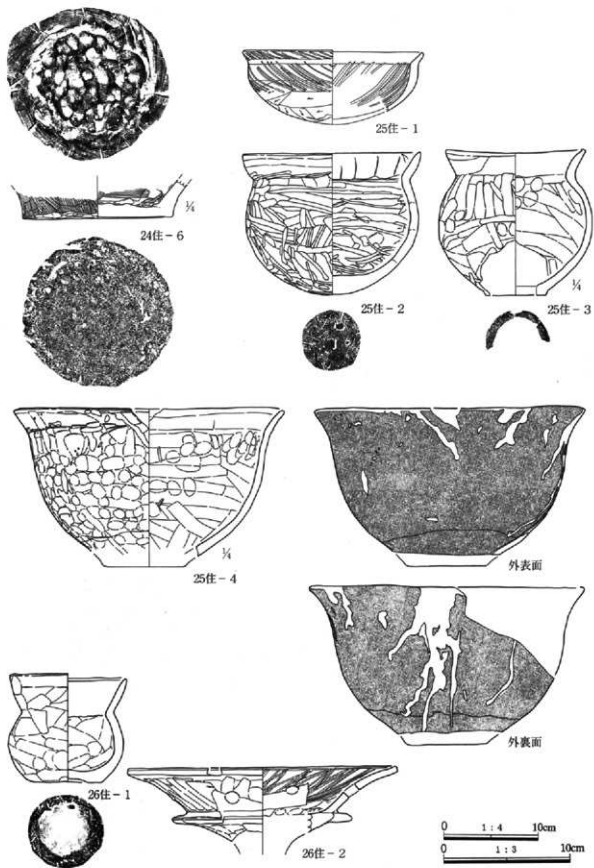
第362图 IV区FA下黑12~16号住居跡出土土器

III 検出された遺構と遺物

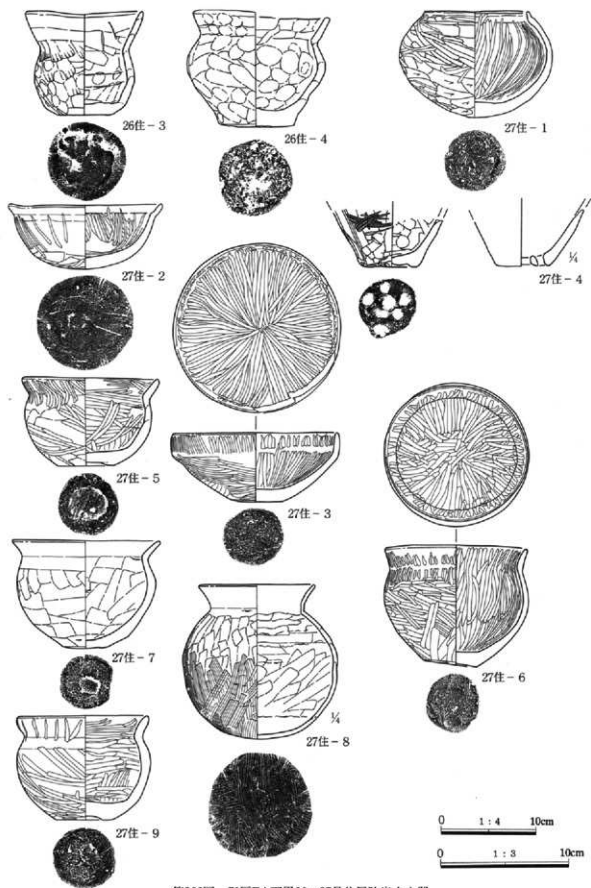


第363図 IV区FA下黒16~18、20~22号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

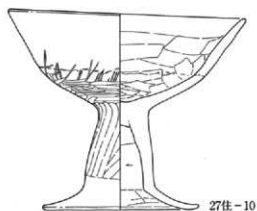


第365図 IV区FA下黒24~26号住居跡出土土器

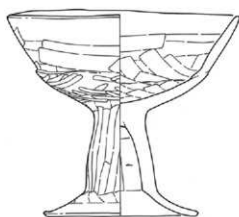


第366图 IV区FA下黑26·27号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物



27住-10



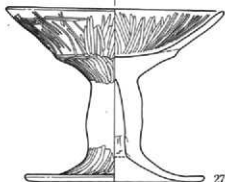
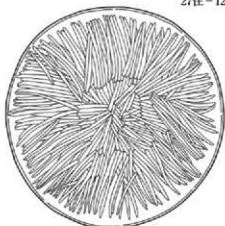
27住-11



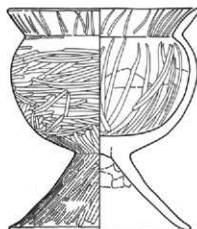
27住-12



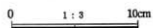
27住-13



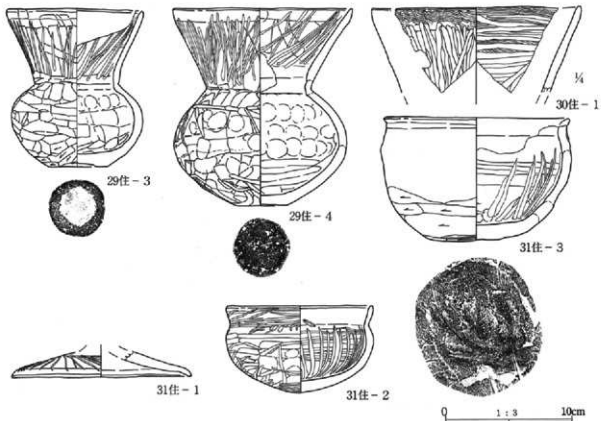
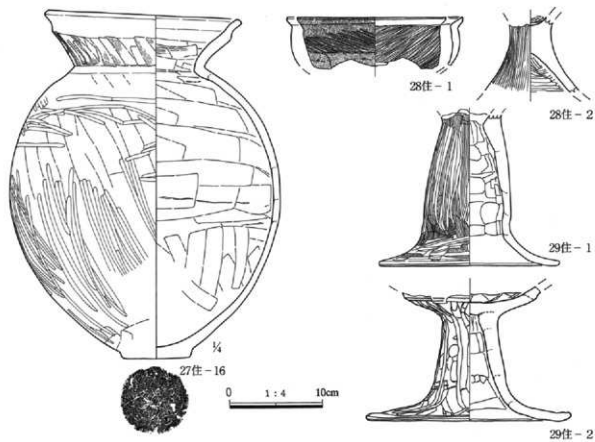
27住-14



27住-15

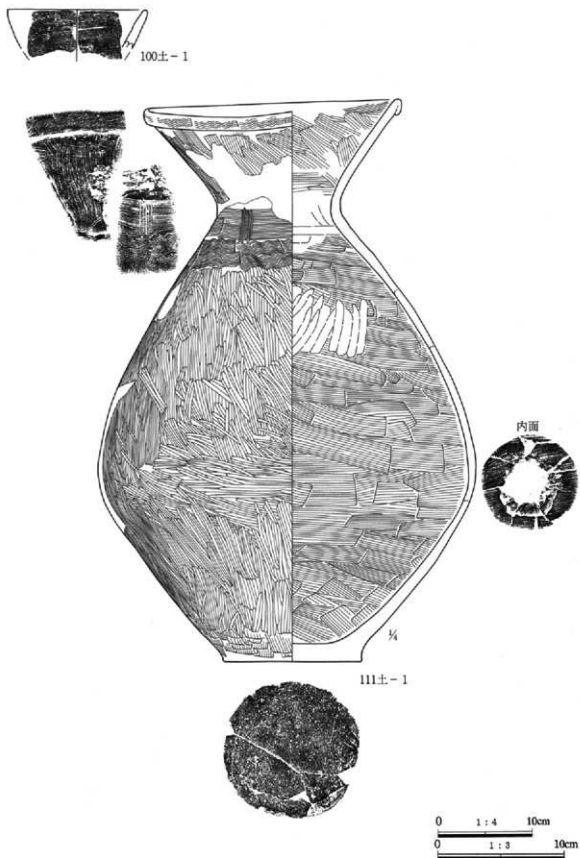


第367图 IV区FA下黑27号住居跡出土土器

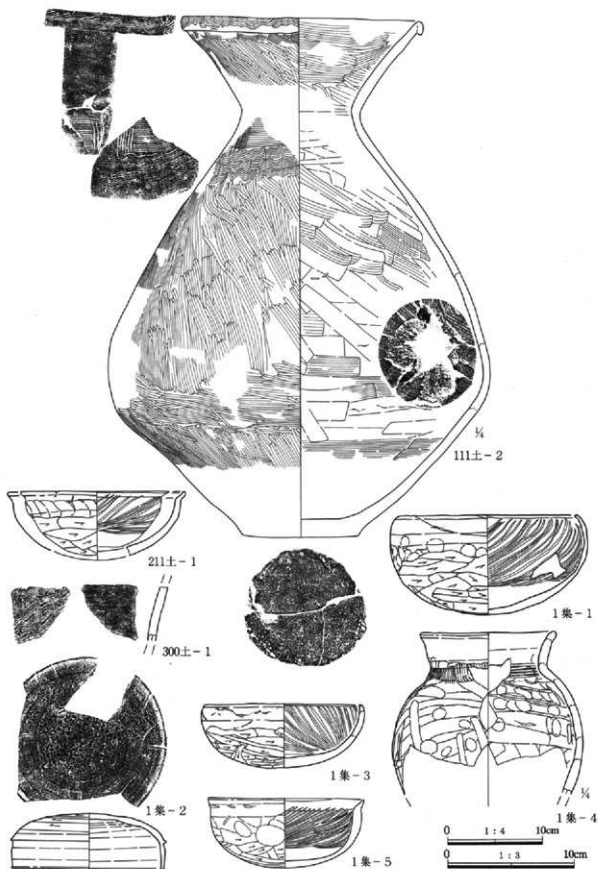


第368图 IV区FA下黑27~31号住居跡出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

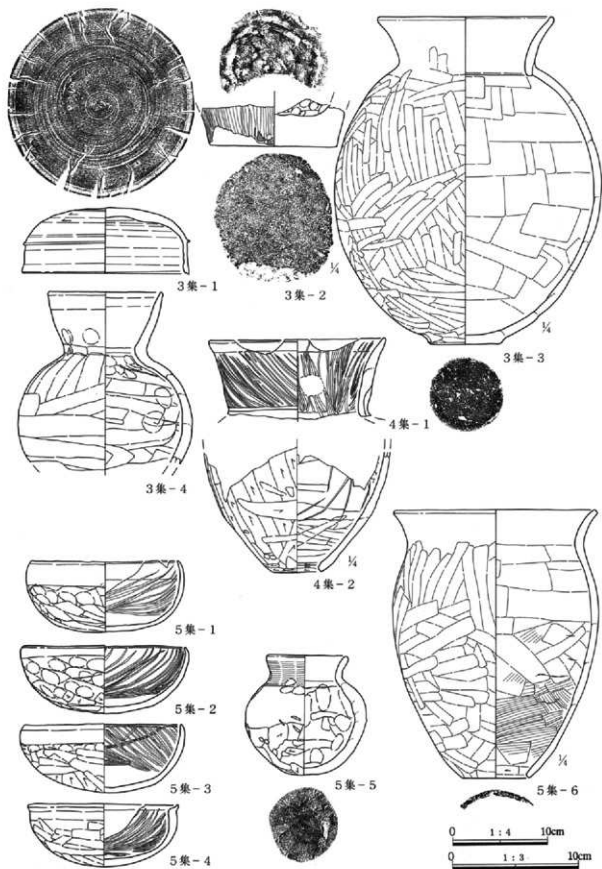


第369図 IV区FA下層100・111号土坑跡出土土器

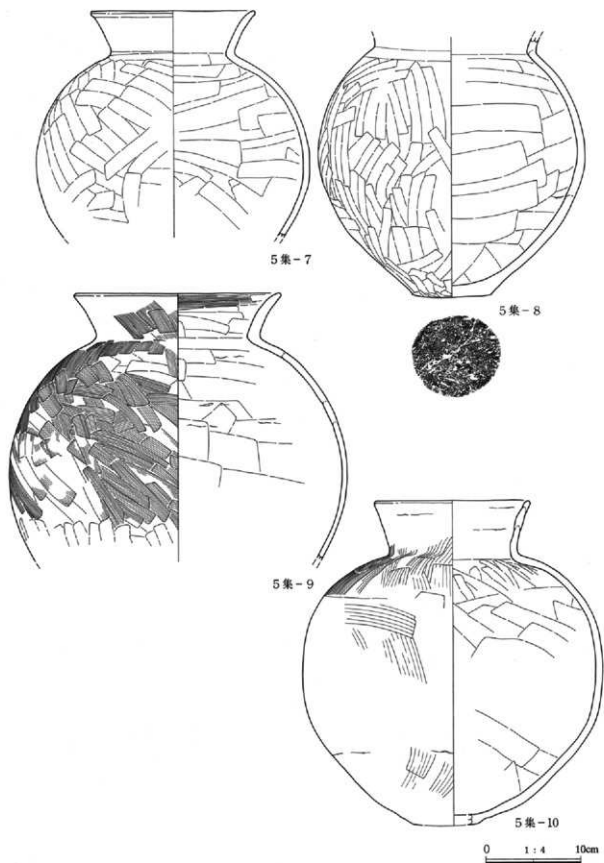


第370图 IV区FA下黑111·211·300号土坑跡、1号遺物集中出土土器

III 検出された遺構と遺物

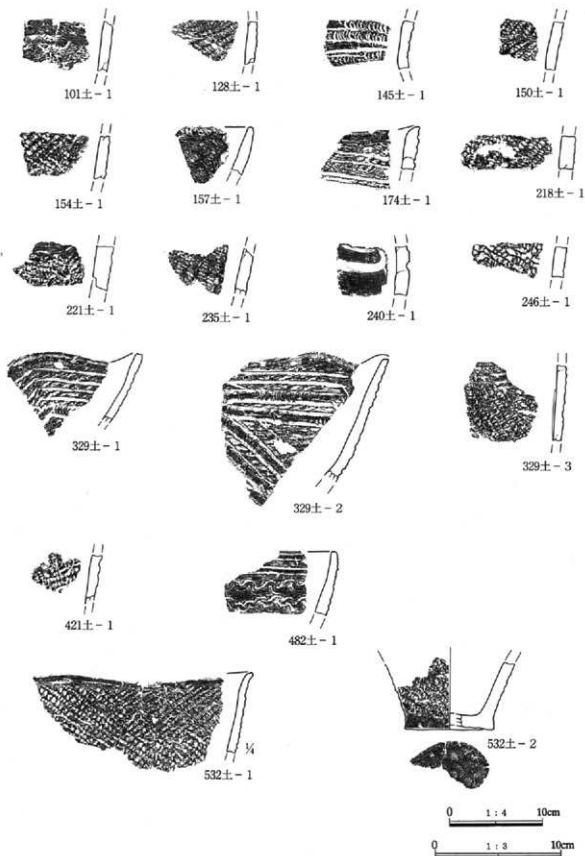


第371図 IV区FA下黒3～5号遺物集中出土土器



第372图 IV区FAT黑5号遺物集中出土土器

Ⅲ 検出された遺構と遺物



第373図 IV区FA下黒101・128・145・150・154・157・174・218・221・235・240・246・329・421・482・532号土坑跡出土土器

(2) 石器概要

I区第5面FA下黒～黒褐色土

I区では1～第4面までの間ではカマドに使用された円礫等があったが、個別に取り上げるべき石器は特になかった。全般的に石器量は少なかつた。

縄文時代と考えられるもので、2溝から分銅形打製石斧が、215号土坑からは磨・敲石が2点、以上が遺構からの出土品であるが、それ以外はグリッドで取り上げたものである。打製石斧、石鏃、スクレイパー類、磨・敲・凹石類、石核等が出土した。LG-18グリッドの分銅形打製石斧は上下両端が良く摩滅し、中央には横位に柄挿れ痕がある。使用による痕跡が明瞭に残る貴重な個体である。石核は黒曜石製の小形品と自然面を残し、剥離面を打面として整えた断面三角形硬質泥岩製の大型品があった。石鏃は無茎三角形鏃であり、裏面に剥離面を大きく残すものであった。

第6面基盤礫層直上

草創期隆起線文土器群と同時に出土した石器は楯先形尖頭器破片と剥片類がある。基盤の礫層直上からの出土であり、周辺には多くの円礫があったが、敲きなど明確な使用痕が付くものは確認出来なかった。楯先形尖頭器は黒色安山岩製で先端と下半部が欠損しており、全体の形は不明である。おそらく使用によるものではなく、不純物が入っていたことや素材段階で入っていた見えにくいヒビが原因で製作中に欠けたものと考えられる。側縁は交互剥離により比較的丁寧に調整されているが、直線ではなく、ややギザギザとなっている。剥片類はいずれも横長剥片であり、打面は剥離面が多いが、一部自然面を残すものもあった。表面に自然面を残すものは無く、尖頭器を製作する際の調整剥片と考えられるものであった。原石からこの場所で石器製作をしたには剥片全体量が非常に少なく、表面に自然面を残す剥片もなかった。おそらく別の場所である程度の形にしたものにさらに細部調整したり、欠損品を再生した場所ではないかと考えられる。また、土器がある程度まとまった量があることなどから、一定期間キャンプサイトとして利用された場所と考えられる。

II区第1面FP上

2号住居跡からは大形の磨・敲・凹石(1)が出土し

た。表面中央に敲打による凹みを有するもので、全面に多くの敲打痕を残す。29号土坑から磨・敲石(1)が出土した。表裏面に磨面、周縁部に敲打痕が認められるものであった。第1面からは他にカマドなどに使用された円礫があったが、磨面や敲打面など使用痕跡が明確に確認できるものは無く、個別石器としては取り上げなかった。

第2面FP下～第4面FA下

FA下では黒色土から石器などが顔を覗かせていたが、本来はFA直下のものではなく、第5面のものと判断した。この間で遺構に伴うと考えられる石器等は無かった。

第5面FA下黒～黒褐色土

確実に遺構に伴うものとして捉えることが出来たのは、5号住居跡1～3のみであった。1は大形の台石で、2・3は手に持ち易い大きさの礫を利用した磨・敲・凹石であった。1の台石にも磨面と敲打による凹みがあった。何か対象物を加工する際に組み合わせて使用したものと思われる。その他住居跡や土坑からは、石鏃、打製石斧頭部破片、黒曜石の剥片などが出土したが、必ずしも遺構に伴うものとは言えない。

その他ある程度遺物のまとまりがあったグリッドについては見ていきたいと思う。

LR-17グリッドからは磨・敲石類が出土した。表裏両面に磨面を残すものと周縁部に敲きだけを残すものがあった。

LR-18グリッドからは打製石斧・スクレイパー・磨・敲・凹石類が出土した。3のように磨石の中には明らかに金属によって付けられた条線を有するものがあり、金属用砥石の可能性が高い。

LR-19グリッドからは磨・敲石類が出土した。1はかなり使い込まれており、周縁部に面構成を有する。

LS-17グリッドからは小形打製石斧と比較的大形の礫を利用した敲石が出土した。

LS-18グリッドからは凹石、磨石、敲石と機能それぞれバラバラのものと磨・敲石と複数のものが一つになっているものがあった。機能がバラバラのものは金属を研いでいたような鋭い線状痕があったり鋭いていたりと古墳時代に属する可能性があ

III 検出された遺構と遺物

る。

LS-19グリッドからは磨・敲石類が出土しており、棒状の3の個縁は非常に良く敲打されていた。

LS-20グリッドからは短冊形打製石斧と個縁の一方所に打ち欠きのある礫が出土した。2の打製石斧には使用による磨減痕が明瞭に残っていた。

LT-18グリッドからは磨・敲・凹石類が出土した。小形のものには磨減のみで、やや大きめのものには凹みがあった。

LT-19グリッドからは打製石斧、黒曜石の剥片、磨・敲・凹石類、石皿破片などが出土した。打製石斧は使用による磨減痕が明瞭で、欠損しているものが多かった。石皿破片表面には敲打痕と磨痕が認められる。比較的量も多く何らかの遺構のあった可能性も否定できない。

LT-20グリッドからは横長剥片素材のスクレイパー、磨・敲石類が出土したが、凹みの付くものはない。

LT-21グリッドからは多くの磨・敲・凹石類が出土した。1のように大形礫素材で金属による鋭い条線が認められた。鉄器用の砥石に使用されたものと考えられる。小形のものには磨・敲・凹の二つ以上の機能が認められるものが多かった。

LU-20グリッドからは打製石斧、UF、磨・敲石が出土した。打製石斧は欠損しており、非常に明瞭な使用痕が認められる。

LU-21グリッドからは打製石斧、磨・敲・凹石類、石皿等が出土した。大形で無数の凹みを有する多孔石(7)もあった。石皿(9)は多少程度欠損しており、右側縁と裏面に凹みを多数有するものであった。小形品には凹みが付くものはない。比較的多くのまとまりがあり、何らかの遺構があった可能性が考えられる。

LU-22グリッドからは磨・敲石が出土した。その中には1や2のように硬い線状痕が明瞭に付くものがあった。これらは金属による傷の可能性が高く、砥石として使用されたものと想定される。

LV-20グリッドからは分銅形打製石斧、石錐、RFなどが出土した。打製石斧には明確な使用痕が認められた。石錐は大形の横長剥片を素材とし、打点から最も遠い下端に機能部を作出したものであり、使用によりやや丸くなっていた。

LV-21グリッドからは石核、磨・敲・凹石類などが出土した。石核(1)は主に礫の裏面側から剥離を施すもので、片刃礫器状でかなり鈍角となっている。磨・敲石には凹みが付かないものが多く、凹みの明らかなものは磨面が明瞭ではない。

LW-21グリッドからは大形で扁平な礫を利用し、その両面に硬い線状痕が明瞭に付くものであった。金属用の大形砥石と考えられるものである。

LW-22グリッドからは石錐、磨・敲・凹石類が出土した。4は周縁部に敲打痕、表に多くの線状痕が認められる。

第6面黄褐色砂礫層直上

草創期に属するものは礫石器のみであった。I区のような槍先形尖頭器や調整剥片の類は調査区内からは全く出土しなかった。I区では基盤の礫層の直上が黄褐色の粘土層であったが、II区では東寄りには粘土層、西寄りは黄褐色砂質土層であった。この層は非常に硬く締まっており、調査に困難を極めた。小礫が多く石器か否か不明のものが多く、まとめて出土したものであり、人為的な可能性も否定できないので、ここで取り上げた。これらはすべて微隆線土器片周辺の漸移層—黄褐色砂質土層にかけて出土したものである。7は磨石の欠損品、8は磨・凹石、9は大形の凹石である。

III区第1面FP上

1号住居跡からは磨痕のある大形の台石(1)が、2・4・5・7号住居跡からは磨・敲・凹石類が出土した。5号住居跡のものはやや大形で、敲打による凹みが多数認められるものもあった。7号住居跡からは金属によると考えられる鋭い線状痕の付いた磨石(1)、8号住居跡からは小形第6面体の流紋岩の砥石(1)、磨・敲石類、台石(3)が出土した。台石(3)は扁平な大形礫の両面に敲打痕が認められるものであった。12・13・14・15号住居跡からは磨・敲石類が出土した。15号住居跡1は両面の平坦部に一部磨痕を有する台石であった。14号住居跡には小形長方形の流紋岩製の砥石(1)があった。

60・178号土坑からは磨・敲石が出土した。礫の端部に敲打痕が集中し、その他の面には磨痕が認められるものであった。

これらの遺構から出土したものは磨・敲・凹石が多く、一見縄文時代のものとの判別が付かないものが多いが、金属による条線が認められるものは平安時代のものであると考えることができよう。また丹念に観察すると敲石の敲打部分に鉄錆が付着しているものもあり、それについても平安時代のものであると考えることができる。縄文時代の石器の再利用も多く、単に同じ層の中で混在して出てきた時には、この種の石器について厳密な意味で時代分けすることは難しいと思われる。

第2面F P下

1・4号畦の盛土の中から磨・敲石類が出土した。1号畦の中のものには敲きのみ、4号畦のものは磨・敲石で明確な凹みはない。

第3面F A上

4・5号平地式住居跡、巨大周溝から磨・敲石が出土した。明確な凹みが付くものは無かった。本来その下の層にあったものが、溝を掘る時に浮き上がって来たものもあり、厳密な意味でその時期のものという判断は難しい。

第4面F A下

16・17・18号住居跡からは多くの磨・敲石が出土した。16号住居跡からは砂岩製の砥石、台石が出土した。2は平坦面が磨滅しやや光沢を持つ台石であり、それ以外は棒状礫を利用した磨・敲石である。17号住居跡からは多くの棒状礫がまとまって出土した。その中で明確な磨りや敲きの痕跡のあるものを中心に図化した。他に9のように中央に大きい凹みがあるものもあった。18号住居跡からは棒状礫が2列に並んで出土した。あたかもアングンの編み機に付けた鎌のようであった。しかし、一部の礫には明確な鋭い沈線が付くものもあり、金属を研いだ時に付いたものと考えられる。2・3号遺物集からも磨石、磨石が出土した。これらは複数の機能を持つものでは無く、単一の機能のみを持つものであった。

第5面F A下黒～黒褐色土

19号住居跡からは磨・敲・凹石類の他に流紋岩製の断面六角形の砥石(4)が出土した。扁平で縁辺部に敲打痕を残すやや大形の敲石(2)もあった。

20号住居跡からは小形の磨・敲石類、右側縁に敲打による剥離痕が並ぶ敲石もあった。

21号住居跡からは磨・敲石類が出土した。3のように下端の研磨面に鉄錆が付着するようなものがあった。おそらく鉄器を研いだ際に付着したものと考えられる。

23号住居跡からは磨・敲類と共に埋没土中より蛇紋岩製の小形磨製石芥が出土した。本住居跡は古墳時代のものであり、伴うものとは考え難い。刃部は使用による磨滅が明瞭であるが、刃部・頭部共に薄く作られている。

24号住居跡からは線状痕が明瞭に付くやや大きめの礫が出土した。鉄器による刃均し傷と考えられる。

25号住居跡からは表裏両面がやや磨滅し滑らかなになった扁平な大形礫(1)が出土した。台石と考えられる。

26号住居跡からは磨・敲石類と共に小形細長の砥石(1)が出土した。粒子が細かく仕上げ砥石と考えられる。4も比較的線状痕は明瞭であり、方向も何方向か纏まりがある。金属器の調整に使用された可能性がある。

27号住居跡からは磨・敲石類が出土した。3のように扁平で両面が滑らかとなるやや大きめのものもあった。対象物を磨り潰す時の台石と考えられる。

30号住居跡からは磨・敲・凹石類が出土した。小形のものには凹みを有するものもあった。大形のものには1点は円礫(1)で、磨痕と共に敲打痕が多数認められるもので、もう1点は住居跡の南側の入口付近に置かれていたもので、扁平な歪角礫(4)で表裏両面は何かを磨ったような線状痕が見られる訳では無く、全体が何となく光沢を持っている。登り降りする際に踏み石とされたものか?と推量される。

31号住居跡からは使用の痕跡が認められない棒状礫、32号住居跡からは磨・敲石が出土した。表面がやや平坦であり、礫の形態としては類似する。

33号住居跡からは磨・敲・凹石類が出土した。1は磨りと敲打、2のように敲打による凹みだけのものや3のようにほぼ磨面のものなどがあった。

34号住居跡からは磨・敲・凹石類が出土した。小形のものが多いが、大形のものには明確な線状痕が付いており、砥石として使用された可能性が高いものである。

35号住居跡からは磨・敲・凹石類と共に小形扁平

III 検出された遺構と遺物

な砥石、表裏両面に敲打による凹みを有するもの、使用痕の不明瞭な棒状礫などが出土した。砥石は上部の孔は携帯用の紐通し孔で、粒子が細かく仕上げ砥石と考えられる。

38号住居跡からは磨・敲石類が出土した。1はかなり丸く、線状痕も明瞭である。凹みを有するものは無い。

39号住居跡からは磨・敲石類、石鏃、大形の流紋岩製の砥石が出土した。磨・敲石類の中には、2のように金属器によるものと思われる非常に鋭い線状痕を有するものもあった。敲石のなかには7のように大形で敲打による浅い凹みを多数残すものもあった。大形砥石(8)は断面菱形で、使い込まれたために上下両端が瓢箪状になったものである。石鏃(1)は有茎のものであり、比較的大形品である。茎部は欠損している。先端部は尖り、逆しは付かないでその部分は丸くなっている。非常に丁寧に調整剥離されている。横長剥片素材で表面には一部主要剥離面を残す。古墳時代のものではなく、縄文時代のもと考えられる。

40・42・43号住居跡からは棒状礫を素材とした磨・敲石類が出土した。磨面が一部だけのものとほぼ全面に亘るものがあった。

44号住居跡からは磨・敲石類と共に非常に小形の磨製石斧(2)や石鏃(1)が出土した。磨製石斧は蛇紋岩製であり、研磨は未完成で刃部には鋭さはない。石鏃は無茎で、底辺が内彎する丁寧な作りのものであった。両者とも縄文時代のものである。磨・敲石類は棒状礫を素材とし、その端部に敲打痕を有するものとそうでないものがあった。これらは3のように鉄錆が付着していれば古墳時代のもので推定出来るが、そうでないものは古墳時代の可能性はあるものの時期判定の決め手に欠け、縄文時代のもが含まれる可能性は完全に排除できない。

46号住居跡からは石鏃(1~4)、磨・敲石類が出土した。この住居跡は弥生時代後期博式土器の段階であり、打製の石鏃は使用していないと考えられるので、縄文時代のもので混入したものと解釈する方が自然であろう。磨・敲石類は比較的線状痕が明瞭なものも多く、端部に敲打痕を残す。7のようにやや幅広い敲打痕が長く認められるものもあった。

47号住居跡からは磨・敲石類が出土した。比較的小形のものやや大形で鉄錆が付着するものがあった。小形のもの線状痕に敲打痕があり、線状痕は比較的明瞭であった。

50・51・53号住居跡からは磨・敲石・凹石類が出土した。表裏中央に一部敲打による浅い凹みを持つものとそうでないものがあった。いずれも小形のものであった。

564号土坑からは磨・敲石類が出土した。中でも2・3は非常に小形で、周縁部に敲打痕、平坦面の一部に研磨を施すものであった。

566号土坑からは方形の砥石が1点出土した。かなり使い込まれて小形化したものと考えられる。

574・576号土坑からは磨・敲石類が各1点出土した。前者は円礫でやや大きく、後者のものは長方形に近いものである。

6号遺物集中からは石鏃(1・2)、磨・敲石類が出土した。他の遺物集中のように元々あったものが散らばったというものは無く、耕作でいらなくなったものを寄せ集めたような状況が看取された。石鏃は縄文時代のもので2点とも無茎で底辺が内彎するものであり、脚部が欠損していた。磨・敲石類の中には4や9のように幅広く明瞭な線状痕が付くものもあり、金属を研いだ可能性の高いものもあった。

その他グッドからは磨・敲石類、弥生時代と考えられる分厚い作りの磨製石斧頭部破片(MF-20-1)、古墳時代の細長い小形砥石(MI-21-1)、縄文時代の石鏃(MK-23-1、MM-0-1)などが出土した。

第6面砂礫層直上

Ⅲ区でも基盤の礫層直上まで試掘を入れたが、Ⅰ・Ⅱ区のような縄文時代草創期と考えられる土器や石器は出土しなかった。

Ⅳ区第1面FP上

2号住居跡から中程の細くなった部分から欠損した流紋岩製の砥石、端部に敲打痕を有する磨・敲石が出土した。他にはあまり注目すべきものは無かった。

第2面FP下~第3面FA上

FA上で僅か磨・敲石類が出土したが、あまり取り上げるべき石器は無かった。

第4面FA下

98号土坑から小形の棒状礫の上下両端に敲打痕、表裏両面に弱い磨痕がある磨・敲石が1点出土した。

第5面FA下黒～黒褐色土

4号住居跡からは磨・敲石類が出土した。細長い小形礫の上下両端部に敲打痕を有するもの(1・2)と周縁部全体に敲打痕を施し、表裏両面に弱い磨痕を残すもの(4)があった。前者の中には明瞭な線状痕を有し、金属を研いだ可能性のあるもの(2)もあった。また自然の凹みを利用し何かを磨り潰したような凹石(3)もあった。

5号住居跡からは石鏃、磨・敲石類、台石等が出土した。石鏃(1)は無茎で底辺が内彎するタイプのもので、底辺が欠損していた。混入品と考えられる。磨・敲石類は棒状礫を素材としたものと円礫を素材としたものがあった。台石(8)は大形扁平礫素材であり、表裏両面に敲打痕と磨痕が認められた。

7号住居跡からは断面六角形の大形砥石(1)、磨・敲石が出土した。磨・敲石(2)には明瞭な線状痕が認められ、金属器を研いだ可能性がある。

8号住居跡からは石鏃、磨・敲石類が出土した。石鏃(1)は無茎で底辺が内彎するタイプのもので、比較的小形品である。混入品と考えられる。磨・敲石類(2～5)は棒状礫を素材としたもので、凹みは認められない。

10号住居跡からは敲石、砥石が出土した。敲石(1)は頁岩質の棒状礫の左側縁に敲打痕が認められるものであった。砥石(2)は上端が欠損しているが、断面長方形で良く使い込まれ、中央が細くなっていた。

11号住居跡からは周辺部が風化してボロボロになった台石(1)が出土した。表裏両面は滑らかとなっていた。

12号住居跡からは打製石斧、小形砥石、磨・敲・凹石類、台石等が出土した。打製石斧(2)は分銅形で、良く使い込まれ、使用痕が明瞭に残るものであった。砥石(1)は小形で上部に孔が開き、非常に薄手であった。磨・敲石類の中には4のように上下端部に敲打痕、表裏及び右側縁には幅広い線状痕が明瞭に残るものもあった。金属器用の砥石として使用された可能性がある。台石(5)は大形扁平礫の両面に磨面を有するものであり、敲打痕は認められない。

13号住居跡からは黒曜石製の小形石鏃(1)が出土した。左側縁には調整溝縁が施され、先端は短く作出されている。

17号住居跡からは磨・敲石類が出土した。2のように金属を研いだ時に付いたと考えられる明瞭な線状痕を伴うものもあるが、4のように敲打痕しか付かないものもあった。

23号住居跡からは無数の敲打痕を有する大形の台石(2)、磨・敲石類が出土した。

24号住居跡からは断面長方形の大形砥石(3)が出土した。側面には刃均し痕があり、表裏両面の中央は凹んでいた。

26号住居跡からは石鏃、磨・敲石類、大形砥石等が出土した。石鏃(1)は無茎で底辺が内彎するもので、断面凸レンズ状で比較的丁寧な作りであった。砥石(3)は大形で表面に刃均し痕と考えられる線状痕が明瞭に付き、裏面には敲打痕が認められるものであった。

28号住居跡からは無茎石鏃(1)、27・29号住居跡からは磨・敲・凹石類が出土した。

111号土坑から大形の円礫素材で敲打による凹みを多数有するもの(1)が出土した。

1号遺物集中からは中央に大きな凹みのあるもの(1)が、2・3号遺物集中からは小形と大形の磨・敲石・凹石類が出土した。大形のもの(3集1)は線状痕が明瞭で、金属を研いだために付いた可能性がある。3号遺物集中3は表裏両面に敲打による浅い凹みがある。5号遺物集中(旧MY-8遺物集中)からは磨・敲・凹石類が出土した。1は小形で上下に敲打面、表裏両面に磨面であったが、2はやや不定形で表裏両面に磨面と凹みがあった。

その他グリッドから無茎石鏃(MX-8-1)、黒曜石の剥片類、磨・敲・凹石や大形の台石類などが出土した。

石器類は全般に磨・敲・凹石類が多く、取り上げなかったものもかなり多く存在する。敲打痕や磨痕のあるものを極力捨ったが、調査中に土の付いた状態では必要なものとそうでないものの判断が困難を極めた。綺麗に洗ってから見れば使用痕が付いていることが分かるものが多かったが、その状態で見ると磨面でも鋭利な線状痕が付くもの、いくつかの研

Ⅲ 検出された遺構と遺物

磨面の切り合いがあるもの、線状痕はあるが鋭利な線状痕はないもの、ただ単に光沢痕を持つものなどがあつた。磨・敲石類の中には棒状の表裏両面に磨痕、上下両端に敲打痕を有するものが圧倒的に多かった。磨・敲・凹石類の中には僅かではあるが敲打痕部分や磨面に鉄錆が付着するものがあつた。鉄器を敲いたり、砥石として使用したために付着したものと考えられる。このように使用痕の状態と鉄錆の有無などからある程度は縄文時代のものでそれ以外のものに分けることが可能と思われる。

特殊遺物 玉類等

I区を除き、II～IV区で多くの玉類や紡錘車等が出土した。玉類は白玉、勾玉、管玉が多かったが、剣形等もあつた。

II区

第5面F A下黒～黒褐色土

第1面F P上～第4面F A下からは玉類の出土はなかった。L X-22グリッドから勾玉2点、L S-17グリッドからはガラス小玉1点が出土した。勾玉はいずれも非常に小形であり、1点は完形で頭部が大きめ、もう1点は孔のところから頭部が欠損しているものであつた。ガラス玉は白玉に比べやや大きめで、ほぼ全面擦れ傷があり、上下両面には研磨痕が明瞭に残るものであつた。

III区

殆どが第5面F A下黒～黒褐色土で出土したが、一部F A上で土したのもあつた。玉類が多く出土した周辺では完形土器のまともは無く、本来下にあつたものが、畚の耕作等で浮き上がったものと考えられる。IV区のようにF A直下の何らかの祭祀跡等も確認出来なかつた。

第3面F A上

2号平地式住居跡から細長い管玉が1点出土した。綺麗に仕上げられており、研磨痕は差ほど明瞭には残ってはいない。

第5面F A下黒～黒褐色土

勾玉は土製のものと石製のものがあり、前者は38・40号住居跡で各1点、後者は40・44号住居跡で各1点、44号住居跡の直ぐ西側で1点の計5点が出土した。土製勾玉は38号住居跡出土品のように頭部より

も下端の方が太くなっているものもあるが、40号住居跡のもののように下端が二股に分かれる珍しいタイプのものもあつた。調整は両者ともほぼ全面指撫であるが、38号住居跡出土品は一部鈍削り部分もあつた。石製のものは平坦な作りのものと立体的な作りのものがあつた。前者は一部剥離面を残すがほぼ円盤状に磨き、腹部部分に抉り込みを入れるものであり、身の幅が広い。後者は身の幅が細く丸みを持って作られている。剥離面は残さない。いずれも完形品である。平坦な作りのものの方が研磨痕が粗い。管玉は23・44号住居跡、30号住居跡の近くのグリッドから計3点出土した。23号住居跡のものはやや大形で太く3分割できる位置に横位2カ所刻みが付けられている。上下には研磨痕が良く残る。両側穿孔されている。小形のものは比較的良く研磨されており、両側穿孔で上下はやや凹む。孔開けの際の影響と考えられる。白玉はいずれもグリッドで取り上げたものであるが、16・30・34・35・39・43号住居跡付近から出土したものである。剣形は564号土坑、21号住居跡付近のグリッドで出土した。564号土坑出土のものは孔が二つあり、やや歪んだ形の鏡形の可能性も否定できない。住居跡出土のものは側面は良く研磨されているが、表裏両面は剥離面を残し、研磨もやや粗い。上部は欠損している。6号遺物集から断面が三角形に近い石製紡錘車が1点出土した。頭部が細くなっている。刀子など金属器による加工痕を明瞭に残し、縁辺部は所々欠損している。III区では玉類に関しては集中部分は無く、祭祀との関係が推定できるものはなかった。

IV区

第3面F A上～第5面F A下黒～黒褐色土

第1面F P上～第2面F P下までの間で玉類は出土しなかつた。多くの白玉、管玉、勾玉、剣形、他にガラス玉、石製紡錘車などが出土した。

4号住居跡からは白玉、管玉、石製勾玉が出土した。白玉は小形品で側面はソロバン玉状になる。管玉は比較的良く研磨されており、上下がやや斜めで平行しない。両側穿孔。勾玉は厚手棒状で、あまり屈曲はきつくない。刀子状工具による削痕を明瞭に残す。両側穿孔。

5号住居跡からは白玉、ガラス玉、管玉、勾玉が

出土した。白玉は小形で側面がソロバン玉状になるものと長方形になるものがあった。ガラス玉(1)は全体に擦れ傷があり、丸みを持つものであった。管玉は一番長いもの(4)は下端が欠損していた。それ以外のものは完形品であった。1点はかなり光沢を持つもの(6)であり、上下両端面は平行しない。3点とも両側穿孔であった。勾玉は棒状であり、頭の方がやや細い。下端部は欠けているように見えるが、完形品である。頭部の孔は細くズレも無く、両側が平行するが、両側穿孔かと考えられる。

7号住居跡からは管玉、剣形、石製紡錘車が出土した。管玉(3)はほぼ上下両面は平行するが、両側穿孔で、穴はややズレが認められた。剣形(2)は比較的小形で孔は1つであり、研磨はやや粗い部分もあったが、完形品であり、製品と考えられる。紡錘車(1)は断面台形で欠が欠損しており、側面には削痕が明瞭に認められるが、かなり使い込まれ、上下両面には光沢痕があった。

8号住居跡からは白玉と管玉が出土した。白玉は小形薄手で上下両面が平行するもの(2)と厚手で平行しないもの(1)があった。管玉は一番短いもの1点(3)は上下両面が平行するが、他の2点(4・5)は斜めとなっていた。3点とも両側穿孔であり、ズレが明瞭に認められるものであった。

10号住居跡からは非常に小形の剣形(1)が出土した。横に平行して2つの孔が開く。石材も滑石や蛇紋岩であり、やや特殊なものである。研磨痕は明瞭に残る。

12号住居跡からは白玉、管玉、紡錘車が出土した。白玉(1)は上下両面、側面とも良く研磨されていた。管玉(2)は両側穿孔であるが、片側からかなり奥まで入れてから反対側から入れている。紡錘車(3)は比較的小形で断面扁平な台形で、欠が欠損している。裏面には剥離面を残すが、良く使い込まれ、上下両面は光沢痕を持つ。側面には削痕が明瞭に残る。

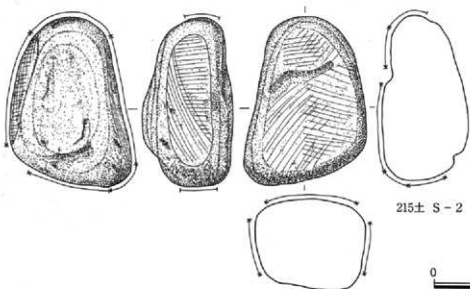
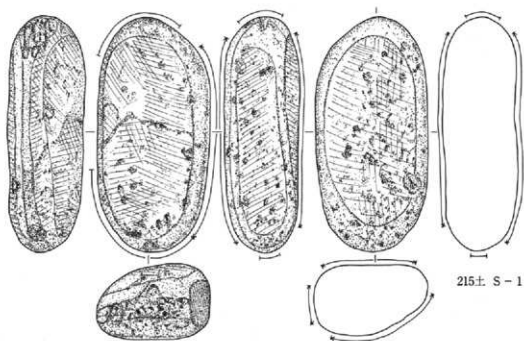
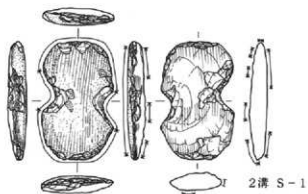
2号遺物集中からは多量の白玉、剣形が出土した。白玉は比較的厚手のものと薄手のものがあった。断面は長方形を呈するものとソロバン玉状になるものがあった。また、上下両面が平行するものとそうでないものがあった。これらの違いは素材形態の違いによるもので、それは同時に製作技法の違いを表

しているものと考えられる。滑石の中には欠けていたり、割られているものもあった。薄手で上下両面が研磨されていないものは割られているものと考えられる。剣形は比較的大形品であり、孔は2つあり、上下に並ぶ。表面には下の孔に、裏面には上の孔に紐ズレが認められる。両面とも一部剥離面を残す。研磨は比較的粗く条線も明瞭に付くものであった。

その他グリッドからは白玉、ガラス玉、管玉、勾玉、剣形、垂飾、耳栓が出土した。白玉は小形薄手で良く研磨されているものと厚手でやや研磨が粗いものがあった。ガラス玉は全面に擦れ傷があり、右端にも小さい孔が開くが、これは気泡によるものと考えられる。管玉は太く短いものと細く長いものがあった。太いものは碧玉製で孔は細く、片側穿孔、細いものは両側穿孔であった。勾玉は薄手で「D」字状に研磨した後に腹部を磨り込んだものであり、研磨はかなり粗いものであった。剣形は頭端部の欠損品であり、全体の形が不明であり、他のものになる可能性も残されている。垂飾は3点あり、1点は蛇紋岩製で上部に横に平行して片側穿孔の孔が2つ開くもの(MV-7-1)で、表裏両面とも紐ズレが明瞭に認められる。研磨は裏面に特に粗い条線が付く。もう1点(NA-8-2)は滑石製であり、不定形の三角形を呈する。両面に一部剥離面を残す。もう1点(NE-11-1)は頁岩系の石で、上半が縦に割れており、両側穿孔であった。柔らかい滑石製のものは古墳時代のものと思われるが、硬い2点はそれ以前になる可能性も考えられる。耳栓(MX-6-1)は側面を見ると中央が絞られて上下に比べやや細くなっている。側面は刀子状工具により削られたと考えられる条線が付く面が複数認められるので、縄文時代では無く、古墳時代のものと思われる。

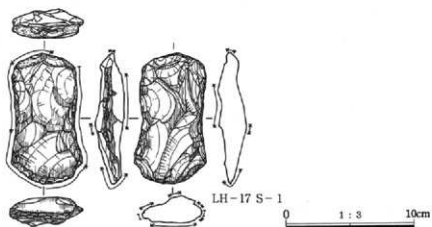
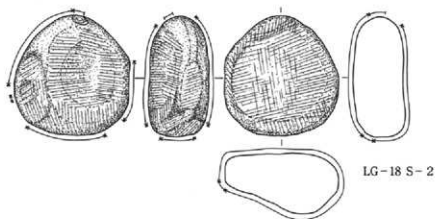
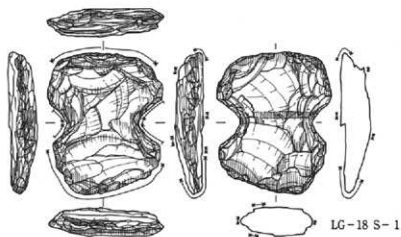
全般的には白玉が最も多かったが、ガラス玉、管玉、勾玉なども多くあった。他に剣形、垂飾や耳栓などもあった。白玉はその殆どが2号遺物集中から出土したものであった。勾玉には石製のものと土製のものがあった。古墳時代の耳栓は例数が少なく、比較的珍しいものと考えられる。

Ⅲ 検出された遺構と遺物



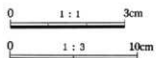
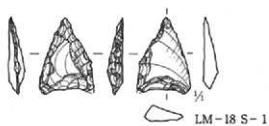
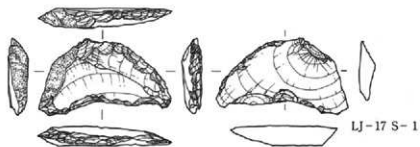
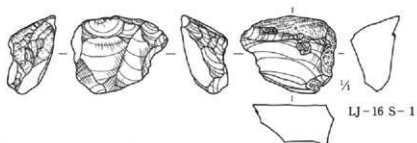
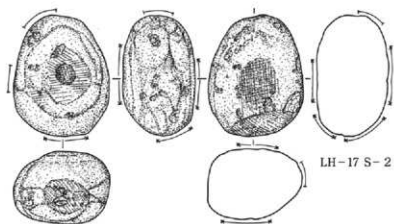
0 1:3 10cm

第374図 I区FA下黒2号溝、215号土坑跡出土石器

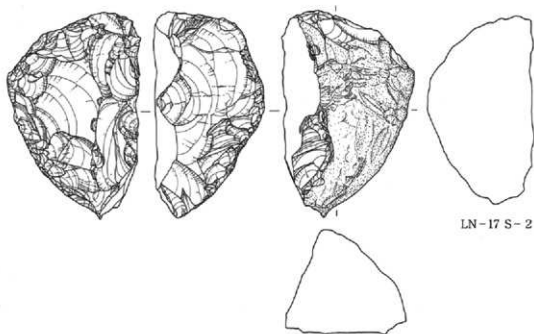
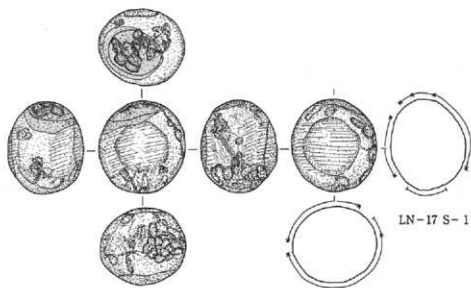


第375図 I区FA下黒グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物



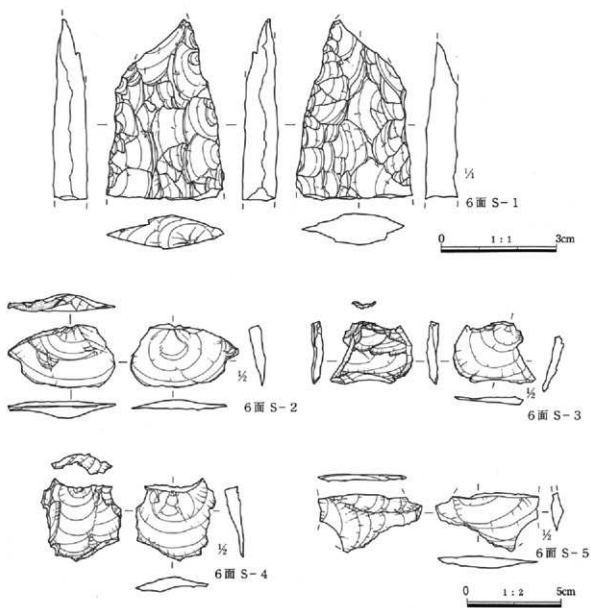
第376図 I区FA下黒グリッド出土石器



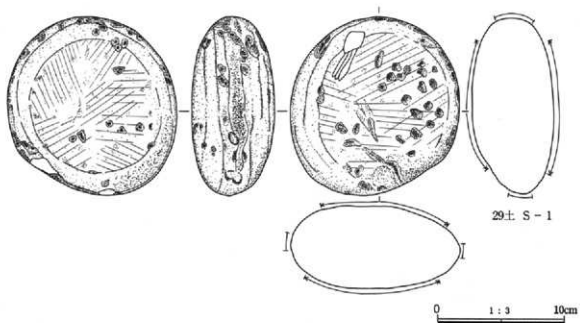
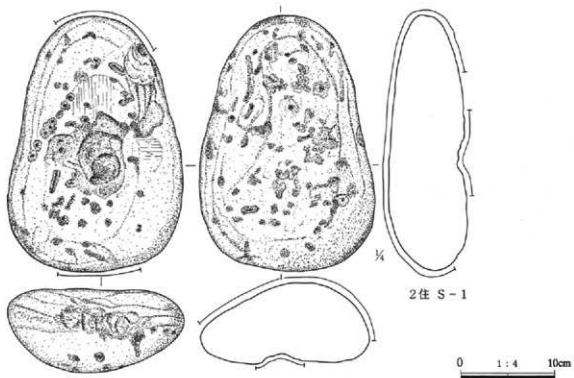
0 1:3 10cm

第377図 1区FA下黒グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

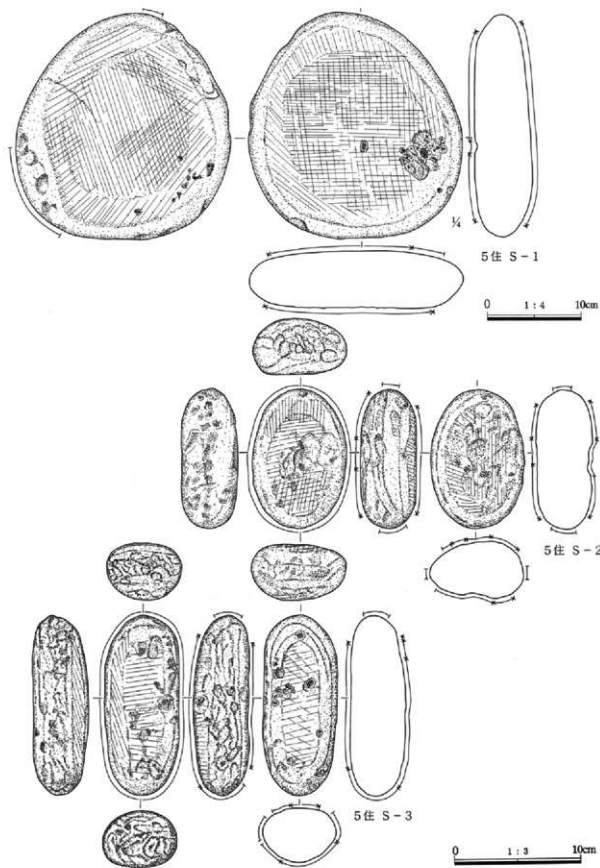


第378図 I区縄文草創期グリッド出土石器

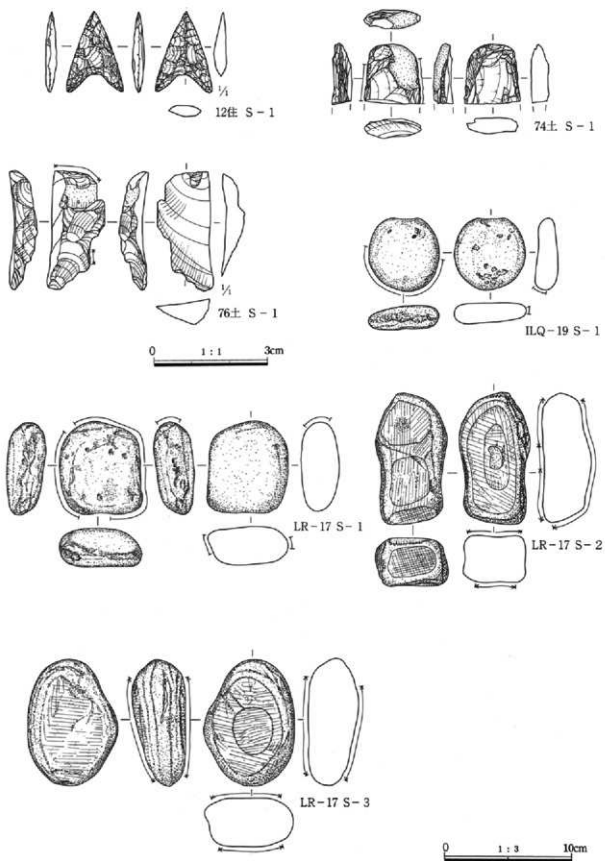


第379圖 II区FP上2号住居跡、29号土坑跡出土石器

III 検出された遺構と遺物

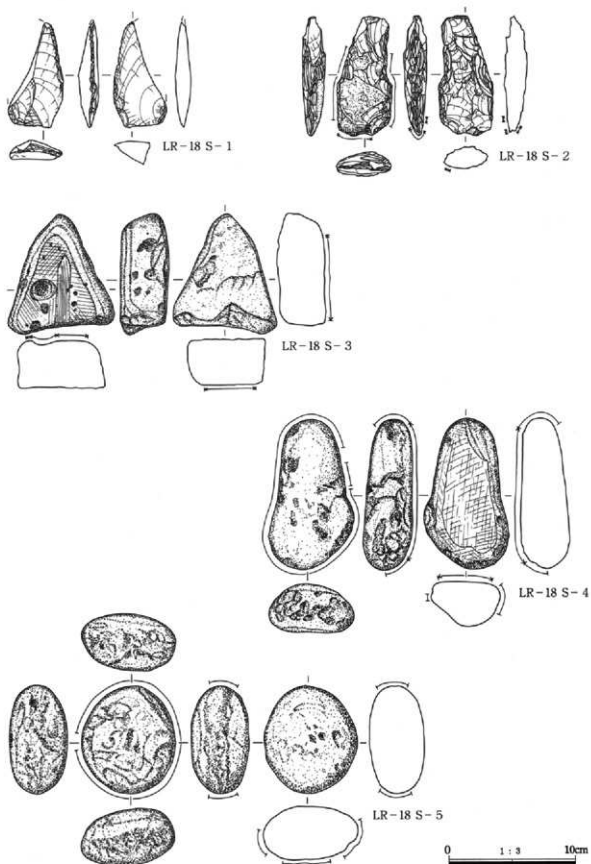


第380図 II区FA下黒5号住居跡出土石器

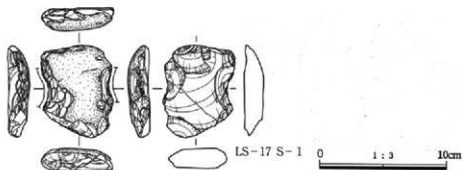
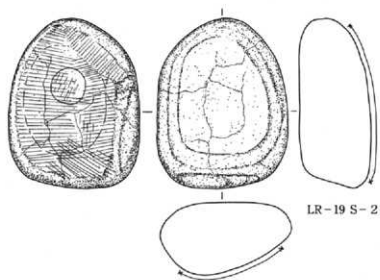
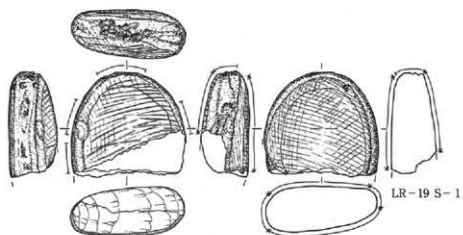


第381図 II区FA下黒12号住居跡、74、76号土坑、グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

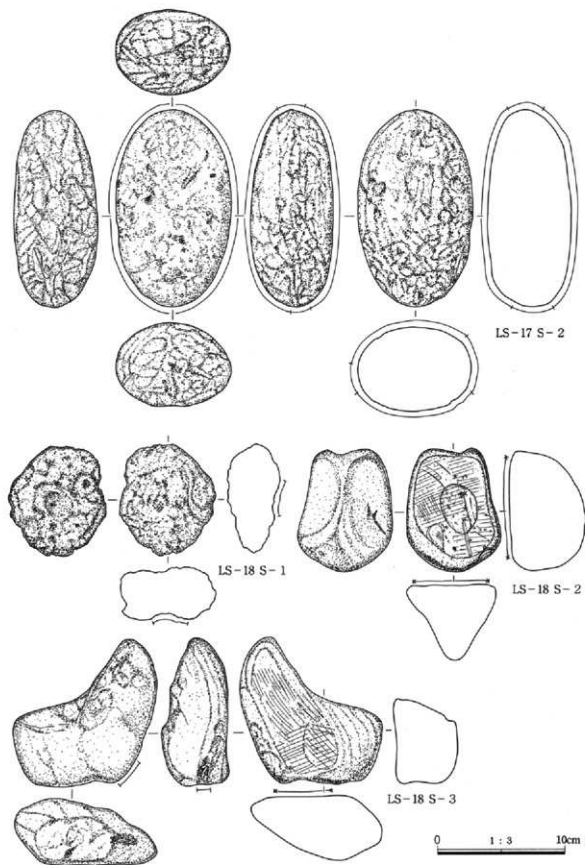


第382図 Ⅱ区FA下黒グリッド出土石器

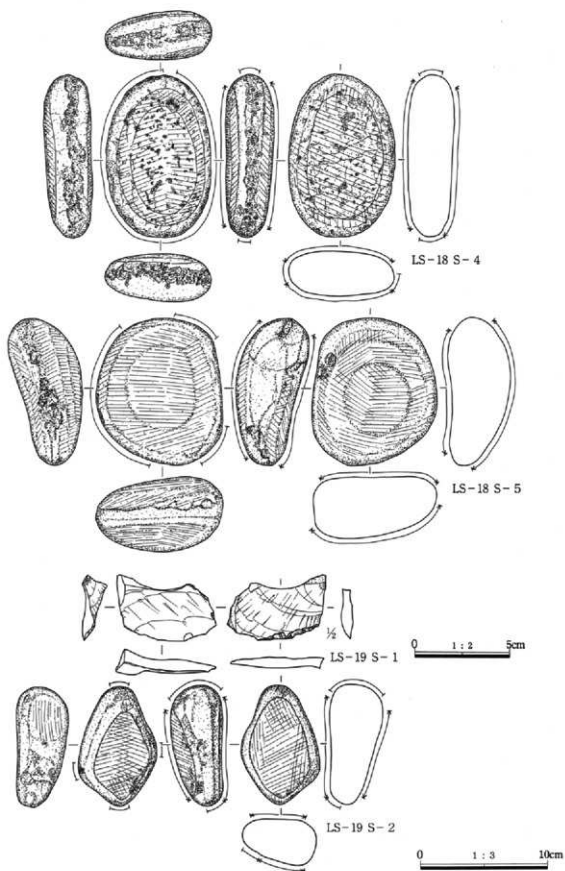


第383図 II区FA下黒グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

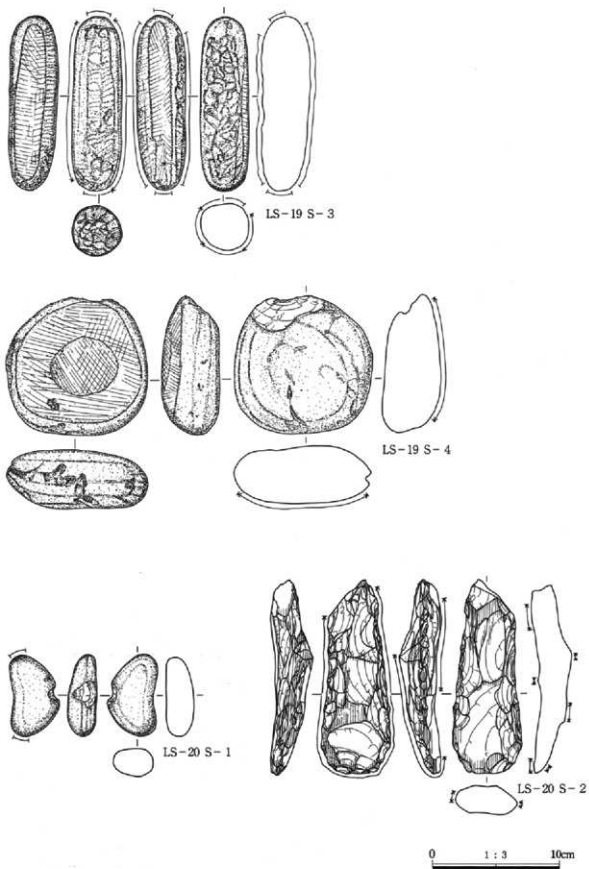


第384図 II区FA下黒グリッド出土石器

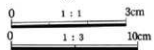
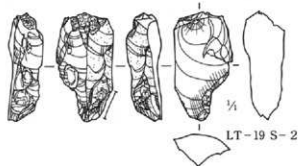
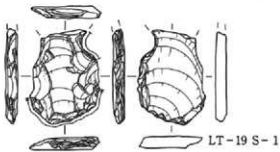
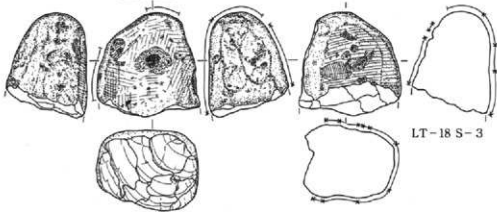
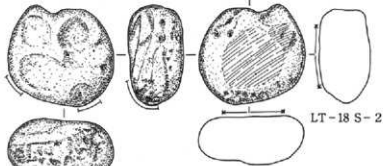
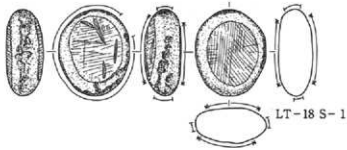


第385図 II区FA下黒グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

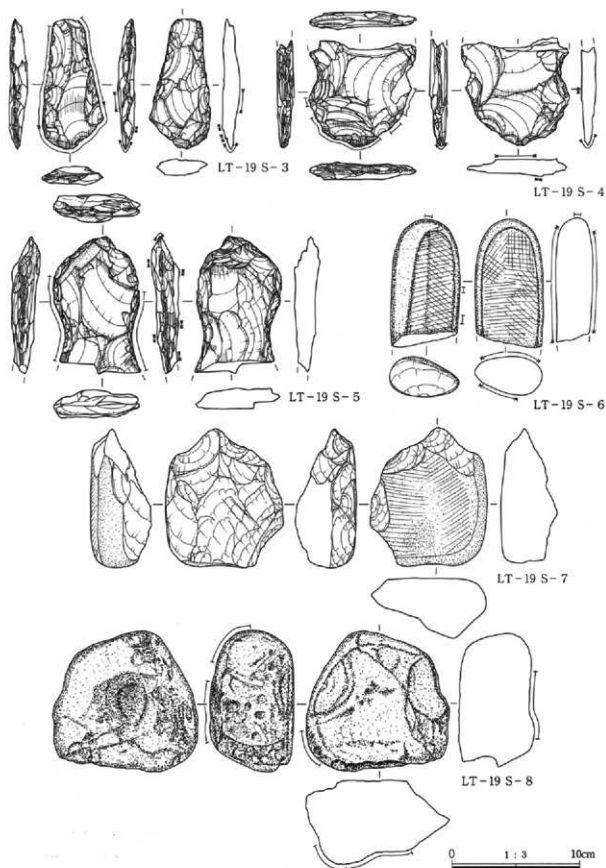


第386図 Ⅱ区FA下黒グリッド出土石器

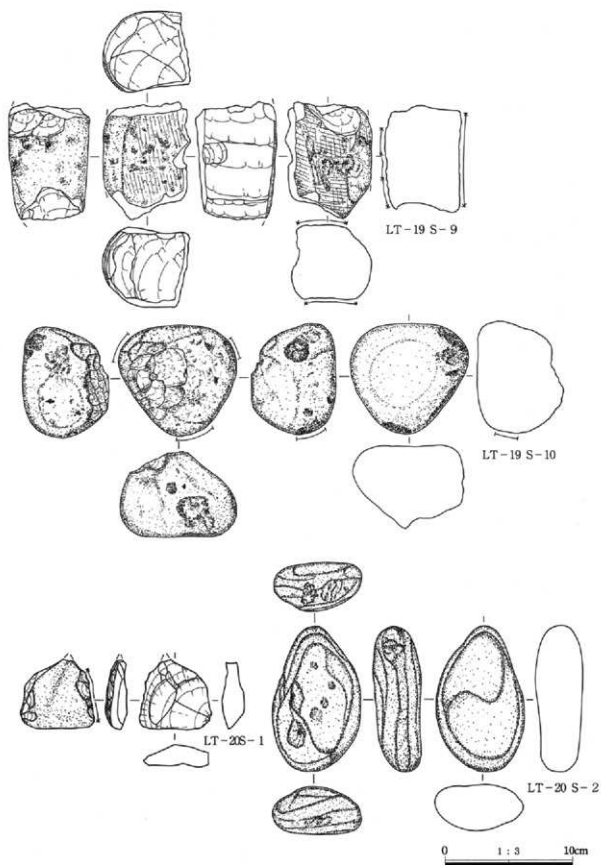


第387図 II区FA下黒グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物

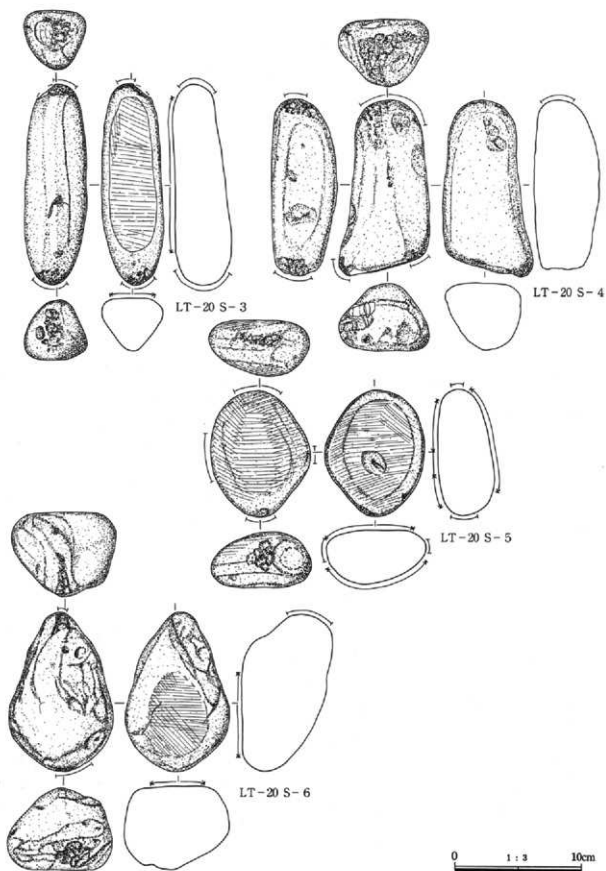


第388図 Ⅱ区FA下黒グリッド出土石器



第389図 II区FA下黒グリッド出土石器

Ⅲ 検出された遺構と遺物



第390図 II区FA下黒グリッド出土石器